

シンデレラの奇妙な 日々

ストレンジ.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『アイドルマスターシンデレラガールズ』の登場人物たちが『ジョジョの奇妙な冒険』のスタンド能力に目覚めて学園生活を送るお話。中心人物はトライアドプリムスの3人（の予定）。

世界観自体はアイマスでもジョジョでもない独自のものとなっているので相違点が多数あります（そもそも登場人物の大半がアイドルの立場では出てきません）。劇中劇やパラレルワールドの類と思ってください。

ちよこちよこ目立つモブキャラが出てくる場合があります。

※この作品はpixivの方にも載せています。

目次

第1話『Stand By Me』	1
第2話『School Days』	15
第3話『Never Say Never』	26
第4話『Strange Days』	44
スタンド紹介①	63
第5話『E.S.P.』	69
第6話『Girl Next Door』	81
第7話『You're Lost Little Girl』	97
第8話『2nd SIDE』	110
第9話『Frozen Tears』	128
スタンド紹介②	156
第10話『Work Song』	160
第11話『S.O.S ぐふたりはアイドル』	181
第12話『★』	199
第13話『GRRR!』	225
スタンド紹介③	236

Woman ()	317	第17話『Living Loving Maid (She's Just a Woman)』	310	スタンド紹介④	293	第18話『Where Do We Go From Here?』	333
Woman ()	317	第23話『Holy Cow』	425	第22話『Wonderwall』	404	第19話『Don't Speak Loudly』	351
Woman ()	317	第20話『Stormy Monday』	362	第21話『Ride The Wild Wind』	386	第16話『If I Were Not So Romantic, I'd Shoot You』 (神谷奈緒の冒険②)	273
Woman ()	317	第15話『Want To Be Close』 (神谷奈緒の冒険③)	273	第14話『Vagabond of the Western World』 (神谷奈緒の冒険①)	240	第18話『Where Do We Go From Here?』	333

第1話『Stand By Me』

——世の中には、幽霊が見えるという人たちがいる。

テレビや雑誌のホラー特集で目にすることもあれば、クラスメイトから「〇組の〇〇って子は霊感があるらしい」みたいな噂を、これまでに何度か聞いたこともある。

その人たち全員に、私はこう言いたい。

「アンタたち……本当に『これ』が見えるの？」——と。

『シンデレラの奇妙な日々』
ストレンジ・デイズ

*

私には幽霊が見える。

これは別に、オカルト少女だとか霊能力者気取りだとかいうわけではなく、本当のことだ。

ゴールデンウィーク初日、飼い犬のハナコと散歩の途中だった。

公園の林道を歩いていると、少し先の樹の側に誰かが立っている。そんなに離れた距

離でもないのに、その人は全身がひどくぼんやりして見えた。

気になって、目を凝らしてよく見ると……それは人ではなく影だった。

緑色の影が立っている……。

しかも、その影から視線を感じる。気のせいなんかじゃない。

恐怖で少しのあいだその場に立ち尽くしていたが、揺れるリードの感触で我に返り、ハナコを抱きかかえて足早にそこを去った。

あれはいつたいたんだっただろう……。見間違いとかではなかった。テレビの撮影とか、なんかの実験とか？ でも、あのとときまわりには他に誰もいなかったはず……。

いろいろ考えても答えは出ない。家に帰り、まだドキドキしてる左胸に手を当てながら自分の部屋のドアを開ける。すると、さっきの緑色の影がそこに立っていた。

「ひっ」

驚いたのも束の間、影はすぐに消えて、文字どおり影も形もない。しかしそれ以来、私ひとり憑かれてしまったらしく、あの影はたまに私の近くに姿を現すようになった。別段何もしてこないが、だからといって安心なんてできるわけ無く、落ち着かない、気味が悪い。

そうして理解不能の事態にただ怖くて何もできず、せつかくのゴールデンウィークは鈍色にくすみ、そのまま最終日を迎えてしまった。

*

無気力感に身を任せベッドで横になってみると、インターフォンが鳴った。重い頭と腰を上げ玄関まで行きカメラを確認すると、そこには奈緒なほがいた。呼んだ覚えはない。気分的にも状況的にも、家に友達を呼んでいるような場合ではないのだから。

「……どうしたの、奈緒？ 連絡もしないで」

「あつ凛りんか、わりい。っていつても、買い物帰りに前に借りたCD返しに來ただけだから」

屈託のない奈緒のいつもの声を聞いて、ほんのすこし気分が軽くなった。しかしそれでも、このけだるさは完全には消えない。今は話をするのも煩わしい。悪いけど、このまま帰ってもらおう――

「……その、今ちよつと立て込んで」

「ん？ 家の手伝いか？ 大丈夫、すぐ帰るから。ちよつとだけお邪魔しまーす」

話が終わる前に、奈緒はドアを開けて入ってきてしまった。仕方ない、CDを受け取れば用事は済む。

「じゃあこれ、ありがとう……な……」

CDを私に差し出したまま奈緒は急に固まってしまった。視線は私の少し後ろに釘付けになっている――まさか！

勢いよく振り返る。そこにいたのは……。

「……………っ！」

例の、緑色の影……。

よりによつてこのタイミングで出てくるなんて……。あれ？ でも……そういえば、今まで両親やお客さんの前でこいつが現れたことがあつたけど、みんなには見えてないようで、誰からも反応なんて無かつた。でも、今、奈緒は明らかにこいつが見えているかのような反応をしている。これは……!!

「奈緒っ！ ……まさかアンタ、こいつが見え——」

「こいつは……『スタンド』ッ！」

私の言葉を遮つて、奈緒が叫んだ。

『スタンド』

………つて、なに？ 奈緒はこいつのこと、なにか知っている……？

「おい凜！ なんか変なモンが見えてても……とりあえずパニクんなよっ！」

そう言い放つた次の瞬間——

『ワン・ヴィジョン』！

ふたたび何事か叫んだ奈緒のそばに、筋骨隆々とした体つきの、燕尾服を着た男がいきなり現れた。

.....。

人間、心の底から驚くと何も反応できなくなるらしい。

例の影が出たと思つたら、今度は知らない人間がいきなりどこからともなく現れた。あまりにも唐突でわけの分からない光景だった。ただ、さっきの流れからして燕尾服の男は奈緒の合図で出てきたようだった。

男はシルクハットを目深に被つていて顔が見えない。そして、腰に短いステッキを携えていた。いかにもマジシャンといった出で立ちだ。こいつはなんだ。奈緒の知り合いい……？ いや、どんな知り合い？ 分からない……頭の中が真っ白だ——

「凜、あたしの後ろに……」

「へっ？ あ、うん……」

「奈緒に腕を引つ張られてやつと我に返つた。」

「いったいなんなの、これ……？」

「後で教えてやる。今はこいつをなんとかしなきゃ……」

奈緒が身構える。燕尾服の男も拳を中段に上げ、注意深くじりじりと動き出す。いつの間にか、影は手になにかを持っていた。長い棒状で、先が鋭くて……まるで剣に見える。剣のような長い影だ。

「オラアッ！」

マジシャンはパンチを繰り出したが、影は素早くそれを避ける。そしてその手を掲げ、突き出されたままの腕に……。

剣が振り下ろされる!!

(ダメっ! いけない!)

と思った。そのとき――

「……………」

突如として、影は停止した。剣はマジシャンの腕ギリギリ手前で止まっている。

「今だ!」

奈緒の声とともに、マジシャンは影の手首を押さえつけ、剣を落とさせようとする。

……ッ!!

「ぐあああううっ!!」

私の両腕がいきなり天に向かって上げられた。その直後、強い痛みが手首を襲った。締め付けられているような力を感じる。

「凜? どうした!」

影から目を離さずに奈緒が叫ぶ。

「わかんない! わかんないけど、腕が勝手に動いて……痛い……!」

「な、なんだって……!? まさか……」

奈緒が私に困惑の表情を向けた。少しして、マジシャンは押さえつけていた影の腕を解放してしまった。

すると……次の瞬間、私の腕も解放された。痛みも徐々に引いてきた。

「……どういふこと？」

「凜！……そいつを見て、なにか感じないか？」

不意に奈緒がそんなことを言ってきた。

なをを急に……と思いつつながら影を見ると、なにか違和感があった。いや、正確には違和感ではなく——安心感。不思議なことに、さつきまでのことが嘘のように、いつの間にか私の心は落ち着いていた。すぐ前にいる、この謎の存在から、なにか穏やかなものを感じ始めている。『大丈夫』——私にそう語りかけているように見えた。

「うまく言えないけど……もうなにもしてこないような……そんな気がする……」

奈緒が信じてくれるかどうか分からないが、今感じたことを素直に伝えた。

「……そうか。よし、じゃあ、変なこと言うようだけど、こいつにここからいなくなるよう頭の中で念じてみてくれないか」

……？ 突然の奇妙な指示。念じたくらいで消えてくれるならあんなに苦労し

なかつただろう。そう言おうとしたが、奈緒は真顔でまっすぐ私を見ている。どうやらなにか考えがあるようだ。

(お願い、いなく……なつて……)

奈緒に従つて頭の中でそう祈つてみた。

すると——なんと呆気ないんだろう。心で念じた、それだけで影は本当に消えてしまった。まるで始めからいかなかったかのように、完全に。

「うそ……なんで」

「お前もか、凜！」

哑然としている私の肩を掴んで、嬉しそうに奈緒が言った。

「お前もつて……なにが？」

「『スタンド』さー！」

さつきも出てきた言葉だ。

『スタンド』………いったい、なんなの？

*

『スタンド』——精神力が具現化し、自分の意のままに動かすことができる、いわゆる超能力。スタンドは、同じくスタンドを持つものには見たり触れたりできない。スタンドが傷つけばそのスタンドの持ち主(『本体』)もダメージを負ってしまう。つまり、スタンドが消滅した場合、本体も同じ運命を辿ることに……—

騒ぎのあと、なにも知らなかった私に、奈緒は詳しく話を聞かせてくれた。

幽霊だと思っていたもの……それは『スタンドと呼ばれる超能力だった。超能力……同じく能力を持たなければ見えない存在……』

にわかには信じられないことばかり矢継ぎ早に説明されたが、能力者（『スタンド使い』というらしい）にしか見えないのなら、両親やお店に来た人がスタンドに気づかなかつたのは『スタンド使い』ではなかつたからだと言明がつく。それに、あの緑の影が、腕を奈緒のスタンドに押さえつけられたとき、私の腕も見えないなにかに掴まれたように動かなくなつた。そしてなにより、こんな嘘を奈緒がつく理由が分からないし、こんな荒唐無稽な話、そもそも嘘として成り立たない。

「スタンド……ねえ」

しかし声に出してみても、やはりそこには嘘くさい響きしか残らない。

「ワケわかんないよな……。気持ち分かるけど」

ひと呼吸おいて、奈緒が

「でも、確かにいるんだよな、これが……そらっ！」

と、つづけると、さっきのマジシャンがまた突然現れた。

「このとおり、ほら」

マジシャンは私に向かって両手を振っている。体格が良いこともあつてなかなか不気味だ。

「こんなことか」

次は勉強机の上に無造作に置かれたままの教科書を手に取り、パラパラめくり読むようなそぶりをしてみせた。

「こういうこともできるぜ」

そして今度は窓際まで歩いて閉めきったままのカーテンを開けてみせた。

確かに、その存在は紛れもない事実のようだ。窓から射す日の光がそれを物語っている。

「見えるだろ。心から生まれる力……これが『スタンド』さ」

そう言うと、マジシャンはこちらに戻って奈緒の隣にちよこんと正座した。さつきより愛嬌があるように感じるのは、私の心がスタンドという存在を少しは理解できたということだろうか。

「……まあ、信じざるを得ないよね。けど……さつきのあの影が私のスタンドってのは本当なの？ ……私も『スタンド使い』なの？」

「それを今から確かめるのさ。さつきとは逆に、今度は「出ろー」って念じてみな。出来て当然って思うことがコツだぞ」

「出来て当然……出来て当然、ね——」

じつと正座したままの奈緒のスタンドを見つめ、その存在を改めて自分のなかに刻み

つけてみる。

そして強く念じる。

——出てきて、私の……スタンド。

*

——!!

身体の内側から、熱いものが外に向かつて放たれるような感覚がした。隣になにかの気配を感じる。

そちらに目を向ければ、そこにいたのはあの影……ではなかった——。

『騎士』だ——騎士がそこにいた。

昔の少女漫画に出てくる貴公子みたいなゴシックな服。色は緑……いや、蒼と言うべきか。やや青みがかった緑色。私の瞳と同じ色だった。影はこの色を反映していたのか。顔の上半分は、舞踏会で身に付けるような仮面で覆われている。奈緒のスタンドのようにこちらも帽子を被っているがシルクハットではなく、つばの広い、これまたゴシックな帽子だ。そのまわりに絡みつく茨、そこには真つ青に輝く一輪の薔薇が咲いていた。

「おおおおつ!! なっ、出ただろ? そいつが凜のスタンドだよ! へえ、カッコいいなあ……」

「これが……私の……」

消した時同様、出すときも実にあっさりだ。ずいぶん派手な気もするけど……確かに見た目は悪くない。そして、影のときに持つていた剣が、腰に携えた鞘に収まっている。格好は良いが物騒なスタンドだ。

「どうだ？　ちゃんと動かせるか？」

奈緒に促されスタンドを動かしてみる。手も足も自由に動かせた。回りを歩かせてみてもなにも問題はない。手こずるかと思っただけ。

「これまたあっさりだった。」

「スタンドをしつかり認識できたみたいだな。もうこれで大丈夫だろう」

言われてみれば、さっきまでの、しつくりこない感じ、心の中にあつた違和感のようなものももう無い。すべては解決したということでもいいんだらうか。

「とりあえず一安心だな。他にも説明することはあるけど、明日学園で『先生』から聞いた方が良いな。今日はゆっくり休めよ」

「……えっ？」

事もなげに奈緒は言ったようだが、聞き捨てならない一言だ。

「『先生』？　うちの学園の先生に『スタンド使い』がいるの？」

「ああ、保体の木場先生。あたしはあの人からスタンドのことを教わったんだ。つい二

週間前だけどな」

私たちが通っている学園の教師にも『スタンド使い』がいるのか。

「……何人くらいいるんだろうね。『スタンド使い』って」

「うーん、さあな。ま、積もる話は明日にして、休んだ休んだ。CDも返したし、そろそろ帰るよ」

奈緒はバッグを手に取り、いつものように別れを告げ帰っていった。

常識が覆るほどの大騒動のあと、静寂を取り戻した部屋の中には、私と、私のスタンドだけが残った。

*

——あれから5時間くらい経っただろうか。なんだかんだで夕食、入浴を済ませ明日の準備をする頃には、すっかり落ち着いていた。

ベッドに入り、念じてみる。

枕元にスタンドが現れた。不安や恐怖はもう感じない。こいつは自分の一部だという感覚だけがある。

「ハナコには見える？　これ……」

ハナコに問いかけても小首を傾げてつぶらな瞳で私を見つめているだけだった。

スタンドを操作して電気を消すと、あつという間に眠気が襲ってきた。

——とんでもない一日だった。明日から、どうなるのかな……。
スタンドをしまい、そんなことを思いながら私は眠りに落ちた。
(つづく)

第2話『School Days』

連休が明けて、また学園生活のはじまり……。

とはいっても、今日は金曜日。今週はこの一日だけのお勤めで済む。中途半端と思うか、またすぐに休みが来ると思うかは人それぞれだけど、私はこの日を待ちわびていた側の人間だ。はやる気持ちで歩幅が大きくなっていく。

「来たな。おはよう、凜」

正門をくぐり校舎前に着くと、奈緒が待っていた。そしてその隣に、もうひとり——
「おはよう、渋谷。よく眠れたか？」

——木場真奈美先生。

保健体育を受け持つ教師であるとともに、この私立『美城学園』高等部の学年主任でもある。生徒に対して厳しい一方、親身にもなってくれる頼りがいのある先生。さらに、その長身と凛々しい顔立ちで生徒からの人気は高く、ウワサによると他校の生徒にまでファンがいるらしい。

「話は神谷から聞いている。君もスタンドを発現したそうだな」

先生は私に向かってはつきりそう言った。奈緒が言ったとおり知っているんだ、スタンドのこと。

「放課後、教室に残っていてくれ。スタンドについてわかる範囲で教えよう」

「……わかりました。待ってます」

スタンドについて、まだ分からないことだらけだ。話ができるだけ早く聞いておきたい。今後なにかが起こるにしても、そうでないにしても……。

「よし、ではまた放課後に。それまではいつもどおり勉学に励んでくれたまえ、しつかりとな」

別に普段もそこまで真面目なわけじゃないけど、今日一日は上の空でも許してほしい。

先生と別れて私たちは教室へと向かった。

*

放課後、私と奈緒の二人だけになった教室に約束どおり木場先生がやってきた。授業の時と同じように教壇に立ったので、一応私たちも自分の席に座る。

「神谷からも聞いたかもしれないが、スタンドとは、精神のエネルギーが具現化したもの……つまり、自分の分身ということだ。幽霊だとか、異世界生物だとかいったものではない。『スタンド』という呼び名は『Stand By Me』……『そばに立つ』こと

からこう呼ばれるようになった。このようにな——」

ひと呼吸置いて木場先生の背後にスタンドが現れた。スマートな、でも奈緒のスタンドの様に遅しい体つき。立っただけでその場の空気が引き締まるような威厳を感じる。

「では、ひとつずつ説明していこうか」

先生のスタンドが歩き出した、と思ったらすぐに止まってしまった。

「まずひとつ。スタンドには『射程距離』というものがある」

人差し指を立てて先生が言った。

「射程距離……?」

「『本体』からスタンドが離れて行動できる距離のことだ。私のスタンドは今いるここまで……2 mほどだ」

「ちなみに、あたしも先生と同じくらいだな」

奈緒も席を立ち先生の隣でスタンドを出し同様に歩き始めるが、先生のスタンドとだいたい同じ位置で動きを止めた。

「な?」一緒だろ。あたしは見たことないけど、100 m以上行けるスタンドもあるらしい……凜はどうだ?」

そうやって奈緒はまっすぐ私を見る。その瞳は子供のように輝いていた。

そういえば奈緒ってアニメ好きなんだっけ。こないかにもな能力……食いつかないワケがなかった。発現したときとか、驚きはしたろうけど、そのあと大はしやぎしてそう。ガッツポーズなんかしたりして——

余計なことを考えながら私もふたりの横に並び、スタンドを歩かせてみる。

結果は……いちばん後ろの席あたりまで行けた。射程距離はふたりより少し長いようだ。

「おおー！ 凜のスタンドはあたしより遠くまで行けるな」

奈緒が嬉しそうな声を出す。歩いただけとはいえ、それぞれのスタンドの違いを目の当たりにして興奮したようだ。

「このように」

「はしやぐ奈緒を制するように語気を強め、ふたたび先生が語り出す。

「スタンドにはに射程距離があり、それはスタンド間で異なる。そして、基本的に力と射程距離は反比例していく。遠くまでいけるものほど、力は弱い。別に確かめたりしないが、おそらく君のスタンドは単純な力に関しては私や神谷のスタンドほど無いはずだ。念のため言うが、「劣っている」ということではない。スタンドの性能は千差万別、向き不向きこそあれど万能なものとは存在しないということをおこう。力の源が心にあることを考えれば当然のことだがな」

「要するに、人間と同じなんだ。似てるところがあっても、まったく一緒なものなんてない……なんか、イイよな！」

つけ足すように奈緒も口を開くが、ずいぶん感覚的な言葉だ。なにが『イイ』んだ。しかし本人は白い歯を見せニカツと笑ってご満悦のようだ。口を出さずにはいられなかったのだろう。そんな奈緒を横目で見ながら先生は話をつづけた。

「そして、スタンドの最大の特徴とも言わべきものが、『能力』だ。ここでいう『能力』とは、スタンドそれ自体のことではなく、スタンドがひとりひとりにひとつ持っている『不思議な力』のことだ。もちろんこの『能力』も人それぞれ、スタンドごとに異なるが、いずれも人間の理解や自然の法則を無視したかのような超常現象じみたものばかりだ」

「そう！ それがスタンドのいちばんの『ウリ』なんだよ！ 凛にいちばん教えたのはそこなんだよ！」

流れるように奈緒が言葉をつづける。その瞳は夏休み中の少年のようにららんと輝いていた。

「神谷、落ち着け……。話の腰を折らないでくれないか」

普段は真面目だけど、テンションが上がると子供のようにはしゃぐ。そんな奈緒に先生は少し呆れ顔だ。

「でも先生、私のスタンドにそんな能力も、無かったと思うんですけど……」

奈緒をなだめながら、気になったことを口にしてみた。

「いや、君はまだ気づいていないだけだ、自分のスタンドの力を。それをいつ理解するかもまた、個人差がある。まあそのうちわかるようになるはずさ」

今はまだ、気づいてないだけ……いつか理解する——。

「能力が判明しても、くれぐれも悪用はしないでくれよ？　もしやったら——『指導』しなくてはいけないからな」

いたずらっぽい笑みを浮かべて先生が注意する。その目になぜか恐ろしいものを感じる。悪用なんてするつもりは無いけど、肝に銘じておこう……。

「最後に……これが私がいちばん教えておきたいことだ。『スタンド使いは引かれ合う』……」

先ほどと違って険しい顔つきになって先生は言った。

『『引かれ合う』……？　なんですか、それは』

「スタンド使いは……なぜそうなるのかわからないが、まるで見えない力で引き寄せられるように他のスタンド使いと出会う……。そんな奇妙なルールがあるんだ」

スタンド使い同士は引かれ合う……。いつかどこかで出会う……。それって——

「それって……危ないやつに会うこともあるんじゃない……」

思ったことを無意識の内に声に出していた。それを聞いた先生はさらに渋い顔にな

る。

「そうだ……それを懸念している。危険なスタンド使いに会ってしまった場合、どうするか……。教師が生徒に向かってこういうことを言うのもなんだが、自分の身をスタンドで守れるようにした方がいいかもしれない」

「つまり……『闘う』……ことがあるかもしれないってことですか？」

「……………『無い』、とは言えないな。だが、襲われたときは逃げてくれ。逃げるのが無理なら、隠れる。そのあとは——これだ」

「そう言う先生は私にプリントを差し出した。色んな先生の名前と番号が並んでい

る。
「とにかく、まずいと思ったならそこに載っているだれかに連絡するんだ。生徒は教師が守ってみせる」

「ずらつと並んだ番号は全部で10人以上あった。うちの学園の教師陣だけでもこんななたくさんのスタンド使いがいるのか。」

「あれ、日下部先生の番号が無い」

「ひとつとおりプリントを見渡していたら、私たちの担任である日下部先生の名前が見当たらないことに気づいた。」

「ああ、日下部先生はスタンド使いではない。そこに載っていない教師にスタンドの話

をしても、なにも通じないから気をつけろ……不安にさせてしまったが、話はこんなところだ。番号はきちんと登録しておいてくれ」

ひと通り説明を終えて、木場先生は教室から出ていった。

一抹の不安を胸に残したまま、私たちも教室を後にした。

*

「そういえば——」

学園を出て、坂を下りたら右手に広がる森林公園。そのなかを友達と喋りながら帰る。いつもの下校風景。いつもと違うのは、会話の内容が、『奇妙な力』についての話をしているということだけだ。

「そういえば、スタンドには能力があるって言ってたけど、実際奈緒たちの能力はどんななの？」

話を聞いただけではいまいち理解できないし、正直この目で見てみたい気持ちもある。スタンドは万能じゃないって先生も言っていたし、まさか世界を滅ぼすようなものでもないだろう。

「その質問を待ってたぜ！ 知りたいか？ 聞いて驚け ……って言っても、先生のは知らないし、あたしのは地味なんだよな……便利だけど」

別に便利なら地味でもなんでもいいだろう。むしろ、まわりには見えなくても派手だ

と使い辛い気がする。

「あたしのスタンドの能力は……こいつ、『ステッキ』持つてるんだけど、これで触ったものの『場所がわかる』んだ」

スタンドを出しながら奈緒が説明してくれる。

「『場所がわかる』っていうのは……つまり、離れたり、見えなくなっただけでもってこと？」

「そう。どこらへんにあるか、どれくらいの距離なのかが感覚で分かるんだ。距離が近ければ近いほど細かいところまで知ることができる」

「へえ……便利そうじゃん」

確かに地味かもしれないけど普通に使えるような能力じゃないか。

「一度にひとつのものにしか使えないけどな。とりあえず、普段は財布に使ってるんだ。これなら、落としたときすぐに分かるからな」

そう言いながら奈緒は財布を取り出した。

「具体的にどんな感じか見せてやるよ……そらっ！」

スタンドが財布を空高く放り投げた。

そして顔を下に向け、左手を掲げたまま財布を待ち受ける。能力で場所を探って、見ずにキャッチしてやろうという魂胆だ。

奈緒を脇目に頭を上げて落下する財布を見守る。位置は奈緒の頭のすこし右側。キヤツチできたときのドヤ顔が楽しみだ——なんて思ってた、そのとき……。

『カアーツ！ カアーツ！』

カラスが物凄いスピードで私たちの真上に飛んできた。

そしてそのくちばしで奈緒の財布を……パクツ、とくわえて飛んでいってしまった。

「ん?! んんんんツ?!」

異常に気づき頭を上げた奈緒の、ちよつとバカっぽい声が響く。

「え、なに?! どこっ?! サイフ?!」

落ち着け。能力で分かるはずだろう。いや、パニックで混乱してるんだろうけど。

「ちよつ、落ち着いて! カラスがくわえてったよう? ほら……」

「ああ〜! 待て〜! 待て〜! 待て〜! 待て〜! 待て〜!」

教えるやいなや、奈緒は電光石火でカラスを追いかける……私も追わないといけない流れだよな、これ……。

「やれやれ……」

スタンドがどうの、なんてことも霞むほどのしょうもなさには思わずため息が漏れる。

すこし笑いながら大地を蹴って、愛嬌あふれるポリユーマーな髪が揺れる背中を追いかけた。

)))))

第3話 『Never Say Never』

「だああああああつ、待てっつーのお!!」

苛立った叫びが並木道に響く。まばらにいる下校途中の生徒たち、ジョギング中のおじさん、ベンチでうたた寝していたサラリーマンが、なにごとかと驚いてこちらを見ている。そんな視線などお構いなしに、奈緒はカラスを追いかけて公園中央の原っぱを駆け抜けていこうとする。

途中、原っぱのはずれ、林道への入り口横にあるベンチにカラスが降下していくのが見えた。それを認めるや、奈緒はさらにスピードを上げて疾駆した。スタンドの能力によれば、まだ財布はくわえたままらしい。

背の高い樹がうしろに広がるその場所へたどり着くと、果たしてカラスはそこにいた。財布もしつかりくわえたままだ。しかし、思わぬ光景も広がっていた。

カラスはベンチに座っていた男性の肩の上に、居心地よさそうにとまっていたのだ。

そして、くちばしにくわえた財布を差し出すように頭を突き出すと、男はそれを受けとった。

「ちよつ、ちよつ、ちよつ！　ちよつと待った、そこのお兄さん！　その財布あたしのなんだ！　そいつに取られちゃつてき……」

「へ……！！」

いきなり話しかけられて面食らつたのか、男は気の抜けた声を出した。

「そのカラス、速いのなんのつて……肩にとまつてるけど、もしかしてそいつ飼つてたりとか？　だとしたら珍しいね、カラス飼うとか。でもビックリしたよ。いきなり現れて財布くわえて飛び去っていくんだもん」

思つてもみなかつた状況に戸惑いながら、矢継ぎ早に奈緒が事情を説明する。男は話を聞いているのかいないのか、薄く口を開けて無言のまま、じつと動かない。なにかを警戒するような目つきをしている。私にはそんなふうに見えた。

「あーつと、証拠がないよね！！　それがあたしの財布だつていう……。うーん、証拠証拠……そうだ、カード！　その中に『幽体離脱フルボッコちゃん』デザインのポイントカードが——」

男の疑心暗鬼な様子を察したのか、必死に自分の財布を目の前のカラスに取られたことを主張する。だが、その言葉をさえぎるように、男が開いたままの口から声を出した。

「……………『見える』のか？」

「だから財布の中身を見てみれば……えっ？」

が、そのパワーは強烈で、バランスを崩して後ろに倒れそうになる。そんな私を、慌てながらも奈緒がスタンドで支えてくれた。

すぐに体勢を立て直し、男を見据える。遅れて奈緒もスタンドともども身構えた。

「……ちつ、今のを防ぎやがるか。生意気だなオイ……」

男が不敵に笑う。私の予感当たってしまったようだ。

「その『カラス』は、アンタの『スタンド』ってことなんだよね？」

「は？ 『スタンド』？ 名前はなんだかねえが……そうだよ。こいつは俺のチカラだ。俺だけが操れる、誰にも見えないチカラ………のはずなんだが、他にも見えるやつがいたんだな。しかも見た目は違うが同じようなモンまで持つてやがる……」

邪悪な笑みを崩すことなく、男がつづけて言う。

「財布が空飛んで意味わかんねえ、けどラッキー——なんて思って取ったら、まさかこんなことになるとはな。ククク……でもイイや。JKふたりとか、楽しく遊べそうだなあ……」

「っ!!」

心底不気味そうに奈緒が男を見る。どうやら、よりにもよつてとんでもないやつと出会ってしまったようだ。

「……その感じじゃ、財布は返してもらえなさそうだし、逃がしてもくれなさそうだね」

「ケケケ……そりやもちろん。チカラ使えんのは俺だけでいいんだよ！ いっしょに遊ぼうぜ？ イヤって言ってもいいよ？ お前らに拒否権ねえしィ!! ギャハハハハハハ!!」

下品に笑いながら、じりじりと私たちに近づいてこようとす。奈緒は軽蔑の眼差しを男に向けているようだが、そんなものは気にもとめようとしない。

「好き放題言ってるけど、どうにかできると思ってるの？ それとも、女だからつてなめてる？」

剣先を男に向けながら挑発するように言い放つ。奈緒のことは心配だ。でも――

「逃げられないなら……やってやる!」

「ハツハア! 威勢のいい嬢ちゃんだな! チカラ持つてようがオンナふたりなんてワケねえぜ!」

同じスタンド使いどうして二対一の状態にも関わらず、ずいぶん強気なやつだ。負けるはずがないとたかをくくっている。

大丈夫、さつきは不意打ちを防いだ。動きはしっかりと捉えられている。油断しなければ、大丈夫……。

「ふふふ……いけやア!!」

『A a a a a a a a !!』

叫び声を合図に、カラスが弾丸のような勢いでふたたびこちらに向かつてくる。今度は私がターゲットだ。速い、でもそれだけだ。動きがまっすぐな以上、反応さえできれば対処は容易い。

迷いなく剣を構えて防御の体勢に入る。

「マヌケが……」

男のつぶやく声がかすかに聞こえた。

次の瞬間、一直線に飛んでいたはずのカラスが、一瞬で空高く上昇した。まったく減速することなく、それどころか体の向きすら変えていない。こちらに向かつてくる姿勢のまま縦に動き、上空へと移動した。

「やれッ!!」

黒い塊が私に向けて降ってくる――

「あぶない!!」

――ザシュッ!

湿り気の混じった、風を切る音。

うつぶせに倒れていた身体を起こすと頬に気味の悪い生温さを感じる。

「凜っ、血が――」

泣きそうな顔で奈緒がこっちを見つめている。そして、遅れてやってくる鋭い痛み

……頬を切られたようだ。

「大丈夫」

立ち上がり、痛みをこらえてカラスのいる方に向き直る。

上昇したカラスは、スタンドを盾にして後ろにいた私自身を狙ってきた。予期せぬ相手の動きに反応できなかったが、とつさに奈緒が突き飛ばしてくれたおかげでかすり傷で済んだ。もし直撃していたら……頭に穴が空いてたかもしれない。

………最悪。

一瞬だけ、吐き気や、怒り、泣きたい気持ち……よく分からない自己嫌悪で胸がいつぱいになった。しかしすぐにそれは、心に湧いたひとつの決意でかき消される。

——この男を……止めなきや！

突然手に入れた魔法のような力。万能感に溺れ、自惚れてしまうのは仕方ないのかもしれない。

だが、歪んだ欲望を満たすためにスタンドを利用して私たちや他の誰かを傷つけるのなら、見過ごすわけにはいかないし、なすがままにされる義理もない。止めてみせる、この男を。

「アンタを……倒す！」

剣を握る手に力が入る。

「はん！ やつてみるよ！」

『V h a a a a a a a a !!』

みたびカラスが唸り声をあげながら突っ込んでくる。

「させるか！」

奈緒のスタンドもステツキを持ち、迎撃体勢をとる。

「W w w w w u !!」

くちばしが剣に激突するすんでのところでカラスが真横に動く。私を攻撃すると見

せかけて、狙いは……

「奈緒っ！」

「せいっ！」

突飛な動きから繰り出された鋭いくちばしを、マジシャンは正確にステツキで捉えて

受け流した。

攻撃が不発に終わったカラスはそのまま横薙ぎに旋回し、男のもとへ戻る。

「ハッ、ふたり揃ってこいつの速さについてこれるとはな……」

焦っているのか苛立っているのか、男が苦虫を噛み潰したような声を出す。

「まあ、こうすりゃ関係ねーか！」

『v o e e e e e e e e e e e e e e !!』

今度は私たちを囲むように四方八方闇雲に高速で飛びまわりはじめた。金切り声と風切り音が周囲の空間を震わせる。これはなかなか厄介だ。死角から攻められたら対応はどうしても一瞬遅くなってしまう。不確実な一手は自殺行為……けど、待っていてモヒット&アウエイでゆっくり痛めつけられていく。いったい、どうすれば……

「凜！ もつと寄れ！」

ぐつ、と奈緒に肩を引かれた。今はとにかく、乱れ飛ぶカラスのくちばしから身を守らなければならぬ。

お互い全神経をスタンドに集中、カラスの動きを油断なく注視——と思いきや、

「スタンド引っこめて！ そんなで、しゃがめ！」

「はあ……！」

自分から防御を解いて丸腰になれど？ どうしてそんな……意味がわからない。しかし、そう言い切った奈緒の目には力強い光が宿っていた。

狙いはわからないけど……なにか策があるなら、乗ってやる！

奈緒を信用してスタンドを引っ込め、身を低く構える。警戒しつつ奈緒の顔を覗きこむと、あろうことか両目を閉じていた。

そこでようやく気がつく。奈緒のスタンドはさつき、ステッキでカラスに『触れて』いた。それはつまり——

「いちおう聞くけど、いけるんだよね？」

「もちろん！ あたしを信じろ！」

目を閉じたまま奈緒が答えた。自信があるなら、私は信じるのみ。

「おーつと、目エ閉じちゃって……諦めたかな？」

「どうか……試してみたらどうだ？」

大胆不敵な奈緒の挑発。男の顔がますます喜色に歪む。

「速さだけじゃ勝負できねえからな。攻撃場所とタイミングは、よおーく考えなくっちゃな……」

こちらを睨めつけ、じっとしたまま男はなにもしてこない。焦らして集中が途切れる隙を狙う気か。

「ヒヒヒ……ところでお嬢ちゃん、パンツ見えて——」

「見えてないから」

余計なことを……奈緒の集中を乱してはいけない。カラスだけでなく、やつ言葉にも注意しなくては。

「けっ、この手はダメか。……んじゃ、そろそろ返してあげますか」

軽口を叩きながら、手に持っていた財布を用心深く握り直し、男が振りかぶる。

「よっ、とオー！」

そして奈緒に向けてストレートに投げつけてきた。

取らなきや奈緒にぶつかって意識が逸れてしまうだろう。だが、取ったら私に隙ができてしまう。どう動いても、ここでヤツの攻撃が来る……！

「っ！」

しやがんだまま手をのぼし財布を取ろうとした。

「ナイスキャッチい〜」

財布が手に収まる寸前、下卑^げた声と、背中に冷たい風の音が聴こえた――

「ぶげらっ!!」

頭上をなにかがかすめた。その直後、奇声をあげて男がその場に崩れ落ちる。顔を押しさえたまま動かない。

「ナイスキャッチ……凜」

微笑みながら奈緒が目を開けた。その言葉で、手に掴んだ財布の感触に気づく。

振り返るとカラスが地面にぐったりのびていて、マジシャンの右手にはステッキが握られていた。

「卑怯者は後ろから襲う……お約束だな。右側だったから少し焦ったけど……ほんの少しなっ！」

「……すいい」

率直な気持ち言葉をすると、奈緒は誇らしげに言った。

「近距離なら、どれだけビュンビュン飛びまわってようが手に取るように細かい位置まで把握できる。これがあたしのスタンド、『ワン・ヴィジョン』さっ！」

『ワン・ヴィジョン』——その名を耳にしたのは、たしか二度目だ。

「でも……なにも目は閉じなくてもよかつたんじゃ」

私の指摘にも動じず、自慢げに話をつづける。

「感覚でわかるぶん、目で見てるとかえって惑わされるかもしれないから。財布は取れなかつたけど、これで理解できただろ？ あたしの能力」

たしかに奈緒の言うとおりよく理解できた。劇的な速さで動くカラスの位置をしっかりと捉え、利き手でなくともそのスピードに対応できる素早く正確な動き。そして、一撃で行動不能にするほどのパワー……。正直、これほど強力な能力だとは思ってなかつた。

「びゃぐつ……く、クソツ……」

鼻を押さえて男がよろよろと立ち上がる。ステッキは見事に顔面に命中したようだ。

「悪いことはできないもんだな。必ず自分に返ってくる……。さて、あとは先生に任せよう」

この問題を先生たちがどうにかできることなのか私たちにはわからない。しかし警

鼻をかばいながら男が問いかけてくる。いわば猫は『人質』……助けたかったら逃げるのを止めるなどということだろう。

「卑怯者……逃げられると思ってるの?」

「俺を逃がさなきゃ、猫ちゃんも死んじゃうぜ? つと、そういや猫は高いところから落ちてても平気ってなんかで聞いたな。もうちよい上がつとこう」

カラスが羽ばたき、さらに高度を上げていく……そうまでして逃げたいか。

「……べつに、私にあの野良猫を助ける義理なんて、ないけど……?」

「へへっ! 強がりはいけないなお嬢ちゃん。そんなこと言っただって見過ごせないだろう? 俺だつてこんなこと本当はしたくないんだ。財布も返したんだし、ここでチャラにしようぜ」

「……!」

こんなにも心の底から誰かを軽蔑したのははじめてだ。なにからなにまで自分の都合で動いて、まわりを傷つけていくこの男を逃がすわけにはいかない。でもあいつが言うとおりに、猫を見捨てることは私にはできない。きつと奈緒は私以上にそんなことできないだろう。

それに……猫を犠牲にしてこいつを倒すことは、『ちがう』……。私にとって、それは間違つた道だ。

「できないよなあ……。かわいいそうだもんなあ……。ふっ、うくくく……。下らねえなあ！ くだらねえ！ そんなんじや社会に出てから苦労するぜ？ ま、そのまま甘ちゃんできてくれよ。俺みたいなやつには助かる存在だし！」

邪悪に笑いながら男がすこしずつ後ずさって、私たちから離れていく。

「まあ安心しな。逃がしてくれりや、猫はちゃんと降ろすぜ」

嘘だ。でも、猫にとつてはこのままあいつを逃がした方が安全かもしれない。仮に落としたとしても私のスタンドなら落下するまでにギリギリたどり着けるだろう。ただ、そうすれば男に逃げられる。もうすでにやつはカラスから50mくらい離れたところにいる。腹の立つことに射程距離がかなり広いようだ……。

どうすればいい……。どうすれば……

「あたしがあいつを追うから、凜は猫を助けてやって……」

横から奈緒が話しかけてくる。

「ここから追いつける？ あの男が天性の運動オンチでもないかぎり、無理だと思うけど」

「でも、そうするしか方法がないだろ!! 最悪、あいつは後で探して捕まえればいい!」
「ダメ。逃がしたらあいつは他の人を襲うかもしれない……。猫も守るし、あいつも、いま捕まえる!」

「だからどうやって——」

「はあい、ちゅうもーく!!」

遠くから威勢のいい声が響く。奈緒と言い合ってるあいだにかなり距離が開いてしまっていた。

「ありがとよおっ!! 俺からのプレゼント、受け取ってねー、バイバーイ!!」

カラスが両脚を解放した。猫が落ちる……男は逃げる……。

「っ！ とにかく、あたしはあいつを追いかける！ 凜は猫を——」

言い終わらないうちに奈緒は男を追っていった。とにかく、まずは猫だ。

全速力で猫が落ちる場所へ向かう。もうすぐスタンドの射程内だ。いま助けてあげる……!!

「ミギヤーツ!!」

間一髪。猫はスタンドの腕のなかに収まった。

「ほら、おいき」

そつと地面に下ろしてやると、猫は一目散に逃げていった。

『aaaaaaaaaaaa……』

頭上のカラスが飛び去っていく。勝利を確信してなのか、大きく翼を広げて悠々と主

人のもとへ帰っていく……。

このままじゃ、ダメだ。

あいつの身勝手に、これ以上傷つく人を増やしちやいけない。ううん、あいつだけじゃない、スタンドを使ってこんなことをするやつらが他にもいるなら、止めなきや。守りたい、みんなを——この町を！ 絶対に！

「絶対に、諦めない……！」

腹をくくり、胸のなかに決意の炎を宿す。覚悟で感覚が研ぎ澄まされ、スタンドとの完全な一体感が生まれた。鼓動を感じる、息づかいを感じる……。頭のなかに、自分の声が届く——『絶対に諦めない』……。

そうだ！ そう決めたんだ！

決意を刻もう。『もうひとりの私』に。そして、叫ぶ。その名前を……！

『ネヴァー・セイ・ネヴァー！』

呼びかけに応じるように、無意識にスタンドが動きだす。『お姫さまだっこ』で私を抱え、大地を蹴って跳んだ。もちろんその一步ではカラスへは到底届かない。

跳躍が頂点に達すると、『ネヴァー・セイ・ネヴァー』が今度は空中を蹴る。すると、実に奇妙なことが起こった。

まるで、地面がそこにあるかのように空中を『跳んだ』。触れてもいない私の両足から

第4話『Strange Days』

「なんとか逃げられずに済んだね」

カラスを倒し、頬の傷と乾いた血の痕を気にしながら林のなかを2分ほど歩いたところで、困惑した顔で立っている奈緒を見つけた。すぐそばに、カラスのスタンド使いの男がうつぶせに倒れている。

「いきなりブツ倒れたんだ……。つまり、やったんだな？ 猫は無事なのか？」

こちらを振り返りながら尋ねる奈緒に、ざっくりとさつき起こったことを説明する。猫を助けたこと、『ネヴァー・セイ・ネヴァー』の能力のこと。

「なんだよ!! 『空中を移動できる』とか、超カッコいいじゃん……。派手だし」

奈緒はやたらとスタンド能力に派手さを求めているようだ。

「派手じゃなくても……。『ワン・ヴィジョン』だっけ？ カッコいいじゃん、強かったし。それに派手なのって、そんなにいい？ 私はさつきの姿、誰かに見られてなかったか気になってしょうがないよ」

あの光景をはたから見たら『横になって空中をけっこうなスピードで飛んでる女子高

生』……。そんなとこ見られていたら、まずい。とりあえず、スカートはしつかり押さえてたからパンツは隠せていたはずだ。たぶん。

「よし、今度こそ先生を呼ぶぞ」

奈緒がスマホを取り出す。そして、操作しようとしたところで……

「ん……おおおおおおお、背中……クソいてえ……」

男が目を覚ましてしまった。

「ちくしよおお……は、はやく……はやく戻ってこい……」

意識を取り戻した男は、どうやらカラスを自分のもとへ移動させてるようだが、余裕のない声で明らかに焦っている。もうスタンドを動かすだけの体力が無いのかもしれない。

「いいかげん観念しろ！ もう終わりだ」

奈緒が男を恫喝する。

「ぐ、クソ、クソ……クソオ……」

この期に及んでまだなんとか逃げようと画策しているようだ。

私もさつき『絶対に諦めない』と決意したばかりとはいえ、この人の絶対諦めない気持ちは見習えないな——などと考えていたとき、すこし奥にある大きな樹の陰からガサガサと音が聞こえた。まだ神経が昂たかぶっていた私たちは、その方向へ瞬時に注意を向け

る。

音の主が正体を現した。私たちとそんなに年の変わらなさそうな制服姿の女の子だ。オレンジみのある明るい茶髪頭から長く伸びたもみあげと三つ編みが青く染まつている。独特なヘアカラーセンスだ。

「キミたち、さつきからなにをしているんだい」

女子高生ふたりの前に男が倒れている——そんな光景にこれといつてうろたえることなく、彼女は静かな光をたたえた紫色の瞳で私たちに視線を注ぐ。

「……アンタには関係ないことだよ。この子が、この男に財布を盗まれたの。危ないから下がってて」

奥になにか秘めているような目の輝きに、若干言い淀みながらも言い放つ。

「財布を盗まれた……ね。それが真実だとしても、倒れている人に追い打ちをかける必要はあるのかい？」

事情を知らない彼女には、おそらく私たちがこの男に暴力をはたらいて、カツアゲかなんかをしているように見えるのだろう。そんな風に見られていようがなんだろうが逃がすわけにはいかない……そもそも追い打ちじゃなく、押さえつけるだけのつもりなだけだ。

「とにかく、そいつ捕まえて人を呼ばなきゃならないから下がって——」

「ぬ……おとおおおおん!! がんばれオレええええ!!」

!!

問答の最中に男が起き上がり、死力を振り絞って女の子に駆け寄っていく。

「やめ——」

制止の言葉を言い終える前に男は女の子の背後に回り、顔の前にジャンケンの『チョキ』の形をつくった拳をつきつけた。

「ハハハハハ！ 今度こそ……今度こそ俺の勝ちだあ！ 動くなよ？ 動いたら、この子の目が見えなくなっちゃうかもしれないからなあ!!」

「この期に及んでまだそんなこと……最低のゲスヤローめ！」

「好きだけ言つてろよお！ フフ……さて、まず、カラスを戻させろ。おまえらはさっきのやつら……『スタンド』つったか？ も出すな。おとなしくしてろ」

「……………」

猫のとき同様、人質をとられては解放されるまで下手な行動はできない。これで終わるつもりはないが、ひとまず命令に従う。

「……………」

奈緒が舌打ちする。1分ほどすると、カラスが這々の体で飛んできた。帰りぎわに攻撃されるのを恐れて私たちのそばを避け、まわりこんで男のもとへ舞い戻り、肩にと

まった。

「よし、よしよし、このお利口さん！ ……じゃ、今度は追うなよ。おまえらを撒けたと判断するまで、人質は放さねえからな。へへへ……最初からそうすりやよかつたんだ……」

「ぐっ……約束なんて守らないクセに……」

吐き捨てるように奈緒が漏らす。

「テメエらからこれ以上恨みを買うのはごめんだ……今度は守る。この子にもなにもしねえよ」

痛い目をみて多少しおらしくなっているようだが、こうしてまた人質をとるような力が未だ残っているようなやつを信じる気にはなれない。そもそも、こんな危険人物を逃がす気なんて私たちには最初はなから無い。しかし、あの子を傷つけずに男を捕まえる方法は……。

いっそのこと、正面から馬鹿正直に斬り込んでみるか……。決して無謀な策だとは思わない。自信がある。さっきの戦闘で私のスタンドはかなり素早く動けることがわかった。男がカラス……どちらかを完全に気絶させれば、今度こそ決着だ。問題は、どちらを狙った方がより確実か。そこを冷静に見極めなければいけない。

はやる心臓の鼓動に気をとられないよう、目の前のターゲットと攻撃のタイミングを

そう言い放ち、彼女は引き金を引いた……。

すると、奇妙なことが起こった。

男が消え、かわりにそこに現れたのは……『棺桶』だ。目も離してないのに、いつの間にも……？

「なに……これ……。あ、あいつは……どう、なったの？」

奈緒が震える声で女の子に尋ねる。

「そう。キミが恐れているように『棺桶』は死の象徴。死を保管するおぼせ厳かなはこ匣……。でも怖がることはないよ。彼は死んでない……ちよつと『棺桶になった』だけさ。それ以上でもそれ以下でもないし、すぐもとの姿に戻る」

ニヒルに微笑みながら、やや芝居がかった口調で彼女は答えた。

『棺桶になった』って……身も蓋もない滅茶苦茶な能力だ。まあスタンドに滅茶苦茶もなにもないが。

そう、またしても『スタンド』だ。偶然出くわしたこの子も、『スタンド使い』……。
またもや引かれ合ったわけだ。

「さて、あとは大人にまかせよう」

そう言うと、女の子はスマホを取り出し、どこかに電話をかける。

「もしもし、早苗さなえさん、ボクだ。また『スタンド使い』が現れたよ。生徒が襲われた……」

軽いけどケガ人が出た。大丈夫……ああ、了解。待つてる」

話を終えたらしく彼女が電話を切った直後、

「……あアツ!! なんだったんだ? いきなり真つ暗になりやがって」

男が棺桶になったとき同様、一瞬でもとの姿に戻った。

「てめえ! いったいオレになにを——」

「そいやつ!」

ばかり。奈緒がスタンドで素早く当て身を打ち込んで、男は意識を失った。

「あれ……決まった?」

自分でやっておきながら驚いている。どうやらとつさの勢いでやってしまったらしいが、それが功を奏したようだ。

「フフっ、やるじゃないか。それじゃあ、あとは早苗さんが来るまでこいつを見張つていよう」

動じることもなく彼女が指示する。しかし私たちには、彼女がなにをどうしようとしているのかよくわからない。

「いまいち話が見えないんだけど……早苗さん、つていうのは誰なの?」

「ふむ……名前を知らなくても当然か。守衛だよ。ボクらの学園の」

守衛? 守衛さんと呼んでどうしようというんだ。呼ぶなら先生なんじゃないか。

「そのようすではなにも知らないようだね……教師だけじゃなく、守衛も『スタンド使い』なんだよ」

私の態度を察したのか、彼女はそんなことを教えてくれた。

学園を出る前に先生からもらったプリントを鞆から取り出しすみずみまで見てみると、いちばん下のところに『守衛：片桐早苗、大和亜季』と、名前と電話番号がたしかに書いてあった。

「ああ、プリントはもらっていたのかい。ならもう理解わかっただろう？　そういうことさ」「見落としてたみたい……。守衛さん、しかもふたりとも『スタンド使い』だったんだね……」

守衛さんのことは、名前は知らなかったが、さすがに学園に通う身な以上見た目くらいは知っている。ひとりには背が低めで童顔ながら威勢のいい声が印象的な人だった。もうひとりには、私と同じくらいの背丈で体格もがっちりしていて、なぜか年下の私たちにも名前のあとに「殿」をつけて呼んだり「くであります」と変に丁寧な話し方をする人だ。

それにしても……先生、生徒、そして守衛……。もはや『引かれ合う』ってレベルじゃないほど、学園周辺は『スタンド使い』だらけじゃないか。スタンドとはそんなにポンポン出てくるような力なんだろうか。

「そしてキミたちも……『スタンド使い』なんだよね？ そっちの彼女は、当て身をくらわせたときに出したのを確認したが」

「うん、私も『スタンド使い』だよ。ほら——」

彼女の前に『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を出す。

「ほう、これがキミの……洒落た容姿をしているね。素敵なスタンドだ」

そう言つて彼女は静かに目を光らせて『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を見つめる。……気のせいか、どことなく奈緒を彷彿とさせる反応だ。

「アンタはさつき『拳銃』を出してただけ……あれがスタンドなの？」

私が質問をした、そのとき、穏やかだった紫の瞳が燃えるように輝いた……ように見えた。

「いかにも。スタンドのヴィジョンは多岐にわたる……生物だけとは限らない。ボクのスタンドは『拳銃』なのさ」

そう言つて彼女も自分のスタンドを出した。銃のことはわからないが、見た目はまさしく拳銃そのものだ。古い映画なんかで見る、回転するところから弾を入れて発射する、いわゆる「リボルバー」というやつだろう。

「それでなにかを撃つと……『棺桶』になるわけ？」

「そうだ。正確には「なにか」ではなく「誰か」……有効なのは生き物にだけ。精神力の

弱いものほど『棺桶』にできる時間は長くなる——もつとも、それでも1分ほどが限界だがね。誰かを倒すとか、ましてや殺すなんて到底できない、少しのあいだ自由を奪うだけのささやかな能力ちからさ……」

自虐的な物言いだ、喋るそのようすから前のめりなエネルギーを感じる。

「だがね、こう捉えることもできないかい？ ……『刹那の死を与える』能力、と……。そう考えると、いささか畏れ多く罪深いスタンドなのかもしれないね……フッフ」

この朗々と語る感じ……やっぱり奈緒に似てる……ような気がする。奈緒と比べるとだいぶ詩人な感じだが。

『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド』……」

——？ 上気した顔をやや上に向け目を閉じ、彼女はいきなり謎の言葉を口にした。

「名前、さ。このセカイに存在するすべてのものは言葉を用いることでさらに力を増すといわれている……。いわゆる『言霊』というやつだね。ボクは自分のスタンドに『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド』という名前を付けた。キミたちにもあるんだろう？

そのスタンドに宿した、自分だけの『言霊』が……！」

いちいちわかりにくい言いまわしだがスタンドの名前を教えてください、ということなんだらう。

「あたしのスタンドは『ワン・ヴィジョン』っていうんだ！ こいつの持つてるステッキ

でものに触れるとだな……」

私より素早くその言葉の意味を理解した奈緒は、屈託のない笑顔で自分のスタンドについて語りはじめた。やはりこのふたり、似ている……。

「おーい、飛鳥ちゃん！」

ふたりのやりとりをポーツと聞いていると、誰かの呼び声とザザッと、と草を踏み鳴らす音がした。それはしだいにこちらに近づいてくる。

「お待たせっ！ みんな大丈夫だった？ ってケガしてるんだったわね。あつ、あなたね。あちゃー、よりにもよって顔か。災難だったわねえ。でももう安心よ♪ ねっ、清良ちゃん」

「怪我人はあなただけ？ では、こつちにいらっしやい。診てあげる……早苗さんは、そつちをお願いします」

「了解！」

現れたのは、あの背が低いほうの守衛さん。この人が早苗さんか。そして、もうひとり——この人は顔も名前も知っている。養護教諭の柳清良先生だ。

「傷は……うん、深くはないわね。これならあつという間に治るわ。動かないで」

清良先生は傷の具合を見ると、そのまま私の頬に触れて意識を集中する。すると先生の背後から、ワンピース型の白衣をまとい、ナースキャップを頭に乗せ、首に聴診器を

掛けた、いかにも看護師さん然とした姿のスタンドが現れた。

先生のスタンドも手をのぼし、私の頬の傷にそつと指で触れる。次の瞬間、そこに弱い圧迫感。おそらく絆創膏かなにかを貼られた？

「治ったら勝手に剥がれるから、おとなしくしててね」

清良先生はそう言うのと優しく微笑んだ。

「さて、じゃ、次はあたしの出番ね！ 『キャント・ストップ！』」

早苗さんが意気揚々とかけ声を上げると、また別のスタンドが現れた……が、なんだこの見た目は。

頭には警官帽、目にはパトライトのような真つ赤なバイザーを装着している……のだが、その下はラメの入ったシャンパンゴールドのタイトなミニのワンピースに毛皮のコート。そして抜群のセクシーボディ。奈緒が喜ぶタイプとは違うベクトルでド派手なビジュアルのスタンドだ。

そんな早苗さんのスタンドが、手から金ピカの『手錠』を出した。ジャラジャラいわせながら、気絶したままの男に迫る。

「はい、タ・イ・ホ♪」

空気より軽い口ぶりで、黄金に輝く手錠を男の両腕にガツチリとはめた。

「これでオツケー」

早苗さんがそう言つてスタンドをしまったそのとき、男が目を覚ました。

「ん……うう、ん……ん？　ん！！　んだこの趣味わりい手錠は！！」

「あらあら、そんなこと言つちやう悪い子はどこかな？　シメちやおうかしら」

寝転がったままの男に笑顔で近づき、ふたたびスタンドを出すと、今度は男の両足に手錠をかけた。

「ああああああ！！　んだクソツ！！　おい！　外しやがれ！　痛い目みんぞ！！」

男が大声を出し、自由のきかない身体をくねらせ暴れる。

「痛い目……ねえ。やれるもんならやってみれば？」

片腹痛いわ、とばかりに早苗さんが男を挑発する。その言葉を聞いた男の顔が怒りの形相に変わる。

「なめんなよ……てめえに一撃くらわせるくらいの力は……」

男が急に固まり、愕然とした顔になる。

「力、『カラス』が……出ねえ！！　なんで！！　まだ俺の力は……」

「悪あがきはよしてくれろ？　手錠をくらつた時点であんたの負けなの。負・け！」

しゃがみ込み、男の顔をまっすぐ見つめ言い放つ。

「あたしの『キャント・ストップ』の手錠は身体だけじゃなく、心もタイホしちゃう粹いきでイナセなスタンドちゃんなのよ。もうあんたはスタンドが動かせないだけじゃなく、嘘

もつけないようになっちゃってるから、そこんとこヨ・ロ・シ・ク♪」

ペロツ、とイタズラっぽく舌を出し男に向けてウインクする。

「こ、こんなこととしていいと思ってるのかよ!!」 このチカラは、法律でどうこうできるもんじやないからって、アンタらに俺を裁く権利なんてねえだろうが!!」

最後の最後まで男は見苦しく抵抗する。私はもう、あきれてものが言えなかった。

「……そんなことを言える立場なのかしら?」 そもそも事のはじまりは、あなたがこの子たちをスタンドを使って襲ったからじゃないんですか?」

——シユンツ!!

「ひいっ!!」

清良先生が口を開いたのと同時に、男の股下スレスレの地面に、なにか銀色の細い物体が突き刺さった。それは手術道具の『メス』だった。よく見てみるとうつすら透けている。どうやら先生のスタンドが出したメスのようだ。

「……どうなんですか?」

笑顔を崩すことなく先生が男に問いたただす。そのやわらかい微笑みが怖い。男は顔を青くして震えている。

「は、はい……そう、です……」

「よーし! それじゃ御用よ! 清良ちゃん、ここはよろしくね。それじゃ、みんな気を

つけて帰りなさいよー！」

「ぢ、ぢぐじよおおおおお……」

ついに観念した男をスタンドで担ぎ上げながら、早苗さんがどこかへ去っていった。男の悲痛な叫びが小さくなっていく。

「さて、と……終わったわね。大丈夫？」

さつきと変わらぬ笑顔を向けて、先生が私たちに聞いてくる。

「助かったよ、清良さん。はやく帰って、カフェオレでも飲んでひと心地つきたい気分だよ」

『あすか』——と、早苗さんに呼ばれていた少女がそう言った。

「うふふ、あなたは問題なさそうね、飛鳥ちゃん。……あなたたちはどう？ このまま帰れそうかしら？」

「ええ、ありがとうございます。大丈夫です。ねっ、奈緒？」

「ああ。ケガした凜が平気だったんなら、あたしもなにも問題ないよ」

いたわるような視線を私に向けながら奈緒が喋っていると、頬にあつた圧迫感が無くなる感覚。大きい絆創膏のようなものが、剥がれ落ちて地面に着く前に溶けて無くなつていくのが見えた。

「おー……すごいなあ、完璧に治ってる……」

「それはそうよ。乙女の顔に傷なんて残しちゃ、かわいそうなもの」

奈緒の感心する声に、先生は目を細めて笑いながら言葉を返す。

スマホを取り出しミラーアプリを起動して確認してみると、カラスにつけられた顔の傷はきれいさっぱり無くなっていった。痛みもなく、もはやどこをケガしたか自分でもわからないほどだ。

「それじゃ、私も学園に戻って先生たちに報告しないと……」

報告……それは単に、下校中に生徒が危険な目にあつたというだけの報告なんだろうか。学園とスタンドは……なにか関係があるんじゃないのだろうか。早苗さんはあいつをどこへ連れていったのだろうか？

「いろいろな気になることもあるだろうけど、深く考えても答えは解^で答ないよ。疲れただろう？ 今日ほもう帰ろう」

『あすか』が私の目を見て言った。たしかに疲れた……命の危機にさらされ、空を飛び、カラスを撃退した。昨日のことも霞んでしまうほどの怒濤の一日だった。

「あとで話を聞くことがあるかもしれないけど、今日のところはこれにて一件落着、つてところ。さよなら。気をつけてね」

清良先生はそう言うのと、スタンドをしまい学園へと帰っていった。

「さてと。ボクもここでお暇^{いとま}させてもらおうか。それじゃあ」

「あつ、待つて」

歩きだそうとする彼女を止めて、私は尋ねた。

「名前……まだ聞いてない。『あすか』って、早苗さんが言ってたけど」

「ああ、そうだったね。スタンドのことを語っておきながら、自己紹介がまだだったとは……ボクとしたことがうっかりしてたよ」

かすかに苦笑してから、彼女は答えた。

「いかにも。ボクの名前は飛鳥……二宮飛鳥だ。君たちは？」

「私は渋谷凜。こっちは友達の神谷奈緒」

「よろしくな」

「凜さんに、奈緒さんだね。次に会うのはいつかわからないが、こちらこそよろしく」
短い自己紹介を終え、飛鳥はその場を離れていく。

「おっと」

が、少し歩いたところでまた立ち止まり私たちの方へ振り向いた。

「スタンドなんて摩訶不思議な力を持ったものどうしだ。気取った別れの挨拶でもさせてもらおうかな」

そう言うと、またあのニヒルな笑みを浮かべて飛鳥は言葉を紡いだ。

「この奇怪で愉快な奇妙な日々へようこそ、お嬢さん」

その言葉を最後に、今度こそ飛鳥は公園を去っていった。

夕日に照らされた静かな公園の樹木たちが、吹き抜けた春の涼しい風にざわめきたつ。その音を聞きながら、私と奈緒はしばらくその場に立っていた。

——そう……飛鳥の言ったとおり、これが『奇妙な日々』の、はじまり——

(To Be Continued……)

スタンド紹介①

『ネヴァアー・セイ・ネヴァアー』

【本体】渋谷凛しぶやりん

【破壊力】B スピード―A 射程距離―D

【持続力】A 精密動作性―B 成長性―A】

・ 舞踏会で被るような、眼のまわりを覆う仮面をつけ、つば広の蒼い（若草色）帽子と西洋服に身を包んだスタンド。剣を持っており、戦闘時には主にこれを使って戦う。帽子のまわりには茨が絡みついており、そこに凛の『諦めない意志』を象徴した青く輝く薔薇が一輪咲いている。

【能力】

・ 足場の無い場所を、自由に移動することができる。階段を歩くように上ったり下ったり、落下中に能力を発動して空中に着地したりできる。

・ 能力発動時、空間を踏みしめるたびに足元から花びら状のエネルギーが舞い散るが、攻撃力などは無い。

*

『ワン・ヴィジョン』

【本体】かみやなお神谷奈緒

【破壊力】A スピード―B 射程距離―E

【持続力】B 精密動作性―B 成長性―A】

・腰に短めのステッキを携え、紫黒色のシルクハットと燕尾服に身を包んだ頑健かつスマートな肉体をもつマジシャンのようなビジュアルのスタンド。シルクハットは顔の上半分を覆うほど目深に被っており、目が見えない（視覚を持たない）。

【能力】

・ステッキで触れた物の現在位置が感覚でわかるようになる。距離が近いほど、細かい位置まで分かる。

・能力を使えるのは、一度にひとつのものだけ。複数のものに、同時に能力を使用することはできない。

・『能力射程』は2kmほど。かなり広い。

*

『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド』

【本体】にのみやあすか二宮飛鳥

【破壊力】なし スピード―A 射程距離―C

持続力—E 精密動作性—A 成長性—A】

・『拳銃』のスタンド。装弾数は六発で、いったんスタンドを引つ込めて少し待てば、弾は自動で装填される。

【能力】

・拳銃で撃たれた生物は、一定時間『棺桶』に姿を変える。棺桶になつてゐるあいだは、意識はあるが、まわりは真つ暗でなにも見ええず、外の音もほとんど聞こえない。もちろん動くこともできない。

・『精神力』が弱い生き物ほど、長い時間棺桶にできるが、最長でも1分ほどなうえ、同じ生物に何度も能力を使うと『抵抗力』がついてしまい、棺桶になる時間が徐々に短くなつていく。

・『棺桶』はとても頑丈で、単純な攻撃では傷ついたり破壊することは不可能。

・非スタンド使いにも『棺桶』は見え、触れられる。

*

『ナイチンゲール』

【本体】柳清良

やなぎはらやまの

【破壊力—D スピード—A 射程距離—E

持続力—C 精密動作性—A 成長性—E】

・『看護師』の姿をした、どこことなく機械的な見た目をしたスタンド。力は弱い、素早く、正確な動きができる。

【能力】

・手から、ケガを治すことができる『絆創膏』や『包帯』を出せる。一瞬で治すほどの治癒力は持たないので一刻を争う事態の場合、この能力だけで治療を済ませるのは難しく、他に適切な処置を施す必要がある。

・『病気』は治せない。

・攻撃手段として、『メス』の形をしたエネルギー弾を飛ばすことができる（通称『手裏メス』）。

・『手裏メス』の射程は3 m程度（力が無いため遠くまでは飛ばせない）。

*

『キャント・ストップ』

【本体】片桐早苗かたぎりさなえ

【破壊力】B スピード―B 射程距離―E

【持続力】B 精密動作性―B 成長性―E

・シャンパンゴールドのボディコンシヤスの上に毛皮のコートを羽織って警官帽を被った、肉感的なスタイルをもつスタンド。目は、パトライト型のバイザーを装着した

ようなデザインになっている。

【能力】

・手から金色の『手錠』を出せる。この手錠は、肉体と心を同時に拘束する。拘束された者は、ただ拘束箇所を動かせなくなるだけでなく、精神面も拘束されるので『嘘』をついたり『隠しごと』をするのが下手になったり、あるいはできなくなる。『スタンド使い』ならスタンドも思い通りに扱えなくなる。

・『手錠』は何本でも出せる。

・頑丈だが『能力射程』はスタンドと同じく2 m程度なので、距離をとられるとあっさり解除されてしまう。

*

『ブラック・ダイヤモンド』

【本体】財布泥棒の男（本名不明）

【破壊力】B スピード―A 射程距離―A

【持続力】A 精密動作性―B 成長性―E

・カラスの姿をしたスタンド。すばしっこく、鋭いくちばしをもち、脚でものを掴む力も強い。（※漠然としたイメージは劣化版『灰の塔』^{タワー・オブ・グレイ}）

【能力】

・『体勢』や『体の向き』に関係なく素早く動けるため、急な方向転換や不意打ちがで
きる。

・射程距離は100mくらい。それなりにパワーがあるくせに遠くまでいける。

第5話『E. S. P.』

巻き起こる奇妙の嵐を駆け抜けた金曜日。その先に待っていた平和な土日も終わり、週は替わり月曜の昼休み。食事を終えると私は遊ぶわけでも予習するわけでも、ボーっとするわけでもなく資料室へ向かった。

「んーっ！ んーっ……んううーっ！」

部屋の中にいるのは、小さな身体で書棚に置かれた分厚いファイルを取ろうと懸命に手と背を伸ばし、ウエーブのかかったロングヘアが揺れる後ろ姿——普通なら、それを見てその人物が成人だと思う人は少ないだろう。

しかし、ここ美城学園高等部に通う者なら例外だ。

「……はい先生」

奮闘する彼女の隣に立ち、目当てのファイルを手に取りそれを渡す。

「うーっ……ありがとう渋谷さん……」

やや上気した表情を浮かべ、私からファイルを受け取ると彼女は言った。

日下部若葉^{くさかべわかば}さんは、小柄な身体と愛くるしいベビーフェイスが特徴の私のクラスメイ

ト……ではなく、担任の先生である。つまり、この学園に勤務する教員……立派な社会人だ。

「踏み台あるんだから使えばいいのに……」

「踏み台無しでもちやんと届きますよ？　もうちよつと粘ればいけたんですつ。ウソじゃありませんよ？」

にもかかわらず、その端から見れば中学生、よくて高校生、下手をすれば小学生と間違われてしまうほどのキュートなルックスに加え、少し見栄っ張りな性格ゆえに生徒からは完全にマスコットのような扱いをされ、日々可愛がられてしまっている。

「はいはい、そういうことにはしておきますね」

「本当なんです！　先生をからかっちゃいけませんよ。もうみんなそうやっていつも私のこと……はあ……」

本人はそれを悩んでいるみたいだけど、私たち生徒からしてみれば別に日下部先生のことをナメてるとかそういうわけではない。

「みんな、日下部先生のこと好きだから。先生、教えるの上手いし、厳しくないし……いい先生のクラスになれて嬉しくてちよつと調子に乗っちゃうだけなんだよ」

ウソは言っていない。実際、みんな先生のことをからかいこそするが、言われたことには素直に従っている。今年教員になりたての割にはハキハキ行動してて、面倒見もい

い。少しくらいならタメ口で喋っても怒らないし——。

私たちは、日下部先生のことをひとりの教師としてもちゃんと慕っているのだ。ただ、それでもそのビジュアルゆえについて愛玩動物のように接してしまう……でもきつと仕方のないことなのだ、それは。

「そ、そうなの？ ……うくん、そうだったのねえ。そっかあ、そうなんだ。でも、もうちよつとそういうのは控えなきや。他の先生方の目もあるし……ね。」

そう言つて日下部先生は、にんまりと愛らしい笑顔を私に向けた。

ほら、かわいい。

やっぱり仕方のないことなのだ。

「まあ、それもそうですね……でもみんな教師と生徒つて立場はちゃんと弁えてると思いますよ。もちろん、私も含めて」

頭を撫でたい衝動を抑えつつ、私は心にも思つてないことを言った。

「……まあ……確かにそうかも。みんな、なんだかんだで先生の言うこと素直に聞いてくれるものね。私だつて、みんなのこと大好きですよ。」

先生の笑顔がさらに明るく弾ける。かわいい。

「持つていくのはそのファイルだけですか？」

先生を抱きしめたい衝動を内心必死に抑えながら私は素っ気ない態度で質問した。

「ちよつと待つて、まだあるの。そこそこのファイルも……」

そう先生に言われて同じ柵からファイルをさらにふたつ出して手渡す。

「はっ」

「ありがと。それで、さらにわるいけどそのそのそのそのプリントを持っていつてくれる？」

言われた場所からプリントの束を取る。先生はファイル、私はプリントを抱えて資料室から出ると次は職員室へ向かう。

なんの委員会にも入っていない生徒は自動的にクラスの雑用係を受け持つことになる。だからたとえ無所属の私でも先生に呼ばれたら緑化委員の仕事を真面目にこなしている奈緒のように、ときどきこのようにクラスの雑務をこなさなければならない。

「渋谷さんは背が高くていいなあ……いくつあるの？」

分厚い3つのファイルをしつかりと抱きかかえながら先生がつぶやいた。

「たしか……165だったかな」

「ひやく……ろくじゆうご……未成年で……ひやくろくじゆうご……!?!」

先生からの羨望の眼差しを横からチラチラ感じる。うん、悪い気はしない。

「でも生徒だけなら高い方だけど、先生も含めたらこの学園って高い人いっぱいいますよね。木場先生、東郷先生、高峯先生、和久井先生……」

思いつくまま背の高い先生を挙げていく。正確な数字は知らないけど全員私より高かったと思う。しかももれなく容姿端麗、クールビューティ。ここが女子校なことも相まって各先生の人気はアイドル並だ。

「ほんとそうよね……他の先生方みんな高くて、カッコよくて……」

たしかに身長はともかくとして、日下部先生のような可愛らしいタイプの先生はここじゃあまり見かけないかもしれない。

「あつ、でも佐藤先生みたいな人もいるじゃないですか。明るくてノリがいい……というかなんというか……」

佐藤心先生。またの名を『しゅがーはあと』……という。これは生徒たちがつけたあだ名ではなく、本人がその名前で呼ぶよう公言しているという、なんともアクの強い先生だ。もつとも、この教師陣のほとんどは独特の雰囲気を持った一癖も二癖もある人たちばかりだけど……。

「たしかに佐藤先生はクールとは違うタイプだけど、あの人も背は高いじゃない……」
ああ、そういえば……。乙女、というか……キャピキャピ？ というか……はっちゃけた振る舞いをする先生だけあの人もスタイルは良かったな……。

「別にいいじゃないですか。クールな人しかいなかったら息が詰まっちゃいますよ」

「……『持っている』人には分からないのよ……初対面の人から子ども相手のように接さ

れてしまうあの微妙な悔しき……い。クールなオトナにはなれなくてもいいかもしれない。でも……でもせめて、大きくなりたいつ……い！」

そう言つて先生はグツ！ と背筋を伸ばし姿勢を正す。すると、ファイルを抱える腕が傾いていちばん上にあるファイルが滑り落ちそうになる。

「あつ、あつ——」

慌てて腕を自分の身体側へ傾ける先生。しかしわずかに間に合わず、バランスを崩したファイルは地面に落下しようとする。しかし……。

「ギリギリセーフでしたね」

すんでのところでファイルはバランスを取り戻し、元どおり先生の腕のなかに収まった。

「危なかつたあゝ」

ふう〜つ、と息をつき一安心する先生……その目の前には、今しがた落ちそうになつたファイルを右手を差し出し軽く押さえていた、中世の騎士のような格好をした謎の人物……。

——『スタンド』は、こんな形でも役に立つ。

『スタンド使い』ではない日下部先生にはなにも見えてないだろうが、傾いたファイルを私のスタンド『ネヴァー・セイ・ネヴァー』でそつと押さえて落下を防いだ。

いささか滑稽な姿だけど、この力は私の一部。奇妙な存在という意識はまだ抜けないが、遠慮だとか使役しているといった感覚はまったくない。『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を動かすことは、手足を動かしたりものを考えたりするのと同じことだ。

そんなことを思いながら、ひと心地ついた先生とふたたび職員室を目指し歩きだす。

*

「じゃ、もういいわよ。ありがとね」

プリントの束を日下部先生の机へ置いて雑用が終わった。職員室にはコーヒーの芳しい香りが漂っている。時計を見ると13時10分、5限目のチャイムまであと10分。することもないし、そそくさと教室へ戻る。

『スタンドは自分の一部』……。

人影のまばらな廊下を歩きながら、さつき考えたことを反芻する。はんすう

それはもちろん、『この力』にも言えることだ。

まわりに誰もいなくなつたところで、私は『能力』を使ってみる。すると、下履きの裏がほのかに蒼く光り、私は『宙を歩き出した』。

私の『ネヴァー・セイ・ネヴァー』が持つ能力——まるで目に見えない足場があるかのように空中を歩いたり、跳んだりできる。はじめて発動したとき私自身は『ネヴァー・セイ・ネヴァー』に抱きかかえられながら空を駆けたが、どうやらこの能力は本体であ

る私の足にも適用されるようだ。

そのまま今度は階段をイメージしながら宙を少しずつ上っていく。頭が天井ストレスだ。非スタンド使いの目下部先生が見たら本来とはまた別のシヨックを受けてしまいかもしれない。

あまり他人に見せるものでもないし、その辺は気をつけなきや。そう思いながら今度は宙を少しずつ下っていく――。

「なっ、なっ、なっ……!!!?」

後方から不意に謎の音。いや違う、声………!?

廊下以上、天井未満の位置に留まったまま、後ろを振り返る……。

まん丸い眼を大きく見開き、私に釘付けになっている女の子がそこにいた。

「なっ………! なん………」

なんとかごまかさなくては……落ち着け私………よし。

「……今度、文化祭でやる手品なんだけど、どうかな……う?」

薄く微笑みながら彼女にそう言って、私は元どおり廊下に着地した。

「……へ? てじな……? ……な、なあ〜んだ、そうだったんですか? ……どんな

仕掛けだったんですか?」

「それは……企業秘密」

「言えるわけがない。むしろ私が知りたい。この能力の仕掛けを。」

「確かに文化祭で披露するのに今夕ネ明かししちやマズいですよね。そうか、手品か……私はてつきり……」

「? てつきり……なに?」

「なんだか座りの悪い反応を示す。それが引つかかって、半ば反射的に私は彼女に尋ねた。」

「手品じゃなかったら、なんだと思ったの?」

「くりんとした瞳を輝かせ、天真爛漫な笑顔で彼女は言った。」

「それはもちろん、『サイキック』ですよ!! 『サイキック』!!」

「さ、『サイキック』……!?!」

突然なにを言い出すんだこの子は。

「そうです! サイキック!! すごいものを見せてもらったお返しに、サイキックの素養があるかテストしてあげましょう! フフフ……キミには見えるかツ!? この奇妙奇天烈、摩訶不思議な『チカラ』が!!」

少女は私の反応を待たず、芝居がかかった口調で喋りつづける。

「エスパー・ユッコ! サイキック・ミラクルウウウ……テレパシー!」

アニメの必殺技シーンでも真似るように左手は軽く構え、右手はまっすぐ伸ばし手の

甲を下に向けジャンケンの『パー』を私へと繰り出してきた。

あれっ？ ポーズはともかく、奈緒が私の前ではじめてスタンドを出したときもこんな流れだったような……。

「ムムム〜ン!!」

——びよおおおおお〜ン……

次の瞬間、突き出された彼女の右手の平から『紙コップ』のようなものが顔を出し……こちらに向かつてきた。

——これはスタンドだッ!!

「『ネヴァー・セイ・ネヴァー』!!」

間一髪で謎の『紙コップ』を『ネヴァー・セイ・ネヴァー』で弾く。その光景を目にした彼女は、さつきよりも大きく眼を見開いて、

「ぎよええええええッ!! ナンじゃこりやあアアアアアッ!!!」

そして思いつきり素っ頓狂な叫び声をあげた。

「ちよつと、うるさい。いきなりどういうつもり?」

『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を一步前に出し威圧する。

「えっ!! 私の『サイキック』が見えるか、尋ねてみようかと……いやいやいや、それより、それ! その、そつちのお方! いきなり出て、まさかつ!! えっ……マジで

すか!？」

早口でまくし立てるがなにが言いたいのかまったく分からない。相手が自分と同じスタンド使いと知って驚いているのだろうか。

「アンタもスタンド使いつてわけ？　で、私を襲う理由はなに？　お金？」

万が一を考えて柄を握り、攻撃の準備をしておく。スタンド使いとあつては老若男女誰であろうと油断はできない。

「……は？　襲う？　いやいやいやいや！　ノーノー！　違います！　なかまつ！　わたしつ、同じ、サイキック仲間！　サイキック同盟！　エスパ―・ユツコ！　ユツコです！」

「仲間……?？」

要領を得ないものの、どうやら襲つたわけではない、敵ではないと言いたいらしい。

「じゃ、なんでいきなりあんなこと——」

「そのふたりっ！　なにをしてる？　動くなっ！」

突如廊下に響く第三者の声。こんなよく分からない状況の中でも思わず背筋が縮こまりそうになる、この静かな鋭さを含んだ威圧感のある声は……。

「きつ……木場先生……」

サイキックの彼女が名前を言わないでも分かる。現れたのは木場先生だった。

「渋谷と堀か。いったいなんだ、この状況は」

「……なんでしようね」

先生をおちよくつっているわけではない。ほんとに今のこの状況が私には分からない。

「堀……なにがあつたんだ？」

私から目線を外し彼女……堀？ にも同じ質問をする。

「あわわわわ……いや、ななん、なんなんでしょうね?!? さ、サイキックのお導き、
というか？」

木場先生の『庄』に押されたのか、さつきよりもしどろもどろになりながら堀さんが
答える。が、その言葉の指し示す先はやっぱ私には見えてこない。

(つづく)

第6話 『Girl Next Door』

『自分の他にも超能力が見える人がいるかもしれないと思つて披露した』——。

堀という少女の行動の真意は、つまるところそういうことだった。

「いきなりで申し訳ありませんでした、渋谷さん！」

そう言つて勢いよく頭を下げる。お守りなのか彼女流のオシャレなのか、首から下げたスプーンが揺れる。しかも先割れのだ。危なくないのだろうか。

「誤解だったつて分かつたし、もう気にしてないつて。私もいきなり喧嘩腰になつてたし、お互い様つてことで」

やれやれ、ただ単にスタンドを見せたかつただけとは……。いきなり出してくるものだから反射で臨戦態勢になつてしまつた。カラスに襲われて以来、急に飛び出してくるものに敏感に反応するようになった気がする。

「まったく……禁止するとは言わないが、不用意にスタンドを出すのはいただけいな。今回はなにもなくて良かったが、騒ぎの種になりかねないぞ」

木場先生が私たちを交互に見る。

「話は以上だ。教室に戻りたまえ」

こうして昼休みのサイキック騒動は、授業時間に10分食い込んでケリが着いた。

*

さつき雑用で訪れたばかりの職員室をふたたび出ると、5限目の時間に入った校内は静まり返っている。校庭から体育の授業中の生徒の声がかすかに聞こえてくる。

「そういえば……結局、あなたの能力はなんなの？」

横を歩く堀さんに話しかける。彼女は私にどんな能力を披露しようとしたのか？

誤解が解けて、彼女が害をなす存在ではないことが分かった今、純粋に好奇心で尋ねてみた。

「フッフッフ……そうですね。やつぱり気になりますよね？ ……つと、あんまり声を張るとまた木場先生に見つかってしま……」

途中から声のボリュームを落とし、立ち止まって私の方に向き直る。

「では……改めて、私のチカラをお見せしてもいいでしょうか？」

軽くうなずいて問いに答えると、彼女は占い師に手相を見せるように私に向かって手の平を差し出した。

「いきますよ………それっ——」

彼女が合図を出すと、差し出された手の平からさつきも見た紙コップのようなものが

ニユーツと出てきた。まじまじと確認するとそれは間違いなく紙コップだった。

「ムムムム……」

紙コップが彼女の手の平を離れ、浮いた、ように見えたが、紙コップの底には糸が付いていて、その糸も手の平から出てきている。

「……『糸電話』？」

見たままの感想が口からこぼれる。手の平から出るので紙コップはひとつしかないがその見た目は明らかに『糸電話』だ。

「そのとおり。糸電話です。ですが……ハイッ！」

「えっ、ちよっ……!?!」

糸電話は私に向かってきて、その紙コップ部分が——あっさりと私の胸の中に『入った』。でも痛みや異物感などはない。

（『大丈夫です！ 身体に害はありません』）

「——えっ？」

彼女がそう言った。しかし声の聞こえ方が今までと違って妙な感じがした。少しエコーがかかかっていて……なにより『聞こえた』というよりは、『頭に響いた』というか……とにかく変な感覚がした。

（『聞こえるでしょう……ユッコです！ 渋谷さんもなにか言ってみてください。ただ

し声には出さず、私に伝えたいことを心に念じるような感じで！」

また声が響いてくる。だがしかし、彼女は『口を動かしていなかった』。これはつまりここで私は彼女の能力の正体をなんとなく理解した。頭に響いた彼女の声に素直に従ってみる。

（『……名前で呼んでくれて構わないよ。私の名前は、凜』）

「それなら『凜』ちゃん！ 私のことも今後は名前呼びでけっこうです！ 堀裕子、またの名をエスパー・ユツコといいます！」

今度ははつきりと彼女——裕子は自分の口を動かして喋り、私が頭のなかで思ったことに応えた。

「もうお分かりいただけただけでしょう！ 声を出さずに直接心で会話ができる！ これが私のさいきつく・ばわー、改めスタンド『ミラクルテレパシー』の能力です！」
（『じゃじゃあく〜くん!!』）

心の声でわざわざ効果音を発すると、裕子はスタンドを解除した。私の胸に埋まっていた糸電話が掃除機の電源コードのように裕子の手の平の中へとスルスル戻っていく。「スタンドのこと、もっといろいろ聞きたいのですが、5限目は音楽室に向かわなければいけないので……今はこれにて失礼！」

「待つて裕子。クラス、どこ？」

「E組ですっ！　なんてったってエスパーですから！」

誇らしげにそう言い残すと、裕子は颯爽と階段を上つていった。

多分にマイペースだが、悪さをするような子ではなさそうだな、と私は思った。

*

「あれ……凜？」

上階へ行った裕子を見送ると、今度は階下から私を呼ぶ声が聞こえた。

「加蓮^{かれん}」

「授業時間中にこんなところでなにしてるの？」

現れたのは加蓮だった。

「加蓮こそ、どうしたの」

「ん、ちよつと寒気がして。風邪かな、と思つて保健室行つてた」

「えっ」

私がおやや心配そうな顔を向けると「まあ、なんともなかつたんだけどね。もう寒くないし」と仏頂面で加蓮はそう付け足した。

加蓮は幼い頃、病弱で入院を繰り返していたらしい。あくまで昔のことで今はもう全然平気だと言つていたのを前に聞いたが。そんな過去があるからか、疎ましいとか、

やっかんでいるという気持ちがあるかは分からないが、まわりからの気遣いに対して敏感なのかもしれない。

「そう？　ならいいけど」

過度な心配は加蓮の気を煩わせるだけな気がした私はこの話を切り上げた。

「で、凜ちゃんはなに？　もしかしてサボりかな〜？」

上目使いでいたずらげにこちらを見つめながら加蓮が言った。

「違うよ。ちよつと木場先生に呼ばれてただけ」

そう言ったら加蓮は少し驚いた顔になった。

「えっ!?　ちよつと凜、アンタなにやらかしたの？」

「やらかした、って……別にそんなんじゃないけど……」

ちよつとした誤解が起こしてしまった騒ぎを注意されただけ……。それだけなのが、いかんせんスタンド絡みのことなのどうかつには喋れない。

「ふーん？　そうなんだ、つまらないな。ま、凜の不真面目そうなところは見た目だけだもんね」

「……不真面目そう？　私」

「不真面目そうっていうか、生意気そうっていうか……いつもクールだから不敵に見えるんだよね。『ぎよええええええっ!!』って驚いたりするイメージがまったく無いって

カンジ」

「ふふつ、なにそれ。『ぎよえええええつ』なんて、そんな驚き方する人見たことない……」

いや、いた。裕子。ほんのさつきそんな叫びを上げて木場先生に見つかったんだつた。

「アタシは嫌いじゃないけど、アンタのそういう雰囲気とか良く思わない人もいるかもしれないよ。背も高くて目立つし」

「良く思わない、って言われても……。自覚はあるけど、それが地だから」

そこを変えようとは思わない。しかし『スタンド使いは引かれ合う』ということを考えて、用心しなければならない。そうでなくとも先日襲われたばかりだ。

「まあ、気になるときはキュートな奈緒ちゃんを横に置いてバランスとれば大丈夫じゃない？」

「奈緒？ んー……なんだかんだでけつこう突つかかってくタイプだと思うけど」

「あはは！ 凜もそう思うんだ？ 確かにそんなところもあるよね。律儀で……義侠心？ だどちよつとカッコ良すぎるか……あつ、飼い主を守る忠犬、みたいな！」

加蓮が無邪気に笑う。大声ではないが、その笑いが静かな階段の上に下に響いていくのが聞こえて今が授業時間中なことを忘れていた自分に気づく。

「加蓮、教室に戻らなきゃ」

「なんだー、戻るの？ このままサボらない？」

いたずらげな瞳をふたたび輝かせる。

「そういうわけにもいかないでしょ。それこそ、ふたり揃って木場先生に怒られるよ」

「ふふつ、あの人に怒られちゃうんじや割に合わないなあ。仕方ない、戻りますか」

そう言つて私の横に並んだので廊下を歩き出したのだが、すぐに加蓮は立ち止まつてしまった。

「どうしたの？ 加蓮」

「ごめん、また寒気が……………あれ？ しない……………気のせい？」

ほんの一瞬だけ不快そうな顔を見せたあと、加蓮は不思議そうに首をかしげた。

「どうなの？ 大丈夫なの？」

「ん……………うん。大丈夫みたい。なんだったんだろう」

「保健室、戻る？」

「いい。大丈夫大丈夫。あんまり休んでるとまたまわりに気遣われそうだし。ていうか現に凜に遣われてるし」

うーん、と伸びをしてから、ことさらに笑顔になつて加蓮が言った。

「ベッドが恋しいけど、参りますか」

そう言うのならこれ以上はなにも言うまい。ふたたび加蓮と横並びで廊下を歩いて、お互いの教室へと戻った。

*

そして放課後――

「なるほど。『スタンド使いは引かれ合う』……私が凜ちゃんや奈緒ちゃんと今こうしていることも、もしかしたら『引かれ合った』のかもしれないね!」

「そうかもな。でもこれがまた厄介でもあるんだなあ。あたしと凜はこの間ここで――」

奈緒と裕子と3人で森林公園を歩く。奈緒には裕子のことを、裕子にはスタンドについて基本的なことを教えておこうとふたりを誘って下校してみれば、お互いのスタンドを見せたり、能力を語ったりとさっそく和気あいあいと話せる仲になれたようだ。

「スタンドを悪用するとは……恐ろしい人もいたものですね……」

眉間にしわを寄せて神妙な面持ちになる裕子。

「その時はなんとかなったけど、裕子もそういう奴らに出くわさないとも限らないから気をつけてな」

「ムムツ……今まで他のスタンド使いに会ったことはありませんけど、そういうことを言われると不安になりますね……」

「ま、そうなるよな。しかも糸電話のスタンドとなると、戦うのは無理そうだしなあ……まあ普通戦おうなんて思わないか」

「でも、『ミラクルテレパシー』の糸の部分は、けっこう長く伸びて強度もあるんです。だからロープみたいに相手をぐるぐる巻きにして捕まえることはできるかも……。決定力にはなりませんけどね……」

「射程距離が広いスタンドはパワーが低いのが基本だからなあ……」

奈緒が分析してみせる。木場先生からもらったスタンドについてのプリントをよく読み込んでいるようだ。

「それに奈緒ちゃんたちと違って、身体から分離させられませんからね。けど、糸は数百m先まで伸ばすことができますよっ」

えっへん、と言わんばかりに裕子が得意気に胸を張る。

「そいつは素直にスゴいな……あたしらのスタンドは10mも離れられないからなあ」
奈緒が感嘆のため息を漏らす。確かに射程距離が数百mもあるのは驚きだ。この森林公園からなら、入り口を出て坂を上って、と、わざわざ道なりにスタンドを動かしていったとしても学園まで余裕で届くことになる。ということは、私と奈緒を襲ったカラスのスタンドと同等かそれ以上の射程距離なわけだ。

「——でも、この間襲ってきたカラスのスタンドは、けっこう強かったうえに遠くまで飛

んでたよね」

カラスと裕子のスタンドを頭のなかで照らし合わせていると、そんな疑問が浮かんだ。

「あのカラスの場合、単純なパワーが高いっていうよりはスピードと鋭いくちばしの組み合わせが強烈だったからな。それに、力と射程距離は必ず反比例の関係になるとは限らないし。遠くまで行けてパワーの強いスタンドも中にはいるらしいぞ」

「ふーん……思ってた以上に、スタンドには色んなタイプがあるんだね」

「どうせなら、もつとたくさんスタンドに目覚めませんか。レポートとか、分身とか……」

「スタンドは基本ひとりにとつだからなあ……難しいだろうな」

駆け抜けた少し強めの風に髪を押さえながら奈緒が言った。

「ムムム……そうですか……。せめて私のスタンドも、もつとこう、ふたりみたいにカッコよくならないものですかねえ……。もう一度見せてくれますか？」

裕子のお願いに「ああ、いいぜ」と返すと奈緒は立ち止まり自らのスタンド、『ワン・ヴィジョン』を出す。

「うう〜む……やはりカッコいい……！ シルクハットに燕尾服、ステッキ！ しかも帽子を深く被って顔を見せないことでクールなミスティアスさを醸し出して……」

ホント、奈緒ちゃんのスタンドはエスパール冥利につきるビジュアルですよっ！」

ご機嫌なテンションで奈緒のスタンドをベタ褒めする裕子。奈緒は少し顔を赤くしながらも、たいへん満足そうに笑っている。

「お次は凜ちゃん！ さあさあさあ！ スタンドをカモン！」

「へっ……っ？」

裕子が今度はこちらを向いて手招きして催促してくる。熱意あるリクエストに応えて私も再度『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を出す。

「これでいいかな……？」

「そう！ それですよ！ この謎めいた仮面に耽美な洋装！ 大きな帽子に絡みつく茨から咲く一輪の薔薇！ しかもブルー！ イッツ・ア・クール！ ベリー・クール！」

芝居じみた口調に拍手までして『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を讃える裕子を前に、私も気恥ずかしさを感じつつも口元が緩みそうになる。大仰ではあるものの、その瞳は純真そのものだ。そんな目をして褒められたら当然、悪い気はしない。

「いいなあ……カッコいいなあ……」

2体のスタンドに忙しく羨望の眼差しを交互に向ける裕子。

「あつ、別に糸電話がイヤなわけではないんですよ？ しかし……美少女サイキッカーとスタイリッシュかつタフなスタンドの名コンビ！ それは例えるならっ！ カレー

に福神漬け！ ひと泳ぎして疲れたあと食べる海の家の焼きそば！ 『おおはらべーカリー』のあんパンに『おいかわ牛乳』っ！ ……ステキな組み合わせだと思いませんかっ、凜ちゃん!？」

「えっ……まあ、うん……そうかもね」

ひととき瞳を輝かせ力説する姿に思わず圧される。

「う〜ん……あたしはクリームパンがいちばんだな〜」

奈緒がのんきに言った。いつから話題が『好きなパンについて』になったんだ。

「凜ちゃんはなにが好きですか？」

「えっ、この話続くの……？ 別にいいけど……チョコクロワッサン、かな」

「んんん〜っ、確かにクリームパンもチョコクロワッサンもおいしいですよ〜。これ

またどっちも牛乳に合いますし……」

「クリームパンならコーヒーもいいぞ！ クリームの甘味とコーヒーの苦味が口のなか

で入れ替わり立ち替わり広がって……」

「ムムム……なるほど……」

目を閉じて奈緒がうつとりと話す。クリームパンにコーヒー、か……。

「チョコクロワッサンならカフェオレ、かな……。甘いのと甘いので、くどくなるようにならない……カフェオレの甘さとクロワッサンの甘さ……タイプの違う甘味が組み合

わさって……」

「ムムムツ……！　ましてや、そのチョコクロワツサンが焼きたてだったら……！」

「そう……中のチョコレートがとろけて、より強い甘味が出てきて……」

「な、なんてこった……おい、凜！　なんでそんなこと今まで黙ってたんだ!?　一緒に『おおはらベーカリー』行ったこと、今まで何回もあつたのに……！」

強い口調で奈緒が詰め寄ってくる。

「だ、だって……クリームパン買つてるときの奈緒の顔、いつもすごく嬉しそうで……」

——余計な口を挟むようで、言えなかつた……。

「落ち着いて、奈緒ちゃん。過ぎたことを気にしても仕方ありません……しかし、今ならまだ間に合います……『おおはらベーカリー』の閉店時間は20時。今はまだ17時前……公園こくからなら30分もかかりません」

「裕子……」

奈緒の紅い瞳が、そつと煌きらめきはじめる。まるで迷路の出口を見つけたかのように。

「奈緒……ごめん。今まで言えなくて」

「凜……いや、いいんだ」

先ほどの険しきとは打って変わって、優しい微笑みを私に向けながら奈緒が語りかける。

「きつとこれは運命だったんだ。あたしたち3人というスタンド使いが引かれ合うことで、今日この事実にとどり着くことができた……。これは、運命。めぐり合わせだったんだ。だから気にするなよ、凜……」

「奈緒……」

「奈緒ちゃんの言うとおりですよ、凜ちゃん。そして私たちに時間は十分すぎるほど残されています」

「裕子……」

裕子の力強い笑顔が、私たちふたりのあとを押す。

「進みましょう……前へ！」

「……………」

「……………」

裕子の結びの言葉に、私も奈緒も無言だった。言葉はいらない——それは裕子にも、テレパシーを使わずとも伝わっているはずだ。

沈黙したままの私たちの間を、やわらかい風が通り抜けた——。

*

このあと3人で『おおはらベーカリー』に寄ったのは言うまでもない。

……しかし、スタンドの話はどこに行ってしまったのだろうか……。

555

第7話『You, re Lost Little Girl』

今朝は気分がいい。なぜか。昨日買った『おおはらベーカリー』のチョコクロワッサンがまだ残っているから。

少し苦めのカフェオレで脳を目覚めさせてからチョコクロワッサンの甘さと香りを味わう。リビングから外へ繋がるガラス戸に目をやれば、庭には爽やかな陽光が射し込んでいる。いつもなら気にもかけないか、煩わしい存在でしかない雑草が鮮やかな緑色でそつと柔らかくそうに揺れているのが見えた。そんなことに気づいただけで、なんだか贅沢な朝に思える。これで今日が休日なら完璧だったのに。

「いつてきます」

そう言つて玄関を出るが誰の声も返つてこない。両親はすでにお店の方で開店準備。リビングにいるハナコにも聞こえているのかいないのか。無言の我が家のドアを閉め学園へと向かう。

空は雲ひとつない一面の青空。燦然と輝く太陽に早くも夏へと想いを馳せそうにな

るが、気温の方はいたって心地よい。衣替えも、梅雨の時期だってもう少し先のことだ。いまはまだ、どんなに強く想ってみても、裕子のようにムムムツと念じてみても、夏休みにはほど遠い、新緑の眩しい春の折り返し地点――。

*

見慣れた風景がとりとめもなく視界を流れていく。ちいさい頃、よくお使いで行った精肉店。うちの母も含め近所のお母さん方が井戸端会議の場として集う喫茶店。たまたにお父さんが行く(らしい)質素な佇まいの居酒屋。取り壊されもせず、かれこれ5年くらい放置されたままの元薬局。十字路の左の角地には最近セルフになったガソリンスタンド。道路を挟んでその向かいにはコンビニ『オーソン』がある。十字路を曲がらずにまっすぐ進めば石畳の路地のオシャレな通りにたどり着き、さらにその先へ行けば商店街の入口だ。

通りは野良猫たちのたまり場になっていて、私たち美城学園生のあいだでは『野良猫ロード』と呼ばれ、日々猫たちを愛でる女子たちで賑わっている。連休があつて穏やかな日とあつづく先月・今月などは特に人が多く、その大半が女子学生なこともあつてか通りにあるお店はいずれも若い女性を狙つたものが軒を連ねている。オーブンテラスのあるカフェ。ケーキ、アイスクリーム、クレープ、ドーナツといった各種スイーツは言わずもがな、最近ではパスタ専門のレストランもできた。以前は地味だった文房具店

も女子向けの小物やキャラクターグッズを取り入れ、レイアウトもポップな感じにリニューアルしたらそれが受けたようで流行っているらしく、どこもかしこもかしましい。そんな様子を見た商店街の住人の誰かが、この場所に『五月女さおとめ通り』という小洒落た名前をつけ呼びはじめたところ、それが徐々に周辺住民に定着していき、今ではこの通りをそう呼ぶ人も多いと聞いたことがある。

もつとも、通りのメインターゲットである女子学生たちにはまったく浸透しておらず、相も変わらずあそこは『野良猫ロード』の呼び名で親しまれている。家の店番をしてるとき、聞くとともになしに聞いてたお客さんどうしの会話で知っただけで私にとつても『五月女通り』は、いまいちピンと来ない。誰に通用してもしなくても、あそこはやっぱり『野良猫ロード』だ。

そんなことを考えながらも十字路を左に曲がった。学園はこちら側にある。『野良猫ロード』を通つて猫を見ながら登校するのも悪くないけど、それでは遠回りになつてしまふ。行きたくなつたら帰りに寄ればいい。私はいつもどおりに通学路を歩いていく。

*

公園に入り、なんの気なしにまわりの景色を眺めながら林道を歩いていると、それは唐突に視界に入った。

林の中の、ひとときわ木漏れ日の降り注ぐ下に日傘をさして立つ、ドレスを着た後ろ姿

私の目がそれを捉えたのとほぼ同時に、彼女がこちらを振り向いた。パラソルに隠れて顔はわずかに口元が見えるだけだが、なぜだか私は相手を『同い年くらいの女の子』だと思つた。

木漏れ日に照らされた薄緑色の日傘を持ち佇む彼女は映画のワンシーンや一枚の絵画のように美しく、そして涼しげで儂い空気を纏まとっている。

コスプレ、PVやドラマの撮影、この格好で公園に佇むのが日課の人……先週末までの私ならそれくらいの可能性しか浮かばなかつただろう。

しかしこの肌で感じる奇妙さの正体を、今の私は知っている——確信している。

問題は彼女が危険な存在かどうか、そして本体はどこにいるのかということ。周囲を見回しても遠くの方で談笑する、おそらく登校中の女子たちの声がわずかに聞こえるだけで近くに人の気配はない。

警戒状態の私の緊張を察知したのか彼女が動きだす。しかしそれは、ゆつたりと、優雅な所作で傘を下ろし、閉じる。ただそれだけの動きだった。

下ろされた傘から現れたのは、つば広の帽子を斜めに深く被つた、貴婦人然としつつも少しあどけなさの残る顔だった。

鬚かげりのある茶色い瞳が私を見つめている。それ以外なにもしてこない。ただこちら

を見つめているだけ。

その瞳を見つめる。お互いの視線が重なる。

「……………加蓮？」

なぜ。どうして。

思いがけず加蓮の名前が私の口をついて出てきた。

そのとき、ふたたび彼女が動きだした。閉じた傘を再度開き、今度は頭上ではなく
まっすぐ私へと向ける。

なにか……

なにか、嫌な予感がする——！

『ネヴァー・セイ……』ううっ……!？」

瞬間、予感は『突風』となり、正面から私を襲った。

「……………ツっ!!」

間一髪、なんとか『ネヴァー・セイ・ネヴァー』で防御する。踏ん張っていないければ
体勢を崩されかねないほど強烈な風だ。寒さすら感じる……いや、これは——？

その風は奇妙だった。止んだあとも寒さを感じる。いや、寒いなんてものじゃない。
全身を冷凍庫に突っ込まれたかのように『冷たい』。地面に目をやると私のまわりに生
えていた植物にはうっすらと霜が付いていた。まるでここだけ季節が冬に戻ったみた

い……突風の勢いといい、なかなかのパワーを持つているようだ。

などと感心している場合ではなかった。彼女はまだ、傘を私に向けている。

次が、来るっ……！

身構えたのと同時に第二波が吹き荒ぶ^{すき}。だが今度は私の方が素早かった。一步、地を踏みしめて右へ跳ぶ。そこからさらに一步、能力で空中を蹴って完全に突風の射程外へと逃れる。

風はキラキラと輝いていた。薄荷^{メント}のような、淡く、ほのかな緑色。彼女のドレスや傘と同じような色。綺麗だ。まるで風に舞う雪……。

そうか。ただの風じゃない……『吹雪』——『吹雪を起こすスタンド』！

それが彼女の能力。ひとり脳内で納得しながらも注意は怠らない。吹雪が不発に終わっても焦ったり苛立つ様子はなく、相手は淡々と私に狙いを定めつづけている。

そして、みたび傘から薄荷色の結晶を吹雪かせた。

しかし攻撃は真正面から、しかも三度目だ。しっかりと見据えれば、もはや見切ることは決して難しいことではない。

力を込めておおきく右斜め前へジャンプ。吹雪から逃れる。彼女は再攻撃のために傘を私に向けて構え直す。その瞬間、すかさず今度は左前へ跳ぶ。また彼女が傘を構え直す。そうしたらまた右へ。彼女が動く。また左。右。左。右……ジグザグに跳びま

わり、攻撃のチャンスを与えないまま距離を詰めていく。

数メートル前まで近づいたところで傘の照準が私に合う。が、本能が反射的に身体を真横へ動かし、それすらもかわしきってみせる。

なおも彼女は攻撃の態勢を解かない。粘り強く傘を私に向けようとする。

だが、もう次はない。仕上げにまつすぐ全力疾走。ひといきに彼女の目の前に到達。ひとまず体勢を崩すべく……体当たりを喰らわせるっ！

「やあっ！………えっ？」

しかし『ネヴァアー・セイ・ネヴァアー』渾身のタツクルは不発に終わってしまった。衝突のまさにその瞬間、彼女は『消えてしまった』。

事態は唐突に、あっけなく終わった。おそらく本体がスタンドを解除したのだろう。

本体……そうだ、本体だ。あのスタンドの本体はいつたどこにいる……？　なんの目的で私を襲ったのか？　ターゲットは無差別なのか？　だとしたら他の誰かも襲われるのでは？

さまざまなクエスチョンが頭をよぎる——が、それらはあるひとつの謎によつて脳の片隅に追いやられていく。

なぜ私はあのスタンドに向かって加蓮の名前を呼んだのだろうか……？

私にとって、それは大きなクエスチョンだった。私はあのとき、スタンドの本体を加

蓮だと思ったのだろうか。攻撃されておきながら？ そんな馬鹿な。

ここで考えていてもこの疑問は到底解決しそうにない。そして考えれば考えるほど、加蓮のことが気になる。会えばなにかが動くような気がする。加蓮がスタンド使いにせよ、そうでないにせよ。

寒さはすでに去っていた。春が戻ったその場をあとにして、急ぎ足で学園に向かう。

*

案の定、とすべきなのか。なんとなくそんな気はしていたが、加蓮は学園に来ていなかった。

加蓮と同じクラスの子に聞いても分からず、保健室を覗いてもいない。朝のホームルームのあと、再度クラスを訪れてもやつぱりいない。しかもどうやら欠席の連絡は届けていないようで先生も首をかしげていたらしい。

一時間目まで、もう10分を切った。仕方ない……緊急事態だ、サボる。とりあえず、あのスタンドと出会った森林公園をまずは探し回ってみよう——

「おい凜、今からどこ行く気だよ？」

教室を出ようと扉に手をかけたところで奈緒が話しかけてきた。

……確証はない。でも、もし加蓮に緊急事態が起きているのなら、幼なじみの奈緒には言っておくべきだろう。私と加蓮を引き合わせてくれたのも奈緒だ。それに、この件

に関わらせなかったらすべてが問題なく収まったとしても奈緒にとつてはおそらく臍に落ちないだろうし、加蓮に力を貸せなかったことに少なからず引け目を感じるかもしれない。この子はそういうお人好しな子だ。そしてそんな奈緒だからこそ、大切な友達だと思っている。私も、そして加蓮だって、きつと私以上に……。

「確証があるわけじゃないんだけど、聴いてくれる？　そしてできれば……一緒に来てほしい。実は今朝——」

*

キーンコーンカーンコーン………

一時間目の授業開始のチャイムに耳も貸さず、校舎から正門へと疾走する制服姿のふたり。他の生徒は私たちを見て学園から脱走する不良少女と思っっているかもしれない。だが友人が危険な目に遭っている可能性のある今、そんな視線など気にもならない。些細な問題だ。

しかし、実はここですでにイレギュラーな問題が起きている。というのも、学園の外へ向かって走っていく制服姿のふたり、というのは『私の目に映った景色』であって、自身はカウントされてない。本来ならここにいるのは私と奈緒だけ。なら私の目に映る制服は奈緒のものだけのはずだ。

「……つまり、加蓮がヤバイことになってるかもしれないんだ。とにかく、凜がその加蓮

のかもしれないスタンドに会った公園を、とりあえず片っ端から探すつ！　OKか？」
 「了解ですつ、奈緒ちゃん！」

そう奈緒に応えたのは、誰であろう裕子だった。

移動教室に向おうという、まさにそのとき、教室を飛び出した私たちの勢い（と、持前の好奇心）につられて気づいたらついてきてしまったらしい。

「裕子、一応言つとくけど遊びじゃないからね？　危ない目に遭うかもしれないよ？」

「もちろん！　北条さんとは親しくなくとも、ともにこの学園に通う同級生！　それにこの出来事のきっかけがスタンドにまつわるものなら、『スタンド使いは引かれ合う』ということ！　ここは奇妙な縁に従い、加勢しますっ！」

走りながら忠告するも、相変わらずまっすぐ純真な瞳で裕子は堂々と宣言した。

正門前にたどり着こうというところで、また見知った顔に出会った。

「おや、おはよう、先輩方……課外授業の時間かい？　他の生徒や引率者はいないようだが」

私たちはともかく、なぜ今この時間にここにいるのか。先日のカラスの一件で知り合った少女、飛鳥だった。

「飛鳥……そつちこそ、一時間目はもう始まつてるよ？」

「フツ……真夜中の電波狂想曲ミッドナイトレディオ・シヨウイゼンに誘われてしまつてね。気がついたらこんな時間さ。ま

あ、たまには重役出勤も悪くない……ああ、ボクのことには気にしないでくれ。最低限の内申は取っているつもりさ」

小粋なジョークでも話すようにクールな受け答え。寝坊してるのに。

「それで、キミたちはいつたどこに行こうと言うんだい？ そんなに息を切らせて」

「……課外授業に出遅れて、ね。急いでるから、それじゃ」

ゆつくり話している時間はない。話を切り上げ、学園の外へ——出ようとしたところ、

「まあ待ちなよ。そうかい、課外授業か……フッフ。授業内容は……『スタンド』、だろう？」

「えっ——」

ニヒルに微笑む飛鳥の一言に、私だけでなく奈緒と裕子も一瞬固まってしまった。

『第六感!』 シックス・センス まさかこの子もエスパーの素質が、じゃなかった……あなたも『スタンド使い』？」

驚きと期待の混じった声を裕子が発する。緊迫した状況でも、彼女のエスパーへの好奇心アンテナは敏感なようだ。

「そのとおり、『スタンド使い』さ。キミとははじめましてだね。ボクはアスカ、二宮飛鳥。エスパーではないけど観察力には長けているつもりだね……」

裕子へ自己紹介を挟みつつ飛鳥が話をつづける。

「キミたちのその真剣な表情……単なるサボリではなさそうだ。スタンドがらみのか」を解決するべく学園の外へ向かう——そんな風に観えたものでね」

カラスのときといい、ずいぶんと察しが良い。しかしそれなら私の気持ちも多少は察せるだろう。

「当たってるよ！ またね」

焦りから思わずぶっきらぼうに飛鳥に言い放ち、ふたたび走り出す。慌てて奈緒と裕子もついてくる。そして……なぜか飛鳥も。

「飛鳥っ!? 話なら今度にして——」

「手伝うよっ！ 協力者は多いに越したことは無いだろう？ 事情は走りながら聴くよ」

「え——?」

飛鳥からの思わぬ申し出。しかし……裕子にも言えることではあるが、飛鳥はこの件になんら関係ない。加蓮のことは知らないだろうし、どうして……。

『ボクはこの件に関係ないはずなのに、なぜ?』って言いたそうな顔だね」

また見透かされた。やっぱりホントはエスパ—なんじゃ……?」

「いわゆる好奇心だよ。といつても、別に物見遊山気分で付き合おうってわけじゃない

……同じ『スタンド使い』として、奇妙な連帯を感じるのさ」

軽く息を荒らしながら理由を話す。つまるところ、裕子と同じなわけだ。

「いいの？ ついてきても、アンタに得なんてひとつもないと思うけど……」

「ボクの好奇心が満たされる。収穫なんてそれひとつで十分さ。それに……損得勘定だけで動くほど効率化された感情は持ち合わせていないよ、ボクは」

唇を歪めて不敵に笑う。彼女なりに私たちのことを気にかけてくれている、ということだろうか。その想いの発端は飛鳥自身の純粋な好奇心によるところのようだが。

——こうなったら、一蓮托生、つてやつなのかな……。

「それなら……とりあえず公園まで行くよ。ついてきて」

「奇妙の舞台はまた森林公園かい。望むところさ」

「奈緒も裕子も、いい？」

「ああ！」

「了解！ さいきつく……だーっしゅ！」

スピードを上げ、先頭に躍り出る裕子を見て私たちも加速する。

待っててよ、加蓮……。

学園を飛び出し、目の前の下り坂を森林公園の入口目指し、駆け抜けていく——。

(つづく)

第8話『2nd SIDE』

「なるほど……話を聴く限り、その薄荷色の彼女がキミたちの探し人のスタンドなら……いわゆる『暴走』状態にある可能性が高いかもしれない」

森林公園の入口で足を止め息を整える私たち同様、荒い呼吸を静めながら飛鳥が言った。

スタンドの暴走……。つまり、加蓮の意図しないところでスタンドが勝手に動いて、たまたま会った私を攻撃したということか。

「凜のスタンドも最初はあたしらを突然攻撃してきただろ？ あんな感じのことが加蓮にも起きてるかもってことだよ……急がなきゃな」

確かに奈緒の言うとおり、私の『ネヴァー・セイ・ネヴァー』は最初は影のような今よりもぼんやりとした見た目で現れては私の周りを好き勝手に動いていた。そして奈緒がそれを見た瞬間、唐突に襲いかかってきた。

「スタンドの暴走を止める手はあるの？」

「凜もそうだったみたい、心がスタンドの存在を『理解』できればいいのさ」

「本来なら」

飛鳥が横から付け足す。

「スタンドを発現した時点で自然と扱えるようになるはずなんだ。『これは自分の一部だ』というような奇妙な確信が心に芽生えて、ね……」

「確かにあたしはそうだったな……原理は分からないけどすぐに自覚できた。でも凜だつて、気づくのに時間はかかっても今ではしつかり『スタンド使い』として目覚めてるんだ……加蓮だつて、大丈夫なはずだよ。さつさと見つけて、気づかせてやろうぜ!」

「そうだね。とにかく、見つからないことには始まらない。ひとまず二手に分かれて公園を一周してみよう……この中で戦闘向きのスタンドを使える人はいるのかい?」

飛鳥の言葉に、裕子がばつの悪そうな顔をした。

「私のは、見た目はただの『糸電話』なので……。凜ちゃんと奈緒ちゃんのスタンドは人型だし、強そうでしたね」

「と、なると……凜さんと奈緒さんは、万が一戦いになつても一応は対処できるわけだ。それなら——」

*

「……」がその『彼女』に出会った場所かい?」

奈緒・裕子と別々に分かれて加蓮を探している私と飛鳥は歩みを止め、林の中を見つ

めていた。

「あそこ。あの木漏れ日の強いところ。そこに立ってた」

指を差して教えると飛鳥は例のスタンドと同じようにその場所に立った。

「ここにいて……急に攻撃してきた、と?」

「そう。日傘を差していて、腕を下ろして私に傘を向けたら、そこから吹雪が出てきた……そういう能力だった」

「『吹雪を起こすスタンド』——か。相手にすると厄介そうな能力だ。ボクのスタンドチカラじゃ接近しなきゃ、牽制すらまともに出来やしない」

「あの、『当たると棺桶になる拳銃』……『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド』、だっけ?」

「ほう……覚えていてくれたのかい」

こちらを振り返り、感心した素振りを見せる。でも目の前で人が棺桶に変わるなんてところ見てしまったら嫌でも覚えてしまうだろう。

「どんな相手でも、棺桶にしてしまえばその間は無害になる」

うつむいて、なにやら探るように視線を地面に這わせながら飛鳥は言葉を続けた。

「棺桶化した本人に苦痛はなし。そしてすぐ元に戻る。拳銃、弾丸、棺桶……そんなヴィジョンとは裏腹に、実に曖昧な結果をもたらすのが『ヴェルヴェット・アンダーグラウ

ンド』さ。もつとも、弾が当たらなければその曖昧な事象すら起こせないが……おや、これは——」

ガサガサと背の低い草をかき分け、飛鳥がなにかを拾った。

「ちよつと、それ……加蓮のスマホ」

その手に握られていたのは加蓮のスマートフォンだった。

『彼女』はこれを取りに来たのかもしれないね」

「でも……暴走してるんじゃない？」

「暴走はあくまで可能性さ。それにもしそうだとしても、無意識の内にスタンドを操れつつあるのかもしれない。いずれにせよ、北条さんを探す必要があることに変わりはない。電話やGPSじゃ探せないことが確定してしまったが」

加蓮のスマホを見つめながら飛鳥が相変わらずクールに言った。それを聞いて、加蓮に連絡を取るという当たり前の手段を今まで失念していた自分に気づく。

「とにかくこの辺探し回るしか——」

♪すこしもさむくないわゝ

突如鳴り出す加蓮のスマホ。一瞬まさかと思ったが、飛鳥から渡された画面を見ると着信は持ち主ではなく奈緒からだった。

少し前のアニメ映画の着信音を止めスマホを耳へ近づけると、焦りに焦った奈緒の声

が聞こえてきた。

『加蓮ンツツ!!』

「奈緒、落ち着いて。私。ちようど今、加蓮のスマホを見つけたの」

『へっ、えっ?! 凜!?!』

調子の外れた声を聴いて、電話の向こうの奈緒の顔が頭に浮かぶ。しかしそれは今にもうなだれそうな悲痛な表情だった。

「スマホ落としたみたい。加蓮自体は見当たらないけど……そっちはどう?」

『こっちもだ! 加蓮は見つからないけど、拾ったんだ、カバン!』

私たちの方からスマホ、奈緒たちの方からはカバン……ふたつの道から見つかった加蓮の私物。学園への通り道にここを歩いただけなら、両方の道を歩く必要なんてない。それにスマホはまだしも、カバンを落としたことに気づかないわけがない………平常時なら。

『加蓮のやつ……なんでカバンなんか落として……それになんでそっちの方にスマホ……』

奈緒も私と同じ疑問に行き当たったようだ。

「……なにかから、逃げてる……とか?」

思いつきが口に出る。

『はあ!? なにかって、なんだよ!』

「分からないけど……カバンなんて、普通忘れないでしょ。落としたけど、拾ってる余裕もないようななにかがあつたのかもって……」

『おいおい、怖いこと言うなよ! そんなんホントだったら、ますます加蓮ヤバイじゃん……』

「逃げてるところか、すでに連れ去られつつあるのかもしれない」

奈緒の泣きそうな声が漏れるスマホに顔を近づけ、ほんの少しすまなさそうに眉をハの字にした飛鳥が追い討ちをかけるようなことを口にする。

『んなつ……んだって……?』

「北条さんになにかが起きているのは間違いない。そのなにか……例えば、良からぬことを考えているスタンド使い。それから逃げてる最中でこれらを落としたのならまだ不幸中の幸いだが……捕らえられて、助けを呼ばれないよう、『犯人』がスマホを捨てたりした可能性も考えられなくはない」

冷静に明瞭に言葉を紡いでいく飛鳥。彼女の声を遮る者はなく、スマホの向こう側も無言だった。

「所詮はボクの空想にすぎないが……いかなる事態も想定しておいた方がいい。なんにせよ、今はこの空論が空回りで終わるよう大車輪でここを調べてしまおう……分かった

ね？ 奈緒さん、裕子さん」

『あ、ああ……そうだな……そうだな！ 加蓮が大変な目に遭ってるかもしれないんだ……へこんでる場合じゃないな！ よし、ソッコー見つけるぞ！ そっちはヨロシクな！』

論すように飛鳥が声をかけると、沈みかけてた気持ちを力任せに再浮上させ、奈緒が意気込む。その声を最後に通話が切れた。

「さあ、ボクたちも行こう。向こうに遅れを取ってはいけない」

走り出す飛鳥。確かに加蓮を見つけるまでは立ち止まってはいけない。

スマホを制服のポケットに入れて飛鳥に続こうと駆け出した、そのとき、

バサツ——

という物音が聞こえた。

なんの音かはすぐに理解できた。『傘を開く音』だ。

しかし、音の正体と場所を把握し、そこから行動に移れるほどの猶予はなかった。

「——ぐううあツ!!」

気づいたときには、横からの突風で私の体は吹き飛び、林立する一本の樹に叩きつけられていた。

「凜さんッ!?!」

瞬間の出来事ながら、こちらを振り返った飛鳥に私は指をさして伝えていた。『彼女』のいる方向を。

「『ヴェルヴェッツ』！」

かけ声とともに自らのスタンドを出し、私の指をさす方へ立て続けに三発の弾を飛鳥は発射した。

「ちいっ！」

だがしかし相手の方が一手早かった。『彼女』は傘を自分の足元のあたりに向けて突風を起こし、その風圧で一瞬のうちに私たちの射程距離外へと逃れた。最初に出会ったときよりスタンドの反応が機敏になっているような気がする。

「凜さん……」

「……大丈夫。痛いけど」

心配する飛鳥を手で制する。スタンドによるガードも間に合わなかったが頭を打たなかっただけマシだ。腕も折れてはいないし加蓮が見つかるまではこれくらいでしよけてもいられない。

「それより……まだ向かってくる気みたいだよ」

10 m以上の距離をとって『彼女』がこちらの様子を窺っている。背筋を伸ばし、優雅に傘を差して佇んではいるが、その姿勢に隙らしきものは見当たらない。ここからで

は『ネヴァアー・セイ・ネヴァアー』の射程距離外だし、飛鳥の銃弾も届いたところで容易に避けられるであろう距離をしつかりと保っている。

「さて、この状況、どう対処するべきだろうね？」

いちどスタンドを引つ込めた飛鳥に私は単純明快にその手段を述べた。

「先手必勝。相手より速く動いて、喰らいつく！」

飛鳥のポーカーフエイスが呆れ顔に変わるよりも素早く、私は林の中を走り出した。

「やれやれ、見かけよりストレートなタイプなんだなキミは！」

背後からそんな声が聞こえた。そのとおり。こういうときは奇をてらうより……跳び出す！

樹の間を縫うように走りながら距離を詰めていく。相手が向かってくるにせよ逃げにせよ、飛鳥に見栄を切った手前近づいてみせる。

優雅な構えを解いて彼女はまた傘を前に向けた。どうやら選択したのは回避ではなく攻撃のようだ。

「っ——！」

折れた枝葉や千切れた雑草を巻き込みながら、前方から真冬の嵐が迫る。慌てず焦らず、意識を集中させて空間を蹴って確実に避ける。前と同じワンパターンな戦法なら問題は無い。回避を繰り返しながら少しずつ近寄っていく。

乱発される吹雪の中をかいくぐり、5 m …… 3 m …… 捉えた!!

『ネヴァー・セイ・ネヴァー!』

気合いの叫びとともに剣を振り上げる。だが傷つけはしない。傘を弾き飛ばして無力化するためだ。

剣は開かれた傘の芯に打ち込まれた。だが腕を上げて大きくのけぞったものの、傘は手から離れなかった。

即座に第二撃、これで傘を吹き飛ばす。その思いでふたたび剣を振りだそうとしたそのとき、彼女が傘を閉じた。

そして上がったままの腕を、力いっぱいに降ろしてきた。私に向かって。

「!!」

キーン! という金属めいた音が響く。振りだしかけた剣が日傘を受け止めた音。

そのまま加蓮のスタンドは、あろうことか剣士のごとく傘を『ネヴァー・セイ・ネヴァー』に次々と振るっていく。驚きながらもなんとか防御する。剣 VS 日傘によるまさかの接近戦。

加蓮のスタンドにここまでのパワーがあつたなんて……!

落ち着きを取り戻せないまま、目の前から繰り出される傘の連撃を強引に弾いていく。

序盤こそ押されたがパワーならこちらが上。攻守は逆転し、今度は向こうが私の剣を受け止める側になった。

このまま力でねじ伏せて防御を崩し、次こそ無力化してみせる。

その思いで必死に剣を振るう。加蓮を助けるために加蓮を攻撃しているという矛盾が辛いところだ。

——『リン』

そんな気持ちを知ってか知らずか、どこかで誰かが私を呼ぶ声が聞こえた。

『リン……』

すごく近くで聞こえた、と思ってしまったのは、その唐突さに私の脳がついていけなかったからなのか。声の主は目の前の、傘を構え懸命に『ネヴァー・セイ・ネヴァー』の剣撃を防いでいる『彼女』——加蓮のスタンドであった。

『リン………ナオ………』

声の出どころと、その言葉の指し示すところを頭が理解したとき、剣を振る手が一瞬止まる。

バサッ……

私と奈緒の名を呼びながらも、生じた隙を彼女は見逃さなかった。

再度開かれた傘。隠される彼女の姿。ゼロ距離で牙を剥く薄荷色の光と風……。

気づいたときには、もう宙を舞っていた。痛みはなかったが、能力を使う余裕もなかった。とてつもない寒さと、地に足の着かない恐怖だけがその瞬間にあった。

その感覚が一瞬だけで済んだのは、『終わり』が来たからだと思つた。冷えきつた恐怖に震える間もなく、視界が闇に染まる。身体が動かない。心地よくはないが不快でもなかった。

これが……これが『死ぬ』ということ——？

＊

……………。

気づくと公園の林の中で立ち尽くしていた。そこは意識がブラックアウトする前にいた場所。そこにいるのは当然だ。当然だ……生きていれば。

「平気かい？」

「え？」

隣からまた誰かの声。いや、誰かは分かっている。飛鳥だ。

「私、どうなったの……」

私は慎重に声を出した。自分が喋れることになぜか安堵した。

「……吹っ飛ばされたのさ。見事に。綺麗に宙を舞って、頭から地面に真つ逆さま……」

『撃った』から大丈夫だけどね」

『撃った』——飛鳥のスタンドで、私を撃つたということか。さつき真つ暗で身動きがとれなかったのは私が『棺桶』になってたから？

「……ありがとう。飛鳥は命の恩人だね」

「気にしないでくれ。刹那の死によって永遠とわの死を欺いただけのとき。流石に少し焦ったがね。それにしても……北条さんとは、随分と強い闘争心を持った人なんだね」

「そうだ、加蓮！」

その名前が飛鳥の口から出るまですっかり忘れていた。私は加蓮……のスタンドと闘っていた。

『彼女』なら、もういないよ」

「えっ……」

確かにまわりには私たち以外誰もいなかった。それにまだいるのならば、とつくに次の攻撃が来ていたはず……。

「キミに『ヴェルヴェッツ』を撃ち込んだのとはほぼ同時に、消えてしまったんだよ。北条さんがスタンドをコントロールできるようになったと思いたいところだが……それを期待するのは安直だろうね」

そう言つて飛鳥は肩をすくめながら、かすかに苦笑した。でもそのとおりで、どつちみち攻撃を食らっていたとはいえ、そんな都合のいいタイミングで『スタンド使い』と

して覚醒してくれてたら、こんな苦勞はしていない——のだが……。

「それでもないかも」

私その一言に、飛鳥はやや目を見開ききよとした顔になっていた。

「呼んだの、あのスタンドが。私と、奈緒のこと……『リン、ナオ』って……吹っ飛ばされる直前に」

「そんなことが……」

つぶやいて、ふたたび思慮深い顔つきに戻った飛鳥。腕を組んでなにやら考えているようだ。

「それが本当なら、この土壇場で覚醒しかけているのかも……『スタンド使い』に。そうなら不幸中の幸いだ……けれど」

いったんひと呼吸置いてから、ふたたび喋りだす。

「それで事態がすべて解決するわけじゃないからね。結局、北条さんを見つけるまでは、なにも終わりはしない」

そう言い切り、飛鳥はスタンドをしまった。つまり、進展はないということだ。ひとり歩きのスタンドを見つけただけ（そして逃げられた）ではどうにもならない。

「おーいー」

しかしそんな停滞したムードをかき消してくれるような声が遠くから聞こえてきた。

「リーん、あすかぁー!!」

「問題ないですかぁー?」

少ししてから、慌ててこちらに向かってくる足音も耳に入ってくる。

「はぁーっ……はぁ……」

「ぜえ、ぜえ……ふう」

乱れきつた息をこぼしながら奈緒と裕子がやって来た。奈緒の手には先ほど電話で話した加蓮のカバンが握られていた。

「なんか……でっかい音が聞こえたんだけど……なんかあったのか?」

「出たの。加蓮の……スタンド」

「なんだってえ!？」

「もう消えちゃったんだけど……」

いちばん伝えたいことを奈緒に話す。

「消える前に、言ったの。加蓮のスタンドが、私と奈緒の名前を」

「な……それは、つまり……」

「目覚めつつあるのかもしれない。加蓮が……『スタンド使い』に。でも、それでも加蓮がどこにいるかは結局分からなくて……」

「……だよな。スタンドを見つけたからって、本体の場所が分かるわけじゃないよな

……」

「ここで会ったのなら、すぐ近くなんじゃないんですか？ スタンドには『射程距離』がありますし……」

険しい顔の奈緒を心配そうに見ながら裕子が言った。

「そうかもしれないが……そうとは限らないかもしれない。間近で観ていた限り、結構なパワーを持っていたから、射程距離はそんなに広くないとみたが……ひとり歩きの状態にあるスタンドは……射程距離なんてお構い無しだからね」

本体が扱えてないわけだからね。飛鳥はそう付け足しました。つまり極端な話、公園内にはもういない可能性だってあるということだ。町中探し回るとなると、私たちではさすがに厳しい。

「ちくしょう……あああーっ!! 加蓮っ!! どこだよお!!」

昂る感情のままに奈緒が空に向かって叫んだ。でも……。

「どっ、に………いるんだよお……っ」

大声をあげただけでは加蓮は見つかるはずもなく、祈るように組んだ両手を胸に当てて、最後は悲痛につぶやいた。

「奈緒ちゃん……だいじよぶ。きつと大丈夫ですよ!」

裕子が奈緒を励ます。しかし、その言葉になんの根拠もないことは裕子自身も含め、

みんな分かっていた。それでも、大丈夫、大丈夫、と泣き続ける子をあやすように繰り返す。声をかけずにはいられないのだろう。その気持ちは私にだって理解できる。でも、私は、考えなきや……。加蓮を見つける方法を。

「かれん……………」

奈緒の弱々しい声に思わず焦る。なにか……なにか手段はないの——？

「？ 待って！ 奈緒さん……『それ』はいつたい……」

狼狽する飛鳥の声が突如響く。その声を聞いて奈緒を見る。祈るように胸に当てられた両手。その手と手の間から……………『虹が出ていた』。

「なっ……………はっ!？」

驚きのあまり組んだ手を解くと、それは奈緒の胸から発されていた。

紛れもない『虹』だ。カラフルな七つの光が奈緒の胸から空に向かって放たれている。

それは空中で弧を描き、ふたたび地上へと延びていた。

「まさか……北条さんをさらったヤツのスタンドかつ!？」

飛鳥の手のひらから一瞬で『拳銃』が現れる。引き金に手を掛けて、油断なく周辺を見回している。

「いやっ……………待ってくれ！ 違う!？」

奈緒が自分の胸から延びる虹を見つめている。

「どうしました、奈緒ちゃん？ ……まさか、痛むんですか!？」

奈緒の隣で裕子がうろたえる。そんな裕子を手で制して、また奈緒が叫んだ。

「分かるツ！ 分かるんだ、加蓮がいる場所！ 虹の向こう側に……感じるんだ！
蓮をツ!!」

——奇跡。

そのとき私の頭の中には、間違いなくこの言葉が躍っていた。

(つづく)

第9話『Frozen Tears』

私と飛鳥、裕子は全速力で走りながらも、ときどき首を上げ空を見た。奈緒からほとばしる『虹』が向かう先を確認するために。奈緒はというと、空には目もくれず、ひたすら前を見て走り続けている。

「奈緒っ……これは、この『虹』はいつたいなんなの!？」

当然気になっていたことを私は尋ねた。

「正直あたしにも分からん! でも、この虹の向こうに加蓮がいる!! それだけは確かなんだっ!!」

「感覚で分かるってこと?」

「そうみたいだ!」

走るスピードはそのままに、大声で奈緒とそんなやり取りを交わしていると、飛鳥もその輪に入ってきた。

「これは奈緒さんの能力なんだろうっ?」

「そうだと思うんだけど……こんなのははじめてだあ!」

私も目にしたのは今がはじめてだ。奈緒の『ワン・ヴィジョン』は、確かにものの場所が分かる能力を持っているけど、それは『ステッキ』で触れたものでなければ発動しないし、場所が分かるのはあくまで奈緒本人だけで、今みたいに私たちにも分かる形（虹）で出たことなんてなかった。困惑しているということは、奈緒にとっても未知の出来事のようなだし……。

「目覚めたのさっ!!」

飛鳥のひととき大きな声がこだまする。私たちは足を止め、振り返って最後尾の飛鳥を見た。それに合わせて飛鳥も立ち止まる。それまで胸から延びていた奈緒の虹が背中側に回った。どうやら身体の向きに関係なく、常に目標に向かってアーチを描くようだ。虹なんだから当然といえば当然だが。

「な……なにに?」

奈緒が問う。声には出さなかったが私も裕子もその疑問を視線で飛鳥に問いかけた。

『セカンド・サイド』
『新たな一面』——にさ』

「せつ……」

セカンド……サイド……?

「そのサイキックな響きはいったい……なんなんですか!? 飛鳥ちゃんっ!」

裕子が叫び、私たちの視線はさらに強く飛鳥に注がれる。『セカンド・サイド』とは――

—？

「簡潔に述べよう。スタンドは……ボクたち同様『成長』する」

そう前置きしてから飛鳥は人差し指で奈緒を差す。

「おそらくだが、北条さんを見つけないという奈緒さんの強い思いが目覚めさせた
『奈緒さんのスタンド』の『第二の能力』……ということさ」

人差し指に加え中指も立て、二本の指を向けて言った。

「第二の……能力？」

裕子のきよんとした声。スタンドの『成長』……『第二の能力』……。

「スタンドは成長次第で新しい力に目覚めることもあるのさ。といっても、なんでもありってわけじゃなく、あくまで本来の……元の能力に根づいたものであるはずだけだね」

「……なるほど。確かに『ステッキ』も『虹』も、どっちもなにかを探す能力だな……」
頷き納得した様子の奈緒を見ると飛鳥はふたたびひとり走り出した。

「理解できたのなら疾く往こうか、『約束の地』へ！」

空をささやかに彩る虹に向けて言うと、オレンジ色の頭から断絶したように生える青い襟足を揺らして緑の中へ飛び込んでいった。

「もたもたしてる場合じゃなかったな！ あたしらも行くぞ！ もうひと息、ダッシュ」

だ！」

続いて私たちも再スタートを切った。感覚で目的地が分かる奈緒を先頭に、飛鳥を追いかけて、追いつき、追い抜いて4人ひとつの塊となって駆けた。

息も絶え絶えになりながらそれでも走り続けていると、ときどき上を向いて覗く虹のアーチの位置がだんだんと低くなっていることに気づく。飛鳥言うところの『約束の地』へ向かうほどにアーチは高度を落とし、もうしばらく走ると正面を向いたままでも先へ延びていく光が視界に入るようになった。

さらに進むとアーチはどんどん高度を下げていき、先行する奈緒の頭に隠れて見えなほほどになっていったので私たちは鬱蒼とした林のなか、横並びになって虹を追いかけた。

*

『約束の地』——それは広い広い公園の林のはずれだった。すぐ後ろは、より木々が鬱蒼と立ち並ぶ傾斜の激しい雑木林の坂がそびえる。道はなく登るのは困難だが、その上は学園へと繋がっている——こんなところから登校してくる生徒はいないだろうけど——

そんな場所で私たちはついに加蓮を発見した。もはや直線と化した虹の終着点は、あお向けに倒れている加蓮の胸。虹の光は奈緒と加蓮を繋いでいたわけだ。そして……

「やつ、ほつ、ほほうつ、ふううつ!」

そのまわりを、器用に木々をかわしながら小太りの男が跳びはねていた。そしてそれを追いながら日傘を振るう、暴走した加蓮のスタンドの姿もあった。それだけではない。さらに……

「加蓮ちゃんっ! ……おわっ?! か、火事!」

裕子が叫んだとおり、といつても小火程度のものだが、一部の林の枝葉や植物がなぜか燃えていた。

「加蓮ちゃん、スタンドと、おじさんと……火事……これはいったいなにか?」

私が聞きたいよ。そう心の中で裕子にツツコミを入れる。

「とにかくまずは加蓮だ!」

スタンドを出して全速力で加蓮のもとへ近づいていく奈緒。

「ぺいぺいぺいっ!!」

「のわっ!」

慌てながら奈緒が回避行動をとった。小太りの男の張り手のように突き出された白い手のひらから、なんと『火の玉』が飛び出してきた。

「なっ、パイロキネシス!! ……いや、違いますね。あのおじさん……」

『スタンド使い』だっ!」

裕子と奈緒が同時に叫んだ。火の玉と、なにより加蓮のスタンドが繰り出す傘による攻撃をはつきり見て、かわしている。間違いない。あの身のこなしもスタンドによるものなんだろうか？

「事情がまるで掴めない……が、北条さんの危機であることは明白だね」

飛鳥に言われるまでもなく、訳の分からない状況だったが一刻も早く加蓮を助けるべきなのは見れば分かる。襲ってくる加蓮のスタンドにならともかく、来たばかりの奈緒に火の玉を撃ってきたということは単なる『暴走したスタンドに襲われているスタンド使用のおじさん』ではなさそうだ。

「かれえええーん!!」

果敢に再度奈緒が加蓮に駆け寄っていく。

『——ナオ』

！ 奈緒の呼びかけに……加蓮のスタンドが反応した。しかし……

「奈緒さん！ 彼女が来るッ！」

「ちいっ！」

反応こそしたものの、奈緒に急接近した加蓮のスタンドは私のとときと同じように日傘で素早い一撃を振り下ろしてきた。

ガキーン！ と激しい音は『ワン・ヴィジョン』のステッキが傘を受け止めた音だ。V

S 剣の次はV S杖ときた。

「えいやっ！」

しかし『ワン・ヴィジョン』のパワーは私の『ネヴァー・セイ・ネヴァー』以上だ。あつという間に加蓮のスタンドは押され気味になっていく。少なくとも私たち相手の真つ向勝負では分が悪いようだ。それでも接近戦に持ち込むのは、そもそも隙を作らなければ『吹雪』も通用しないということと戦ったときに学んだからだろうか。

「まとめて燃えちまえっ！」

いつの間にか木に登っていた男がてっぺんから奈緒たちに向けてふたたび火の玉を放った。

「奈緒！」

相撲の突っ張りのような動きで、手のひらから怒濤のごとく乱射された火球がふたりを襲う。

『ナオ——ナオ！』

加蓮のスタンドがまた奈緒を呼んだ。次の瞬間——

バサッ——

「しゃがめ！ 奈緒さんっ！」

飛鳥が言うと同時に加蓮のスタンドが日傘を開いた。

「んおおおおおおおおおつ!!?!?」

撃ち込まれた大量の火球が、薄荷色の吹雪によって瞬く間に霧消した。吹雪は木の上
にまで届き、吹っ飛ばされた男は5〜6mの高さから尻餅をついた。

「ほおおうツ……!!? お、おおおう……」

うわ……痛そう。私は思わず守るように自分のお尻を手で押さえた。

「た、助けてくれたのかな……?」

身をかがめたまま奈緒が怪訝そうに加蓮のスタンドを窺った。

「そうであることを願いたいね……だが、キミはひとまず本体の元へ帰るべきだな」
マスター

ドキュウン! そんな音が聞こえたときにはすでに飛鳥は行動を完了させていた。

「おい飛鳥! なんのつもりだ!」

奈緒の問いかけももう意味を持たない。いつの間にか背後に近づいていた飛鳥が
『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド』で撃った。加蓮のスタンドを。

「痛ましい光景を見せてしまったかもしれないが落ち着いて。これでとりあえずは暴走
を止められたのだから」

弾丸を撃ち込まれた加蓮のスタンドは姿を消していた。

「スタンドに向かつて放てば『棺桶』にはならず、強制的に本体の内もとへ戻る……。動きを
捉えさえできれば暴走を止めるのは容易なのさ……。そう、ボクの『ヴェルヴェット・ア

ンダーグラウンド』ならね」

そう言ってから飛鳥は腕を下ろしてスタンドを解除した。確かに、飛鳥の能力を多少知ってるとはいえ奈緒がうろたえるのも無理はない、傍目から見れば恐ろしい光景だった。

「そうか、戻ったんだな？ 加蓮に！ 加蓮！ かれんっ！」

ホッとする暇もなく、慌てふためきながら奈緒が加蓮の元へ向かう。ふたりが近づくと胸に輝いていた虹の光がスーッと淡くなつて、消えた。

「おい加蓮っ！ 大丈夫か？ 喋れるかっ!？」

「私たちも加蓮に駆け寄り様子を窺う。」

「ん……ああ——」

意識はあるものの、加蓮は脂汗と苦悶の表情を浮かべていた。それに朦朧としていてまともに喋れないらしい。

「清良先生を今呼ぶよ——」

飛鳥がスマホを取り出し電話をかけた。手早く話をつけたのか、すぐに切つてブレーザーの内ポケットに戻した。

「サボってここにいるのを忘れていたよ……みんな、先生の大目玉を覚悟しておいてくれ」

気落ちした飛鳥の声。どうやら電話で注意を受けたようだ。

「そういえば、そうでしたね……あはは、まあ、北条さんを見つけれただし良しとしましようよ……つと、そうだ!」

突如思いついたように裕子がスタンド——『ミラクルテレパシー』を出した。糸電話が私、奈緒、飛鳥の胸を通り抜けて、最後に加蓮の胸へと紙コップが潜り込む。

「喋るのが辛いならこれで……」

そう言ってから——

（『北条さん、言いたいことがあつたら、それを頭に思い浮かべて。でも無理はしないで下さいね!』）

今度は頭の中に裕子の声が響いた。

「なっ!? 直接……脳内に!」

飛鳥が驚いて声をあげた。そうか、飛鳥は裕子の能力を知らなかったつけ。

（『これなら、聴こえにくかったり声を出すのが辛くても会話できますよ!』）

（『……驚いたな。これが裕子さんのスタンドか』）

裕子に続いて飛鳥の声も響く。驚きながらもすぐ能力を把握し活用している。

（『はい! 『ミラクルテレパシー』……名前のとおりテレパシーのスタンド能力です!』）

『……………なんで、そんなことできるわけ？』

頭に流れる裕子と飛鳥の会話に別の声が入ってきた。

「加蓮！ 大丈夫なのか？ ……ああ違う」

うっかり直に話しかけてから、途中で気づいて改めて『ミラクルテレパシー』の力を借りて奈緒が加蓮に問いかけた。しやがみこんで加蓮を見ながら。

『大丈夫なのか？』

『おかげさまでなんとか……ね。だるいし熱いし、状況がまったく理解できてないけど。起きたらなんかいっぱいいるし……しかもテレパシーで会話してるし』

『加蓮を探すの手伝ってくれたんだよ。凜に、あとの子たちは……初対面か』

『えっと……あなたは確か、E組の子だよね？』

そう念じて苦しそうな顔で裕子に視線を送る。

『はい、E組の堀裕子です！』

『ん、知り合いだったのか？』

『アタシD組だからね。合同授業のときに見た覚えのある顔だったから。でも……そっちの子は、分かんないや』

今度は飛鳥に視線を移す。荒い呼吸音がかすかに聴こえる。

『アスカ、二宮飛鳥……よろしく、北条先輩』

裕子に続き飛鳥も短く自己紹介する。加蓮も「そう……よろしく」と短く応えてから、それから遠くを見るような目で少しだけ苦々しげにつぶやいた。

『あー、もう。またまわりのご厄介になっちゃったわけねアタシ。しかも凜と奈緒以外にまで……んー、うまくいかないなあ……』

ちよつと悔いるような、恥じ入るような声色。テレパシーといつても会話は会話だからその辺もしつかり伝わってくる。

『私が言うのもなんだけど、気にしすぎじゃない？ 厄介になったとか、迷惑かけたとか……』

『そうだよ加蓮。いちいち水くさいぞ。昔からそうだったろ。今さら気にするなよ』
それにすかさず加蓮が返す。

『……昔からそうだったから気になるのよ。借りばっか作って……そんなの、カツコ悪いじゃん……』

『よせよ、そんなこと言うの。貸しができたなんて、誰も思っていない。助けたいから助けてるんだよ』

私も奈緒の言葉に同意だ。加蓮に貸しを作った覚えなんて、これっぽっちもない。

『ちなみに、野暮なことを言うと初対面とはいえボクの方も気遣いは無用だよ。好奇心に導かれて此処こゝにいるのだけなのだから』

『それは私もです。状況に対して不謹慎な動機かもしれませんが……。それに、サイキック同盟フレンズはひとりでも多い方がいいですし!』

飛鳥と裕子も私たちに同調してくれた。それを聞いてなぜか自分のことのように嬉しくなった。

『加蓮、アンタいろいろ考えすぎ……。けっこうめんどくさいんだね』

『ぷっ……。凛、バツサリいくなぁー』

奈緒がようやく顔を綻ばせる。いつもの笑顔が少し戻った。

『ちよつと凛……。それひどくなくい?』

おどけるような調子で加蓮が言った。張りつめていた空気が少し緩んだような気がした。

『凛にはこんなこと言われちゃうし、奈緒には笑われるし……。はあ、なんか奈緒アンタの豆柴みたいな顔見てたらバカバカしくなってきた』

「んなっ……。!? 誰が豆柴かつ!」

加蓮の思わぬ一言に奈緒が大きく口を開いて叫んだ。

『よしよし。今お姉さん体調悪いから大声出すのはやめてね? フフフツ』

『うるさいっ! 犬扱いすんな!』

『奈緒はかわいいなぁ』

〔くそおつ、なんだよ！ 余裕か！〕

加蓮は汗を流しながらも笑顔で奈緒の頭を軽く撫でる。

〔加蓮、ちよつと……〕

〔おお、凜。言つてやつてくれ！ はしゃいでないで安静にしてろつて！〕

ふたりの会話に割り込んだきた私に、助けが来たと言わんばかりに奈緒が期待の目を向ける。

〔あのね、加蓮……確かに奈緒は可愛いけど、ハナコの方がもつと可愛いよ？〕

〔ちがああーう！ そうじゃない！ お前もか凜！ 親バカならぬ飼主バカか！
ていうか、犬とあたしを比べんな！〕

〔そんな……ひどいよ奈緒。うちのハナコじゃ釣り合わないつていうの……？〕

〔そうじゃないつーの！ ヒトはヒト！ イヌはイヌ！ みんな違ってみんなイイ！ ……あたしもバカバカしくなってきた〕

そう言つて奈緒は頭を下げ大きなため息をついた。

〔さつすが凜。アタシが見込んだだけのことはあるわ。その調子なら『奈緒イジリ道』免許皆伝の日は近いかもね。精進めされよ！〕

〔はい、お師匠さま〕

「極めようとすんな、そんな道！ オマエら息合はずぎだろ……」

耐えられなくなったのか普通に声に出してツツコミを入れてきた。奈緒はすっかり呆れきった顔をしている。

「……仲良きかなことは美しき、哉……」

私たちのそんなやり取りを見て飛鳥が小さくつぶやいた。

（『あの……北条さん、そんなハシャいで平気なので……？』）

おつかなびつくり裕子が加蓮に尋ねる。

「ん、まだしんどいけど……さつきよりだいぶ楽になってきたみたい。みんなが見つけてくれたからかな？ 『糸電話』ありがとね。もう大丈夫だよ」

自分の口で照れくさそうにそう言ってから加蓮はあお向けに寝そべっていた状態から起き上がり、制服についた汚れを手で払う。そんな加蓮を心配そうに見守りながらも裕子はスタンドを解除した。

「おい、無理するなよ。先生呼んだから来るまで寝てろ」

「無理してないよ。だるいけど、意識ははつきりしたし、悪寒もしなくなつたし。『すこしもさむくないわ』ってカンジ」

軽く歌ってみせる。それはさつき加蓮のスマホの着信音でも聴いた映画の曲だった。かと思つたら今度は真面目な顔をしてこんなことを言う。

「確かにアンタたちが言うように貸し・借りがどうのこうのとか、アタシは必要以上に気

にしてるのかもしれない。けどね、やっぱりアタシの中では『借りたな』って気持ちがあつて、それはアンタたちがなにを言つても返さなきや気が済まないの。アタシなりの、プライドが許さないから」

「だーから、借りとか貸しとか、そもそもそんなのないつてーの」

「だーから！ あるの！ アタシの中では！ だから、みんながそう思つてなくても勝手に返していくつもりだから」

ケンカとまではいれないが熱く言葉を交わす。加蓮、病み上がりの身体のどこにそんな元気があつたんだ。

「んー、わかつたわかつた！ もう好きにしてくれ！」

ぶつきらばうに奈緒が言つた。こういうとき、優しい性格が災いして欲しいいつも奈緒の方から折れてしまう。

「つたく……。てか、いったいどうやって『返す』んだよ？ ここにいるみんなにハンバーガーでも奢つてくれんのか？ だったらドリンクとポテトは全員しサイズにしroya? 自分のだけじゃなくな！」

しかし完全に屈するのは嫌なのだろう。軽く悪態をついて一矢報いようとする。

「別にそれでも構わないけど……。もつと良い方法があるの。それに、ここで今すぐ『返せる』し」

？ 加蓮は事も無げにそんなことを言ってみせた。

「今ここで、つて……どうやってだよ？」

もつともなことを奈緒が口にする。その答えは私にも分からなかった。が――

「う、し、ろ」

答え合わせをするように加蓮が言った。「後ろ」と。

それだけでは意味が分からないから私たちは揃って振り返った。

地面に座り込んだまま小太りの男が両手を空に向かって上げていた。

そしてその両手の数m上空に大きな火の玉が浮かんでいた。

「……………」

絶句。まるでゲームの上級魔法のような巨大な炎の塊がめらめらと空中に停滞している。それは私たちが釘付けになっている間にも大きくなり続け、周囲の林を巻き込み、燃やしはじめた。

「なんて、こつた……」

奈緒が言葉を絞り出す。放たれば間違はなく私たち全員を燃やせるだろう。

「気づいてなかったの？ こんなに大きいのに。みんなただアタシに夢中になってたのよ？」

こんな状況にも関わらず加蓮が冗談めかすように言った。

「やややややややや、北条さん！ そんなこと言ってる場合じゃないでしょおおく！！」

裕子の叫びがこだまする。奈緒も私も、飛鳥ですら緊張と危機感で引きつった顔になつてゐるなか、加蓮だけが余裕の表情でクールに構えていた。

「さて、じゃあ奈緒が言つたとおり好きにさせてもらいますか」

まるでちよつとした面倒事に対応するような、これといつて臆した様子もなく堂々とした態度で加蓮がひとり前に入る。

「加蓮……………やめろよ……………やめろ!!」

単身躍り出た加蓮を見て奈緒が我に返り叫ぶ。

「うるさいよ奈緒！ ハウス！」

「バツ……………ふざけてる場合かバカッ！」

「ふざけてなんかないよ！ 『確信』してるのよアタシは！」

頑なに一步も退かない。口にした『確信』という言葉は本心？ それとも強がり？ 心を測りかねていると、加蓮は落ち着いたトーンで話しはじめた。

「さつき言つたでしょ。少しも寒くない、つて…………。不思議なの。なんか凄く『確かで、強いエネルギー』が私の中にある気がするの…………。分かつてもらえないかもしれないけど、うぬぼれなんかじゃない…………うまく言えないけど『間違いない』つて感覚で心が満

たされてるの」

一言一言しっかりと紡がれていく加蓮の言葉に、私は覚えがあった。それは紛れもなく『スタンド使い』として目覚めたとき私が味わった感覚と同じものだった。

「加蓮……もしかして『理解できた』の……?」

「恐らく……ね。具体的なことはなんにも分からないけど、凜が言いたいこと、なんとなく分かる」

隣の飛鳥の顔を覗くと私の意図を察したのか小さく頷いてくれた。加蓮は目覚めたんだ——『スタンド使い』に。

「だからここはアタシに任せてくれる? 後悔させないから」

こつちを向いて迷いのない瞳を見せる。その目には強い光が灯っているような気がした。

「……やれるんだな?」

「もちろん。……心配?」

「そりゃあ、な。さつきまで倒れてたんだ。心配なのは当たり前だろ」

包み隠さず奈緒が加蓮に告げる。

「そう……」

加蓮は静かに奈緒を見つめて、続けて言った。

「それなら……見てて!!」

「えっ——」

きよとんとしながら奈緒も加蓮を見つめた。

「見てて、私のこと……。それで、心配する必要なんて無いってこと分かせてあげてあげて……」

そう宣言して加蓮は男の方に向き直る。その後ろ姿は——儂げで、でも強い意志を感じた。

気がつくとは私は一歩踏み出していた。そこが自分の収まるべき場所であるかのよう

に、加蓮の隣に並んだ。

「凛……もしかしてアンタはアタシを信用できない——」

「違う」

加蓮が的外れなことを言いきりそうになったので否定の言葉を短く挟む。それから私は続けた。

「見るなら隣こで。……こつちの方が、よく見えるし」

「……もう。凛つてば……この負けず嫌い!」

「なに言ってるの。アンタも相当強情でしょ」

燃え盛る小さな太陽を前に私と加蓮は笑いあつた。

「おいおいおい、待てよ。あたしも入れろ」

早歩きで奈緒も加蓮の隣に並ぶ。

「親御さんがいないときはあたしが加蓮コイッの保護者つて言われたから。近くで見張つてないとなっ」

わざとらしく不満気な顔をして奈緒がそう言った。

「それ、いつのハナシよ」

「幼稚園のころ。あたしの両親が言った。加蓮の両親にも頼まれた」

「そんな小さいときの口約束いつまで守る気よアンタ……」

「う、うるさいっ！ 死ぬまで有効だ！」

赤い顔で奈緒が断言した。一方、そんな奈緒にいたずらそうな目を向けた加蓮はとうとう――

「ウチのマンション、ペット可だったけなー」

「んああああっ!! まだ言うかく！」

また懲りもせずからかった。嘘偽りのなさそうな笑顔を浮かべて。

「ちよつと失礼、エスパークも合流させてもらいますよ！」

今度は裕子が奈緒の隣に並んだ。

「裕子……別に付き合ってくれなくてもいいんだぞ？」

「仲間はずれはいやですよ！ 私たちサイキック同盟ですし、そもそもあんなのぶつ
けられたら前にいても後ろにいても同じですし」

あつけらかんとした態度で裕子は巨大な炎の玉を仰ぎ見る。……この子も大概、お人
好しかも。

「やれやれ、危機感のない先輩たちだ……隣、お邪魔するよ」

気づけば飛鳥も私の隣に立っていた。

「アンタも付き合う気？」

「付き合うというか……面倒みてあげるよ。ボクの『ヴェルヴェッツ』を忘れてないか
い。全員『棺桶化』してしまえばあんなものとするに足らないよ。辺り一帯焼け野原にな
るまでは防げないが……それに」

一度そこで言葉を切り、『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド』を出してから続けた。

「こういう展開も、たまにはいい……」

「……ふーん」

——お人好しは全員だったか。

なんだかんだで私たちはみんな加蓮の横に並んだ。まるで悪に立ち向かう戦隊ヒー
ローだ。

「……逃げないのか」

姿勢はそのままに、小太りの男がつぶやいた。

「逃げたら公園が丸焼けになっちゃうからね。それはイヤ。通学に使うし。あと、植物……特に花とか好きな子が友達にいるんでね。そんなことになったらその子シヨック死しちゃう」

首を左に曲げ加蓮が私にウインクしてみせる。いや気遣いはけっこうだけどころなんでも死にはしないから。

「逃げなかつたら……それを防げると?」

怒気を含んだ目をこちらに向けて、あくまで静かに男は言った。

「そうゆうこと。誘拐犯に言うのもなんだけど、本気でいくから……気をつけてね!」

大胆不敵に言つてのけると、加蓮は前をしつかり見ながら、両手を胸に当てた。

「——出て来てっ!!」

力のこもった短いその言葉に呼応するように、加蓮の前に見慣れたドレス姿のお姫様が現れた。

「あなたが……私の……?」

「そう。それがキミの心のチカラ——『スタンド』」

お姫様に代わって飛鳥が加蓮に答える。

「スタ……ンド……」

「その薄荷色の姫君が貴女の可能性。……名前があればその存在はより確かなものとなる」

「私のスタンド……可能性……名前——」

ゆつくりと手繰り寄せるように言葉を紡いでいく。それに続いてスタンドもひとつひとつの所作をしつかりと確認するように手に持っている日傘を開き、まっすぐ男に向けた。

「はんっ！ お前の力なんぞ扇風機の代わりにもならんね！」

攻撃体勢をとった加蓮のスタンドを目前にしても男は動かない。

「そう？ それならもつと強いの見せてあげる！」

そう言った加蓮もまたその場に立ったまま次の行動に移ろうとしない。スタンドの方も傘を前方に向けた姿勢のままだ。

「加蓮、どうするつもりなの？」

「アイツの火球アレといっしょよ。『溜めて』るの！」

溜めてる……ひよつとして『吹雪』のエネルギーを？

「そんなことできるの？」

「みたいよ！ 今気づいたけど」

行き当たりばったりか。それで対抗できるのだろうか。

「おい……本当に大丈夫なのか？」

不安げな声を漏らす奈緒を一蹴するように微笑んでから加蓮は目を閉じた。すると、開かれた傘の前の空間に『歪み』が生じる。陽炎みたいな、ぼんやりとした歪み。

「焼き尽くせえええええっ!!」

男が大声をあげて怒りをぶつけるように両手を前に振り下ろした。禍々しい熱量を持った火球がゆるゆると私たちに近づいていく。周りの木や草を燃やしながら。遅い。それはあつさりと避けられるスピードだった——あまりにも大きすぎなければの話だ
が。

私の視界を火の玉が強引に埋めつくしていく。それだけでは飽き足らず、私の、私たちの全身をその灼熱のエネルギーの中へ閉じ込め消し炭にしようとする。

みんな無言だった。無言だったけど、怖かったからじゃない。煌めきを感じたからだ。視界に映った炎の前にぼつんと立つ、お嬢様の持つ日傘から。

「いくよっ——『フローズン・ティアー』!!」

透き通った声を響かせて、加蓮が目を開けた。日傘から強烈な光と風が放射状に拡散していった。

目の前の火球に、ぽつかりと穴が開いた。

穴はみるみる外側に浸食していき、巨大な熱の塊をかき消し、周りに広がった余波を

も消し去った。

風が吹き抜けると空間は銀色に染まっていた。くつきりと。木も草もなにもかも、風の流れた場所だけが霜で覆われていた。

「さみや、まままままままままま……」

それは小太りの男も同じだった。赤いキャスケット帽に無地の赤シャツ、その上に着たブルーのオーバーオール、真っ白な軍手、そして鼻と上唇の間に蓄えられた立派なヒゲ。なにからなにまで霜だらけだ。

「ままままままままま……」

男は寒さで歯の根が合わず、二の句が告げないままこちらを見ていた。

『フロースン・ティア涙は止んだ』——『涙なんて似合わない女になるわよ』……ってこと。あつ、「幸せ過

ぎて〜」とか、恋の駆け引きで流す『オンナの武器』としての涙とかは別なんで、そこんとこヨロシク……ねっ！

そう言つて無邪気にウインクしてみせる。その言葉を聞いた男は、

「……マンマミーア」

ふざけているのかなんなのか、そう呟いてから倒れた。

「ふう……ねえ、凜。ヤバい、疲れちゃった……」

「えっ、ちよっ……加蓮？」

こっちを向いて一息つくど、加蓮が突然私の胸に寄りかかってきた。

「なんだ、どうした!？」

奈緒が慌ててこちらを見る。しかし加蓮はその声に反応しない。

「すう……すう……」

私に身体を預けたまま、加蓮は規則正しいリズムで寝息をたてていた。

「眠っちゃった……」

「寝ただけか……よかった」

奈緒がほっと胸を撫で下ろす。飛鳥と裕子も安堵のため息を漏らす。

*

「見つけたわよっ、不良娘たち〜!」

それから少しして早苗さんがやって来た。

一難去ってまた一難。いや助けを呼んだのは私たちだけ。来てくれた早苗さんに感謝しながらも、このあとの先生たちのお説教を想像して静かに戦慄しながら加蓮も含めて私たちは無事に学園へと帰還した。

入口の前で、木場先生と清良先生が待ち構えているのが見える。それに気づいた私たちは、思わず立ち止まってしまふ。笑顔がかえって恐ろしい。

あのふたりの前ではどんなに大きな火球もしぼんでしまふだろう。そんなことを思

いながら早苗さんの背中ですやすやすと眠る加蓮をよそに、私たち4人は覚悟を決め、ふたたび校舎に向かって歩きだすのだった――。

(To Be Continued……)

スタンド紹介②

『ミラクルテレパシー』

【本体】堀裕子ほりゆうこ

【破壊力】なし スピード―B 射程距離―A

【持続力】A 精密動作性―C 成長性―B】

・糸電話のスタンド。本体の手から出てくる。手から分離させて動かすことはできない。紙コップの色は黒く、まわりにオレンジ色で『丸・十字・波線・四角』、そして内底に『星』のマークが入っている。

【能力】

・思ったことを糸電話に触れている者に直接伝えることができる。『紙コップ』だけでなく『糸』の部分に触れても能力は発動する。

・射程距離777m。

*

『フローズン・ティアー』

【本体】北条加蓮ほうじょうかれん

【破壊力】B スピード―B 射程距離―D

持続力―C 精密動作性―B 成長性―B】

・つばの広い帽子を斜めに被り、ドレスを身に纏い、フリル付きの日傘を持った貴婦人のような姿のスタンド。顔つきは貴婦人というにはやや幼く、少女の面影が残る。帽子、ドレス、日傘はどれも淡い緑色しており、いずれにも薄荷ミントの葉を模した白いコサージュがあしらわれている。

【能力】

・日傘から『吹雪』（冷気を纏った風）を吹かせる。吹雪は淡い緑色でキラキラしている。

・日傘はかなり頑丈で近接武器としてもけっこう使える。また落下中に広げて落ちるスピードを緩やかにすることもできる。

・『フローズン・ティアーズ』ではない。

*

『セカンド・サイド』

【本体】神谷奈緒

【能力】

・『ワン・ヴィジョン』第二の能力。『本体』（奈緒）と『対象者』（今回の場合加蓮）の

ふたりが、お互いのことを強く想ったときに発動する。『虹の光』が現れ双方の心を繋ぎ、互いの居場所が感覚で分かるようになる。近くに行くほど『虹』は直線になっていく。

・『ステツキ』による探知と違って能力射程はない。世界の裏側にいても繋がる。

・『セカンド・サイド』とは、飛鳥が『新たな能力』、『新たな一面』といった意味で使った言葉だったが、奈緒が気に入ってそのまま能力名に採用した。

*

『ファイアボール』

【本体】逸見真里いづみまさと（小太りの男）

【破壊力】C→A スピード—C 射程距離—C

【持続力】B 精密動作性—C 成長性—D】

【能力】

・『火の玉』のスタンド。本体の手のひらから出てくる。あまり速くなく射程距離も10mくらいが限界だが、連射したり、力を溜め込んで巨大な火球を放つこともできる。

・ある程度は平気だが巨大にしすぎると本体も火傷を負う危険がある。そのため本体はいつも耐火性の手袋をしている。

【本体について】

・身長150cm、体重90kg。鼻と唇の間の立派なヒゲが特徴の39歳。仕事を転々としており、レーサー、ゴルフプレイヤー、テニスの審判員、ビルの解体業、宇宙飛行士、パーティー主催者などさまざまな職を経験している。フィアンセがいるらしい。

・瑠偉るいという背の高い双子の弟がいるが、「除霊師になる」と言って職に就かず夢ばかり追い求めていることに頭を悩ませている。

第10話『Work Song』

「1番、堀裕子！ 『じよいふる』いきまーす！」

底抜けに明るい声を響かせてから裕子は狭いボックス内を歌声で満たしていった。

「はい、はい、はい、はいっ！」

歌に合わせて奈緒と加蓮が仲良く掛け声を入れる。ふたり息のあったノリっぷりに嬉しそうな顔をしたままちよつと前のめりなテンポで裕子がサビを熱唱する。

ポップにはしやくぐ3人娘を眺めながら私と飛鳥はメロンソーダを飲み干した——。

あれから5日が経った。戦いのあと、疲れ果てて放課後まで眠りつづけた加蓮は、大車を取って休むよう再三念押しした奈緒に負けて翌日、翌々と学園を欠席した。

残る金曜日、奈緒とともに登校してくるなり私と裕子を呼びつけると日曜日に遊びにいく約束を半ば強引に取りつけた。それから方々探し回り、最終的に「いくら個性が服ウチのガッコウ着て歩いてる美城学園とはいえ、あんな髪色の子は5人といない」と息巻く加蓮を先頭に中等部の校舎にまで足を伸ばしたところでやっと飛鳥を見つけ、同様の約束を取りつけた（ちなみにあの特徴的な髪の毛がエクステであったことをここではじめて知った）。

そして日曜日になり、加蓮号令のもと街へと繰り出し、たまに行くカラオケ店に今日は5人入り、現在かましい3人とそれを見守る2人がここにいるというわけだ。

「せんきゅー!」

裕子の歌が終わるとすぐさま加蓮がマイクを持つ。モニターには『キミノヒトミニコイシテル』と表示されている。まるで呪文のような曲名だ。

途中、詞に歌手の名前が出てくる箇所を加蓮は臆面もなく自分の名前に替えて歌ってみせた。それまで歌っているところを聞いた覚えはなかったが歌い慣れている曲のようだ。そしてサビ。キャッチなメロディに乗せて「マメミムモ、マメミムモ——」、これもまた呪文のような言葉をアイドルみたいにキュートに歌った。

「なんの曲?」

加蓮からマイクを受け取りながら奈緒が尋ねた。奈緒も知らなかったらしい。

「子どもの頃見た映画の中でアイドルが歌ってた曲」

「へー、なんて映画?」

「ないしょ」

「なんでだよ」

「別にいいじゃない。いちいち内容話すのもめんどくさいし……:気になったならあと勝手にで文明の利器を駆使して調べてくださいな。歌はじまっちゃうよ」

いけね、と軽く慌てながら奈緒が準備する。モニターに映った曲名は『君の知らない物語』——奈緒の十八番だ。照れ屋の奈緒だが、歌声はまっすぐ、素直で力強く、爽やかだ。飛鳥がその姿をじっと見ている。どうやら気に入ったようだ。

「そのさつきから大人しいおふたりさん、退屈しちやっただ？ 次どっち歌うの？」
奈緒の曲が終わり加蓮が聞いてきた。

「別に退屈してたわけではないよ。では……そろそろボクにも歌わさせてもらおうか」
飛鳥が立ち上がりマイクを手を取った。画面に『スカイクラッドの観測者』というタイトル。

「おおっつ、いいね！」

奈緒が嬉しそうな声をあげた。知っている曲らしい。「たぶんアニメかゲームの曲だよ」と加蓮が横で小さく言った。奈緒が反応したからといってなんでもそういう曲とは限らないと思うけど。

「それはなんの曲なの？」とためしに飛鳥に尋ねてみた。

「とあるゲームのOP曲さ」

「……ふーん」

当たり前だったか。

歌う飛鳥の姿は凛々しく堂々としていた。上手いだけでなく、クールさの中にも可愛

いげのある声は少し意外だった。

「飛鳥、かつけー!」

男子みたいな感想を奈緒が漏らす。

「なるほど……だいぶやるようね。よし、凜、いきなさい!」

なぜか道場破りに先鋒を倒された師範代のような口ぶりで加蓮に促された。

「いけ凜! 最初からクライマックスだつ!」

それに便乗する奈緒の言葉につられ、いつもなら後半で歌う曲をつい勢いで入れてしまった。画面に現れたタイトルは『蒼穹』。

「とぼしてくね〜凜」

アンタが焚きつけたんでしょ、と心の中で加蓮にツッコみ、立ち上がる。

まあそんなことに関係なく最初から本気で歌うつもりだけど——。

それからふたたび奈緒の番が来て『ヒミツの珊瑚礁』を歌いはじめた。しっとりした出だしのあとにビートの効いたリズムが響く。爽やかな可愛らしさを強調した歌いかたは本家の秋月涼を意識したものだろうか。よく似合っている。途中、無意識か歌詞に合わせたのか、目の前に差し出した左手をすかさず加蓮が握った。それに照れこそしたものの、歌のほうは淀みなく進行させていく。さすが奈緒、ノリノリである。

それをきっかけに27番ボックスはアイドルソングメドレーの場と化した。裕子が

『shiny smile』を歌い、飛鳥が『迷走Mind』を歌う。私が『arcadia』を歌うと加蓮は『99 Nights』歌ってから『ふるふるフューチャー☆』を奈緒に歌わせた。律儀に、というか意地なのかもしれない。奈緒は恥ずかしがりつつも感情を込めてしつかり歌いきった。その様子はまさにアイドルそのもの。可愛かった。加蓮も満足そうだ。

「凜、最後にゆったりしたりしたやつお願い」

退出時間も近づいてきた頃、城ヶ崎美嘉の『TOKIMEKIエスカレート』を歌い終えた加蓮が言った。

「いいけど……私で終わりになっちゃうよ。いいの？」

「またみんな集まればいいじゃないですか！ というワケで、はいどうぞ！」

裕子にマイクを渡されたので曲を入れる。

モニターに『散歩道くさんぼみちく』と表示されると加蓮がマイク越しに訊いてきた。

「それはなんの歌なの？」

「あれ……歌ったことなかったっけ」

奈緒と加蓮が首を横に振った。子どもの頃から慣れ親しんだ曲だからみんなの前でも歌ったことがあったと思っただけでなかったようだ。

「で、どういう歌なの？」

本当なら、これは犬の散歩の歌だとか、この曲が入ってるアルバム全体が犬をテーマにしているジャケットも子犬の写真で、しかもさまざまな犬種に着せ替え可能な愛犬家仕様だとか、そんなことを言いたかった。しかしもう前奏が始まっている。すべてを抑えて、

「犬の散歩の歌」

加蓮の質問にそう短く答え、私は歌った。ゆったりしたテンポの、愛犬と飼い主との仲睦まじいひとときを描いた歌を。

*

先日のこともあるからと強情を張るので昼食は加蓮のおごりということになった。

「クーポン持ってたし、ちょうどよかったかもね」

かわりと言ってはなんだがお店のチョイスを一任したところ加蓮が選んだのは王道ハンバーガーチェーン、＼マック＼こと『マックロナルド』だった。ここならおごられる側からしても気兼ねせず済む。割引きできるといふならなおさらだ。

「高校生に＼ラッキーマック＼は少しハードル高いけどね」

チーズバーガー、ポテト、コーラ、フィギュアが入った箱の載ったトレーをテーブルに置いて席につく。

「凜気にしすぎ。いまだき珍しいことでもないでしょ」

「ボクの知人にも集めてる人がいるけど、その人は二十歳ハタチだよ。趣味に貴賤なんてものはナンセンスさ」

「そーそー、飛鳥の言うとおりよ。現にここに、ラッキーセットをご所望のJKがひとりいるんだから」

正面向かいに座る奈緒をつまんだポテトで指しながら加蓮が言った。加蓮のトレーにだけポテトが2袋載っている。単品で追加したようだ。しかもLサイズ。

「いやー、凜も加蓮もサンキュな」

私たちの分と自分の分、『フルポッコちゃん七変化シリーズ（全4種）』なる名前のつけられた3つの箱をトレー脇に寄せてから奈緒が両手を合わせて言った。

「はいはい。おかげでポテトを追加注文しなきゃ満足できない加蓮ちゃんに特に感謝してね」

「へいへい。ありがと加蓮様。これをお納めくださいいな」

お礼にと自分のポテトをひとつ加蓮に啜えさせる。

「それも私のおごりだけだね。まっ、よかろう。裕子、こっちこっち」

遅れて裕子もトレーを持ってやって来た。

「いただきます加蓮ちゃん！」

「どーぞどーぞ」

おごりの主に一言入れてから裕子がビーフパティ2枚重ねのバーガーにかぶりつく。清々しい。いい食べっぷりだ。つられるように私たちも食べ始める。

「んー！ この期待を越えも裏切りもしないレベルのバーガーとポテト、そのあと飲む安っぽいコーラの味……いいわ〜」

「褒めてんのか、それ？」

「人は必ずしも至高を求めるとは限らない。親しみやすさは孤高の美を駆逐する。それがボクたちの住む御しがたきセカイ……フツ、社会つてやつさ」

冷笑し、飛鳥がフィツシユバーガーをかじりコーラを飲む。なんだかんだと言いつつも悪くない顔をしている。

「しかし……この薄いコーラだけはいただけない。こればかりははつきりと『ウツデイズ』のほうに軍配が上がる」

「あー、あそこはちゃんとした、っていうのもヘンだけど普通のコーラよねー。ポテトもこっちはホクホク柔らかい、あつちはカリカリ……甲乙つけがたいんだわ、これが」

「おまえの判断基準はポテトか」

つまんだポテトをフニャフニャ揺らしながら奈緒が言った。

「ナゲツトもいいけどアタシポテトだけは何個でも食べられる。いつもそんな気がするの」

「本当に何個も食べてたら体重がとんでもないことになるぞ」

「子どもの頃食べられなかった分を今食べてるからいいのよ。奈緒のが油断大敵よ。フィギュア目当てに何度も通ってるんだから」

「へへっ、そのへんは今回のコレでコンプリートだから問題ないんだな。『子どもの頃食べられなかったから』なんて言ってる加蓮のほうがよっほどだったの。そんなに食べる必要あるんなら、あたしナゲットおごってやるよ」

「あらいいの？　ありがと。じゃ、どうせならアタシも買ってみんなで分けるとしますか。行くよ」

そう勝手に決めるとふたりはカウンターに向かった。

「さあつ、モリモリ食べ野菜ー」

ご機嫌なのか柄にもない駄洒落を発し、加蓮がテーブルの真ん中のスペースに新たにトレーを置いた。

「お、おお……!?!」

「ちよっ……これは……ずいぶんとまた豪勢な……」

それを見て声を漏らす裕子と飛鳥。私は呆れて声も出なかった。

トレーの上に載っているのは……15ピース入りのチキンナゲットが2箱。さらになぜかまたポテト。それも大量。当然野菜など見当たらない。

「ポテトに期間限定でメガサイズがあるのを加蓮が見つけてな……」

まるでおもちゃをねだる子どもに根負けした父親のように奈緒がため息まじりに言った。実際におもちゃを欲しがったのは奈緒のはずだが。

「すごいでしょ！」サイズふたつ分なんだって！ もちろんこれもアタシのおごりだから気にせずどうぞ」

ウキウキ顔で加蓮がさつそくそこからポテトをつまむ。たくさんおごつてくれるのはありがたいが、この炭水化物のオンパレードを食べきれというのか。ナゲットだけでもひとりあたり6ピースだというのに……。

「デリーシャス！ 奈緒ちゃんにも感謝ですね！」

一分の憂いもなさそうに裕子がナゲットをひよいひよい食べていく。この子はきつとカロリーという名の悪魔を見たことがないに違いない。

「さあさあ、凜と飛鳥も食べた食べた」

「はあ……お風呂上がりで絶望しても知らないよ」

冷ややかに言いながらもナゲットもポテトもありがたくいただく。

「言いつつバツチり食べてるじゃん……」

奈緒にそう言われた。しかし勘違いしないでほしいというものだ。

「私は、みんなより背が高いから」

そう。背が高い、ということとはエネルギーの消費量も多いということ。つまり私に限ってはふたたび必要な量のカロリーを摂っているにすぎない、はず。母さんにだって「気持ちわかるけどもつと食venaさい」と言われた私だ。むしろもう少し身体に脂肪をつけたほうがちよūdいなのだ。主に胸とか。

「……なるほど。じゃあ、あたしもみんなより髪が長いぶん平気だよな……」

そう言つて奈緒もナゲットとポテトにおずおずと手を出す。確かにそのポリュームでキューティクルを保つには多くのエネルギーを必要とするのだろう。たぶん。

「アタシはさつきも言つたとおりだし、だから気にする必要ないし？ ほら飛鳥もじゃんじゃんいきなさい」

「え……ボクはもう十分なんだが……」

加蓮は言わずもがな。要するにみんなバクバク食べるための言い訳が欲しいのだ。私のは言い訳じゃなく事実だ。

「いっぱい食venaきや大きくなれないわよ！ 背も胸も！」

「別に要らないよ。背はともかくとして……」

ぶつきらばうに飛鳥が返す。

「まあそれならいいけどさ。横に大きくなるだけかもしれないしね。それなら誰かさんみたいに背にしか栄養いってないほうがマシよね。ウフフツ」

「ちよ、加蓮……!」

——ん……?

今、何者かから決闘の申し出を受けたような気がする。いったいどこの誰だ。私の勘ではポテトの妖精かミントの使者のどちらかだと思われる。

「加蓮今なんか言った?」

私は、北条加蓮は世を忍ぶ仮の姿、その正体はポテトの妖精に尋ねてみた。

「ん〜ん〜? なんにも〜?」

どうやら違うらしい。今度はミントの使者に訊いてみよう。

「ミントの使者、いる?」

『あら凜ちゃん、わたくしをお呼びになつて?』

私の呼びかけに応じて『フローズン・ティアー』は世を忍ぶ仮の姿、その正体はミントの使者が現れた。さつきと同じことを尋ねてみる。

「さつきなんか言った?」

『いいえ呼んでおりませんわ。わたくしずっと美味しいミントティーの淹れかたについて考えておりましたのよ。オホホ』

こつちも違うらしい。ちなみにこのミントの使者、声に加蓮にそっくりである。

「そう……忙しいところごめんね。もういいよ」

『あらそうですの。それでは、バイバイですわ〜』

そう言つてミントの使者は消えた。

「……………満足か？ 新人お笑いコンビ『バラとミント』のおふたりさん」

間を置いて奈緒が言つた。

「お嬢様は「バイバイですわ」なんて言わないと思う。まだキャラ作りが甘い。65点」

「あちゃー、確かに最後気抜いたわ。今後の課題だね」

「ケンカかと思つたらその息の合いよう……………なんなんだキミたちは。なにがしたい」

飛鳥が怪訝な表情で見ている。正直なところ私もよくわからない。ひとつだけ言えるのは『バラとミント』は奈緒をいたずらに困惑させるために結成されたユニットだということだ。つまり目的は果たされた。でも失言は失言なので加蓮にはあとでコンビニでガムでも追加でござらせよう。さて、『バラとミント』、一時解散。

「んん〜！ ナゲットのソース、ポテトにつけてもデリイェーシャス！」

そしてすべてをよそに、裕子はひとりポテトに舌鼓を打っていた。前言撤回。彼女はカロリーという悪魔を知らないんじゃない。悪魔に立ち向かう、恐れ知らずの勇士^{ウォーリアー}だったのだ。

——なにを脳内で言ってるんだ私は。

*

大満足とは今の私たちのことをいう。もうお腹いっぱいだ。食後のコーヒーも飲む気になれない。

「さーで、これで明日からの学校生活に必要なエネルギーはバッチリ摂れたね〜」
組んだ手を前に伸ばして加蓮がひと心地つく。

「つたく、あの騒ぎで体調崩したと思つたら2日後には復活して、そのまた2日後に歌うわ食べるわふざけるわ……元氣過ぎだろ」

「昔の私じゃないってことよ。実際、今は『この子』がいるからね」

そう言うと、『この子』がふたたび現れる。加蓮のスタンド——『フローズン・テイアー』だ。もうミントの使者ではない。

「この子スゴいんだから。能力をほんの少し、かるく使うといい感じに涼しい風が出るのよ。今年からはクーラーいらすね。あはは」

「スタンドをクーラーの上位互換機扱いすんなよ」

奈緒のツツコミが入る。クーラーなんて目じやなくらい、その子が凄いのは十分知っている。暴走状態のときに一戦交えて殺されかけた私が言うんだから間違いない。

「ね〜夏休みなにしよつか?」

「気早すぎ」
「ゴールデンウィーク終わったばっかだぞ」

早くも夏休みの計画を立てようとする加蓮に今度は奈緒とふたりでツツコミを入れ

る。

「まあ期末どころか中間テストもまだだもんねー。ていうかまず来週よね来週。あー、めんどくさいなあ、『職場体験』」

「けだるそうに発した加蓮のこの言葉に飛鳥が反応した。

「そういうえば高等部は1週間後から職場体験学習だそうだね。学園という安全網セーフティネットを飛び越えて未開の荒野へ……とまではいかないが新たな地平へ一步を踏み出すわけだ。まあ、とはいえしよせん柵の向こう側も予定調和の生い茂る平穏な草原……さしずめ放牧地帯といったところだが。キミたちはいったい何処の牧草を食はみに往くんさい？」

「は、はみ………は？」

裕子の頭上に大きな『？』マークが浮かんだ。

「………どこの職場にお邪魔するのか教えてくれないかな」

飛鳥の言葉の迷路は場合によってはあっさり飛び越えられることがあるらしい。

「私は果樹園です。さいきつくぱわーで園中の果物の成長を促して豊作にしてみせますよ。今から腕が鳴ります！ 3人はどこへ行くんです？」

「あ、アタシ……」

「あ、あた……へ？」

アタシココ。加蓮の直裁な返答に裕子が再度固まった。

「ここよ、ここ。このマックが私の職場体験学習の働き先でーす」

「おまえ働き先で堂々とめんどくさいとか言ってるなよ……」

「いっぱい注文したんだし、そのへんは差し引きなしってことで。奈緒はどこ行くの？
そういうええば聞いてなかったけど」

「あたしは、あれだ……喫茶店だよ、喫茶店。普通の」

「どことなく不自然に奈緒が答える。働いてるところを加蓮に見に来られるんじゃないかと警戒してるように見えた。」

「えーそうなの？ どこどこ？ この喫茶店よ？ アタシ絶対見に行くー」

「だああっ!? 来なくていいよ！ ったく……言うと思つたよ……」

バイト先に様子を見に行こうとする親を必死で阻止する子どものように奈緒が慌てる。案の定私の予想は当たっていた。

「そもそもみんな働いてるんだから来れないだろ」

「そこは、なんとかするわよ。1日だけ早退するとかしてさ」

「すんな。真面目に働け」

「ちえー……凜は？ どこにしたの？」

流れで加蓮が尋ねてくる。私は――

「私は……幼稚園」

「……………うそん」

「なにその反応」

嘘じゃない。嘘をついてどうする。

「へえ。いや、似合うんじゃないか？ 幼稚園の先生」

「奈緒それ本気で言ってるの？ 凜が？ ようちえんの？ せんせい？ こんな

長身のクールビューティーが先生だったら園児は怖がるわ」

けなしてるのか褒めてるのか。加蓮は私の選択をよほど意外に思ったらしい。

「いや確かに素っ気ないけどさ。花屋の娘だから接客で人と関わる機会多いし、花の世話してるし、ハナコの面倒だって見てるじゃん？ それ考えたら、あたしはけっこう向いてると思うんだけど」

「家業な以上花屋はまだわかるけど……凜に向いてるって言ったらOLとかじゃない？

スーツ着こなして、バリバリ働いて、意見があつたら上司にも遠慮なしにバシツと言っちゃったりしてさ」

「あー、そっちも似合うなー。後輩の女子社員からモテてそうだな」

「わかるー！ 絶対社内で大勢力築いてるわ。でも、それでもやつぱりうまくいかないこともあつて、ヘコむんだけどまわりは気づいてくれない。そんななか、ある日ほとんど喋ったことのない、仕事は出来るけど無口な同僚に不器用ながら励まされる……」

凜の傷心にこの人は気づいてたんだね。それをきっかけに親しくなるふたり……いつしか凜の心に特別な感情が芽生えて……」

「……どこまで勝手にシミュレートしてんの？」

「ゴメンゴメン。いやー、凜ちゃんの未来予想図は輝いてるねー」

そう言つて屈託のない笑顔を見せる加蓮。なぜ進路だけでなく恋路までシミュレートされなければいけないんだ。

「なんにしても、いたいけな子どもたちに気に入られるお姉さんぶりを見せてる凜の姿が想像つかないのよね。それに悩んで庭の隅つこのほうでうちひしがれてる画なら浮かぶけど」

ミント娘の口撃はとどまることを知らない。スタンドを身につけてからというものエネルギーに溢れすぎている。ここは一度、鼻を明かしてやるべきかもしれない。

「そんなに言うなら……賭けてみる？」

「えっ……？」

加蓮の笑顔が曇つた。その隙を突くように私はつぶけた。

「1週間後、5月23日から27日の職場体験学習の間、私が笑顔の園児たちと仲良くしてるところの写真を園側の許可をもらつて、撮る。それを加蓮に送ったら私の勝ち。出来なければ負け。どう？」

毅然と加蓮の瞳を見つめて一気に言った。

「へえ〜……で？ 勝つたらなにがあるのかな？ 次はドーナツでもおごる？」

加蓮の問いに私は、力強く首を横に振って答える。そしてさらに力を込めて、はつきりと言ってやった。

「負けたほうは……勝ったほうに、『ロツドリア』で好きなメニューをなんでもおごるっ！」

「なっ……」

「なななっ……!!」

「なんだってえええ〜ッ?!?!? ……って、またハンバーガーじゃねえか」

飛鳥、裕子、そして奈緒が、思わず驚愕の声を上げ、余計なツツコミを入れる。

「凜……アンタ、マジで言ってるの？」

冷ややかに、しかし捕食者のような、獲物をしかと見定めるような目で加蓮が言った。

「……マジだけど？」

負けじと私も見つめ返す。

ロツドリア。このお店もマック、ウツデイ同様ハンバーガー店である。しかし、それらと圧倒的に異なる点がある……それは他のファーストフード店と違い、ハンバーガーを提供する高級レストランというところである。なので値段は当然高い。シェイクひ

とつ2000円近くすると聞いたことがある。尋常ならざる価格設定だ。メインのバーガーともなると特に高いものはひとつ5000円を越えるものもあるらしい。いったいどんな食材を使うとそんなに高くなるのか。考えるだけで今は胃がもたれる。なんにせよセットメニューひとつ注文するだけで福沢諭吉が財布のなかから東へ西へ旅立ちかねない。負けたほうは当然なにもできない状況に陥ることは必至。それでも私は加蓮をギャフンと言わせたい。

「……逃げないですよ？」

「はっ、当たり前前。振り返ちにしてアンタの目の前で満面の笑みでシェイクチューチュー啜ってやるわよ」

私と加蓮、ぶつかり合った視線と視線が火花を散らす。まるで剣豪同士の鏝迫り合いのように……。

「……奈緒さん。なんなんだい、このショーは」

『バラとミント』が再結成したんだろ。気をつける。しつかり見ると時間をムダにするぞ」

「な、なるほど……では面白半分に見るとしよう」

「面白全部だ」

「……そうかい……理解った」

「もつと言えば裕子を見習え」

「え——」

「デリーイーシャスツ！」

——こうして、職場体験学習を利用した私と加蓮による高級ハンバーガーを賭けた戦いが、その場の勢いで幕を開けた。のちにこの勝負は誰からも語り継がれることなく、夏休みがはじまる頃にはみんなの頭からすっかり忘れ去られるのであった——。

……またなにを脳内で言ってるんだ私は。

(つづく)

第11話『S・O・S　　ふたりはアイドル』

それは私にとってスタンドの次に思いがけない出会いだった。

職場体験学習初日の朝。緊張のなか足を踏み入れた職員室には、およそ先生には見えないふたりの少女が園長先生たちと談笑していた。その横にはもうひとり、スーツ姿の男性もいる。

「あつ、おはよう。この子、渋谷凜さん。体験学習で来た美城の生徒さんね。んで、渋谷さん、実はこのふたりも体験で先生やんのよ。学校のアレじゃなくて仕事でだけどね。びつくりしちゃうよね。知ってる……よね？　このふたり」

少し聴き取りにくいしやがれ声で園長の夏軒久慈郎先生から、唐突に紹介されたふたりの女の子……。私はその子たちの名前を知っていた。なぜなら――

「いえ〜い！　城ヶ崎莉嘉だよ☆　よろしくねつ、凜ちゃん！」

「ハイハイ、あんまはしやがないの。アタシは城ヶ崎美嘉。騒がしくなっちゃうかもしれないけど、これからヨロシク★」

ふたりは、カリスマアイドル姉妹だったのだから――。

「美城の生徒さん、どうぞよろしくお願いしますね。あつ、申し遅れました。私こういう者です」

姉妹の隣にいたスーツ姿の男の人が名刺を差し出してきた。幼稚園の先生でスーツ？　と思っていたが、なるほど。この人は先生じゃなく姉妹のプロデューサーだったのだ。でもそれにしても……

「あの、私、このふたりもいっしょだなんて、なにも訊いてないんですけど……」
思ってた疑問を素直に口にしてみた。

「ああ、申し訳ありません。なにぶん企画が急に予定変更になった経緯がありました……」

「学生向けの雑誌の職業体験特集で、アタシたちが幼稚園の先生を体験するって企画なんだけど、本来行くはずだった幼稚園でインフルエンザが流行っちゃってね……」

途中から城ヶ崎姉妹の姉の方、美嘉がいきさつをつづけた。

「で、企画の担当さんが慌てて他の幼稚園にアポ取って、土壇場で引き受けてくれたのがここだったってワケ」

「今年ウチ来る生徒は渋谷さんだけだったからねえ。もう2〜3人なら、増えても別に構わねえから、来てもらったんだよ。びつくりしたでしょ？　学園側の許可はちゃんともらってるよ。きっとサプライズで言わなかったんじゃない？　生徒が喜ぶと思って、

「さ」

「サプライズ、ねえ……。」

学校行事のサプライズゲストとしてはふたりは刺激が強すぎる。特に姉の美嘉は女子学生から凄まじい人気があり、当然うちの生徒にだってファンが大勢いる。体験学習にここを選んだ生徒の面子次第では、ちよつとした事件になっていたかもしれない。

「申し訳ありません。なにぶん時間がなかったものでして……」

考え事をする間、怪訝そうな顔になっていたのかもしれない、プロデューサーさんにペこペこ頭を下げられた。カリスマギヤル姉妹のプロデューサーにしては低姿勢過ぎるほど丁寧な人だ。

「いや、別にいいんです。突然だったから驚きましたけど……」

「まあそりや仕方ないよね。まあ仲良くやってちょうだいよ。そろそろ時間だから、教室行こうか」

マイペースに話を進めながら歩き始める園長先生に少し面食らいながら、姉妹とプロデューサーさんともども、私も園長先生のあとに続いて教室へと向かった。

予期せぬ出来事で胸のなかにあつた体験学習への緊張は消えていた。

*

教室に入ると待ちかまえていた無邪気な視線たちは一瞬だけ私に降り注いだあと、す

ぐふたりに釘付けになった。

「りかちゃん!? りかちゃんじゃんっ!! なんでなんでなんで!?」

「ぎゃああああああ!! みかちゃんりかちゃん!? ふあみりあついん”だああああ

!!」

怒濤の唸りをあげる園児たちでさっそく教室内は大騒ぎ。『ファミリアアツイン』のふたりが突然現れたのだから当然だ。

女子中・高生アイドル城ヶ崎美嘉・莉嘉の姉妹からなるユニット『ファミリアアツイン』は、もともとそれぞれ活動していたユニット『L i P P S』、『凸レ^{デコ}ーション』での人気に加えて、単なる短期ものの企画にとどまらない、姉妹による初のユニット活動ということも手伝ってこのように幼稚園児も狂喜乱舞するほどの絶大な人気を誇るアイドルデユオだ。

「はーい、みんなー! 気持ちわかるけど、騒ぐと美嘉ちゃんたちが困っちゃうから静かにしましょうねー」

『静かにしないとダメウサ〜!』

「は〜い!!」

そう言っつて右手にはめられたウサギの人形を操り、狂乱状態の園児たちを直ちにまとめ静かにさせたのは、髪をサイドテールに束ね、ピンクのエプロンを付けた先生。胸の

ネームプレートには『ありせんせい』と書かれてあった。

「よし。みんな、今日からね、金曜まで新しい先生が来ることになったから、言うことちゃんと聞いて、仲良くするんだよ……じゃ、自己紹介、お願いね」

園長先生の言うとおりに、園児たちの前で横並びになった私たち3人はそれぞれ自己紹介をした。

「やつほー！ 城ヶ崎莉嘉だよー☆ ザツシのお仕事でお姉ちゃんと先生やつちやうよー！ いっしょに遊ぼうねー！」

「はぁーい！」

「りかちゃんよろしくー！」

園児たちの元気な返事でふたたび教室内が活気づく。

「城ヶ崎美嘉だよー。みんな、金曜日までヨロシク★」

「みかちゃんキレイー！」

「カリスマ！」

「オアアッ！」

またしても声は大きくなっていく。

「美城学園から来た渋谷凜……私も今日から金曜日まで先生だから、みんなよろしくね」
「はーい」

「ほーい」

「ふくん」

パチ、パチ……パチ。

途端に、まばらな拍手、まばらな反応。そりや人気絶頂のアイドルのあとに単なる学生じゃ仕方ない。仕方ない……。

「はあくい、それじゃあみんなで仲良くおうたを歌いましょうね〜！ 先生たちもいっしょに〜！」

『ありさせんせい』がそう言うと、今まで彼女の隣で微笑みを絶やさずに立っていた『くらりすせんせい』という、胸元に綺麗な赤い石のブローチを付けた金髪の先生が静かにオルガンに向かう。

備え付けの椅子に座り木の蓋を開けると、そこから聞こえてきたのは懐かしい、童謡『アイアイ』のメロディ。

「あいあい〜！」

「あいあいっ〜！」

「霊長類だね〜♪」

素朴に歌う園児たち。時代が流れても子どもは変わらないな、なんて大人からすれば生意気そうなことを思いながら私たち3人も園児に混ざり歌った。

本人たちは軽く歌ったつもりかもしれないけれど、横から聴こえてくるふたりのアイドルの歌声はやはり綺麗というか、よく通っていて巧かった。

*

歌を歌ったあとは外で遊ぶ時間だ。砂場、ジャングルジム、小さなすべり台などの遊具が設置された、狭くはないが決して広いともいえない庭で園児たちがはしゃいでいる。

「はいはいはいはいっ、よいしょー！」

「はえー！ りかちゃんはえー！」

城ヶ崎莉嘉がジャングルジムを素早く登ってみせ、頂上で男児たちから拍手喝采を浴びている。

「さあみんな、いくよー！」

「はーい！ T・O・K！ ト・キ・メ・キ！」

いっぽう美嘉はリクエストに応じて自身のソロデビュー曲『T O K I M E K I エスカレート』の振り付けを女兒たちに教えていた。みんな眩しいばかりの笑顔を振りまいている。そんな光景を姉妹のプロデューサーが時折カメラを構えて写真を撮りつつも、優しく見守っていた――。

そして私は、小さな花壇のチューリップに水やりをしている。ひとりで。

「手伝ってくれる子がいたら来てね」なんて半端なことは子どもに言うべきではなかった。見事に誰も来ない。男の子も女の子も。みんな姉妹と遊ぶのに夢中だ。私のそばにはチューリップの花だけ。赤・白・黄、どれも綺麗だ。原色調で、はつきりした力強い色。チューリップ……『Tulip』。美嘉の所属ユニット、LIPPSのデビュー曲。あのシングルを持っていない女子高生なんてきつとほとんどいないだろう。かくいう私も奈緒と買いに行った。あまりアイドルに詳しい方ではないけどカッコいい曲だと思った。明日にでもCDにサインしてもらおうかな……でもファンとか別にそういうわけじゃないし……ミーハーっぽいし……うーん……。

そんな空回りをする私の頭が、少しずつ大きくなっていく足音を耳ぎとくキャッチした。

チューリップの花から顔を上げると、ふたりの男児が目の前にいた。

「凜先生、僕らもお手伝いしますよ」

はきはきと声をかけてきたのはツリ目の細い身体の男の子だった。スモックに付けられた名札に『葉加瀬光流人』とあった。

「じょうろ、もつてくるね〜」

その葉加瀬くんの隣でおつとりと言ったのは、ふくよかな体型をした『郷田天瑠』く
んという男の子。ふたりとも、危うくかなが振つてなかったら読めないところだった。

不覚にも「いまどきの名前だな」なんて思ってしまった。

「おつ、アマルにコルド、りん先生のお手伝いか、感心感心」

花壇の脇に並ぶ、園児たちが育てているミニトマトのプランターをひとつひとつ眺めていた園長先生が少し茶化すようなニュアンスで言った。

「さつきから誰も凜さんを手伝おうとしませんからね。みんな美嘉さんと莉嘉さんに夢中なので、ここは常に場の状況を冷静に把握できる僕が一肌脱ぐしかないでしょう」

「そんなこと言っちゃって。ほんとはアマルと同じで身体動かすのが得意じゃないからこつち来たんだろ？」

ぎくり。そんな音が聞こえてきそうなほどはつきりと焦り顔になるコルドくん。

「ち、違いますよ。みんなファミリアツインのお二人ばかりを気にしていて、誰も凜先生を気にかけていない。大衆はいつも陽の当たる美しい温かな場所にしか目を向けようとせず、陰日向でひたむきに頑張る人たちのことなんてまるで見ようもしない。僕にはそれが菌痒くて、情けなくて、ゆえにお手伝いに来たのです。それこそが善の道、仏の道にかなっていると思つたから来たのです。園長先生、まるで僕が逃避という選択を採つた結果ここに来たとまわりに誤解されるような言い方はやめていただきたい。教育者の立場であるあなたが、幼稚園の長という立場のあなたがそんな誤つたレッテルを園児に貼りつけてしまつて良いのですか？ どうなのですか、園長先生。僕としてはあな

たの、教育者としての存念をお伺いしたいところですね。どうなんです？ 園長先生も
とい夏軒久慈郎さん」

園長先生の発言に対して早口でまくし立てるコルドくん。どうやらだいがぶこまつしやくれた子のようだ。

「……運動会サボったのはどこの誰だったか覚えてるかな、コルドくん？」

「そ、それは……………」

しかし、そう返してきた園長先生の言葉には二の句が継げずコルドくんは黙ってしま
う。どうやら運動が大の苦手なのは凶星のようだ。

「サボるといふのは、逃避にあたる行為だと園長先生は思うよ？ 君はそうやって、いち
いち小賢さかしいことをくどくどと喋って逃避を選んだこと自体から逃避しようとするん
だね。そういう人を、世間では卑怯者というのだよ。アマルはビリつけだったけどど
ちやんと参加してたよ？ 彼は苦手なことから逃げずに、立ち向かうという選択をした
んだ。素敵だねえ。とても素敵でダンディな少年じゃないか。たとえダメダメでも逃
げずに立ち向かったアマルの方が、君の言う仏の道に沿っていると園長先生は、園長先
生もとい夏軒久慈郎は思うなあ。ところで、運動会をサボったのは誰だったか思い出せ
るかい。え？ 葉加瀬光流人くん？」

追い打ちをかける園長先生もとい夏軒久慈郎さん。塩気の効いたハスキーボイスに

よつて、ねちねちした言い回しから生じるはずの陰險なニュアンスが相殺されて小気味よい。もつともコルドくんは全然そう思つてはいないだらうけど。

「……つ、園長先生とあろうお方が質問を質問で返し、あまつさえ話題の転換を謀ろうとは、ずいぶん姑息なやり口ですね。そうですね、それが大人のやり口ですか。かつてあつたはずの純粹無垢な眼差しを失い、無味乾燥の偏屈人間と化した大人のスタイルですか。果てなき夢を追つて大空を行き交う鳥のように自由闊達だつたあの日のあなたはどこにいったのです。ご両親はさぞお嘆きになつてのことでしょうね」

しかしコルドくんも負けじと反撃に出る。そこからはもう単なる罵り合いだった。

「ぐぬぬっ……うっ……だ、黙りなさい！ 大人にはね……社会に出ると、大人には大人の事情つていうのがあるんだよ」

「おつ、出ましたね出ましたよ、大人の事情」が。それこそ僕が最も忌み嫌う姑息な言い訳のひとつだ。大人はすぐそうやつて無闇矢鱈にその胡乱うろんな言葉をまるで免罪符のように振りかざし問題の解決を後手へ後手へと追いやつて自分で自分を濃霧の立ち込める廃墟と化した街の外れにポツンと佇む一軒家に取り残された錆びついた鳥籠の中に閉じこめるようなまねをする。そうやつて心のセルフポートレートを虚飾という名の古びた灰色のクーピーで塗り固めていつていつたいあとになが残つたというのです？ その毎晩辛子レンコンを肴さかなに呑んだ貧乏くさいワンカップに含まれるアルコー

ルによって日々なにげなく蹂躪じゅうりんされていった喉から発される聴き取りにくいしやがれ声だけじゃないですか。違いますか?」

「うるせえっ! 子どもが知ったふうな口をきくんじゃあない! 君に俺のなにが分かる! 君だつて、いつかはそうなるかも知れないんだぞ。くそっ、俺だつて……あのときああしてれば、俺だつてなあ……」

「過去を悔いて嘆息しておられる、おほほ。〃たんそく〃はその短い御御足おみあしだけにしてもらいたいものですなあ。おほほ」

「ううう……うあああああああああああつっ!!」

園長先生の渴いた哀しい叫びが空に散つて消えていく。

子どもの無邪気さとは、ときに恐ろしいものだ。聞くともなしにふたりのやり取りを聞きながら私はそう思った。

「りん先生。りん先生は、なに色が好き?」

隣でいっしょに花に水をやっているアマルくんが言った。

「うーん……私は、蒼が好きかな」

「そうなんだー。あおいチューリップは、ここにはないや。ざんねんだねえ」

「そうだね」

「あつ! りん先生! うえ見て、うえ!」

「上……?」

そう言われたので頭を上げた。雲ひとつない、よく晴れた空が澄み渡っていた。

「でつかい、あおがあるよ。やったね!」

「……そうだね。アマルくんの好きな色は?」

「あい!」

「え、あい……?」

一瞬なんのことかわからなかったがなんてことはない。『藍色』のことか。

「藍色ね……ってことは、アマルくんは、夜の空が好き?」

「うん、好き! 星も好き! いつかうちゆうに、星をとりにいくんだ!」

「それが夢?」

「そうだよ!」

「そつか。叶うといいね」

「うんっ!!」

満面の笑みのアマルくんが大きく頷く。そんな感じでふたりでチューリップに水をやった。

*

「はい……じゃあみんな、作ってくれた人たちに感謝しようね……はい、いただきます

……」

「いただきます!!」

すっかり意気消沈した園長先生の号令のもと、園児たちが元気にいただきますを言って給食を食べ始めた。号令をかけると、教室を私たちに任せて園長先生は職員室へ戻っていった。昼食は向こうでとるのだろう。メニューはわからないがいつもより塩辛い味つけになっていないことを私は祈った。

「あゝっ! まだ一日目だけど結構疲れるね。仕事柄、体力には自信ある方なんだけど」
向かいの机に座った美嘉が卵焼きを食べながら言った。

「ずっとダンス踊ってたもんね、美嘉さん」

「呼び捨てでいいよ。年そんなに変わらないんだし。アタシも凜って呼ぶから」

「そう? うん……わかった」

「凜ちゃんは疲れてない? アタシはみんなとジャングルジム登ったり鬼ごっこしたりでお腹ペコペコ。いやーサツコンのコードモたちの元気はとどまることを知らないね」
☆☆

「アンタもまだまだコードモでしょっ★」

デコピンのまねをする姉に、八重歯を見せて笑う妹。公私共に姉妹仲は良好のようだ。

「渋谷さん、ちよつと失礼」

不意に私の背後に立ちカメラを構えたプロデューサーが、ふたりに向かってシャッターを切る。

「……雑誌に載せる用の写真ですか？」

「ええ。こういうデリケートな現場は必要最低限の人数が望ましいので、カメラマンは私が兼任することに」

「……プロデューサーっていうのも、大変なんですネ」

「ははは。でもやりがいだってありますよ。それに写真は自分の趣味でもあるので負担の内に入りませんよ」

「本職じゃないから写真の出来映えがちよつと不安だけどね★」

冗談を言う美嘉に、プロデューサーがカメラを降ろし、真剣な目でふたりを見つめる。「確かにね。あくまで趣味に過ぎないよ……けど、君たちは僕の担当する自慢のアイドルだ。君たちが貶められるような写真は絶対に撮らないよう全力でやってる。本当だよ」

「なつ、ちよつ……冗談だから！ 信用してるからっ！ もう、そんなマジにならないですよ。ハズいなあ……」

そう言いながら目をそらす美嘉が、心なしか嬉しそうに見える。

「だいじょーぶだよPくん！ アタシもお姉ちゃんも、Pくんのこと信用してるし、大好きだよっ☆」

「ちよ、莉嘉……」

「ああ、僕もふたりが大好きだ!!」

「もうっ！ 莉嘉もプロデューサーも、おっきい声でハズいこと言わなっ！」

はにかんだ笑顔で美嘉が叫ぶ。

「ぼくはカレーパンが好きい！」

「あたしはメロンパン！」

好きという言葉に反応して、まわりの園児たちが思い思いに好きな食べ物を言い出した。

「とうもろこし！」

「うどん！」

「ごもくごはん！」

「うずらのたまご！」

「あんかけやきそば！」

「いも」

子どもたちから発せられるたくさんの美味しい響きをおかずに一品ちよい足しして、賑

やかな時間が過ぎていった。

*

お昼が終わったら、今度は帰宅前の歌の時間。園児たちは食後も元気いっぱい声を上げて歌っている。一部、うとうととしている子もいるけど。

「おーりゅにーでいずらーぶ♪」

クラリス先生のオルガンに導かれて、たどたどしく歌われるのはビートルズの『All You Need Is Love』。これまた懐かしい、親が歌って聞かせたのかテレビで聞いたか覚えてはいないが、小さい、本当に小さい頃に耳にした覚えのあるサビのフレーズ。それにしても朝の『アイアイ』とはまるつきり関連性のない楽曲。おそらく情操教育の一環というやつだろう。

しかし周囲の歌声に改めて耳を傾けてみると、城ヶ崎姉妹はもちろんのこと、ふたりの先生のそれもものすごくレベルが高いことに気づかされる。亜里沙先生は落ち着きなく動き回ろうとする子をあやしなから、自らもしつかりと歌っている。優しいけれど、力強く芯のある声。一方のクラリス先生はオルガンを弾きながらも、淀みとか雑音とか、そういったものを微塵も感じさせない、どこにいても歌えばすぐに居場所がわかりそうなほどの透き通った声を響かせていた。ふたりとも職業上歌の心得があるとか、明らかにそういったレベルを一段も二段も越えているように私には思えた。

*

「ばいばーい、また明日ねー☆」

そんなこんなで午後3時。園児たちが送迎用のバスに乗り込み帰路につく。運転手は園長先生。

正面にポップな字体で『てんしのすずようちえん』と書かれたバスは、快晴の空を思わせる眩しいばかりの青色で、両側面の窓のすぐ下には絵本みたいにやたらモコモコした雲が天使の羽のような形になって描かれている。シンブルに抑えつつもファンシーなデザイン。ただ、抜けるような青空のいちばん地面に近い部分が跳ね上がった泥水で曇天に染められていて、晴れのち曇りの空のような不穏な雰囲気醸し出している。

園長先生には日々の洗車をもう少し頑張っていたきたい。

そんなことをぼんやり思いながら、発進するバスを美嘉たちと見えなくなるまで見送って、騒々しい体験学習の1日目が終わった。

(つづく)

第12話 『★』

火曜日と木曜日は、朝の歌の時間のあとはお散歩の時間となつていろいろらしい。

帽子を被り、今か今かと出発を待ちかねている園児たちを一行に並ばせ、先頭に亜里沙^{ありさ}さん、最後尾に城ヶ崎姉妹と彼女たちのプロデューサーが着くと「いつてきます」の大合唱をあとに幼稚園を元氣よく出ていった。木曜日は私とクラリス先生が園児たちを率いることになる。

「さーて、面倒くせえ事務仕事の始まりだあ。ほいじゃ、凜先生にクラリス先生、あとよろしく」

私たちと一緒に園児たちを見送ると園長先生は、だるそうな足取りで職員室の奥へと引つ込んでいった。

私とクラリスさんは午後には園児たちに見せる『赤ずきん』の人形劇の準備を始めた。

用具室で丁寧に保管されている様々な人形の中から赤ずきんに登場するキヤラクター、赤ずきんやおばあさんや獵師、狼の人形を探してみるも、どうしても狼の人形だけ見つからない。

「クラリスさん、狼が見当たらないんですけど……」

困り果ててクラリスさんに尋ねてみると、彼女は細い目をさらに細くして狼人形の置き場所を思い出そうとする。

「ああ、たしかお腹のあたりが少し破れていたのを園長先生が見つけて直してくれたのでしたわ。きつと職員室にあるはず」

「え。園長先生が……直したんですか？」

「そうですよ……ふふふ、意外ですか？」

「……まあ、それは」

格好こそ普通だが、園長先生の顔は正直なところ、だいぶ「アウトロー」な感じだ。なぜ幼稚園の先生になったのかぜひ理由を聞いてみたくなるほど、およそこの仕事に向いてなさそうなくらいの厳いかつい顔。顔だけではない。声にしたって、昨日コルドくんが園長先生をさんざんデイスリ倒したときに言及した通り、荒んだ人生を送ってきたことが容易に想像させられるような酒に焼けたしゃがれ声だし、がに股で若干早歩きで動く様もどことなく荒々しい（もつとも園児たちが園長先生を怖がっている様子はないが）。そんな人が人形のお腹を繕つくろって直してあげた、というのは、人は見た目だけじゃないということを知っては分かっていてもついでに意外に驚いてしまう。

「見た目で誤解されるかもしれませんが、久慈郎さんは純粋で仕事熱心なお方ですよ。」

裁縫だけでなく料理もお上手で。稀にですが、私たちと同じように歌の時間にオルガンを弾くこともありますし」

「そう、なんですか」

確かに園長先生なんだし、立場を考えればそういったことが出来てもなんらおかしくはないが……聞けば聞くほど意外な人だ。

「きつと、迷える子羊を導く守護天使としての務めをしかと果たせるようにと、主は彼をあのような相貌にお創りになったのでしよう……」

守護天使というよりは用心棒と言った方があの人にはしっくり来るような……とは言わないでおいた。そんなことは言わぬが花だ。

「クラリスさんは歌もすごい上手いけど……やっぱり先生になるために練習したんですか？」

「あらあら、それはありがとうございます。そうですね……習って、というのもありますけど、日曜日には隣の聖靴町の教会でシスターとして神に奉仕する身ですから……聖歌を唄うことでより磨かれているのかもしれませんが。凛さんがそう感じてくれたのなら、とても光栄です。歌うことは私にとって、かけがえのない縁のひとつなので……」

遠い目をして話すその声の調子には少し熱がこもっていた。

歌を愛する働きの幼稚園の先生、兼シスター……なんだかすぐそんな肩書だ。心のなかで勝手に感嘆しながらクラリスさんと人形を取りに職員室へ向かった。

*

ガラツ、ガラツ、ガラーツ、と滑りが悪いのか少し途切れがちに大きな音を立てて職員室の扉が開かれた。

クラリスさんの言うとおおり、狼の人形があつた。園長先生の机の隅の方にちよこんと置かれている。

事務仕事を終えたのか、ミニトマトの水やりをしている園長先生が窓の外から見えた。

「園長先生ー、人形、持っていきますよーっ」

「んーっ? あいよーっ」

開け放たれていた窓から園長先生に一言断り、お目当ての狼人形を持っていく。

「あれ……これは?」

人形を手に入り口へと向かう途中、机の上の違う人形に目が留まった。

「あら、ふふ……私の人形ですわ」

はにかんだように笑ってクラリスさんが人形を手を持った。

「教会の子どもたちが私を模して皆で繕い上げてくれた大切な人形です」

見ると白いローブを着たその人形は金髪でにこやかな笑顔を浮かべている女の子だ。「いつか人形劇に出してみたいものですねえ……」

そう言つて人形を元に戻すクラリスさんは慈しみ深い笑顔を浮かべていた。

「亜里沙さんのウサコ、ちゃんは……ないですね」

なんとなく辺りを見渡していてふと思つたことを言つてみる。あの人形も亜里沙さんは大切そうにしていたから机の上に置いてあるのかなと思つたら亜里沙さんの机には見当たらなかつた。

「ウサコちゃんは、亜里沙先生と一緒に出かけ中ですよ。あの子もまた、亜里沙さんにとつて特別な存在のようで。園にいる間は身に付けていない時間の方が少ないくらいで……」

確かに亜里沙さんの人形遣いの腕は見事なもので、腹話術だけでなく、その所作やリアクション、自身との掛け合いを淀みなくやつてのけた。園児たちが皆ちゃんと言うことを聞くのも頷ける、一流芸と呼べるものだった。

園長先生、クラリスさんと亜里沙さん、美嘉と莉嘉、ふたりのプロデューサー……。

みんな、頑張つてる。私はなにを頑張ろう？　なにがやりたいんだろう？　勉強？

うちの手伝い？

いま具体的にじっくりくるものはなにも出てこなかつた。やるべきことを見つけた

この人たちが羨ましい。奈緒や加蓮、裕子や飛鳥はどうだろう？ みんなのやりたいこととって、なんなんだろう？

包み込んでくれるようなクラリスさんの微笑みと、開いた窓から流れてくる風に当てられて、思いがけず切なくなってしまう。外はよく晴れているのに風はけっこう冷たかった。窓の外をふたたび見ると、いつの間にか園長先生は毛皮のコートを羽織って水やりを続けていた。

——『毛皮のコート』……………？

自分自身で思ったことに引つかかる。確かに陽気の割に肌寒い風が吹いてはいる。けどいくらなんでも毛皮のコートを羽織るほどでは、明らかにない。

どうしよう。もしかして私たちが見ていることを見越して満を持して放った園長先生なりの渾身のギャグなんだろうか……………？ しかもよく見ると頭から首にかけてまで毛皮で覆われていた。つまりフードまで被っているわけで……………。

ダメだ、どうすればいいのか私にはわかりかねる。

「クラリスさん……………アレは、笑うかツッコむかした方がいいんですか……………？」

「はい？」

窓の外を指差してクラリスさんに助言を請う。その光景を見て「あら……………？」とクラリスさんも私と同じような反応を見せた。

「……………なんなのでしょね？」

ふたりして窓に近づき、しばし園長先生を凝視した。

それから20秒くらいしてから、ようやく園長先生がこちらを振り返った。

「なんか言えよ！ バカみたいじゃないか！」

そんな感じのことを言う、おちやらけた顔の園長先生が私の頭の中に浮かんでいた。のだが……………

振り返った園長先生の顔は犬だった。

犬みたい、ではない。そのまんま犬だ。

全体的に毛に覆われた顔、黒い鼻、大きな口、頭部の左右手前にピヨコンと出た三角形の耳……。それに、彼は毛皮のコートなど羽織っていないかった。身体が灰色の毛で覆われているのがそう見えただけだった。犬ではなく狼かもしれない。

眼を見た。

鋭く光った気がした。

「危険だ」——私の脳がすぐさま信号を出す。嫌な電流が身体を駆け巡る。それはすでに何度か味わった覚えのある感じ——。

「ウオウウウウウウウ……」

犬人間あらため狼人間とも言うべき姿と化した園長先生が低い唸り声を上げながら、

叫びながらクラリスさんの前に立ちはだかるように『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を出そうとした——と同時に、すでに彼女の前に何者が立ちはだかっているのが見えた。

「お守護^{まも}りを！」 『シスター・ジャステイス』 ツ！」

「オオオオオウウツツ!!」

毅然としたクラリスさんの叫びに続いて聞こえてきたのは、困惑の色を含んだ狼人間の、くぐもつた唸り。見ると、狼人間は何者が両手で持った長い棒に噛みついていた。

そしてその『何者か』とは、『シスター』だった。いや、シスターの格好なのだが、尼僧服から露出している顔と手は『甲冑』に包まれていて、さながら『甲冑』を身に付けた上から尼僧服を着込こんだ人」ともいうような格好だった。頭部を覆う兜の顔部分には細く十字型の空洞が空いているが、中は真っ暗で、目や鼻や口など顔のパーツらしきものは一切見えない。

そして両手に持つている、今現在狼人間が噛みついてる長い棒——それはいわゆる『棍』という武器(?)だった。

『甲冑シスター』の持つ棍によつてクラリスさんの身は狼人間の牙から守られた。この『甲冑シスター』……考えるまでもなくわかる。『スタンド』だ。おそらく狼人間の方も。またしても『引かれ合った』わけだ。

しかし園長先生はなぜ突然狼人間になって襲いかかってきたのか。そこがまったくわからない。幼稚園は、外部からやってくる人間が限られた場所ではあるし、今は私たち3人しかいないぶん騒ぎにもなりにくくはある。でもそれにしたってなぜ？ なんの理由があつて？

なにもわからない現状にある意味答えを押し付けられたように、それまで聞いたことのない声が職員室の奥、園長室へと繋がる扉の方から聞こえてきた。

『ヘルター・スケルター』！』

謎の叫びに呼応するように勢いよく扉を突き破つて、園長先生とは別の狼人間が現れた。

『ヘルター・スケルター』！』

声がもう一度すると奥からまた別の狼人間が。

『ヘルター・スケルター』ッ！』

さらにもう一度。園長室の前に3体の狼人間が並んだ。

「ルクアアアオオオオオオオオオオウツッ！！！！」

怒濤の雄叫びをあげて計4匹の獣たちが牙を剥き出し爪を向け、一斉に私たちに迫る。

『ネヴァアー・セイ・ネヴァアー』！』

このままコイツらにやられてたまるか。幸か不幸か連日の騒動で私の神経はだいぶ凶太くなっているらしい。狼人間たちに怯むことなくスタンドを出し、まずは側にいる園長先生に足払いをかけ、転倒させる。

「なんと……凜さん!?!」

クラリスさんがなにか尋ねたそうに一瞬だけ私を見たが、すぐ3匹の方に向き直った。彼女が状況を判断できていることに少し安心した。しかしそれだけでは事態は解決しない。

「ルクアオオオオオオウウウウ!!」

3匹が来る! 剣を抜き、迎撃すべく待ち構える。だが、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツウウ——」

両端を掴み水平に構えた棍を前方に出しながら、クラリスさんのスタンドが躊躇なく3匹に突っ込んでいった。

「グゲエエツ!?!」

ぶつかつても甲冑シスターは止まらず、そのまま前へ前へとまるでブルドーザーのように3匹を押し突き進んでいく。狼たちは抵抗して爪を突き立ててみるが、甲冑は傷ひとつつかず、ゆえに怯みもしない。

シスターは前進しつづけ狼たちを窓際まで追いやっていき、そのまま力を緩めること

なく窓を破壊しながらついに3匹を外へ追い出した。

「オオオン！」

そうこうしてる間に園長先生が体勢を立て直した。しかしこちらには目もくれず、園長室へと駆け込むと、やがてガラスの割れる音がした。

「急いで！」

クラリスさんに従うままに私たちは（危ないからというのもあるが）律儀に出入口から外へ出た。

*

庭に駆けつけた私たちを4匹の狼人間は低い唸りを立てながら睨みつけてきた。だがクラリスさんのスタンドに恐れをなしたのか、二本の足で少しづつ後ずさりはじめる。攻撃されないのはいいことだが逃がすわけにはいかない。このまま園の外へ出られたら誰かが襲われるかもしれない。第一、散歩に出た皆がそろそろ帰ってくるかもしれないのだ。

「たっだいまー☆ いやあ〜お腹すいたね〜」

『莉嘉く、まだ早いっての。次は英語のお勉強だつて亜里沙さん言ってたでしょ』

「そうだったけ〜?」

間の悪いことに私が危惧したそばから皆が帰ってきてしまった。

「オオウツ！」

しかもあるうことか狼たちはそれを認めると一目散に園の入口へとダツシュしはじめた。

「だめええつ!!」

スタンドと共にクラリスさんが狼に迫いすがろうとする。すると一匹が踵かかとを返し、甲冑シスターへと立ち向かっていった。続いて駆け出そうとした私の方にも一匹向かってくる。

「ちっ……!」

鋭利な爪による引つ掻きを、剣を使って弾く。

「うあああああつ!!」

その垢抜けない叫び声が入ったとき、私たちに向かってきた2匹は囷くわだだということに気づかされる。邪魔者のいなくなった残りの2匹は散歩帰りの園児の列に接近すると、あつという間にそれぞれ園児をふたりずつ両脇に抱えると猛スピードで窓から園長室へ戻っていつてしまった。

「な、ななななな……!」

「な、なにアレー!!? オオカミ!!? だったよね〜!!?」

動揺を隠せない美嘉と、状況を把握できないゆえに好奇心でいっぱいになっている莉

も下げているのは少なくとも私的には趣味が悪いし、まずこんなことをやっている時点で顔がいいところでもなく許されるはずはなく、この男の言葉はただ私をイライラさせるだけだった。

「……なぜ、このようなことを？」

引き締まった顔を真つ直ぐ男に向けてクラリスさんが問いかけると男は、

「いやあ、『イケイケ番ちゃん』なんてもてはやされてもホストは楽な仕事じゃないかんね、やっぱストレスとかあるじゃん。で、オレこんなチカラあるじゃん？ 最近できるようになったんだけど。で、まあ、せつかくこんなチカラがあんだからアウトレイジなことでもやってストレス解消すつかくって思ってたら幼稚園あつて。そういう幼稚園つて金あんのかな、って気になって、まあ無かつたら無かつたで良さげな先生いたら襲つてアレしちゃうんでもいいし、入ってみつかうって、念のためにテキストにその辺歩いてた奴ら何人かオオカミにして引き連れて入ってテキストに物色してたら……こんなよ。正直、今スゲーめんどくせえ。家でバー経営の勉強でもちゃんとやってりやよかつたって思ってる。でもそうするには子どもはともかくお前らはヤツとかないと無理じゃん？ だから今から頑張つてやる、そんな気分。マジで。って使い方あつてる？ ヤツツベエよ、オレ今年で31より9月2日。あと3ヶ月ちよいじゃんか……」

などと不愉快きわまりないことをつらつらと、どうでもいいことまで付け加えて喋るのだった。

「……どうやら、神への懺悔を必要としている方の方のようですね」

平常心を装ってはいるが、その言い方は冷ややかだった。

クラリスさんは自分の内の穏やかさを断ち切るように続ける。

「未知なる力による道徳にもとる振る舞い……見過ごせませんね」

「はっ、それはオレとまともにやり合おうってことでいいんだよな？ アンタらもなん

だかヘンな能力持ってるみてえだが、んなことで怖じ気づくオレじゃねえぞ!?」 イケ

イケ番ちゃん”だからな！ 許してくださいって言っても聞いてやんないかなな！」

「……私が許しを求めるのは神にであり、貴方にはありません」

決然と言い放つ彼女の言葉には、今の自らの感情に少し素直になつたからだろうか、

挑発めいた抑揚があつた。

「言うねえ……じゃあいいや、容赦しねえ。言っておくが『ヘルター・スケルター』は数

が多くなるほどパワーが上がるんだぜ……8匹もいりや、何人来ようが関係ねえ。全員

ズタズタにしてやる」

「そのような脅しに屈するのなら先程のようなことは申しておりません。私は既に覚悟

を決めています。いい加減貴方もそうするべきでは？」

「なにをだ!! お前らに倒される覚悟かあつ?! いらねえなあ、んなもん! オレの『ヘルター・スケルター』は、サイツキョーなんだよ! オオカミどもはみんなオレの言いなりだ。こんなふうにな………: 吼えろ!」

「BOWWOW!!!」

「踊れ!」

狼たちは男の言うとおりに吠え、それから各自滅茶苦茶に踊りだした。その中には美嘉の『TO K I M E K I エスカレート』を踊っている狼もいた。

「よし、お前ら、獲物どもに挨拶しときな!」私たちが『ヘルター・スケルターズ』です!」ハイッ!」

そう言つて男が手を叩くと狼たちは深々と礼をし、男も窓から身を乗り出し狼の前に立つと、「どうよ?」とでも言いたげに両手を広げてからかうように首を傾げて礼をした。慈悲深いクラリスさんもさすがに険しい表情をはつきりと表している。私もそろそろ我慢ならない。

「その子たちはアンタなんかのバックダンサーじゃないツ!!」

そんな矢先に男への嫌悪を声を大に露あらわにしたのは美嘉だった。下衆な奴のなすがまにされてしまっている子どもに自分の曲を踊られては反応せずにはいられなかったのだらう。

「ああ〜？　じゃあなんだ、自分のバックダンサーとでも言っていてえのか、カリスマギヤルの城ヶ崎美嘉ちゃんよ〜!?」

それまでクラリスさんを注視していた男だったが、美嘉の存在には気づいていたようだ。さすがカリスマギヤル……なんて感心している場合じゃないけど。

「アタシはそんなおこがましいオンナじゃないの。ト・モ・ダ・チ、だから！　アンタみたいなのに好き勝手されてたら、ムカつくに決まってるでしょ!」

物怖じしない、堂々とした目つきに物言い。彼女をそうさせるのはカリスマJKアイドルとしての矜持？　園児への友愛？　それとも……

「さっすが、カリスマギヤルは威勢がいいねえ！　言っておくが、他のヤツらは即ブッコロでも、お前だけはまず最初にせええ〜……つたいに、エツツツツ……ロ〜くいことしてやるからな!」

「じょおおおーだんつつ!!　そういうのは、好きな人にしかさせないし!」

「そーだ、そーだ!　“ふじゅんいせーこーゆー”はだめなんだぞー!　しやぎいしろー!　つーか、しねー!」

「かえれゲスー!　たいほーにうたれろー!　てゆーか、しねー!」

園児たちも美嘉を応援したい一心で異口同音に男への怒りを自分なりに表明している。その言葉はけっこう手厳しい。

「てゆうくかさあく、ミカちゃん好きな人いるの？ だれ？」

こんな状況においても耳ざとく情報をキャッチしたマセタ感じの女兒が好奇心全開に美嘉を問い詰め出した。少しくらいはこの異様な空気を察知してははずだろうに……。

「や、ややややや!! たとえ! たとえだから! そういうの、違うから!」

動揺しながらだけど美嘉もちやんと答えるし。

「なんだ、つまんなーい。でもマジ、ミカちゃんのゆうとーりだよね。『ビッチ』とか、いまだきダサイし。オトコに『また』ひらいたかいすうでオンナかたるとか、マジわるみ。アタシらのトレンドって、『ジューンジョー』は『なんですけど?』みたいな。マジきつちよむ」

……いろいろ大胆というか、極限に空気を読まないというか……。最近の子はこれが普通なんだろうか? 言語感覚も私とかなり違う。なんだか自分が急に大人になったような錯覚に襲われた。

「び、また、あわわわわわ……そんなの、どこで覚えたのオ!!!」

「コトバンク」

あそこにそんな言葉は出てこないと思う、たぶん。

「うー……ってか、今はそんな場合じゃないの! 危ないからみんな下がって! そ

「せえええええええええいっ！」

吠声の暴力に気圧されて反射的に縮こまりそうな胸を奮い立たせようと半ば無意識に私も叫びながら、ぶつかっていくように『ネヴァー・セイ・ネヴァー』で先頭組の片割れと対峙する。剣と棍が、爪と牙と激突し、鏝迫り合いのように交わり、押し合う。必死に押し返そうするが力は拮抗し、膠着状態に入る。

「ルアアアアアアアアアアア！」

少しでも力を緩めたらその瞬間、間違はなく私は八つ裂きにされる、それがまざまざとスタンド越しに伝わってくるほど、男の言ったとおり狼人間のパワーは上がっていた。かつてないほどに力を振り絞って『ネヴァー・セイ・ネヴァー』に全精力を込めた。それでも押し勝つことができず、私は一向に動けなかった。

「ハイッ！ くっ……いっ！」

なんとか押し勝ち膠着状態から脱したクラリスさんも決して余裕というわけではなく、横で精一杯になっている私や後ろの皆を守るために牽制的な手しか出せず、防戦一方に持ち込まれていた。

「りーっ！ クラリスさんっ！」

そんななか、後方から美嘉の声と——足音が、どんどん近づいてくる。

「美嘉!」

「オオオオオオオウツツ!!」

（「来ちやダメ！」）と続ける間もなく3匹目がやって来て美嘉に飛びかかる。私はもちろんクラリスさんも目の前の敵に手一杯で美嘉をフォローする余裕はとてもない……。「逃げてえっ!!」

可能かどうかは関係ない。とにかくそう叫ばずにはいられなかった。しかしそれでも視界の隅に映る人影は消えなかった。

「大丈夫!」

隣からふたたび美嘉の声。強がりなんかじゃなく、確信めいた、男に向かって啖呵を切ったときのような力強い声だった。

「そんな能力、これでイチコロだよツ! 『ブラックスター』!」

「オ……オオオオオオオオオオオオオオウ!」

今までよりも高い狼人間の叫び声がすぐ横で響いた——その次の瞬間、目の前の狼人間がなにか『黒いもの』に遮られて、ほんの一瞬だけ見えなくなつた。そして——園長先生が、目の前に現れて、『ネヴァー・セイ・ネヴァー』と組み合っていた。

「うわあッ!」

「いでえ!!」

驚愕と同時に『ネヴァー・セイ・ネヴァー』が園長先生を吹っ飛ばしてしまつた。

「えんちよーせんせい、だいじよぶー？」

そして、いつのまにか私の横で園児が園長先生を心配そうに見ていた。

「はっ……あれ、ここ……幼稚園？　なんで……」

そして左隣……クラリスさんの目の前には、見知らぬ男性が。

「これは、いったい……？」

男性の前でクラリスさんもしきりに困惑している。だがなにが起きたか私にだって当然わからない。いや、ちよつと違う。私たちを襲っていた『狼人間の能力』が解かれた、ということはわかり始めていた。だけど、なぜそんなことが起きたのかがわからなかった。

「て、ててててて、てめえ！　な、なに……しやがったんだ……!?!」

先程とはうって変わって男は明らかにうろたえている。どうやら奴が自分の意思で能力を解除したわけでもないらしい。

———そういうえば『狼^{うろうた}狼える』という言葉には『狼』の漢字が含まれているな———。なんて、そんなことが急に頭に湧いて出たとき、

「消したのよ……あんな悪いモノは★」

美嘉が、ドヤ顔ともいうべき自信に満ちた顔で高らかに言った。

「け、け、け……『消した』だアアア……!?!」

「そういうコト！ アンタのあの『人間をオオカミにするエネルギー』みたいなものを、アタシの『ブラックスター』が飲み込んで、消したのよ★」

「はあ〜っ!?! ……………はあ〜っツツ!?!」

二度見、ならぬ二度驚き。驚きが能力に伝播しているのか知らないが、さつきから残りの5匹の狼人間も動きを止めて棒立ちしている。

『ブラックスター』……と美嘉が言ったその視線の先には、ぽっかりと、空中に星型の空間が空いていた。

これが……スタンド？ なんとというか、まるで『星の形をした夜空』……『星型にくり抜かれた夜空』？ とにかくそんな見た目だった。これが美嘉のスタンド……。

「く……おおおおお！ 別にお前を倒さなくたって勝つことはできらあ！ イケイケ番ちゃん” はこんなときでもへこたれない！ 『ヘルター・スケルターズ』！ 奥だ！ 奥のヤツらをヤツちまうんだ！」

「グオ!?! ……アアアアアアア！」

思い出したように残りの5匹がふたたび動く。狼人間たちは美嘉を避けるために横に大きく広がって駆け出した。

「ちよっとお姉ちゃあああん！ カッコつけてないではやくそいつ倒してよお〜!!」

「うわあ!! そうだ、これだけじゃダメだった!!」

莉嘉の懇願するような叫びに慌てて男に向かつてがむしやらに走り出す美嘉。

つまり、いま美嘉は狼人間を消したけど、それはあいつのスタンドが持つている『人間を狼人間に変える能力』を消しただけであって、しかもそれは一部の対象に対してだけだから、当然すべての狼人間が消えるわけではない。おそらく全部消すには、当たり前だけどすべての狼人間に『ブラックスター』を使わなくてはいけない。それか、能力の『もと』——『人間を狼人間に変える能力』を持つあの男のスタンド、あるいはそのスタンドの『本体』である男自身に『ブラックスター』の能力が発揮されなければすべては解決しないんだ。きつと。だから美嘉は必死こいて男の方にむかつて全力疾走しているわけだ……。

なんて、こんな火急のときでも冷静に考えるのは私の悪い癖かもしれない。どちらに行くか、本当にほんの一瞬だけ迷いつつも私は後ろの皆を守るために幼稚園の入口に走っていった。『ブラックスター』が男に触れて能力を消し去るまで、時間を稼がなくては!

(つづく)

第13話 『GRRR!』

『ネヴァアー・セイ・ネヴァアー』が私を抱えながら空中を跳んで駆けていく。抱き方はお姫様抱つこで、私ひとり持ち上げるくらいのパワーは十分にあるから自分の足で走るよりこの方がずっと速い。

狼人間がスタンド使い以外からも狼人間として見えるかどうかはわからない。いっぱい私は生身の人間なので私の姿はこの場にいるみんなからはいちいち訊くまでもなく当然見えている。ということは、狼人間のことが単なる（という言い方もおかしいけど）『奇声を上げながら素早く動くアブない人』にしか見えなかったとしても、私のことは『椅子に深く腰掛けるような体勢を維持したまま空中をジグザグに動いて正門に向かっている女』として見えるわけで、いよいよ非スタンド使いである人間の目には奇妙奇天烈極まりない光景が広がってしまったているはずで、ばつが悪い。ただそんなことは言ってもらえないから正門に着くまではどうしようもできない。

幸い狼たちが美嘉を避けて左右に膨らんで移動していたこともあって先回りすることとは難しくなかった。だが園児たちは今後私のことをどんな目で見るとだろう。トラ

ウマになりませんように。

狼人間は1匹残らずこっちに向かっていた。つまり5匹。その動きは速く、力だっけかなりある。私だけでどうにかなりそうなものではなかった。能力の根本である本体を追いかけるのはいいけど、狼人間の数をもう少し減らしてほしかった。美嘉にそう言いたくなるけど、そもそも私たちは戦闘のプロでもなければ映画やアニメやマンガの登場人物でもないんだから咄嗟にそこまで機転良く立ち回ることなんてできやしない。それはカリスマと巷ちまたで呼ばれている美嘉だっけ当然そうで、もしも彼女がアクション全開のドラマや映画なんかに出演した経験があれば多少話は違うかもしれないけど、そういった作品に出たということも少なくとも私は聞いたことがない。というか、美嘉なら全部なんとかしてくれると期待してしまっている私の態度がそもそもおかしくて、それは、果てしなく難解な化学式を理解できる人がここにいたとして、その人なら美味しいチョコクロワッサンの作り方も知っているはず、と思っっているようなものだ（探せばそのふたつに精通した人もいるかもしれないけど）。

結局、のつぴきならない事態になれば現状でできることを全力でするしかない。美嘉はそうした。なら私だっけそうするしか道はない。5対1で真つ向から対峙するのはどう考えても厳しい。でもこの場を放棄するほうが、もつと厳しい。自分の命と誰かの命、どちらがより重いのか？ なんてこと考えたくないけど、はつきり言って、こんな

状況では私は自分の命をかける道を取る方が納得できてしまうのだ。向こう見ずなのかも知れない。

やるしかない。本当ならこんなことをいちいち考えずに即、行動に移れたらもつといい気がする。それは思考停止とは違うと思う。「思う」じゃなく、「思いたい」かもしれない。

「ああああつ、もうつつ!!」

だからといって別に覚悟が決まってるわけではなく、置かれている状況の心地悪さに耐えきれず叫びたくもなる。今の私は半ばヤケだ。でも5匹の狼人間にひとりで戦おうとするということは、そういうことだ。

「クアオオオオオオオオオオオウツ!!」

狼たちは5匹いっぺんにひとかたまりになって襲い来る。バラバラに向かってこないぶん動きが単純で読みやすい。が、どう来ようが別に策はない。攻撃を一身に受けて後ろのみんなを守ろうと剣を盾代わりに待ち構えた。「もう、盾役しかないよね」と、そんな軽い口調が頭の中で発された。

狼人間の爪と牙が文字どおり目と鼻の位置に迫ってきた。

しかし攻撃が私に届く直前、予想だにしないことが起きた。予想だにしないことはさつきから立て続けに起きているが、それでも起きたものは起きた。

まず、私は攻撃を受けずに済んだ。私と狼人間たちのあいだの空間になにか、『透明の膜』のようなものが現れて、それにぶつかつた狼たちは、ボヨヨオン……と膜の反発力によつて押し返されたからだ。透明の膜は薄いピンク色をしていた。

そしてもうひとつ。受け身をとつて立ち上がろうとした狼人間の群れに、今度は『黒い大きなふたつの塊』が降りかかり、群れを襲つた。

それは2頭の『ゴリラ』だつた。

2頭のゴリラは数で勝る狼人間の攻撃を避けずに甘んじて受け止める。ここからはよく見えないが、おそらく攻撃を受けたと思われるそのたびに、動かしがたい、山のようなゴリラの背中越しに火花、というかエネルギーの欠片のようなものが散つていくのが見えた。どうやらこのゴリラ、スタンドらしい。

それからゴリラは攻撃にひるむことなく巨大な体軀から丸太のような両腕を伸ばし、どちらのゴリラも腕ひとつで1匹、計4匹の狼人間をがちりと捕まえた。狼人間たちは不自由なりに爪と牙を身体に突き立て逃れようと必死になるけど、それでもゴリラは山のように動かなかつた。

『ミーくん』、『ケイクン』！ もーちよい頑張つてっ！

私の隣に寄つてきて、たぶんゴリラに対して激励の声を掛けたのは莉嘉だつた。

『GRRRー！』

軽く吠えてゴリラたちは莉嘉に答えた。野性的かつダンディーなバリトンボイス。ゴリラたちは狼人間を押さえる腕にさらに力を込めたようで、

「アアアア、アアアアアアアアアア……」

呻き声が漏れ、しだいに抵抗をやめていく。相当な力で抱き込まれているようだ。

「ガアアアアアアアア！」

「これで……とりあえず全員の動きは封じれましたね……」

残る一匹をクラリスさんのスタンドが押さえた。あとは本体だけ……。

「美嘉さんに神のご加護を……！」

「お姉ちゃん、まだあー!？」

「もうちよつと! この……いいかげん観念しなさいつての!」

「やなこつた! あー、どうすりやいいどうすりやいい……」

美嘉はまだ男を捕まえあぐねていた。星型ブラックホールのスタンドはあまり速くないようで、男はちよこまかと逃げ回り続けている。

「ひらめいたっ!」

そう叫んで男が止まって美嘉の方に向き直る。手にはナイフが握られていた。

「持つててよかった、十徳ナイフ!」

歩みを止めた男の全身を、美嘉のスタンドが覆い、通り抜けた。

「莉嘉、もういいよ!」

「おっけー! ミーくんケイクくんお疲れさまっ!」

と、美嘉の言葉に反応した莉嘉が素早く自分の手からなにかを剥がした。それは『シール』だった。剥がしたとたん、ちよつとやそつとじやどうにもできそうにないゴリラたちがあつさり姿を消してしまった。

星型ブラックホールが男をすり抜けると、クラリスさんのスタンドに押さえつけられている狼人間も、さつきまでいたゴリラに抱えられていた狼人間も、それぞれもとの姿を取り戻す。園児もどこで狼にされたかわからない人たちも、これで助かった。

「あいやああああああ!!」

しかし事件はまだ終わらない。本体の男は依然ピンピンしていて、刃を起こした十徳ナイフ片手に美嘉に突っ込んでいく。

「亜里沙先生っ!?!」

「大丈夫です! 美嘉ちゃんも射程内ですっ!」

なにかを確認するようにクラリスさんが亜里沙さんに叫んで、亜里沙さんはそれに答えた。私には全然なにやらわからなかったが……

「え、うえええええ!!? なにこれ〜っ!?!」

という声を上げた美嘉を見ると、彼女は薄い黄色の『シャボン玉』に包まれていた。

「お、おとおおとおお……!?」

必然的に男のナイフはシャボン玉に刃を突き立てる。しかし驚くことにシャボン玉は割れない。ボヨォーン……と後方に押し返されて男は転んだ。

自分のまわりの『膜』を見てみると、これもどうやら美嘉を包むものと同じようだった。後ろを振り返ってわかったことだが、私を包んでいるシャボン玉はかなり大きく、莉嘉もプロデューサーさんも園児たちも亜里沙さんもそれに包まれていた。

さつき亜里沙さんの言っていた『射程内』……こういうことか。亜里沙さんも『スタンド使い』とは……。

「さあ、懺悔の時間ですよ」

「いのでででででででで！」

転んで隙を見せていた男に、クラリスさんは素早く向かい、スタンドでガツチリと押さえつける。それでようやく事態は終息したのだった。

*

「おら、くらえ、わるいやつ！」

「むぼお……！」

「えいやーっ！」

「うべえ……えつ、ヘックション！」

事件が終わって、幼稚園には平和が戻った。なにも知らない園児たちは、さつきまでのことなどなかったように遊んでいる。ただその遊びは以前と変わっていて、みんなは水鉄砲を狼人間のスタンド使いの顔に向かって、ピューピューと一斉射撃していた。男は園児用のあまり高さのない鉄棒に掴まり、両足を最大限に折り曲げて必死にぶら下がっていた。この状態を解こうとすると、横にいる園長先生が竹箒の柄で脛を叩くためだ。お仕置きということらしい。ただすぐ横にいるから園長先生の上半身も男同様びしょ濡れだった。

「やめてくれよお……こんなん続けてたら……手にまめがいっぱいできちまうよお
おとおお……！」

男の叫びは悲痛だったが誰もやめない。私もさつき連絡した早苗さんが来るまではそれをやめさせる気がしなかったので、放っておいた。すっかり疲れていた。

まさか、職場体験学習中にまで『スタンド使い』に襲われるなんて……。重症者は出なかったがこれは由々しき事態というやつだ。

……奈緒や加蓮たちは、大丈夫かな……？

そんな不安が心からこぼれ落ちた――。

【インターロード：『She's a Rainbow』】

——……………!!

つく、ヤバいつ!!

あつ、そんなつ……………！ ん、んあつ……………！

……………。

「……………セーフ」

ふう……………危ない危ない。下げた食器持ったままくしやみなんかしたら落として割っちゃまうよ。加蓮か凛があたしのウワサでもしてんのかな？ まさかあたしの働き場所調べて冷やかに来たりなんかないよな……………。大丈夫だよな……………場所教えてないし……………。

いかん、また不安になってきた。いやいや、大丈夫だ、大丈夫なはずだ！ 初日は何事もなかったし今日だってランチタイム終わりの今まで知ってる顔は見なかった。体験学習期間は土曜までであるから金曜終わりの凛は1日早く休みになるけど加蓮はあたと同じ土曜までだから最終日にふたり揃ってここをつきとめたりなんかもできないはずだし、なによりあのふたりだつてやったことないことをやってるんだからいろいろ

大変なはずだ。あたしのことばっか構ってる余裕はないだろうし。うん、大丈夫だし！
自信持て、あたし！

考えごとでいちいち不安になんかなくてたらお客さんを明るく接客できない。仕事もそこそこ覚えられたし、しようもないことでミスはしたくないよな。それに……。

それに……もし闇雲にあたしの働き場所を探そうとしてもみんなには喫茶店としか言つてないんだ。『ここ』だとわかるはずがない……今どきチェーン店も含めれば美城町内に限定したつて喫茶店なんてゴロゴロあるんだ。ましてや『ここ』は加蓮のマックからも凛の幼稚園からも、学園からだつて離れたところにあるし……見つかるはずがないんだ。

でも……もし、見つかつてしまったら……？

考えるだけでも恐ろしい……。間違いなく、過去最高にイジられる。特に加蓮。それだけはゴメンだ！

絶対……絶対バレるワケにはいかない。自分で見つかったら困るようなところを選択しといてなんだけど、でも絶対に見つかるワケにはいかないっ！

——カランコロソソ

「こっくにちは〜」

「いらつしやいませ、ああ、じゃなかった……」

「あはは。挨拶まだ慣れないっスか？ でも奈緒ちゃん笑顔はバツチっス！ 懲りずにファイトっスよ！」

「そくそく。だから気を取り直して昨日みたいに天使のような尊い笑顔で青春の階段を踏み外してしまったおネエさんたちを元氣にお迎えしておくれ〜！」

「り、りよーかい！ コホン。それでは……」

お辞儀のスピードは早すぎず遅すぎず、そして深々と……あんまり仰々しくなつてもいけない。でもって、頭を上げたらしつかりスマイル！ そして今度は間違えずにちゃんと挨拶……と。

「——お帰りなさいませ、お嬢様がた。お疲れでしょう、こちらの席へ……どうぞ♪」

「Oh……………っス」

「その笑顔を見たら、疲れなんて2000光年のかなたにフツ飛んでったじえ……GJ、奈緒ちゃん……」

よし、今度はバツチりだ……。無事に挨拶を済ませて、空いてる窓際の席へふたりの『お嬢様』を案内する——。

絶対あのふたりにバレるワケにはいかない……。あたしの職業体験学習先が、喫茶店は喫茶店でも『メイド喫茶』だということを……！！

(To Be Continued……)

スタンド紹介③

『シスター・ジャステイス』

【本体】クラリス

【破壊力】A スピード―A 射程距離―E

【持続力】A 精密動作性―A 成長性―D】

・『尼僧服を纏った甲冑』の姿をしたスタンド。甲冑の中に誰か入っているわけではなく、ただそういうスタンド・ヴィジョン。視覚を持たない。

【能力】

・これといった能力はないが、『棍』を所持しており、頑丈かつ正確な動きをする近距離・パワー型スタンドの身体能力を活かしてパワフルに立ち回る。

*

『ブラックスター』

【本体】城ヶ崎美嘉じょうがさきみか

【破壊力】なし スピード―C 射程距離―D

持続力—A 精密動作性—A 成長性—C】

・記号の星(『★』)の形をした夜空のような見た目のスタンド。『★』の中の黒い部分には、無数の小さな光が星のように瞬いている。

【能力】

・触れたスタンドエネルギーを一時的に消失させる。直接本体のスタンドエネルギーを消せば、長時間スタンドを使えなくさせることも可能。

*

『GRRR!』
がお　うっ!

【本体】城ヶ崎莉嘉
じょうがさきりか

【破壊力—A スピード—B 射程距離—D

持続力—A 精密動作性—C 成長性—C】

・キスマークの描かれた『シール』のスタンド。ローリング・ストーンスのロゴマークに似てないこともない。莉嘉の両手のひらから1枚ずつ、いちどに2枚まで同時に出せる。

【能力】

・シールを貼ると、そのすぐそばにスタンドの『ゴリラ』が出現する。なにか命令すれば射程内(10m未満)でその通りに行動する。

・ゴリラ自身はかなりタフだが、シールの方を剥がしたり破いたりすれば、いともたやすく消えてしまう。

・シール自体の射程距離はとてつもなく広い（上記のパラメータはゴリラの性能）ので、莉嘉は普段自分に1枚、美嘉に1枚持たせて緊急時のボディガード用としてお守り代わりにしている。

・ゴリラには莉嘉が付けた名前がある（『ミークン』と『ケイクン』）。見た目はまったく同じに見えるが、美嘉と莉嘉には区別がつけづらい。

*

『ガーディアン・オブ・ザ・ユニヴァース』

【本体】持田もちだ亜里沙ありさ

【破壊力】なし スピード―E 射程距離―B

持続力―B 精密動作性―C 成長性―D

・『シャボン玉』のスタンド。ランダムに様々な色のもが出てくるが性能に差はない。

【能力】

・地面から柔軟かつ頑丈なシャボン玉が、ぶくぶくと出てきて対象を包み込み、守る。シャボン玉なのでちよつと浮く。

・大きさを調節して出せる。大きいほどスタンドエネルギーを使うのでその場合、いちどに出せる数は減ってしまう。

*

『ヘルター・スケルター』

【本体】ほんぼたけふみ 番場丈文（イケイケ番ちゃん）

【破壊力】B↳ スピード―A 射程距離―B

【持続力】B 精密動作性―C 成長性―D】

・生物に手で触れることで発動するスタンド。ヴィジョンを持たない。

【能力】

・手で触れた生き物を『狼人間』化させる。群れるほどパワーが上がる。

・狼人間は基本的に本体の命令通りに動く（精神力の強い者であれば抵抗可能で、そもそも能力が通用しない場合もある）。

【本体について】

・ホストクラブ『パースデイ』で働いている現役ホスト。頭は悪くないが感情の赴くままに行動しがちで、痛い目に遭うこともあるけど元気な30歳。特技はお菓子作り。

・今回の騒動のあとクラリスさんに滅茶苦茶説法された。

第14話『Vagabond of the Western World』(神谷奈緒の冒険①)

バイト経験ゼロの学生なもんだから肩肘張った感じがそうすぐに抜けるわけではないけど、それはそれとして自分で希望したからにはそれっぽい振る舞いができるようにないたいと思いつつも、どうしても恥じらいはある。

この個人的な問題をどうやら店長は察してくれたらしく「お嬢様相手なら少しは気楽にいけるんじゃないの」、と女性のお客さんをあたしのはじめのご主人様としてわざわざ向けてくれたのは良かったんだけど、それでも結局最初は挨拶もしどろもどろになっちゃったにもかかわらずお客さん側である比奈さんと由里子さんがあたしを氣遣って励ましてくれて、ありがたさと申しわけなさで困惑したら、どうやら常連のお嬢様たちのようで、「だからあまり気にすることないわよ」と店長まで気さくなことを言って、正直それお店側が言っちゃおう？ ってなりながらもすっかり気持ちは軽くなつて、頑張ろう！ って思えた。意図せず嬉しかったのは、ふたりと趣味が合うこと、それを会って2日目のこの時点で知れたことだ。

「いやー、あの『フルボッコちゃん』フィギュア、ファストフードのセットのおまけの割

にやたらクオリティ高いからどうしても揃えたくなくなっちゃって……友達に頼んでもらったりしてなんとかコンプしたんですよ」

「わかる。ホント最近のおまけは油断ならない出来のモノがあるから侮れんじえ」

「ハハハ……でも高くないとはいえそれでも財布の中身は減るし脂肪はつくし……しばらくジャンクフードは敵っスね……、とか言いながら次のおまけも推し作品だったらまた通いつめるんスけどね」

「いや、ベーコンレタス以外のハンバーガーはもういいかな。カッコ悪い目……」

眩しそうに目を細める由里さんの空になったグラスにお冷やを注ぐ。

まさか、学園じゃできなかった話がこんなカタチでできるとは……やってみるもんだな、メイド。

「しかし職業体験学習のラインナップにメイド喫茶が入ってるとか、相変わらずフリーダムというかなんというか……器の広い学園のようだなによりっス」

「ゆうてあたしらだつてほんの2年前までは通つてたんだから、そんなスグ変わらんっしょ。ま、あたしらはJKではなくなつたケド」

「JK……女子高生……かあ。まだほんの2年前のことなんスね……懐かしい……眩しくて、甘酸っぱい時代……」

「比奈センセ、あたしそんな瞬間あったけ？」

「いや、ないッスね。言ってみただけ。アハハハハハハ！」

「ですよね。アハハハハハハ！」

「はあ……………」

「はあ……………」

……………なんかふたりともいきなりため息ついて虚しい感じになりだしたぞ……………。

「いやいやいや、比奈さんマンガ描いてイベントで出展したりしてるって昨日言ってたじゃん。それって超青春じゃん！」

そう言ったら比奈さんのメガネがキラーツ！ と光って、

「フッフ、そうッスね……………終わらない作業、近づく締め切り……………うんざりするほどの量の人が通りすぎていく出展スペース、いっこうにハケない創作物……………フッフッフ……………」

「際限なく増えていく本、収まりきらない本棚、薄い本1冊読むたび真人間から遠ざかっていく気がしてたあの背徳感……………たまらん青春すなあ……………」

なんだかよけいにネガティブな雰囲気……………。

「でもまあ、楽しくはあったッスね。放課後はマンガ読みまくって、で、描く」

「あたしはそれを読む。たまに手伝う。修羅場なときは……………ガッツリ手伝う」

「そう……スね。そうそう、王子様がアイドルデビューするアレの二次創作のときは作中で歌うオリジナルの歌の歌詞をユリユリに頼んだツスね〜」

「あゝ、懐かしいじえ……あたしの黒歴史……」

「いやいや、よかつたツスよ。当時も今もそう思ってるツス。名作詞家、由里子サマ誕生の瞬間ツス!」

「そうかな〜? ま、そう言われたら悪い気はしないよね〜エへへ……」

あつ、なんだかんだで楽しい感じに戻ったみたいだ。よかつたよかつた。

「ヒナちゃん、ユリユリ、そろそろ奈緒ちゃん返してくれる〜? メニュー上がってるから〜。奈緒ちゃん、4番に『ムスターフア』2皿お願いねエ〜!」

「あつ、はいっ!」

マスター
店長に呼ばれて話を中断してキッチンに向かう。

「はいよろしく〜」

「はいっ」

カウンターに置かれた出来立ての2皿をトレンチに乗せる。メニューは両方とも、店長が開発したオリジナルのスパイスをこれでもかと利かせた激辛カレー『ムスターフア』だ。ひとつは普通盛り、もうひとつは大盛りだった。トレンチを傾けないよう慎重になりながら4番テーブルまで、ちよつとぎくしゃくした足取りで向かう。

よつぼどじゃない限り落とすことはないと自分では思っている。バランスを崩してマズいと思ったら『ワン・ヴィジョン』で支えればいいだけだ。でも本当に落としてしまう瞬間が来るまではスタンドは使わない。あくまで自力でこなしたいからだ。ついてもスタンドの力だつて自力の内に入るわけなんだけど。まあ、とりあえず今のところそれとこれとは別のハナシなのだ。あたしのなかでは。

「お待たせしましたお嬢様。『ムスターファ』になります。……つと、お、大盛りのお嬢様は——」

4番テーブルのお嬢様ふたりは、見た感じあたしとそんなに年が変わらなそうな子たちだった。こういうとき、*“大盛り”*は言わないほうがいいのか？ あたしだったら、例えば自分だけが大盛りを頼んでいたらちよつと配慮してほしいと思う。べつにそうされなかったとしても、それで感じ悪いと思うほどのことではないから気にはしないけども。でも念のため『大盛り』のとこだけ若干トーンを抑えてお嬢様たちに尋ねた。午前10時に激辛カレーとは大胆なお嬢様たちだ。

「はいはい、アタシアタシ」

向かつて左の席のお嬢様がビツ、と指をまっすぐキレイに伸ばして小さく手を上げた。頭のとつぺんのちよい後ろでお団子をつくった髪型は、今は解ほどいちゃってるけど普段のあたしとだいたいいっしょだ。お団子仲間だ。

「うーん、見た目は普通のカレーだね？ 匂いも……普通」

右の席のオレンジ色の髪のおさげの子は、自分の前に置かれた並盛りのカレーに顔を近づけてそう言った。その姿は小動物のような感じがあつてかわいい。垂れ下がるふんわりとしたおさげがそう思わせるのかもしれない。

「見た目は普通でもな、中にはコレが入ってるんだぜ？」

お団子のお嬢様がテーブル脇の調味料やつまようじ、紙ナプキンなんか置いてあるスペースからひとつ小瓶を取つておさげのお嬢様に見せた。

「えっ、ううつつわ！ 真っ赤じゃん！ なにそれ？」

ちよつと大げさな困惑顔をつくつたその子の目の先にあるのは、七味唐辛子のような赤い粉の入つた小瓶だ。粉の赤は一目ではつきり香辛料だとわかるほどず赤い。

「で、なんなのそれ？」

香辛料を2、3秒凝視してから彼女がふたたび尋ねると、

「はい奈緒ちゃん、説明！」

「うえ?!」

いきなりマスターが言った。店内は決して広くなく、今は混雑もしていないからどうやらふたりの会話を聞くともなしに聞いていたみたいだ。

「おいおいマスター、新人イジメか？」

「美少女メイドだからって嫉妬しちやダメだよマスター！」

「イジメじゃないしジェラシーでもないわよっ！　ちよつとしたテストみたいなものですう〜！」

ふたりが意地悪く言った言葉をわざとらしく怒ったようにマスターが返す。やりとりからしてこのふたりも比奈さんたちみたいな常連お嬢様らしく、でもそれよりあたしとしては、おさげの子が言った『美少女メイド』という言葉にムズムズきてしまつて、少し恥ずかしい……嬉し恥ずかしい。

「まあ、じゃあそういうわけで説明プリーズ、美少女メイドさん？」

「へ？　うう、あつ、はい！　かしこまりましたお嬢様っ！」

なんだかんだノツた感じでおさげのお嬢様が楽しそうにあたしに説明を求める。しどろもどろになりながらも、しかし料理やお店のことなんかの説明もメイドの務めで、その香辛料のことは昨日きちんと覚えたから大丈夫だ。それにしてもやつぱり面と向かつてあつけらかんと美少女と言われると面喰らつてしまう。でも悪い気は………しない。

軽く深呼吸をしてから、あたしはお団子のお嬢様が手に持っている小瓶の中身について説明した。いやご説明させていただきます。

「そ、それではご説明いたしますお嬢様。今そちらのお嬢様が持つておられる調味料は

『レッド・スペシャル』という、当店オリジナルの香辛料で、お嬢様たちがご注文された激辛カレーライス『マスターフア』にも含まれております。辛さのもの足りない方は自由にお使いいただいて、お好みの辛さに調節して料理をお楽しみください」

よしっ！

「奈緒ちゃん勉強熱心で助かるわあ〜っ」

言い終えると、マスターの黄色い声が店内に響くと同時にふたりのお嬢様からも拍手の音が響いた。

「うーん、さすが美少女メイドだなー」

「あははっ。マスターよかったね、有能で可愛いメイドさんが来てくれてっ！」

ううあああ……やっぱりこれは……ちよつと………照れるっ！

「以上になりますごゆっくりどうぞ！」

話が長くなって料理が冷めるといけなから矢継ぎ早にそう言っ引っ込んだ。

「照れてる〜、カワイイんだ♪」

後ろからおさげの子が言うのが聞こえてくる。たしかにそうだけど、料理が冷めるのもいけないからそうしたわけで……。

「奈緒ちゃん……恥じらいメイド……GJッス」

「あ〜、尊いんじや〜……」

去り際に比奈さんと由里子さんまでが親指を立てて^{ねぎら}労いのような言葉をかけてきた。

*

カウンターに引つ込むと、マスターがニコニコしながらお冷やを差し出してきた。

「いいわあ奈緒ちゃん。初日の初々しさを残しつつご奉仕の方はちゃんと身につけてきたわね。その感じを維持してくれたらアタシ嬉しいわ」

もらった冷水を飲み干しながら、見るともなしに笑顔で話すマスターを見る。コックコート越しに隆起するプロレスラー然とした肉体を持ち、鼻と唇の間に立派にたくわえられたヒゲを携えた彫りの深いやや日本人離れたエキゾチックな顔から放たれるいかにも女口調は正直まだ慣れないけれど、2日目ともなればそれが彼のスタイルだと、ぼんやり納得できるようになっていた。

「奈緒ちゃん、アタシらはそろそろ失礼するツスよ。引き続きお仕事頑張つてツス」

「マスターもばいばい。また明日か明後日か^{しあさって}明々後日にも来るじえ」

「あつはい！ またね比奈さん由里子さん……いつてらっしやいませ！」

「うんうん、メイドとしての反応力が上がってきたツスね。お姉さん感心しちゃうツス」
「なあにがお姉さんよっ。アンタたちは女子力を上げなさい。せつかくカワイイんだから」

「ぐへへへへへ、冗談もほどほどにねマスター。カワイイ子はこんな風には笑わないん

「だじえー！」

カウンター越しに軽く談笑して比奈さんと由里子さんはレジに向かっていく。

「まったく……女子大生はのんきなモンねエ……」

どこか諦めたような笑みを浮かべてため息をつくマスターのその顔はなんだか母性的だ。常連客のことだし、比奈さんや由里子さんにどことなく自分の娘のような感情があるのかもしれない。まだ誰のことも大して知りはないけど、あたしにはそういう笑顔に見えた。

「ありがとうございます！　いってらっしゃいませお嬢様〜！」

そんな笑顔をマスターから向けられていることを知らない比奈さんと由里子さんはカランコロンとベルを鳴らして店を出ていった。

「しほおー！　このカレー辛すぎるよおーっ！」

すると突然さつきのおさげの子が、比奈さんと由里子さんのレジの応対をしたメイドさんであるところの榎原志保まきはらしほさんの名前を呼んだ。

「マスター失礼しまーす」

「はいはい」

志保さんが一言断りレジを離れマスターが交代する。

「大丈夫、伊吹いぶきちゃん？　パフェ食べる？」

「いやパフェは食べたい、けど……ひとまずこれが辛すぎて……」

そう言つて彼女は自分の前にあるカレーライスを指差した。残っているご飯の量に比べて、かなりルーが残っている。

「調子こいてスパイスガンガン振りかけっからだよ」

向かいのお団子の子が言った。彼女の大盛り皿の中はきれいになつていた。

「んん……アヤがチョイ足して涼しい顔して食べてたから、いけると思つたのに……」
志保さんが伊吹と呼んだその子の声は、次第に力が抜けていくようにすると小さくなつていった。

「確かめもせずに一口目からいきなり足すなよ！ 食つたことあるモンでもねーのに」
「さ」

「だあつて……激辛メニューつて、たいてい大したことなくて期待外れじゃん？ うう……これはちよつとナメてた……」

「うふふ……伊吹ちゃん敗れたり！ その期待外れを払拭するために開発した『レッド・スペシャル』なのよッ！」

レジのマスターが嬉しそうに声を張る。とても、とても嬉しそうだ。

「うう……マふたー、うるはい……」

ヒリヒリしてるだろう口で懸命に言つてから、伊吹さんはお冷やをグビグビ飲んだ。

「志保、お冷や持つてきてくれ。まったく……見切り発車が過ぎるぜ、伊吹」

「アヤさん、は、ワケない顔で伊吹さんに話しかける。多少辛さが上乘せされたムスターフアは、このアヤさんにとってはお気に召すものだったようだ。」

「アヤあー……少し食べない？ ほら、こつちから左のゾーンならいくらでも食べていいから」

「おまえ……こつち左つてルーのゾーンじゃねえか！ そんな風に言つてるとメシとルーかき回すぞ」

「ダメっ！ 癒しのライスだから！ 救いのライス様だからっ！」

「そのルーはもともとお前の責任だろ。ちゃんと食いきれ」

「いやアタシにとつてはこのルーは最初から悪かった可能性があるよ。スパイス足さなくとも辛すぎたかもしれない」

「じゃあ最初から頼むなよ！」

「むー……残すよりいいでしょ？ ねえアヤ、マスターにも悪いし……」

「わあかつたよ……食うよ……ううあつ、かなり辛えなコレ……。お前スパイスかけすぎだよ……」

「ライスは手つけちゃダメだよ」

「鬼か！ さすがにアタシでもキツいわっ！」

「お冷やお待たせ〜……、？ アヤちゃん大丈夫？ パフェ食べる？」

「水はサンキューだが隙あらばパフェ推すんじゃない志保……でもこれ食い終わったら持つてきて……チョコのやつ」

「アタシフルーツパフェ……」

「よし。じゃあパフェの前に、食え」

「うう〜つ……」

「ライス足す〜？ パフェ頼んでくれたんなら常連のよしみでタダにしとくわよ。少しでいいなら」

「マスターナイス！ お願いするぜっ！」

「あいあと、まふあー……」

「ほら、水飲め」

「ん……」

苦戦しながらも彼女たちは少しずつマスターファを食べ進めていく。

*

喉元過ぎれば熱さ忘れる。フルーツパフェに舌鼓を打つ伊吹さんはすっかり元気だ。

「へーっ、美城の職場体験学習でここ働いてんのね。っていうかじゃあアタシらの後輩じゃーん！ 学園生活はどうだね？ ん？ どれどれ、先輩たちが可愛がつてあげよう

じゃないかつ！」

「パフエ食つたら一気にやかましくなったなオマエ」

「パフエ・イズ・ゴツド！」

「オマエを救つたライスのことを忘れるな」

ツツコミを淡々と入れながら、アヤさんもチョコレートパフエを食べる。

そんなふたりを志保さんが嬉しそうに見ている4番テーブルに、なぜかあたしもいた。ふたり以外にお客さんのいなくなった室内の妙な静けさが落ち着かないのか、なんの気なしの単なる賑やかし要因なのか、「さっきの美少女メイドさんいるー？」伊吹さんそんな感じで呼ばれ、いつからここで働いてんの、と聞かれたから諸々の事情を話したら、志保さんがそうなのは昨日日本人から聞いたけど、アヤさんと伊吹さんも元・美城学園生だということがわかって、にわかにかに空気が盛り上がった。

「懐かしいなー、ダンス関係の部活がなくなつてさー。人集めて同好会立ち上げて……。もー楽しくてさ。アタシ踊つてばつかなかだつたなー」

「踊つてばつかなのは今もだろ」

「アンタもでしょ」

「……結果的には、な」

話を聞いていくと、アヤさんは伊吹さんのストリートダンスの同好会発足のための人

数合わせとして巻き込まれたらしいのだが、やってみたら楽しかったそうで大学に行つてからも伊吹さんと同じダンスのサークルに入つて活動が続いているらしい。志保さんも含めて彼女たちは美城女子大に通うの1年生だそうだ。まあ美城学園チに通つてる生徒のだいたい進学先はそこになるよな。比奈さんと由里子さんだつてそうだし。あたしもそのつもりだ。

「ほんと、ちよつと前のことなのになんだかもう懐かしいよね。違う部活なのにいっしょに練習したりとかしたね」

ふたりの空のグラスに新しくお冷やを注ぎながら志保さんが言った。

「やった、やった！ ウチの学園、ユルクはないけどフリーダムだからね。っていつても、チアだつてダンスだからそんなにかけ離れたもんでもないけど」

「あははっ！ でも何回か本当にチア部のメンバーとして踊つたりもしたよね」

「あー……あれには少し参つたぜ」

ばつ悪そうに頭をかきながらアヤさんが言った。チョコパフェのグラスはもう空になつていた。

「チアリーディングだつてダンスのひとつだつてのに、アヤさ、恥ずかしがつちやつてさあ。さっきの奈緒ちゃんみたいで可愛かつたな〜！」

「かわ……おま、いや、だつて……チアリーディングとか、スゴい女子っぽいじゃんかよ

!? アタシにや似合わねえよ……」

「そんなことないっつーの！ 志保もそう思うでしょ？」

「うんうん、可愛かったよ！ もっと自信をもつて！」

「いや、自信つてーか……その、カワイイつてのが、アタシにはなんかちよつと……」

「自信もつてアヤちゃん！ カワイイよアヤちゃん！ カワイイカワイイ！」

「オマエのそれは囃はやしてるだけだろツ！」

あれ？ なんか……

「そーいやアタナんでこないだ買った服着てこないのよ？ せつかくアタシと志保がチヨイスしてあげたのにさ。」

「……いや、いきなりアレ着てガツコーとか、ハードル高いだろ。踊れねえし……」

「そんなの、着替え持つてくればいいでしょ？ がっ！ いいかげんそのパーカー見飽きたのよ」

「なんだよ！ オマエだつてしよつちゆうパーカー着てるだろ！ パーカーのこと悪く言える身分じゃないだろ！」

「アタナは普段からパーカーばつかじやない。アタシは女子っぽいカッコもします〜！

あつ、ねえ奈緒ちゃん、ホントこの子困つちやうのよ。こないだアタシらファッショニスタが可愛いワンピースをこの子に買わせたのにさ、今日着てこないんだもの。

似合ってるのにさあ、カワイイのにさあ。あつゴメン、喋ってるだけじゃわかんないよね。写真撮ってるからさ……コレなんだけど見てよ」

と、伊吹さんが差し出してきたスマホの画面を見ようとしたり、

「だあぁッ!! やめろ! そんなもん初対面のメイドさんに見せんな!」

「なんでよく? よく撮れてるのに……」

「うるさい! とにかくやめろ!」

とつさに突き出されたアヤさんの手に遮られて見れなかった。

……似てる……なんか似てる……あたしと、加蓮のカンジに……。

「もつと一步を踏み出しなさいよアヤ。いつまで朝な夕なにパーカーにジーンズでいる気よ」

「るっさいなあ! アタシだって暑くなりやもうちよいソレっぽいカッコするっての!

そんなの知ってるだろ?」

「アタシが言ってるのは、いつになったらスカートを書くのかってことよ」

「スカートは……いいよ、アタシは……動きづらいし」

「そんなだからダメなのよっ! 女子ならスカートくらい穿けよっ! オンナノコを樂しめよっ! 志保を見習いなさい、プライベートでもスカート、バイトでもスカート、チ

ア部の衣装だってスカートよ! 女子力の塊よ!」

「オマエ女子力の根源をスカートに求めすぎじゃないか……？ いや、だってスカートだと、急にシャドーやりたくなつたときとかやりづらいじゃんか……」

「するか！ そんなの、よっぽどボクサーっぽい格好してなけりや不審者も同然だよ！」

「だから、スカートじゃヘンだつて言つてるだろ！」

「だから！ 急にシャドーボクシングなんてしたくないっての！」

「わかんねえだろっ！ 人それぞれだろ！ オマエだつて道端で急に踊りたくなるだろ！」

「ぐっ、それは……う、その……」

なるんだ……路上で、急に……。ストーリートダンスつてそういうもんなのかな……？

「とにかく、もつとこう……信じなさい！ アンタの中の女子力を！」

「女子力女子力つて、いつでも真つ赤な顔で恋愛映画見てるようなヤツがホントに女子力をわかつてんのかよッ!？」

「う……!？」

アヤさんの言葉が思つてもみなかったものだったのか、伊吹さんが一瞬ひるむ。

「この恋愛映画マニア！ ラブコメコレクター！ この……ラブロマンサー！ ラブロマンサー・小松！」

隙を見せた伊吹さんにアヤさんが間髪入れず叩き込んでいく言葉は、端から聞いている

ともはやよくわからない中学生の悪口みただった。

「なっ！ なんだよ！ ……べ…べつに、いいじゃんかよ…ラブコメ好きでもさ…」

「…お、おう…なんかスマン」

予想だにしなかった乙女チックな反応にアヤさんが思わずたじろいだ。伊吹さん…可愛いな。似てると思ったけど、こういうところはウチのコロネおさげとは大違いだ。

「アヤちゃんツツ!!」

「!? な、なに、マスター…?」

突如その場に大声でマスターが割って入った。レジで仁王立ちしているその顔は妙に儂げな色気みたいなものがあって、申し訳ないけどなんか変だった。

「スカート…いいじゃない。女子なら穿くべきよ…穿かなきゃ…。いい? 世の中にはね、スカートを穿きたくても社会的にヤバくて穿けない人もいるのよ」

…それは自分のことを言ってるんだらうか?

「やめてマスター。そのムキムキボディでそんなこと切実に言われると面白くて涙出る」

「ちよおーっ?! になよ伊吹ちゃんっ?! せつかく助け船出してあげたのにその辛辣な

返しはアツ!？」

さっきの乙女チックはどこへやら。ある意味サポートに入ったマスターに、伊吹さんは笑いをこらえきれなさそうな顔を向けていた。

「ちわーっ。3人なんですけどおーっ」

カランコロン、のベルの音と同時に3人の男性客が訪れた。ご主人様だ。お嬢様と間違えちゃマズい。

「はーい！ お帰りなさいませご主人様ーっ！」

ふたりのやりとりをずっと見ていた志保さんが、すかさずメイドモードに入って接客を始める。さすがの働きぶりだ。

「あ、そんじやあんまりお邪魔もなんだし、そろそろ出よつかアヤ」

「そうだな。んじやマスター、お勘定」

「バイバイ奈緒ちゃん。またね」

「あつ……ありがつ……じゃない、いってらっしやいませお嬢様！」
ちくしやう、やつぱあたしはまだまだ……。

*

アヤさんと伊吹さんが去って新たに3人のご主人様が入店されると、人数的にはひとり増えているにも関わらず、うってかわって店内は静けさを取り戻した。

「はあくつ、そろそろランチタイムだつていうのに、どこまで買い出しに行つてんだか、あの子……」

チリーーン……

ここにいない子の軽い愚痴をマスターがつぶやくと、それを遮るように注文のベルが鳴った。志保さんがオーダーを伺いにいく。そのさりげなく洗練された動きを4番テーブルの掃除をしながらあたしは見ていた。有能メイドの動きを見て、その技術を盗むため……。

のはずだったのだが、ここでちよつと問題らしきものが起きていた。3人のお客のうちのひとりだが、どうもさつきから志保さんの腰のあたりをガン見している……。見ていられるだけではあるけれども、いくらなんでもガン見が過ぎる。あれが熱線ならスカートに穴が空くレベルだ……。志保さんはどうやら気づいていない。

それ以上の事態が起きる可能性がないとは言いきれない。ゴタゴタが起る前にマスターに知らせようと、掃除していたテーブルを離れようとしたとき――

「メイドさん……いいですね。とてもいい……腰だ」

「……………はいっ」

ガン見していた男が志保さんに言い放った。昔はどうか知らないが、残念ながらセクハラ成立だ。急いでマスター呼ばなきや……

「その腰の下……とても豊かだ。滑らかに……実っている……。『安産型』……それは神々の業……」

「……………は、はい？」

クールに気取りながら男は意味不明な言葉を重ねる。かと思いきや突如、パンツツ！とテールに両手を叩きつけて立ち上がり、

「君の臀部を舐めまわすように撮影してその一部始終をつぶさに高画質録画保存したいのですが、かまいませんね!!」

「はああ〜つつ!!?!」

というこの叫び声はあたしだ。なんなんだこの人は……？ 堂々と犯罪宣言か!?!
なんかヤバイ……。

そう思ったのと同時だ。その男のすぐ横に、突然スーツ姿の男が現れた。近くの物陰からいきなり出てきたとかではない。本当に、男の真横に『いきなり現れた』……。

ひと目でわかる、奇妙な像……。これは、スタンドだ……!

そのスーツの男は、いたって普通のスーツ姿の成人男性のようだった。ただひとつだけ、おかしいところがある。それは……

スーツ男の首から上は、『ビデオカメラ』だったのだ――。

そいつは、映画館の本編上映前に流れる、上映中の映画を無断で撮影するのは禁止で

すよ、という注意をする動画に出てくるアイツによく似ていた。『録画』、と男はさつき言っていた。つまりあいつは、あのスタンドで『撮る』気なのだ。志保さんの……………その……………お、お尻を……………舐めまわすように……………つぶさに……………高画質で……………

「——この……………どヘンタイがあぁーっっっ！」

「ど、どどど、どーしたの奈緒ちゃんっ!？」

マスターがレジを離れ、こちらに飛んでくる。それだけの大声をあたしは反射的に出してしまっていた。しかし、この光景を見たマスターもまた大声でこう言った。

「やだッ——これ『スタンド』ッ!？」

え……………? 今、マスター、『スタンド』って言ったか……………? 知ってるのかマスターは

……………スタンドをツ!？」

「バカ真面目に許可をとってるんじゃないやねえエーよ! そんなだからお前は『いい奴』ジェントルって呼ばれるんだよ! オイ! ——」

ここで、それまで黙って座っていたふたりの男のうちの手前の席にいた男が立ちながら言った。

「なあ、おい『いい奴』ジェントルよ……………俺たちはテレビ局の撮影クルーかなんかなのか? ん?

違うよな違うだろ? 俺たちやしよせん、さつきそこのお嬢ちゃんが言ったとおりただの変態なんだよ。顔がハンサムだからって体裁を繕おうとしてるんじゃないやねえッ、アホン

「ダラが！」

「パンツッ！」と軽快な音が響く。今立った男が、ニセ映画泥棒スタンドを出している『いい奴』^{ジェントル}という男の頭を叩いた音だ。

「あおうっ！——ゴメン、ゴメンよ『悪い奴』^{ワイルド}のアニキい！」

頭を叩かれた男は情けない声で謝った。

「オオウツ！『いい奴』^{ジェントル}、『悪い奴』^{ワイルド}！グダグダやってンじやねえぞッ！この状況がわからねえのか！もうコツソリなんてやってられんのだぞっ！」

そのふたりを、今度は奥の席に座っていた最後のひとりが立ち上がって叱りつけるように言った。

「だが俺たちはやると決めたら最後までやり抜く……！！『いい奴』^{ジェントル}！『悪い奴』^{ワイルド}！

『エツツツツツツロストリームアタック』を仕掛けるぞ！！」

「了解だっ！『ひどい奴』^{デンジャラス}のダンナあッ！」

最後のひとりのかけ声にふたりが応えると、それまで1体だったニセ映画泥棒が、3人に『分身』した。

『セクシャルバイオレット』ッ！ばんごおお——！！」

『No. 1』ッ！」

『No. 2』ウツ！」

「そして『No. 3』イッッッ！」

ババアアアッッ！

……………なんなんだ、このバカ騒ぎは……。

「よしっ！ というわけでそのマツチヨ！ 俺たちはこれからこの魅惑の安産型メイドさんを、主に腰部分を中心に全身余すところなく撮影するッ！ 痛い目にあいたくなくちゃ終わるまでおとなしくしてな！ それとその太眉モフモフヘアードさん！ お前もこつちに来いっ！ 哺乳瓶をしゃぶり倒す赤ん坊のように、その眉毛の一本一本を鮮明に徹底的に撮ってやる！ 俺は眉毛フェチなんだあああッ！」

『ひどい奴』があたしにまでヒワイな言葉を浴びせてきて、つらい。しかし志保さんが、それにマスターも危ないこんな状況でヘコんでもいられない。分身だと思ったが、さつき番号を斉唱したあたりあの3体のニセ映画泥棒はそれぞれ3人のスタンドのようだ。「アンタたちひどいわ！ オンナの敵やおッ！ 女の子をなんだと思ってるのよおッ！」

ヒステリックに叫ぶマスターを嘲笑うように、今度は『悪い奴』が不気味な笑顔で言った。

「フフ……俺たちのこの愛という名の欲望が、やがて秘めたる炎を抱えた世の男たちの『喜びへの道』となるのさ！ すべての美少女はそのための“糧”だあアーツ！」

とんだ変態スタンド使い連中だ……！　ここはあたしがなんとかしなきゃ、

——ジャラララア~~~~ン……♪

ん……？　なんだ？　ギターの……音？

「買い出しから帰って来てみれば……店がずいぶん賑やかだなマスター？」

音に続いて聞こえてきたのは、今ここにいて誰のものでもない声だった。

「なんだテメエはっ!?　どっから入って来やがった!？」

「質問はゆっくりひとつずつするもんだぜ、ご主人様？　まあいい」

『ひどい奴』のがなり声に臆する様子もなさそうな涼しげな声が、そのクールさを保ったまま男の質問に答えるのが聞こえてくる。

「まず最初の質問に答えると——見りゃわかんだろ。メイドだよ、この店の。まっ、期間限定の雇われだけどな」

声は最初の質問に、律儀に詳細までつけ足して答えた。

「それでもうひとつの質問は——店側の人間はフツー表から入らねえ。裏バックヤード口から入るに決まってるんだろ」

声がふたつめの質問にも答えた。今度のその声色には、苛立ちのような、怒りのよう

な……そんなざわめき立つものがわずかにあった。

「ギター抱えてカッコつけて……フッフ、色っぽい……色っぽいねエ、クールな流しのメイドさんよ？ 帰って来たばかりで状況がわかってねえのか？ ん？」

挑発するように喋る『悪い奴』のその声は明らかに苛立っている。

「ああ、わからないね。しいて言うならアタシが今のところわかってんのは、アンタら3人がオトコの風上にも置けないサイターのセクハラ野郎だつてことだけだな」

「……テメエ……」

『悪い奴』の挑発的な言葉に乗るように、声はハッキリとそう言った。どう見ても一触即発だ……。

「ちよつと……なつちちゃん……！ アンタそんなこと言つて大丈夫なの……!?!」

マスターがクールな声の主に話しかける。心配そうな声ではあるけど、マスターの顔はどこか安心していているような余裕が見えるのが不思議だった。

「ん？ マスターは、大丈夫じゃないと思つてアタシが喋つてると思つてんのか？」

「そうじゃないけど……」

マスターに『なつちちゃん』と呼ばれた声の主は、これまたクールなまま、おどけるように言った。

「うるせえぞつ！ この状況でうだうだ喋つてんじゃねえ！ てめえらT・P・Oが弁え

られんのかっ!? どう見ても余裕な態度をとってられる場面じゃなからうがっ!
 まったく、いったい誰に育てられたんだか……」

しびれを切らしたように早口で『ひどい奴』がわめき散らした。セクハラしてきたクセに妙に公共的なことにこだわるやつだ。

「——『ジミー・ペイジ』」

「……………あ?」

突然飛び出した外国人の名前に、3人の男たちは頭の上に大きな『?』マークを浮かべた。

「いま言ったろ? 『誰に育てられたんだ』——つてさ……ジミー・ペイジだよ。あとキース・リチャーズ。エディ・ヴァン・ヘイレンとブライアン・メイもだ。もつと教えてやろうか? ジェフ・ベック、ポール・スタンレー、パンキー・メドウズ、ポール・コゾフ、ニール・ヤング、バート・ヤンシュ、レズリー・ウエスト、ビリー・ギボンズ、リック・デリンジャー、ゲイリー・ムーア、スコット・ギーハム、ロニー・モントローズ、ロビー・ロバートソン、ロン・ウッド、ミック・ラルフス、スラッシュ、テッド・ニュージエント、ピート・タウンゼント、ジョージ・ハリスン、クリス・スペディング、ライ・クーダー、ジミ・ヘンドリックス……とにかく色んなヤツに育ててもらったってことだ。そして今もな……。まだ言ったほうがいいかい?」

まるで呪文だ。でもいきなり羅列されていく言葉たちの中に、なんとなく聞き覚えのある単語がいくつかあった。彼女はロックスターの名前を次々挙げていったようだった。

「オイオイオイオイオイ、生意気な金髪ブロンデーメイドさんよお……俺たちは、テメーの好きなミュージシャンの名前が知りたいわけやねえんだよ、つてか、わかかって言ってるよな？ えっ？ その態度が気に食わねえんだよおおおっ！」

度重なる彼女の余裕ぶりに『悪い奴』は荒れてテールブルの脚を蹴る。グラスとコーヒーカーップの中身がこぼれ流れて床に滴り落ちるのを今は誰も気に留めない。

「そうかい……アタシはその1000倍、アンタらがその子たちにとつた態度が気に食わねえなあっ！」

ここではじめて彼女の冷静な口ぶりが少し崩れた。崩れたその間から怒りの火が燻くすぶっているのがちよっぴり見える。

「はん！ てめえの気なんざ知ったこつちやねえ！ いいか……人間には2種類ある。タマを持つてる男と、持ってない女だ。持ってないやつが偉そうにしてるんじやねえっ！」

『悪い奴』のその差別的な口汚い罵りはヒートアップする。

「メイドさんだったら黙って、恥じらいながらも大好きなご主人様からの『ご褒美』を期

待しているのを隠しきれずに切なげな表情で瞳をほんの少し潤ませて熱い吐息をわずかに洩らしながらゆっ……くりとスカートをたくしあげてカワイイけど派手過ぎない控えめなデザインのまつ白なパンティを見せてりやいんだよおおおっ!!!」

『ひどい奴』がそれに続く。

「そうだよおっ!　そして俺たちの『セクシャルバイオレット』によつて、長時間超高画質でそんなところをねっ……とり撮られていることに少なからず不安と焦りを感じながらもあくまでそれを見るのは自分だけで他人に見せたりネットに流出したりしないよう厳重なセキュリティで保管していることも知っていて私はご主人様だけのメイドなんだご主人様だけのものなんだという事実をあらためて噛みしめてさっきまで感じていた焦燥感以上の多幸福感と更なるエクスタシーが押し寄せてご主人様に舐め回すように見られながら長時間超高画質で録画保存されている最中のカワイイけど派手過ぎない控えめなデザインのまつ白なパンティにあつたかくて半透明の液体でイヤらしいシミをつくつちやうんだよおおおっ!!!」

さすが『ひどい奴』と呼ばれるだけある。そのひどすぎる文言に、あたしはちよつと目眩がしてきた。

「バカ野郎。そんなこと、好きな奴以外に向かつてするわけねえだろ」

男たちが喋ってる間にクールダウンできたのか、彼女の声は先程のように冷静そのも

のに戻っていた。しかし……わかつて言ってるんだらうけど、そういう問題じゃないだろ……。

「ああもうその冷静っぷりマジムカつくう〜!! お喋りは終わりだ! 『いい奴』、『悪い奴』! アタック開始ーッッ!」

「アイアイサー!」

我慢の限界が来た男たちは、それぞれのニセ映画泥棒を3体すべて彼女へと襲いかからせた。ボーツと見てたらトンデモないことになってしまう……! 身構えて『ワン・ヴィジョン』を出そうとした、そのとき――

ダアツ、ダアツ、ダアンツツ――!!

「う〜う〜ぐつ!」 「もむべらあつ!」 「るがうううツ……!」

銃声が聞こえて、ニセ映画泥棒が吹っ飛ぶのと同時に、奇声をあげながら男たちもその場に崩れ落ちた。

あたしは振り返って、今日ここではじめて、買い出しから帰って来た『彼女』を見た。その姿は、いっしょに働いて2日目なので当然見覚えはある。しかし同時に見覚えのない点もふたつほどあった。ひとつはメイド姿のまま彼女が抱えているアコースティックギターのこと。そしてもうひとつは――

「男にも2種類ある。タマを持つている奴と、持つていると勘違いしている奴だ」

そう言い放つ、メイドさん兼ギタリスト然とした彼女のそばに、まるで用心棒みたい
に『拳銃を構えた『西部劇のガンマン』のような格好をした大男』が立っていたこと
だった。

「さてと、アタシのご奉仕は終わりだ。ご満足いただけただけなら……………お帰りください、
ご主人様？」

「……………ひえ……………ひいえええええええええええええええええ!!」

「お、おい『ひどい奴』！ 待ってくれよお!! 俺を置いてくなよおおおおう
わあああああああつ!!」

「えつ、ちよ、兄貴イ！ 待ってくれよお！ ひとりにしないでくれよおおおおおおお
おっ!!」

ドタバタと慌てふためきながら3人の無法者たちは料金も払わず全速力で店から逃
げていった。彼らが残していったのはメチャクチャになった2番テーブルだけだった。

「ふう。みんな大丈夫か？ なんもされなかったか？」

彼女があたしたちに声をかけた。その声色はさつきまでとは違う、優しい調子になっ
ていた。

「大丈夫だったけど……………もう、なっちゃん、相変わらず無茶するんだから……………」

冷や汗をかきかき、少しうんざりした感じでマスターがつぶやくと、

「悪いね、こういうやり方しかできなくて。アハハハハッ！」

悪いねと言いつつ、悪気がまったくないような明るさで『なつちやん』が笑った。その金色に染まった長めの前髪を揺らしながらニヒルな笑顔をつくる『なつちやん』は、間違ひなくあたしといっしょに昨日から体験生としてここで働いている木村夏樹きむらなつきその人だった――。

(つづく)

第15話『Want To Be Close』（神谷奈緒の冒険②）

ぼろぼろではないけどそれなりに使い込まれている布巾に、今はもうぬるくなっている冷水だった水が染み込んでいって布の感触にわずかな湿り気が混ざっていき、それは水が染み込んでいくほどにはつきりとしていって、さっきまでの布のふんわりした手触りが今はもうなく、手にはびちよびちよした水の感覚が次々伝わってきたから一度布巾を絞ってからふたたび床を拭いて、最後に別の布巾できっちり乾拭きをして掃除を終えた。

「あーあー、派手にブチ撒けちまって……」

ちやちやつと慣れた手つきでグラスにコーヒークップ、ソーサーを片付けながら夏樹さんが言った。茶に近いシツクな色味の金髪から覗く横顔は、ほんの数分前まであんなことがあったようには見えないくらい落ち着き払っていて綺麗だ。

「しかし、神谷^{アングタ}も『スタンド使い』とはねえ」

片付けを完全に終わると夏樹さんが冷水の入ったグラスを両手に持っていて、左手に

持ったグラスをあたしに差し出してきた。

「こんなビツクリ能力持つてる人がいっぱいいるとかコワイ世の中になったわねえ」

そんなに怖がっているようには見えない様子でマスターが言った。

「にしても、夏樹さんにはビツクリさせられたなあ。スタンド出したと思ったたら一瞬で3人吹っ飛ばしたんだもん……」

「ハハ、まあこの店の用心棒みたいなもんだな」

軽く笑う夏樹さんの背後に、例のスタンドが現れた。そう、これ！ 『西部劇のガンマン』のスタンド！

さっきの短い間、しかもとんでもないことが起こっている中で見たときでさえもカッコいいと思ったけどこうしてじっくり見ればさらにカッコいいし、じっくり見ることによってさっき見たときと印象が変わるところもあって、でもやっぱりカッコいい。

落ち着いて見てみると夏樹さんのスタンドは、髪型は男らしいリーゼントだけど、顔はけっこう線の細めな、いわゆるヴィジュアル系に近い顔立ちで初見のときよりも中性的な印象がある。背は高く、あたしの『ワン・ヴィジョン』ほどではないけれど身体つきも頑丈そうだ。口には煙の出ないタバコを咥えている、と思つたらそれは細長い白い棒だった。棒つきキャンディの棒みたいだな。上半身にはクモの巣模様のポンチョを身に付けていて、髪型に劣らず目立っている。そして腰に巻いたベルトの左側にあるホル

スターからは、拳銃の黒い持ち手の部分が見えていた。

「『ジギー・スターダスト』……コイツの名前さ」

ほえっつ、見た目もカッコよけりや名前もカッコいいのな。

*

一難去つて翌朝、3日目ともなればとりあえずひと通りの流れはぎっくりと覚えて、そこそこ余裕も出てくる。接客業つて忙しくて目まぐるしいものかと思つてたら、それはそうだったけれど、それはそうとしてけっこう楽しいなんて思うことも自然と増えてきた。

「お待たせいたしましたご主人様！ こちらコーンポタージュとコーンサラダのコーン多めになります。ごゆっくりどうぞ」

配膳を終え、2枚重ねた曇りのないピカピカの銀のトレンチを抱えながら志保さんが戻ってきた。

「それが、志保さんの……スタンド？」

「そうだよ……はいっ！」

と言つて、おもむろに両手にそれぞれ一枚ずつ載せたトレンチをあたしの前に差し出した、と思つたら志保さんが右手に載せていたほうのトレンチが突如として音もなく消えてしまった！

「おう、ホントだ……でも、それっていったいなんなの？」

「この上に料理を載せると、『料理の状態が固定される』んです。温度とか鮮度とか。暑いものと冷たいものをいっしょに載せてもそれぞれちゃんとその状態を保ってくれるから、料理をいつでも出来立てのままお客さんに提供できる、我ながらステキなスタンダードなのです！」

目を輝かせて自慢げに語ったあと、志保さんは空いた右手でOKサインをつくつてみせた。

「だからと言って何日も前のものを作り置きして出してるってことはないわよ？ 品質的には問題ないとはいえ……ね」

なんだか言い訳がましい感じでマスターが言うけど頷ける。そういう能力だからといって、じゃあとつくの前に作ったものをお客さんに出せるかといったら出せないだろう。この辺は実態よりも意識の問題みたいなものだろうけど、そういう風に思ってるほうがなんかいい気がする。

「自分で食べるぶんには節約とかになりそうでいいなあ」

軽く言ったら志保さんがビシッ！ とグーサインをしながらまた語りはじめる。

「そう！ それなの！ これがあれば作りすぎて余りに余ったパフェも食べられるの！ おかげで新作パフェ作りが捗ってるんですよ、マスター！ あとラーメンだって伸び

ずにとっておけるから、あらかじめ作っておけば好きなときにいつでもホカホカの状態
で食べられるんですからっ！」

「志保ちゃん……甘いものと炭水化物はほどほどにね。30過ぎると来るから……これ
先輩乙女からのアドバイス」

アクセルを利かせて話す志保さんにブレーキをかけるようにマスターが冷静に言う。
先輩乙女……先輩乙女？ 先輩乙女とは。

「大丈夫ですよ。たまにアヤちゃんや伊吹ちゃんの体力作りに付き合っただけで走ったりバド
ミントンやったり、このバイトもありますからっ！」

爽やかな笑顔の現役女子大生の志保さんの答えに先輩乙女たるマスターはたじたじ
になったのか、なにも言わずにちよつと硬い笑顔で返した。

先輩乙女……

あたしの頭の中で『先輩乙女』の文字が大量増殖してゲシュタルト崩壊を起こし、次
には『早乙女先輩』の文字が浮かんできて、やがてそれは『学園のアイドル・早乙女先
輩に密かに想いを寄せるヒロイン』という架空の少女漫画の1コマとなった。

「早乙女先輩……」

*

にしても……スタンド使っているのはちよいとした資格を取るようなレベルで身

につくものなのか？ 昨日の修羅場の時点で『スタンド』の名を発していたマスターはともかくとして志保さんもスタンド使いなのはまったくの予想外で、それは今日の朝更衣室でメイド服に着替えてるとき、こともなげに夏樹さんとの会話の中で知ったことで、夏樹さんはもうとつくにあたしがそれを知っているものだと思っていたようだった。

それだけで話が終わればまだちよつとビックリするだけで済んだらうけど、話はそれだけでは終わらなくて……

「うえええ、このお店にもそんなヤバい人来ちゃうのか……あたしらの城にそんなことが……恐ろしいじえ」

「このマスターがいるお店にそんなことしに来る人がいるんスねえ。大した度胸ツス」

「“この”ってどのよ？ “この”って……。でも、ウチの店員にはアタシが指一本触れさせないわよ！」

「そのヘンタイさんたち追い払ったの夏樹ちゃんでしょ。マスターはなんにもできなかったんでしょ」

「なんで知ってんのよ？」

「他ならぬ夏樹ちゃん本人から既に聞き込み済みだしえ」

「マスター……仲良いとはいえ実習生に助けてもらってどうするんスカ」

「アタシはまず志保ちゃんたちの身の危険を顧みてたのツ！ そしたら、買い出し帰りの夏樹ちゃんが空気も読まずに派手にやっちゃったのよ……結果オーライだったけど」
 「同じ『スタンド使い』の身でありながら女の子に助けてもらうなんて、オトコの名が廃るじえ、マスター！」

「おだまり！ アタシもか弱いオンナよ！」

「5000兆歩譲ってオンナだとしても、か弱くはないっすね」

「そんなに譲らなくてもいいじゃない。大気圏外に出ちゃうわよ……」

「空中移動能力のないマスターのスタンドじゃそれはムリっす」

「重力その他モロモロの現象もあるから地続きで放浪の旅やね。ユリユリなら聖地巡礼する〜」

「変にまともにツッコまないでよ……」

意気消沈しつつ比奈さん由里子さんと喋るマスター。3人のこの何気ない会話の中にも『スタンド』が登場していた。そう、夏樹さんが言うには比奈さんと由里子さんまでもがスタンド使いだという。この町の（他の場所がどうかは知らないけど）スタンド使い密度の高さにはほんとビックリというか、呆気にとられるというか……ワクワクしてくるといいうか、ワクワクするほかない。でも治安とかも心配だ。

*

「そういえば夏樹さん、バンドやってるの？ ギター弾いてたけど」

ランチタイム前の穏やかな時間。スタンド以外に気になっていたことも訊いてみた。「やってるよ。昨日のあのアコギはマスターのだけだな」

「え……」

まさかなんとなくて訊いてみたことから意外な情報が出てくるとは。マスターがバンドマン……バンドウーマン……。

「あれでメチャクチャ歌上手いんだよ。アタシの歌の師匠みたいなもんだし」

「なんか想像つかないな……ていうか夏樹さん、マスターとどういう知り合いなの？」

「ん？ 行きつけのライブハウスにマスターが出てて、そこで知り合った感じ。で、中学の頃、一時期ここでバイトしながら歌とギターを教えてもらってたんだ。ギターの腕はもうとつくに追い越したけどな！」

ニコニコ笑って夏樹さんはエアギターを軽くジャカジャカ弾いた。

「……中学生でライブハウス行って、そこで知り合ったおじさんと仲良くなって、その人がやってるお店でバイト……しかもメイド喫茶……」

「ハハハ……よからぬことは別にないからな？」

夏樹さんがちよつと語調強めに言った。いかん、そんなことを考えてる顔になってたみたいだ……。

「音楽の話で気が合ったし、歳だけで人を判断するようなヤツでもなかったからすぐに打ち解けたのさ。それに……いたからな、『彼氏』が」

か、『彼氏』……………」

「……そうなんだ」

「だからその辺の心配もムダにしなくてよかつたんだよ。メイド喫茶はさすがに面食らったけど、慣れちまえばなんてことないし、今じやすっかり憩いの場さ」

余裕ありげに話すけど、それにしたつて中学生でその行動力はスゴいと思う。あたしだったら中学時代はおろか今でも真似できる気がしない……………」

「あのさ、中学でバイト……………」してたの？」

「ああ。……………」あ、美城ウチの中等部はバイト禁止なのか。アタシは高等部からの美城生だから。中学は違うガツコだよ」

「あつ、なんだそうかあ〜——」

「その中学もバイト禁止だったけどな」

「え」

「店内BGM、店の雰囲気とぜんぜん合っていないだろ？ 全部マスターが趣味で選んでるからなんだよ。中にはアタシとか、アタシのバンドのメンバーでよく来るやつが選んだのもあるけどさ」

「えっ、あつ、うん？ そうなんだ？」

唐突に話題を変えられてしまった。少なくとも校則に縛られない程度の行動力を持つているようだ……。

*

このお店のレイアウト自体は、それなりに落ち着いていてメイド喫茶といえどもそこまでファンシーな雰囲気ではない。とはいえ、制服のメイド服は可愛い女の子がたくさん出てくるようないかにもアニメっぽいキュート系のデザインでスカートだつてそれなりに短くフリフリで、リアルメイド派（？）の人たちが見ようものなら即ダメ出しされそう。窓に少しだけ掛けられたカーテンもお屋敷のカーテンみたいな真っ白いフリルのものだし、メニューにスマイル（無料）やケチャップで文字を書くサービス（有料）なんかもあつて、いわゆる『萌え系』なコンセプトが少なからずあるお店なのだ。

けれど夏樹さんの言うとおり、このお店で流れているBGMはメロディよりもリズムが際立ったファンキーな曲やギターの音がガンガンに目立った曲ばかりで、しかも洋楽だ。お世辞にも大半の曲がお店のイメージにはまるで合っていないかった。だから選曲がマスターの趣味だと知つてあたしはひどく納得した。

「まあマスターの趣味ならお店と合つてなくてもそういうものなんじゃないかな。別にそれが原因でお客さんが来ないってわけでもないみたいだし」

勤めて3日の身分でなにかを語れる立場ではないけどお店はけっこう繁盛しているし、比奈さん由里子さんのように常連さんもいる。まわりの迷惑になつてるとか経営が赤字とかじゃなければ別に問題ではないだろう。現にあたしもちよつと違和感があつただけで不快だとは思つてないし。

「それに親しみやすさが無いわけではないし。何曲かあたしの知つてる曲もたまにかかつてるし」

「おつ、そりやマジか？ 例えば？」

夏樹さんが明らかに嬉しそうに、といつても身を乗りだしたり鼻息を荒くしたり目を輝かせたりはせずに反応したので、あたしもその態度になんだか嬉しくなつて鼻息が荒くならないよう気にしながら答えた。

「んー、ビートルズにクイーンだろ……あとニルヴァーナ、レディオ・ヘッド、そんなとこかな」

ここで聴いた覚えのある曲の断片を矢継ぎ早に思い出しながらアーティスト名を挙げていった。ビートルズやクイーンは馴染みやすいし、店の雰囲気になんとなくとも合わないというほどでもない曲だつてあるからまだ自然なほうだけど、メイド喫茶でニルヴァーナはやっぱ場違いだと思う。でも『ラヴ・バズ』が流れたときはひそかにテンションが上がった。

「いいねえ。わかるやつがここにもひとりいるって知ったらマスターも喜ぶぜ」

「いや、ほんのちよつとしか知らないよ？」

「いいんだよ。そういうのがわかる同級生は貴重だからアタシも嬉しい」

「そう？　なんか少し照れるなあ。好きな曲を聴くってだけで知識的なことはぜんぜんだし、クイーンの名前のメンバーの名前もフレディ・マーキュリーしか知らないし」

「アハハツ！　上等上等！　ウチのバンドのボーカルはフレディすらわかんなかったからな！　でも『この曲いいよね、カッコいいよね』って無邪気に言っただけ。その単純な気持ちは大事なんだよな。誰だって最初はそういう気持ちで色んなものを好きになるわけだし」

そう話す夏樹さんの様子に楽しそうで無邪気な感じがあるんだけど、それを言おうかどうか軽く悩んでいたら、耳が新しく流れ出したBGMに敏感に反応するのを感じた。

「んっ!?　……ん？」

「どうした？」

「いや……今流れてる曲、一時期よく聞いてた覚えが……なんの曲だったっけかな……」

すごい聞き覚えがある、脳がやたらと嬉しく感じてるからそれは間違いないと思う。けど誰のなんて曲かはスルツと抜け落ちたかのように出てこない。

「ああ、これはウチのバンドのベーシストが選んだ曲だ。曲名は……アタシも知らないな。ゲームの曲だって言ってた気がするけど」

ゲーム……？ ゲームはそれなりにやるけど……うーん、思い出せない。

「ド忘れしたっばいなあ……曲だけ知っててゲーム自体はやってないのかも」

「ド忘れならそのうち思い出すだろ」

「だね」

~~~~~

と、店内にランチタイムを知らせるメロディが鳴った。

\*

メイド喫茶ではあるもののマスターが料理上手なこともあってこの店のランチタイムはなかなか激動だ。毎日のようにやって来る比奈さんと由里子さんは当然それをわかってるからランチタイム前には店を出ていく。そういうお気に入りのお店との呼吸を合わせるような気遣いぶりが微笑ましいというか羨ましい。羨ましいだけでなく、今はここで働いているあたしにとっても、その配慮が生むありがたさの一端のようなものを偉そうにも感じていて、体験学習はこういうことを知るためにあるのかなんて少し思ったりもしているけど今は忙しくて考えに集中してはいられない。

「お待たせしましたご主人様〜！ 『妖精の王様御用達ミルクプリン』と『森の木陰でひ

と休みホットココア』になります〜」

……このネーミングセンスにはまだまだ全然ついていけそうにない。ホントにマスターがつけたのか疑いたくなるほどの乙女チックさだ。スイーツ関連のメニューにしか付けられてないだけマシか。お客さん側はいいな、単に『ミルクプリンとホットココア』って言えばいいんだから。

「はいお待ちどう、主人様。ハニートーストとフルーツオレね」

……ハニートーストは『蜜蜂さんたちの舞踏会ハニートースト』、フルーツオレは『妖精の王様も夢中フルーツオレ』って名前なんだけどなあ……夏樹さんはあくまでブレない。ちなみに妖精の王様シリーズは他に『妖精の王様お気に入りガトーションヨコラ』と『妖精の王様イチオシイチゴタルト』がある。妖精の王、いろいろオススメしすぎ。国の統治で忙しいだろうけどもつと悩んでから推しを決める。挙げ句には『妖精の王様が王子時代に好きだったマロングラッセ』なんてのもあって、やたらと妖精の王がフィーチャーされていてこの店と妖精王国との癒着関係が疑われている。誰にだ。

\*

メイドになってから3度目のランチタイムを乗り切り、とたんにガランとした店内でマスターが小さな声で「あっ」と叫んだ。

「マスター、どうかした？」

「ウエハース買い忘れちゃってたわ。なっちゃん悪いけど今日も買い出し行ってくれない？」

「ええ、またかよ……？ 自分で行ってきたらいいだろ」

「昨日あんなことがあったのに外出なんてできないわ。今度万が一があつたらアタシがお店と従業員を守らなきゃ」

「じゃあアタシひとり買い出しに行かせるのもナシなんじゃないか？」

「なっちゃんだつたらバイクでちゃちゃつと行ってこれるでしょ。お願い！」

胸の前で両手を組んで上目遣いで祈るみたいに夏樹さんに懇願するマスターのその仕草を見ても、今ではあまりヘンに感じてない自分がいた。

「すぐ行けるつたつて……メンドーだな。また着替えるのかよ……」

「そのままでも構わないわよ。ジャージ穿いて行ってきたら？」

「誰がそんなカツコで乗るかよ」

「水着で海岸沿い転がすよりはマトモよ」

「だろうな。でもどつちにしてもアタシはやらないね」

「なんでそんなことやつたのかしらね、たくちゃんは」

「暑さと夏休みで脳がオーバーヒートしてたんだろ」

「今年はやらないよう注意しなくちゃね」

「去年の時点でさんざんリナに注意されてたから大丈夫だよ。たくみはバカでも、話は聞くバカだからな」

「リナちゃんに言われたなら尚更ね」

どうやら突如としてあたしの知らないふたりの共通の友達の話に入ったみたいで、話を聞いている限りでは『たくみ』という人が去年の夏休みに水着でバイクに乗ってたらしい。うーん、想像してみたら気持ちよさそうな気はするな……。まあ男の人ならバカで済むかもしれないけど、女子あたしがやったらアウトだ。やらないけど。バイク乗れないし。

「色気付いてきたのかしらねえ、たくちゃんも」

「いや、そういうわけではなさそうなんだよな……。気持ちいいと思つてやってみたくなっただけらしい」

「……耳の痛くなる話ね。あの子、まわりの視線が気にならないのかしら。保護者ヅラするのもなんだか不安だわ……」

「アタシもそこはよくわからん。自分で谷間出してんのに、ほんのちよつとチラ見されただけでキレルしな」

「うん、そうね……。オトコ側に肩持つわけじゃないけどアレは見ちゃうわよ」

「勘違いされるようなカツコシといてナンパしてきたらキレル。アリ地獄みたいなヤツだな！ 正直ツルんでて飽きない」

「そこは止めなさいよ。っていうか、なっちゃんだつて割と攻めたカツコするときあるじゃないの」

「アタシのはライブ前にギア入れるみたいな意味でやつてるだけだし、近づいてきたらきつちり断るつての。いきなり照れて顔赤くしながらブン殴ったりしねーよ」

「堂々と見せつけといつてウブとか、なかなかあの子も魔性よね。このままじゃ今年の夏もヘンな虫にたかられちゃうわよ」

「心配かい?」

「心配は心配だけど、まつ、たくちゃんだしね……大丈夫でしょ。あの子アタシより力あるし、リナちゃんもついてるし」

「……………女なのツツ!?!」

思わず声が出た。途中からすっかり聞き耳立てて夢中になつちまつた……。

「あ、ごめん。でもなんか、だいぶアレだね。その『たくみ』さんつてヒト……」

「アハハツ! 今のハナシじゃそうも言いたくなるよなあ!」

人の世間話に聞き耳を立てていたことをふたりとも別段とがめる気はないようで、夏樹さんは大きく笑つてマスターもそれにつられそうになつて笑顔を噛み殺していた。

「同級生のダチだよ。向井拓海むかいたくみつて、フルネームならたぶんわかるだろ?」

「えっ!?!」

ひよつとして、あの『ムカイタクミ』のこと……？

顔はおぼろげだし詳しいこともわからないけど、『ムカイタクミ』の名前ならおそらく高等部の生徒はほとんど知っている。

『ムカイタクミ』のウワサは有名で、町のガラの悪いバイク乗りのチームをひとりで壊滅させたとか、女子高生なのに100人くらいの規模の走り屋チームのリーダーをやつてるとか、美城の『特攻三鬼龍』<sup>マッシュライダース</sup>なんていう、町のバイク乗りたちに伝わる伝説の3人のバイク乗りの内のひとりだとか、どこかの月刊少年マンガ雑誌みたいな根も葉もないウワサがたくさん語られていて、つまり恐れられているということだ。

「あの『ムカイタクミ』の、トモダチ……なの？」

「『どの』かは知らないが、そうだよ。……70%<sup>パー</sup>くらいはアイツ自身の振る舞いによるものだけど、あんまり妙な偏見を持たないでやってくれ。頭は悪いが、悪いヤツではないからさ」

「そう……」

「悪いヤツではないけど頭は悪いヤツだからさ」

「なんで文脈入れ換えて言い直すのよ」

人差し指と親指で口ひげを撫でながら半笑いでマスターが言う。

「まつすぐすぎるくらい根はいい子よね。荒っぽいのはまあ事実で、だからヘンな逸話

が次から次へとできてるわけだけど」

「まったくただのウワサ……ってわけでもないんだけどな」

「ええっ!!」

ホントのことが存在するのか？ 全部デマだと思っただけ……。

「しようがない、買い出し行ってくるわ」

気になるところで話を切り上げて夏樹さんはカウンター奥に消えていった。向井拓海……：…いつたいたいという人なんだろう？

\*

「へいへ〜い、まだやってるう？」

「課金しに来たっスよ〜」

「そういう言い方しないっ!」

ぴしやり、とマスターの一言が入り口に向けられて、そこには比奈さんと由里子さんがいた。本当にこのふたりは筋金入りの常連さんだ。一日複数回訪れる、どころかお客さんの出入りが少ないタイミングにやってくる。配慮がガチ勢のそれだ。メイド喫茶ガチ勢だ。

「姫、お紅茶をいただきたい気分にございますわよ?」

「はい、お待ちくださいお嬢様〜!」

「アタシはエナドリで」

「ないです！ お好きな席へどうぞ〜」

志保さんが応対とツツコミを同時にこなす。出遅れたあたしは入口付近というほどでもないところで足を止める。志保さんはホントに反応が速くて、お互い手が空いても来客への反応は志保さんのほうが3歩くらい速い。

——カラ〜ン……

「お帰りなさいませ〜ご主人様っ！」

奥へ戻ろうと入口に背を向けた瞬間またベルの音が聞こえたので、あたしはそのままクルッと一回転してふたたび入口に向き直りつつ挨拶した。接客態度としては行儀が悪い。マスターに微妙な顔で見られてるかもしれないと背後が気になりながらも入口を見た。

「ただいま、かわいいメイドさん……」

そう囁いてそこに立っていたのは『デンジャラスひどい奴』——昨日のビデオカメラ人間のスタン

ド使い3人衆と知らない男の人がひとり……不気味な笑顔の4人の男たちだった。

（つづく）

第16話『If I Weren't So Romantic, I'd Shoot You』(神谷奈緒の冒険③)

およそ24時間ぶりに店の中に緊張が走る。どうかしてるぜ、昨日の今日で来るなんて。

「捕まえて早苗ケイサツさんに突き出してやる!」

昨日は夏樹さんにビビって慌てて逃げていったから、性懲りもなく現れたのはある意味ラッキーだ。

「威勢がいいなあモフモフ太眉メイドさんよお! 昨日のあの金髪ブロンドメイドが出払ってるのはわかってるんだぜ!? 半日この辺りを張り込んでいた甲斐があったってもんよ!」  
『デンジャラスひどい奴』が嬉しそうに大声で言った。たしかこいつは眉毛フエチだとか言ってたやつだ。ああ、やだなあ……って、いかん。萎えてる場合じゃない。

「会いたかった……安産型メイドさん。君の魅惑の腰回りに私は胸騒ぎの腰つきを余儀

なくされるだろう……」

比奈さん、由里子さんの座る6番テーブルの脇にいる志保さんのところへ近づきながら、静かに、でもハキハキと明瞭な声で大柄な優男やさわたくしが喋る。昨日いきなり志保さんに向かつて堂々とアレなことを言っていた、『良い奴』とか呼ばれてたやつだ。

「やはりあなたの腰つきはヴィーナスにも引けをとらない。初めて見たときから……うふふふ……下品なんです、その、うふふふ……」

「それ以上の発言は慎んでもらおうかしら？」

カウンターからフライパン片手に出てきたマスターが言った。口髭をたくわえたエキゾチックな顔から刺すような瞳が覗く。迫力はあるけど頭の中にあるいつものマスターの姿のイメージであまり怖いとは思わない。

「うるさいよマツチヨマン！ この俺の、セーフティ・ボーン・スウィート・ベイビー・レイディーへの愛の言葉ことばを邪魔するんじゃないよ！ あばら2、3本折るよ？」

「ハン！ やつて……」

『良い奴』の言葉にマスターは途中までそう言ってから――

「フンヌラバツ！」

謎の叫びとともに持っていたフライパンを、グニヤリ！ 折り曲げて自らの筋力を見せつけた。

「……みなさいよ?」

マスターは少し息を乱しながら『良い奴』の方を見た。男たちは最初こそ驚いた顔を見せたものの、すぐに笑顔に戻って馬鹿にするようにマスターを笑った。

「ハハハハハハ! とんだ怪力野郎だ。だがな、店長さんよ。オレたちにそんな筋力関係ねえんだよ。信じられねえだろうが、オレたちみんな『超能力者』だからなっ!」

『超能力』——スタンドのことだな。こいつら、スタンド使いであることを鼻にかけてるみたいだけど、夏樹さんに攻撃されて即逃げしてたから、こつちとしては都合がいいけど知らないんだ。あたしたちもスタンド使いなのを。

「いいか? 嬢ちゃん並びにマツチヨマン。超能力は超能力者にしか見えねえんだ。つまりオマエらはオレたちのチカラがまったく見えねえってこつた。……この意味がわかるか?」

ピーンと鋭く伸びる長鼻の頭を人差し指でかきながら『悪い奴』が、呼ばれている名前のように意地の悪そうな目つきであたしたちに訊いてきた。大きな勘違いをしているとも知らずに……。

「へへへ…… やりたい放題”ってことだよ!」

その言葉を合図に、『奴ら』が出てきた。ビデオカメラが頭になってる人型のスタンドが3体。同じスタンドが発現することもあるのだろうか。そして今日初めて会った4

人目の男は未だなにも動きはない。でもこいつもスタンド使いではあるだろう。

「あああああああつ興奮してきた！ お嬢さん、おとなしくスカートの中を見せてごらん！ イヤ？ それなら太もも……それもダメならニーソックス……せめて靴だけでも！ お願いだよおうわああああああん！」

懇願の叫びを上げて『良い奴』が突然土下座を始めた。床に何度も頭を打ちつけている。頭が痛い。土下座をしてるのはあいつなのに。

「違うねっ！ 全部だ！」

と思つたらいきなりそう言つてヤツのスタンドが襲いかかつてきた！ 志保さんに向かつて一心不乱に由緒正しい、俗に言うルパンダイブの体勢だ。

——スコオンツ！

「あひんっ!?!」

しかし男のスタンドは頭から床に不時着して倒れた。なにか小さいものがビデオカメラ男の顔に当たつたのが見えた。

「メイドさんの敵はアタシの敵ツスよ！ おとなしくするツス！」

志保さんのそばにいた比奈さんが、そう言つて銃を構えてた。夏樹さんのスタンドが持つてたような古いタイプのやつではなく、映画でもゲームでもいちばんよく見かける見た目のやつだ。

「んごごっ……邪魔をしゃがってメガネ女子！ エアガンか、ガスガンか？ どっちもちそんなもん持ち歩いてるんじやあないっ！」

「おい『良い奴』、待ちな！」

イライラしてる『良い奴』を制止して『悪い奴』が言った。

「撃たれたのはためえ自身じゃねえ、能力の方だ！ つーことはよ……」

「んがっ!? そうだ！ テメエも……超能力者かメガネ女子!？」

気づいた『良い奴』が鼻を押さえながら叫んだ。

「当たりツスよヘンタイさん。ケガしたくなかつたらもう観念するツス！」

銃を構えたまま油断なく男たちを警戒する比奈さん。いいなあ、カッコいい……。比

奈さんも銃のスタンド能力なのか。

「ちいっ！ 金髪以外にもいたのか！ 最初の標的はお前だメガネ女子！」

続いて『悪い奴』のスタンドがぬらり、と躍り出て比奈さんに迫る。

「ユリユリーツ！」

「ガッテン！」

比奈さんの声に由里子さんが応えると黒い塊が突然現れてビデオカメラ人間その2に突っ込んでいった。

「んごごおおおおっ！」

空席の椅子やテーブル上のメニューを蹴散らしながら、スタンドごと『悪い奴』が突き飛ばされて床に叩きつけられた。

「志保ちゃんにつく悪い虫は容赦しないじえ……」

由里子さんの前に堂々と立ちはだかる黒い塊……。目の部分以外顔の上半分が隠された黒のマスク、上半身は裸で胴体に鎖が×の字に巻かれていて、下半身もレザーパンツを履いているみたいに身体の線が出ていて黒光りしている。かなりアヴァンギャルドな見た目の男だ。しかも体当たりで相手を吹っ飛ばせるほどのパワー持ち。どうやらこれが由里子さんのスタンドらしい。

「ぬう……なかなかのパワー、だが学生時代登山部でならしたこのワイルドボディは簡単に屈しない……ぞ……ぞ……?」

威勢のいいことを言ったと思ったら、急に歯切れが悪くなり、そして直後になぜか回れ右のような動きを繰り返して『悪い奴』はその場をグルグル回りだした。

「……!?! お前ツ、俺になにをした!」

回るのをやめると、今度は慌てて壁際に寄ってなにかをかばうように壁に背中をぎゅつと押し付けた。

「なんなんだ一体!?! 『後ろが気になってしょうがない』ツ!!」

「『後ろが気になる』?」

「そうだ！ 壁に寄りかかればマシになるが……背後になにもないと異様に『怖くなる』のだっ！ おそらくあの太眉お嬢様の能力に触るところなるのだ！ そうに違いない、だってアイツの能力に突き飛ばされる形で触れてしまったのはぼくら4人のうち今のところ我輩だけなもの！ Q. E. D. (以上証明終了) 気をつけるテメエら！」

「イエツサーー！」

『悪い奴』が瞬時に予測をまくし立て、他の奴らも瞬時にそれを理解して返事する。あたしらにとつて、なんて不必要な理解力なんだろう。太眉 “メイド”<sup>店員</sup> 呼びと “お嬢様”<sup>お客さん</sup> 呼びであたしと由里子さんを区別してるのも腹立たしい。

「ダメなときはターゲットを変えるに限る！ オアアアアアアッ！」

由里子さんを狙うのを早々に諦めて、今度はあたしに向かって『良い奴』と『ひどい奴』のスタンドが走り出した。

「上等だよ、『ワン・ヴィジョン』！」

スタンドを出して迎え撃つ。『上等だ』——こんなバトルマンガな台詞を実際に言う日が来るとは。言ってみたかった台詞でないこともなかったもんだから空気読めてないのは自覚してるけど感無量だ。

「ええええええ!? お前もか太眉メイドオ！」

あたしもスタンド使いであることに驚きながらもふたりのスタンドはひるむことな

く突っ込んでくる。この人たち、ホントに夏樹さんさえないなければなんとかなると思っ  
てたんだろう。ただひたすら向かって直接攻撃しようとするばかりだ。

「アタシのこととも忘れないでエエッ！」

そして急に響き渡るマスターの、なぜか嫉妬めいた甲高い声。次の瞬間、やつらのス  
タンドの足元に大量の『水』が飛んできた。

「んおっ！ こらヒゲマツチョ！ 水をかけるんじやあ……とととおあっ?!」

スッテーン！ とふたりのスタンドが勢いよく転んだ。マスターへの注意の言葉も  
満足に言えずに、本体である『良い奴』と『ひどい奴』もその場で思いつき転んだ。

「ンだこりや……ヌルヌルする！ 気持ち悪い……オイルか？」

「オイルよ。引火性はないから安心しなさい」

あっさりマスターが答えた。

「このっ……んごおー！」

「た、立てん！」

スタンドが必死に立ち上がろうとする……が、すぐにまた滑って転んで床に横にな  
る。それがフィードバックして本体のふたりもやつぱりまた倒れる。

『ひどい奴』のダンナあ！ 俺たちの能力は普通のものからは干渉されないんじやな  
かったかあ!？」

「そうだよ……つまり、このオイルも能力だっ！」

「そういうことよん」

マスターが涼しい顔でウインクして答えた。

「さあ、ユリユリ！」

「そいやあー！」

由里子さんのスタンドがすかさずオイルまみれのビデオカメラ人間に触れる。

「ふふふ……我がスタンド『バック・ドア・マン』は触れると背後が気になってしょうがなくなくなる能力！……いいじえ、このセリフ。マンガみたい！」

不敵に笑って自分のスタンドを紹介してみせる。由里子さんも少しシチュエーションに酔ってるようだ。

「おあ、おとおおおあ!？」

「な、なんだ!? なにか後ろにいるような……!？」

由里子さんの説明通り、ふたりはしきりに背後を気にしだした。

「『良い奴』、とりあえずお前の背中を俺のにくつつける！」

「ラジャー！」

「……おお、ちよつと落ち着いた」

「ココアでも飲みたい気分ですね」

「そうだね」

アホなことを言いながらふたりは背中合わせになった。

「ぐへへへへへ、いいじえ……もつとその大きくて逞しい背中を強く擦り合わせるんだよおおおっ!!」

由里子さんはなんだかへんなスイッチが入ったみたいでいきなり喜びだしてるし……。

「能力いったん引つ込めたらいいじゃん……」

突如響く声。ボソツとつぶやくようだったけど、異様によく通る声質で全員が声のした方を見た。昨日はいなかった4人目の男だ。いちばん小柄で、表情も覇気というか、意志の強さみたいなものを感じさせず、上の空のように見える。

「おお、おさまった。さすが『静かな奴』のダンナア!」

「……とりあえず、男を沈めておこう」

スタンドを解除して背後への恐怖感がなくなったのか、安堵する男たちを確認して『静かな奴』と呼ばれている小声の男は、着ている灰色のジャケットの胸ポケットから鉛筆を取り出し、芯をこちら側に向けた。

「……『ロケット』」

ボソツと呟いた瞬間、鉛筆が『静かな奴』の手から猛スピードで飛び出した。

「痛っ!」

少し大きな声でマスターが叫んだ。

「マスター!?!」

「大丈夫大丈夫。ちよつとチクツとしたわ」

振り返るとマスターは小さく手を振って無事をアピールしていた……が、左胸に鉛筆が突き刺さっている。

「いやいやいやいや、刺さってるじゃん?!?!」

「大丈夫だってば。服だけだから♪」

「へ?」

そう言つてマスターは平然とした顔で鉛筆を抜いた。

「制服に穴が空いちやつたわ」

「……はあ……!?!」

そのマスターの様子を見て、言葉少なは

変わらずだが『静かな奴』が目を見開いて明らかに狼狽していた。

「アタシのボディを舐めてもらつちや困るわ」

いや筋肉じゃさすがに防げないだろ!　と思わずツッコもうとしたら、顔だの首だのマスターの肌がやたらとテカテカしているのが見えた。

「それ、さっきのオイル……?」

「Exactly」

すごい流暢な発音でマスターが答えた。いやオイルでも防げないだろ! とツッコもうとしたけどオイルはオイルでもスタンドのオイルなので、まあ納得できないことも……ない。

「くそっ……」

男はもう一本胸ポケットから鉛筆を取り出し、それを今度はあたしに向けた。

「つとー!」

かなりのスピードだけど『ワン・ヴィジョン』ならステッキを使わずとも取れないことはない。鉛筆は当然削ってあつて芯がバツチリ尖ってる。HB、頭に消しゴム付きだ。

「な……」

「なんだとオ!?!」

『静かな奴』よりも『ひどい奴』が大声を出して驚いた。

「悪いね。それくらいならなんとかできる程度の能力なんだ」

決まった……。あたし、今カッコいいんじゃないか……?」

「ぬんっ!」

奴は腹立たしげに鼻を鳴らして今度は由里子さんに鉛筆を飛ばした。

「おお〜っと!」

由里子さんのスタンドも難なく鉛筆をキャッチした。身体能力的にはあたしと同じタイプのスタンドだな。

「フツ……まだまだだね」

あたしに習ってなのかこれまたキメっぽいセリフを声までつくって由里子さんが呟いた。少しハスキーな声もあつてまさに王道少年マンガ原作アニメの主人公のような感じがカッコいい。

「クソツ、クソツ!」

苛立ちに任せて今度は比奈さんに向かってさらに鉛筆を飛ばす。

「盾はすでに用意済みッス!」

そう言つて比奈さんの両手に、まるで手品みたいにいきなり警察の機動隊なんかが使つてる盾が現れて鉛筆を弾いた。〃用意済み〃つて……どこから出したんだろう? なんてそんなもの持つてるんだろう?

「あああああ、マジムカつくぅ〜!」

『静かな奴』ははつきりと怒りの感情を声にして、何度めの正直とばかりに次は志保さんを狙つた。だがそれもすぐ近くにいる由里子さんのスタンドによって阻まれた。

「ぐるぐるるるるうわあああああゝっ!!」

『静かな奴』という名前はどこにいったのか。すっかり喚きながら男はまたしてもポケットに手を入れた。

「やかましいぜ、ご主人様?」

と、厨房につづく扉が開く音と声。アコースティックギターを抱えて、昨日の再現かのように夏樹さんが買い出しから帰ってきた。昨日と違うのはメイド服に着替えずに私服のまま入ってきたことだった。

「またか、と思ったが……ロクデナシがひとり増えてるな。歓迎しないで」

「ぐっ……帰ってきちゃった……!」

昨日すでに打ち負かされた3人は夏樹さんの登場に焦りを隠せず気色けしきばんでいる。こいつらの予定では夏樹さんが帰ってくる前に目的を果たしていたんだろう。『目的』がなんなのかについては考えたくない。

「お前が例の金フロンティア髪か」

恐らく3人から彼女の強さを聞いているのだろう。さっきまでのヤケクソな態度が嘘のように消え、元の無感情なトーンで『静かな奴』が夏樹さんに尋ねて、そのテンションの落差に少し笑ってしまいそうになるほどだった。

「いや違う」

「ウソをつくなア！」

「ああ、ウソだよ」

『悪い奴』の怒鳴り声も気に留めず、軽口が店内を駆け抜けていく。

「なるほど。気に入らない女だが、骨はありそうだな」

そんな夏樹さんにのペースに囚われることなく『静かな奴』は平静を保っている。

「だが俺をよく見て考えることだな。俺は『両手をポケットに入れて』。注意することだな」

たしかに言った通り、男はさつきまで胸ポケットから鉛筆を取り出していたのに今はジャケットの左右サイドにあるポケットにそれぞれ両手を突っ込んでいた。

「なっちゃん、アイツは鉛筆を飛ばしてくるの。銃みたいに……」

「そういうことだ」

マスターが夏樹さんに能力のことを教えても『静かな奴』は冷静な態度を崩さなかった。さつきまで散々攻撃を防がれてキレそうになつたのにここにきて我を忘れないのはやっぱり夏樹さんに用心してるからなのか……。

「なら話は簡単だ。どつちの能力銃が速いか……だ」

そう言うのと隣に立っている夏樹さんのスタンド、たしか名前は『ジギー・スターダスト』——が、左手を腰に着けた拳銃を収めているホルスターの位置まで静かに上げた。

「……ギターを持ったままでやる気か。注意しろと言ってやったのに」

「見てくれはふざけてるかもしれないが、コンセントレーション集中力が大事なものは百も承知さ」

「……そうか。それがお前の本気か」

「あとはコーラ味のアメがあればな」

「……そうか。だがそこまでお前に留意するつもりはない。世の中正々堂々と振る舞う奴は少ない。お前らのような女子学生はなにも知らないだろうが、社会は喰うものと喰われるもの、この2種類の人間しかいない。喰われたくなければ常にスコ」

「喋ってないで撃て」

「カッチーン！ という音が聞こえてきそうなくらい『静かな奴』が大きく目を開き、怒りを速度にでも換えたのかのような勢いでポケットから両の手を引き抜いた——と同時に銃声が聞こえて、男は床に倒れていた。4人全員が、だ！ 『静かな奴』のそばの床には大量の鉛筆が転がっていた。危うく穴だらけにされるところだったわけだ。」

「すつ………げえ。どうやって……？」

「アハハ——」

なんとか声を絞り出したあたしに無邪気に笑いながら夏樹さんは答えてくれた。

「こうしてギターを構えたり、コーラ味のアメを舐めて集中力を高めてサイコーに集中するとだな……『まわりの動きがゆつ……くりに見える』のさ。4、5秒だけだけどな」

なんて能力だ。でも一瞬で4人倒してるくらいなんだから本当なんだろうな……。

ともかく、4人揃って地面に倒れてピクピクしてる今がチャンスだ。学園に連絡を入れ、お店を臨時休業にしてみんなで不審者ーズ（今名付けた）を見張りながら、あたしたちは早苗さんが来るのを待った。

待っているときに夏樹さんが言った。

「『常にスコ』……なんだったんだろうな」

それはあたしも気になっていたが、別に『静かな奴』に聞いたです気はなかった。夏樹さんもそうまでする気はなかったようではばらくみんな黙っていたが、マスターと志保さんが一度厨房に引っ込んでココアを持ってきてくれたのでみんなでそれを飲み、談笑しつつ改めて早苗さんの到着を待っていた。

(To Be Continued……)

## スタンド紹介④

『ジギー・スターダスト』

【本体】きむらなつき  
木村夏樹

【破壊力】A スピード—A 射程距離—E

持続力—D 精密動作性—A 成長性—D

・年季の入ってそうなワークシャツにベスト、ブルージーンズにウエスタンブーツ、そしてクモの巣柄のポンチョ（『ポンチョ クモの巣』で画像検索して最初の方に出てくるようなデザインでは断じてない）を着て腰に拳銃を一丁携えた、西部劇のガンマン姿のスタンド。棒つきキャンデーの棒を咥えていたり、いなかったりする（能力に変化はない）。髪型は夏樹のデレステ3Dモデルと同じ。顔はヴィジュアル系のようなメイク感のある顔をしている（身も蓋もない言い方をすると、映画『荒野の用心棒』のクリント・イーストウッドの格好をした若い頃のデヴィッド・ボウイみたいな感じ）。拳銃は『コルト・シングルアクション・アーミー』に似ている。装弾数が6発なので一度に連射できるのは6発まで。弾は少し間を置けば回復する。

## 【能力】

・ものすごく集中すると、ほんの少しの間『時間の流れ』がゆっくりになる。

・夏樹いわく、ギターを抱えてコーラ味のアメを舐めているときがいちばん集中できるらしい。

\*  
\*  
\*

『HOT! M E N U』  
ホッ ト・メ ニュー

【本体】まきはらしほ 榎原志保

【破壊力】なし スピード—なし 射程距離—C

【持続力】A 精密動作性—A 成長性—D】

・料理を運ぶ『トレンチ』のスタンド。2枚まで出せる。いつでも銀色にピカピカ光っていてキレイ。なにげに銃弾を防げるくらい頑丈。

## 【能力】

・上に載せた料理（トレンチだから当然食器越しでも発動できる）の状態が、載せてる間『固定』される。ラーメンなら麺は伸びずにスープもアツアツ、アイスクリームなら溶けない。鮮度も固定されるから消費期限も気にならない（気持ちの問題はある）。パフェを作りすぎても大丈夫。射程距離（20mくらい）もあるので常にトレンチを持つてゐる必要もない。

\*

『バック・ドア・マン』

【本体】大西由里子おおにしゆりこ

【破壊力】A スピード―B 射程距離―E

【持続力】B 精密動作性―B 成長性―E

・目の部分だけ穴の空いた顔上半分を覆うマスクを被り、剥き身の上半身に鎖を巻き、黒光りするレザーのパンツを履いたデニムでダークでファンタジーな男の姿をしたスタンド（身も蓋も以下略）、プッチ神父の『ホワイトスネイク』とVAN様（知らない人はそのままの君でいてくれ）を足して2で割ったような感じ）。

【能力】

・このスタンドに触れられた者は、『背後』に異様なほどの恐怖心を感じるようになる。  
 ・どこかに背中を密着させると少し落ち着く。能力射程が短い（5〜6m）ので離れればすぐに解除される。

\*

『フィジカル・グラフィティ』

【本体】荒木比奈あらかきひな

【破壊力】なし スピード―なし 射程距離―C

持続力—B 精密動作性—C 成長性—C】

【能力】

・本編で全然説明されていないけど『Gペン』のスタンド。描いたものが『実体化』する。描いたものの能力は本体の精神力に依存するので実在の物と同じとは限らない（おそらく、銃を描いたとしても本物ほどの殺傷力はないだろう）。

・紙媒体への無意識の敬意ゆえか火に弱い。紙でも床でもいいが物質にしか描けないので『空間』には描けない。岸辺露伴なみに速く描けるようになるのが比奈の夢。

\*

『ボディ・ランゲージ』

【本体】真木悠里まきゆうり（メイド喫茶のマスター）

【破壊力—なし スピード—なし 射程距離—C

持続力—A 精密動作性—C 成長性—E】

【能力】

・本体の身体から『オイル』を出す（分泌する？）スタンド。とてもよく滑る。引火性はない。石鹼のにおいがする（気がする）。スタンドなので解除すればヌルヌルはすぐに消える。

【本体について】

・メイド喫茶店『JAZZ』（『JAZZ』は“雑多”の意）で店長兼コックを務める心は乙女の筋肉モリモリ、マツチヨマンのナイスガイな36歳。趣味でクイーンのコピーバンドを組んでいて（パートはボーカル、たまにギター）、夏樹とは彼女が中学生の頃ライブハウスで知り合った。

・29歳のとき、旅行で行ったインドで見つけた調味料類を元にオリジナルのスパイス『レッド・スペシャル』を生み出し、30歳で店をオープン。オーソドックスなメニューの他に、甘いスイーツとスパイスを活かした激辛メニューの両極端なラインナップで店はそれなりに繁盛している。

・『レッド・スペシャル』の製法は彼しか知らず、お客はもちろん店員が尋ねても絶対に教えてくれない。絶対に。

\*

『セクシャルバイオレットNo. 1・2・3』

【本体】『良い奴』<sup>ジエントル</sup>（No. 1）、『悪い奴』<sup>ワイルド</sup>（No. 2）、『ひどい奴』<sup>デンジャラス</sup>（No. 3）

【破壊力】C スピード—C 射程距離—C  
 持続力—A 精密動作性—B 成長性—C

・顔部分が『巨大なビデオカメラ』の一張羅を着た怪しいスタンド。ダンスはうまく踊れない。そもそも本体がマナーというか法律を守ってない。顔がビデオカメラだけ

あつて目が良い。

【能力】

・スタンドが見たものを『録画』することができる。録画できる容量は本体の精神力次第。スタンドでモニター（TVでもPCでも）に触れると、モニターに録った映像を映し出せる。

・3体とも見た目も性能も同じだが、『良い奴』<sup>ジェントル</sup>より『悪い奴』、『悪い奴』<sup>ワイルド</sup>より『悪い奴』<sup>ワイルド</sup>より『ひどい奴』<sup>デンジャラス</sup>の方がパワーがちよつと高い。覚えておかなくても問題ない。Hail<sup>君に幸あれ!</sup> 2U!

【本体について】

・いつまでたつても思春期が終わらない映画好きの3人組。悶々とした日々の中でスタンド能力に目覚めてしまい、やばいと思つたが性欲を抑えきれなかつた。『良い奴』は28歳、尻フェチ。『悪い奴』は38歳、鼻フェチ。『ひどい奴』は41歳、眉毛フェチ。好きな映画は3人とも『グーニーズ』。

\*

『ロケット』

【本体】『静かな奴』<sup>サイレンス</sup>

【破壊力】なし スピード—A 射程距離—D

持続力—D 精密動作性—B 成長性—C

【能力】

・手に持った鉛筆を銃のような勢いで発射できる。鉛筆なら種類は問わないがシャーペンやボールペンなど、他のペン類では発動できない。

【本体について】

・ひよんなことから3人組の親分的な存在になった寡黙な男。ワイセツなギルティよりも、本当は強盗とか金儲けがしたかったのだがシャイな性格のせいで言えなかつた30歳、喉仏フェチ。キレると逆によく喋る。好きな映画は『ヘイトフル・エイト』。

## 第17話『Living Loving Maid (She's Just a Woman)』

集合写真でみんな笑顔、というのだけで納得がいかないのであれば、こちらはいくらでも追撃の用意はある。約束は約束だから容赦はしない。負けを認めればお金を失うのは私なのだ。

「他の写真は？ 集合写真だし、別に凛に対しての笑顔、つてわけでもないし」

案の定、加蓮はさらなる判断材料の提出を求めてきた。財布の中の平和を思えば当然の申し立てだろう。しかしそれは自分の首を絞めることにしかならない。

私は「してやったり！」的な表情になるのを堪えて、ことさら仏頂面をつくったぶん、狡猾に仕掛けを施した罠へと巧みに獲物を誘導していくハンターのような気持ちはマウスを操作する右手に宿っていたかもしれない。

「ハレハレ。」

加蓮を見つつPCに映したのは、ガーベラの絵が描かれたスケッチブックを両手に抱えて私と並んで笑った顔をカメラに向けている女の子の写真。私の家は花屋だという

ことを教えたなら、嬉々としてこの絵を描いて私に見せた。彼女も花が好きで、しばらく花の話をしてたらいっつの間にか仲良くなれた。

「……」

加蓮はとりあえず沈黙した。一発で負けを認める気はないというサインだ。それは「もつと打ち込んでこい」というサインでもある。私はそう受け取ることにした。

「こういうのもあるね」

人差し指で『次の画像へ』を4回クリック、ふたりの男の子が現れた。私といっしょに3人でジャングルジムの頂上でピースしている。私はしてないけど。莉嘉ほど素早くは登れないが『ネヴァー・セイ・ネヴァー』の能力で慣れた今、このくらいの高さには物怖じしなくなった。もつとも、その能力を使えばあつという間に登れる。が、そんなことをしてもしょうがないし、事態の收拾が済んだあと、園児たちは驚くほど普段と変わらずに友だちと遊んだり話したりしていた。みんなの本当のところはわからないが刺激しないに越したことはない。園児たちと同じだけ私たちも努めていつも通りに振る舞った。

「へへ、この幼稚園ジャングルジムあるんだ……………」

そこからまた沈黙。未だジャングルジムのある幼稚園には驚いたものの、それ以外への反応はまたしてもシャットアウトだ。

「あとはこれとか」

さらに11回左クリック。これはちよつと私も見せるのに勇気がいった。人形劇をやったあとの写真だが、ワニの人形を手にはめた私が男の子に笑顔でなにか話しかけている。なにを言ったかは忘れてしまったが、劇中のワニを演じたまま喋りかけていた記憶がある。ワニの名前はたしか『シャーロットちゃん』で、ウサコちゃんと同じく亜里沙さんの手によって生まれた仲間だそうだ。

「……」

沈黙。しかし加蓮はやきもきと手をグーパーさせながら、なにか言いたそうな顔をしている。

「……っ、あーもうわかったわよ、降参。私の負け」

静かな深呼吸のあと、ようやく私の待つていた言葉を加蓮は言った。折れた、加蓮が折れた！ もはや勝負がどうというよりかは加蓮の鼻を明かしたのが爽快ではあったが顔には出さなかった。

「……もういいのかしら？」

PCから目を離し、座ったまま清良先生が私たちを見上げて尋ねた。

「はい。ありがとうございます」

「土曜日に来てまでなにかと思つたら……賭け事でもやってるのかしら？」

「そんなんじゃないですよ。ちよつとした女の勝負です」

「女の勝負? ……まあ細かいところは聴かないでおくわ」

写真のページを閉じながら清良先生は柔らかな調子で言った。これが木場先生だったら少し面倒なことになっていたかもしれない。

なぜわざわざ土曜日に学園に来てまでこんなことをしているのかという先生の質問に勝手に答えれば、それは加蓮の勇み足とでもいうものだが、勇み足の理由に私が関係していないわけでもないから、こうしてふたりして土曜日の学園の職員室にいた。

職場体験学習で、私が実習先の幼稚園の園児たちと仲良くなり、それを証明できるような写真を撮れば私が勝ち、できなければ加蓮が勝つ。負けた者は高級ハンバーガー店「ロツドリア」のメニューを勝者に奢る——というのが、加蓮いわく「女の勝負」の概要だ。「女の勝負」なんて気概のある言葉から示される概要が果たしてそれでいいのか。

それにしてもなにも土曜日きよでなくてもいいだろう。昨日まで慣れないことをやってたうえに襲われもしたのだ。今日はハナコの散歩をいつもより長くしたりして安らぎたい。しかし加蓮は今日まで実習期間だったし、こうして呼び出しに応じて来たのは他ならぬ私だ。自分のスマホで写真を撮らなかつたこともある。ひと騒動あつたおかげで勝負のことなど吹っ飛んでいた。

しかし事件のこともあつて、翌日から実習期間終了まで清良先生が見回りに来てくれていて体験学習の記録のための写真も撮っていたから、思い出したときには後の祭り、とはならなかった。

\*

「でさ……加蓮、本当に奢る気なの？」

「ん？」

用を終えて職員室を去り、下駄箱で靴を履きかえたところで尋ねた。正確な額ではないものの、ロッドリアではシェイクですら2000円を越えると噂で、それは私だって加蓮だって伝え聞いている。

情けをかけるわけではないが私は勝負に勝ったこと自体に満足していて、勝者への特典を反故にされることを望んでいるわけではないが、忬度は絶対にしないとしようとしているわけでもない。ただ自分から「奢らなくてもいいよ」とは言わないし、ロッドのチョコレートシェイクは飲んでみたいのも正直な気持ちだ。

「どう思う？」

2、3歩先にいる加蓮がこつちを振り返って訊いてきた。

「そりゃルールだから奢るよ。でもロッドでお腹いっぱいになるまで奢ったりなんかしたら、夏休みの予定なんて立てられなくなると思わない？」

それはそうかもしれない。予算の不足によって夏休み中の加蓮の行動が制限されるということとは、私や奈緒も少なからず不自由な夏休みを送るということだ。みんなが裕福であるに越したことはない。なんといっても、夏休み中の自分のお金はひとりのものにあつてひとりのものにあらず。連携が取れなければ索漠とした長い休日を過ごすことになる。

かといつて加蓮の居直りをあつさり肯定できるわけもない。夏休みまでまだ二ヶ月近くある。その間バイトでもすればどうにでもなる。そういう案も出さずに話をなあなあにしようとするのは虫がよすぎる。

しかしそういえば元々は加蓮の挑発的な態度が事の発端とはいえ口火を切つてこの勝負を持ちかけたのは私だった。つまり私が今回の勝負の公式だ。運営だ。開発陣だ。私が折衷案を出して加蓮がそれに同意すればルールの変更は可能と言える。

それに多額のお金を相手に使わせることになる罰ゲームは問題では？ ファミレスのドリンクバーを奢るならまだしも、対象はファストフードの代表格たるハンバーガーとはいえ、頭には『高級』の文字が付くレベルの代物だ。それを奢らせるとは、いわばカツアゲにあたる行為になってしまうのかもしれない。深く考えて勝負を持ちかけたわけではないが、それはマズいしそんな展開は望んでない。うーん……。

あ！ 気づいた。ここで私が柔和な内容にシフトした案を出せば加蓮に『貸し』のよ

うなものをひとつ作れるんじゃないか？ それは気持ちの問題に過ぎない、決して明確な貸し借りの関係などにはならない、法律云々より人情の問題だ。

しかしそれを加蓮がどうして感じずにいられるだろう。加蓮のようなタイプには論破するより義理に訴えかける方がおそらく効果的だ、みたいなことを考え出しているようでは、私がすぐく友だちに対して損得勘定を働かせるということにならないか？

私こそが汚い女ということにならないか？ ただ折衷案を出して加蓮に対して精神的にイニシアティブをとった気になりたい、しかもそれが錯覚であることはわかった上でそう感じたい、極めて控えめな欲を勝負に勝ったことへの裏の報酬のようなものとして得たいだけなのに！

校舎を出て正門へ向けてアスファルトを踏んで加蓮と歩いていくなかで声に出すにははばかられる言葉が湧いてくる。加蓮が喋つてからどれくらい間が空いたんだろう。30秒？ それとも1分？ どちらにせよそろそろなにか言わなければ変かもしれない。

「おや……凛さんに加蓮さん」

予期せぬ呼びかけにごちゃごちゃ回る思考は中断された。声の方を見ると、飛鳥だ。土曜日の学園になぜか飛鳥がいた。

「飛鳥……どうしたの。今日は」

「そう、ボクだ。二宮飛鳥がここにいます」

相変わらず、と言うには浅い付き合いだ、今日は銀髪のエクステを風になびかせ、飛鳥は挨拶がてら芝居めいた言葉で自らの存在を誇示して、そこからさらに気の赴くままに台詞を言うように続けた。

「土曜日。かつては今日も人は学び、働きに出た。安息の天使の微笑む刻を求めて彷徨う最後の航海の日だ——」

半ば当然であるかのように私も加蓮も足を止めて飛鳥の話の終わるのを待った。上を向くと空は青く、分厚そうなモコモコしたまっ白い雲がたくさん漂っていて、昨日まで通っていた幼稚園にあった送迎バスを思い出した。

「人の苦しみを天使は聴きたもうたか。天使は口角を上げ、さらに暖かな眼差しを荒れ狂う海に翻弄される小舟に向けた。かくして……………」

そこまで言って飛鳥は言葉に詰まった。といつても悩んでいるような表情には見え、真顔のまま4秒ほどフリーズしてから、

「…………駄目だ。惰性で喋っているだけだ。くだらない。馬鹿げている」と呟いた。

「第一これはランコの意識を些末になぞつてだけのようなものだ。ランコほどの優美さ大胆さもなく虚飾に過ぎる。ボクの思考の発露は形而上学的でもあり、シニカルでも

あるような……とにかくボクは今いい加減なもの言い方をした。それについては失礼したよ」

「そう……」

それくらいしか言うことが見つからない。まして知らない固有名詞まで出されたらなおさらだ。

「で、ボクが土曜の学園でなにをしているかということに答えれば、部活の自主練みたいなものさ」

「部活？　へー、アンタ部活入ってたんだ」

実に意外そうに加蓮が言った。私も加蓮も帰宅部だ。ただ加蓮は家庭部に友だちがいるらしく、たまに遊びに行っているらしい。

「それで、ふたりはなにをしているんだい。高等部は昨日まで職場体験学習だろう？　実習先で粗相でも犯して反省文の提出に來たにしては悲壮感はなさそうに見えるが」

「そんなんじゃないよ。先週マックでアタシと凜が言い合ったこと覚えてる？」

「ああ、思い出した。ロッドリアを奢るとか奢らないとかの……」

「それぞれ。そのこと……ってアタシが率先して喋るのも癪しやくなんだけど」

「なるほど。ということは勝利の美食に酔うのは凜さん、か」

「飛鳥にも見せたかったよ、いつもはクールビューティ気取ってるクセに園児の前で二

コニコしてる凛の写真。でもロツドはねえ……夏休みにまで尾を引く値段だし、正直勘弁して欲しいなーって」

別に気取ってはいない。いつもにしたって幼稚園のときにしたって私は素だ。そして話のもとに戻って、加蓮は本音をぶつちやけた。

「約束だろう？」

加蓮を嗜めるといふよりは当然の反応といった感じで飛鳥が返す。

「それを言われたら弱いよねー。でもさ、考えてみてよ。今ここでロツドを奢ったら夏休みの予定はどうするの？ 夏物も買えないし、海に行くなら水着だって買わなきゃだし」

「たしかに、なにをするにしても夏休みに向けて予算の確保は肝要だね。ただ加蓮さんは納得ずくで凛さんの勝負を受けたのだから、それを反故にしようというのは……気を悪くしないで欲しいが、傲慢というか、わがままなんじゃないのかい？」

「ん、うーん……まあ、ね」

後輩に「わがまま」なんて言われてはさすがに加蓮もばつが悪い。

「……約束は約束だけど、変えられないとは言ってないからね」

飛鳥の言葉の返事に淀む加蓮を見て、ここが潮時でも悪くはないと思ひ、心を決めた。弱気というほどではないにしても少なからず意気を乱された加蓮を見れたのだから、当

分は元気にやっていけるといふものだ。こう思うは私はやっぱり意地の悪い女なんだろうか？

「他のお店で奢るのでもいいんじゃないかな、って思わないこともないよ」

心を決めたにしては歯切れの悪い折衷案を私は繰り出した。しかし内心ホツとしてもいた。約束通り加蓮に食事を奢らせ、かつ夏休みの予定段取りへの影響も軽減させたのだから、加蓮からしてみれば今や私はささやかながら救世主のはずである。もつとも加蓮本人はそこまで大それたエモーションを感じてはいないだろうし、こんなことを考えている私だって本気でこう思ってるわけではない。

「え、それでいいの？ だったら話は早いね。もうちよつとリーズナブルでいこう」

そら見たことか。「それで借りを作ったなんて思わないことね」と言わんばかりの軽やかな反応、羽毛みたいな。

「ただしハンバーガー以外で」

どうせお店を変えるのならハンバーガー店以外がいい。気分転換にもなるし、これなら加蓮に一矢報いた感じがしないでもない。まるで加蓮をハンバーガーの申し子のよなものだと思っているのか私は。しよせん職場体験学習で一週間ばかりマニュアル通りの対応だけでバーガーを売ってただけの女だ。しかもこいつの真の狙いはポテトであつてバーガーではない。「Wチーズのセット。ポテトはLで」と、まるで控えめに発

されたこのポテトこそが加蓮にとつては主役でバーガーは脇役なのだ。もつとも『相棒』でいえば伊丹刑事くらいにはフィーチャーされている度合いの脇役ではあるはずだろうが。でなきやそもそも頼まないはずだし、なんだつたらそのぶんポテトを追加するだろう。そして私や奈緒が想定外のカロリーを摂取する羽目になる。それを自分は腹八分目で早々に切り上げて横目で見ているだけ。まるで氷のような女。実際スタンドも吹雪を出す能力だし。

しかしそれを言ったら私だつて一週間ばかり園児たちと遊んでいたただの花屋見習いだ。それでも私にはハナコがいる。加蓮にも奈緒がいるが奈緒は私の友人でもある。いい勝負だ。この辺りに関してはライバルと認めざるを得ない。奈緒は私の頭の中でまでいじり倒される運命にあるのか。それは私の意思次第だ。ごめん、と先に謝つておこう。

「それなら、これは思いつきなんだが、これからボクが食事に行こうと思つてる店で誓約を果たすというのはどうだい。少し遠いところだが……」

意外にも飛鳥がそんなことを言ってきた。こんなときは第三者の提案が心地よい。いつその約束のすべてを飛鳥に委ねてしまい、私は帰つてハナコの散歩にでも行きたくなつてしまったほどだ。

「それってなんのお店？」

「喫茶店……だがレストランとしての利用にも耐える。なにより味は保証するよ。店長マスターが凝り性なものだからね」

「値段は？」

「それも問題ない。それなりに高価なものもあるが、基本的にはリーズナブルだ。もつとも、店の様式には驚くかもしれないがね……」

「コスパへの注意を怠らない加蓮の質問に、なにやら含みを持たせつつ飛鳥は答えた。驚くつて、どういうこと？」

「それは……来てからのお楽しみ、とでも思つて欲しい。その上で、どうだい？ 行くかい？」

私が尋ねたことで含みはより意味深なものとなった。とはいえ飛鳥の言い方からしてマイナスに感じるようなものではなさそうだ。ちよつとしたサプライズ要素のあるお店といったところだろうか。いずれにせよこの飛鳥の提案は渡りに船だし、すべては行けばわかる。

「いいでしょ、加蓮？」

「そりゃもちろん、凛がいいなら。美味しくてリーズナブルっていうならアタシは文句なんてないし」

話はまとまりすべてが順調に進みだした感じがあった。しかしなんで奢られる側の

私がいかに煩悶とすることになってしまったのか。最初から最後まで加蓮のペースに乗せられてたということなのか。まあいい。私が奢られる側なことには変わりはない。溜め込んだモヤモヤは美味しい物で黙らせてもらおうとしよう。

「じゃ、決まり。飛鳥お願い」

案内を飛鳥に頼み、私たち3人は颯爽とふたたび歩きだした。

まあ、生きていけばいつかは飲めるよね。ロッドリアのチョコシエイク……。

未練がましさを紛らわすために少しだけ歩幅が大きくなった。ロッドリアは今から4年後、食品偽装が発覚して全店閉店した。

\*

学園からやや長い道のりを歩いてたどり着いたお店は、外から見る限りは特段なんの変哲もないように見えた。

「外観は普通だね」

「中に入ればすべてが氷解するさ。では往こうか」

飛鳥がノブに手をかけ扉を開けると、カランと音が鳴った。すかさず誰かが私たちの前に立った。

「お帰りなさいませお嬢様が、た……たたたたたたたつっ!!」

「あら……あらあらあらあらあららっ!!」

目の前に映し出された光景の情報処理に頭が追いつかず一瞬真っ白になったものの、落ち着いて状況を把握したとき、飛鳥の言った通り確かに私は驚いたし加蓮も驚いていた。それに飛鳥も驚いていた。飛鳥にとつても予期せぬものが目に見えていたことはすぐに理解できた。

扉を開けて目の前に現れたのは、見るもキュートなメイド服を着た奈緒だった。かわいい。私たちを確認したとたん挨拶の言葉も中断してバグっている。加蓮はさすがといったところで、驚きつつも即座にこの場を楽しみむべく好奇心を貪欲に動員しているのは明らかだ。そのふたりの反応の結果が「たたたた」と「あらあら」のラッシュユとなつてお店の入り口で激しくぶつかり合っている。

「なに!? なにごとなのっ!?!」

当たり前だが騒ぎを聞いて店の奥から他の店員がやって来た。妙に甲高い声の持ち主は制服越しにも鍛えているのがよくわかるほどの体つきをしたコックさんだった。

「マスター! 止めて! この女止めて!」

「はじめましてマスター。うちの奈緒がお世話になってます」

好奇心を爆発させつつ、いや爆発しているからこそ冷静かつ唐突な社交性を発揮して加蓮は奈緒がマスターと呼んだコックの格好をした男性に挨拶した。

「あら、奈緒ちゃんのお友だち? ゆっくりしてつてちようだい。でも他のお客さんに

迷惑かけるのはいけないわよ」

「そうですね。はしやぎすぎました。以後気をつけます」

丁寧に謝り、素早く場を収める。しかしそれで加蓮の好奇心までもが収まったわけではない。

「さ、案内してもらおうかしらメイドさん。3名のお嬢様がお待ちかねよ！」

ほくそ笑みながら奈緒に応対を要求する。飛鳥は自分はどう出ればいいのかわからず黙ったまま。私も黙ってはいるが、それはこの場は加蓮に任せられた方が面白そうだと思うってのことだ。

「くそっ……3番テーブルに来やがれ、お嬢様がた……」

小さじほどの反抗心をあらわにしながら奈緒は私たちを案内してくれた。メニューにスマイルはあるのだろうか。

(つづく)

## 第18話『Where Do We Go From Here?』

メニューを眺め、私は値段的に問題ないかどうか加蓮に確認をとってから3人それぞれオーダーを決める。

「せっかくのメイド喫茶だし、アタシは王道で行ってみようかな」

そう言つてオーダーを決め終わると加蓮がテーブルの上の呼び鈴を押す。警戒心からか、少し渋い顔をした奈緒が私たちのテーブルにやつて来た。

「オムライスとサラダのセット」

「シーフードドリア」

「シエフの気まぐれおにぎりセット、ジンジャエール」

「気まぐれおにぎり……あー、ほんとだ。そんなのもあるんだ。つていうか、おにぎりにジンジャエールつて……」

「それで全部か？」

「とりあえずはね。あとでデザートとか頼むかもだから、そのときはまたよろしく

……つていうか!」

注文を確認するメイド奈緒に受け答えしたあと、声の調子を上げて加蓮は話を続けた。

「喋り方。『ご注文は以上でよろしいでしょうか、お嬢様?』でしょ。そこは」

「ああ……そういうのもあるかもしれないなあー」

面倒そうな顔で奈緒がはぐらかす。どうやら言われたようにするつもりはないようだ。

「主人に曖昧な態度をとるなんて生意気なメイドね。お客さんが知り合いであっても、礼儀をもって応対するのが接客業の基本じゃなくって?」

「ぐ、ぬぬ……」

高飛車お嬢様が板に付きつつある加蓮の指摘に言葉を詰まらせた。真面目な奈緒にとっては痛いところだろう。

「確かにそうだけど……お前はあたしの反応を見て楽しみたいだけだろ! メイドが主人に礼儀を払うなら、主人もメイドに礼節をもって接するのが真の主人だと思わないかい?」

さすがに奈緒も毎回加蓮のペースに乗せられるのは不服らしく、拒否の態勢を崩さない。

「第一、なんで知ってるんだよ。あたしの職場体験学習の働き先……飛鳥まで呼んじゃってさ」

「あ、それはたまたま。嘘じゃないよ。ね、飛鳥」

伝票を書きながらムスツとした顔で呟いた奈緒に、飛鳥に説明を促す形で飄々と加蓮が答えた。

「……まあ、そうだね。たまたまというか、凜さんと加蓮さんをここに誘ったのはボクだ」

非があるわけではないが、どことなく申し訳のなさそうな表情で飛鳥が言った。

「……まじっ？」

「マジよ」

ぼかんと驚く奈緒へ楽しそうに返す加蓮の顔は活き活きとしている。屈託のないお嬢様がそこにいた。

「ただ、ボクは奈緒さんがここで働いていることは知らなかったよ。ここを選んだのは、単にボクの行きつけだからだ」

「あ、そうなのか。そうだよな、あたしがどこで働いてるかなんて、飛鳥にも言っただけだし……」

「そのとおり。これはあくまで偶然の産物。予期せぬ出会い」

「セレンディピティ、YESっ！」

「うるさいー！」

飛鳥との会話に茶々を入れる加蓮に直裁なツツコミを叩きつける奈緒。加蓮のお嬢様ぶりがこのままのようでは従順なメイド奈緒はまず見れないだろう。

「でもメイド喫茶が飛鳥の行きつけって、なにげに謎だよね」

加蓮の言うとおりではある。少なくとも私から見た飛鳥のイメージにメイド喫茶は合わない。飛鳥からしてみれば余計なお世話だろうけど。

「端的に言えば、部活の先輩がここの常連なのさ。何回か連れて来られるうちにボク個人も利用するようになったんだ」

「へえ、お前部活やってたんだな」

「メイド喫茶に入り浸る女子校の先輩ねえ……どんな人かちよつと気になるかも」

「なら首を右に向ければいい。キミの知りた<sup>こたえ</sup>い解答があるよ」

「えっ?」

と、その言葉につられて私と加蓮、奈緒も揃って右を向いた。そこには他のお客さんに給仕している金髪の店員<sup>メイド</sup>がいた。

「彼女……って、えっ……夏樹さん、か?」

「そう、彼女さ」

「つてことは飛鳥、お前……軽音楽部かよっ!？」  
「どうした、呼んだか」

奈緒の声に反応して、件の金髪のメイドが私たちのテーブルへとやって来た。

「やあ。体験学習ご苦労様」

「飛鳥、来てたのか」

「ああ。奈緒さんの友人たちとね」

「ん、そうだったのか。アタシ、木村夏樹。見てのとおり奈緒といっしょにメイド中。よろしく」

私と加蓮を見て金髪メイド改め木村夏樹が自己紹介をしてくれたので、私たちも同じように挨拶を交わした。

「にしても、メンバー以外の高等部のヤツとも付き合いがあるなんて、大したヤツだぜ。高等部にひとりで来て入部届けを直接渡しに来るだけのことはあるな」

挨拶を終えたあと、夏樹が飛鳥に向かってそう言った。

「年齢で順列が決まるなんて、今時ナンセンスにもほどがあるだろう？ ボクは逢いたい人に逢い、敬うべきものだけを敬う。それにどっちにしたって、中等部と高等部じゃただかか4つや5つの違いだろう。自分が生まれる前の音楽に精通してる奴の言う台詞でもないよ」

「ハハハ！ 違ういな」

いつものように澄ました調子で話す飛鳥の言葉に夏樹は笑って受ける。

「それに、凜さんたちと知り合ったのは……火急の事態がきっかけだったからね」

「……『スタンド』か？」

「そうさ」

『スタンド』。不意に出てきたワードに、一瞬だけ私たちの回りの空気に緊張が走った。

「凜も、加蓮もか？」

「うん……アンタも？」

「そうだよ。ホラ」

そう言った夏樹の背後に、古い映画に出てくるガンマンのような格好の男が現れた。

「うわ、マジだ。ほんとゴロゴロいるんだね。『スタンド使い』って」

加蓮がそう言ったが、その様子に驚きはあまり見られない。なんとなくわかる。驚いていないわけではないけど私も加蓮もスタンドに目覚めてからこの3週間程度、良かれ悪かれ様々なスタンド使いに何度も出会った。1ヶ月も経たないうちにそんな異常事態が何回も起きてるものだから半分感覚がマヒ、そしてもう半分は悟り、というか呆れのような境地だ。危害を加えてくるような相手でもなければそうヒステリックになるようなことでもない。この『スタンド』と呼ばれる存在への認識が、つまり私たちの中

でいよいよ常態化したということなのか。夏樹が同級生なことから無意識的に感じている薄い仲間意識のようなものもあるかもしれない。

「そういうえば……ふたりはどうだった、体験学習中。なにもなかった？」

考えている間に気づいた。私が変わりに危害を加えるスタンド使いに出逢ったのなら、こうして今顔を合わせていることからみんなが無事なのは言うまでもないとはいえ、奈緒や加蓮にもこの1週間の中で同じようなことがあったかもしれない。

「ありも大ありだ。スタンド使いの男が4人、ここにきてな。まあゴタゴタあったけど夏樹さんがブツ倒して、あとは早苗さんに任せたよ」

「やっぱり……奈緒もあつたんだ」

「つてことは凜もか……？」

「うん。相手はひとりだったけど、こっちは子どもたちがいたし、その子どもを利用するような奴だったから大変だった」

「マジか……」

「最っ低ね、そいつ」

夏樹と加蓮が顔をしかめた。飛鳥もなにか考えるように口元に手を当て少しうつむき、無言ながら嫌悪感を放っていた。

「おいおい、大丈夫……だったんだよな。その様子なら」

「どうにかね。幼稚園の先生とか、他の実習生にもスタンド使いがいて、みんなでなんとかしたよ」

「ならよかった。子どもが悪いやつに襲われて、そいつをみんなで協力して倒すなんてアニメじゃワクワクするけどさ……実際に起きたらたまつたもんじゃないよな。加蓮は？」

奈緒は心底ホツとした顔でそう言ってから加蓮に訊いた。私はここで城ヶ崎姉妹に会ったこと、実習生としていつしよに幼稚園で働いていたことや彼女たちもスタンド使いだったことなんかを一挙に話したくなつた。そこには正直自慢もある。

「あたしは特に問題なし。5日間ずっと営業スマイルでポテト揚げたり売ったりしてた」

「他のメニューも作ったり売ったりしろ」

「今作ったり売ったりするのはアンタの仕事でしょ。そろそろ注文を通してくれる？  
メイドさん」

ちよいちよい、と加蓮が小さく人差し指で店の奥を指し示した。そつちを見ると店長が私たちの方、おそらく奈緒と夏樹のことをじつと見ていた。

「おおつと！ 今は長話するタイミングじゃないな……わかつたよ……お嬢様」

なんだかんだと加蓮と軽妙なやり取りを交わした末に仕方なく折れた奈緒はテーブル

ルを離れていった。

「アタシも適当に業務に戻るとするかな。またな」

そう言つて夏樹も私たちのテーブルを離れた。話すことはあるにしても仕事の邪魔をするわけにはいかず、私は曖昧に手を上げて見送った。

\*

「今日は意外尽くしの日ね。あの木村夏樹と、メイド喫茶なんて意外な所で知り合いになつたと思つたらスタンド使いだったとか」

去つていく奈緒と夏樹の後ろ姿から視線をこつちに戻した加蓮が言った。

「夏樹のこと、知ってるの?」

「けっこう有名な子だよ。軽音部の部長。去年学祭で見た。もう回りの子たちがキヤーキヤー言つててスゴかったんだから。凜知らないの?」

「うん……つていうか、加蓮が学園祭のバンドを見に行つてた方が私には意外かな」

「そう? ベつに私だつてそういうのも聴くよ。まあでも見に行つたのは部活の友達が出たからだけだね」

「部活……? アンタ部活やつてたっけ」

「やつてます。たまにしか行かないけど」

「何部?」

「家庭部」

「はあ？」

我ながら新鮮な驚き声が出たと思う。加蓮に対してただただ失礼だが出てしまったものは仕方がないし、自分の中から普段は出ないような音が発されたことから来る変な面白さもあつてなんだか少し楽しい。

「ずいぶん失礼な反応ね」

「だって……」

「家庭部というと、海うみさんか」

フオローするような意図はないように見えるけど結果的にはそうなるような形で飛鳥が言った。

「こそ。杉坂すぎさか海ちゃん。我が家庭部のエース」

「……そういうえば、幽霊部員がいるって言ってたかな……」

加蓮のその台詞を聞いて、少し長い瞬きをしてから飛鳥が言った。

「あー、それたぶんアタシ」

「アンタそんな行つてないの？」

「幽霊部員は大げさだよ。今年度に入ってから行つたの今のところ2回かな」

「……もうすぐ6月なんだが」

そつと飛鳥が呟いた。なにが「我が家庭部」だ。今年2回でそんな台詞を言うなんて乗っ取りもいいとこだ。

「私が入部してもない園芸部にたまに行く回数より少ない……」

「そうなの？ 入部しちゃえばいいのに〜！」

また朗らかな顔でそんなことを言う。今のところ入部までいくほどその気になりきれてないとか、家の手伝いとかで顔を出せない日が多いかもとか、そんなことで気を遣ってる私がバカみたいじゃないか。

「海もなかなか斬新よね。軽音と家庭部かけ持ちとか。それに、ウインド？ サーフイン？ よくわかんないけど趣味でそれもしてるんだから。バイタリテイハンパないよね〜」

「確かに海さんは積極的に動く人だね。ことによると軽音部でいちばん体力があるのは彼女かもしれない」

「やつぱり？ そんな気するよね。あつ！ さつき奈緒もビックリしてたけどアンタ軽音入ってたの？ 去年のステージいたっけ？」

「入ったのはあの後さ。去年の学祭のときはボクも観客のひとりだった」

「じゃあ見覚えないわけだ。こんなビジュアルの子、見たら簡単に忘れないもん。パートはなんなの？ “当方ボーカル。全パート募集” なカンジ？」

「……学祭を見たならボーカルは誰か知ってるだろう？ ベースだよボクは。まったく歌わないわけでもないが……」

自らの部活動ぶりを棚に上げて、というかどんどん押し入れの奥へと押しやって話を飛鳥の所属する軽音部について進めていく加蓮。行いを改めるために今度家庭部に強制的に連れてってやろうかと思わないでもない。

「冗談よ、冗談。ボーカルは“リーナ”だもんね」

「リーナって、多田李衣菜って子？」

聞き覚えのある名前に、私は加蓮に訊ねた。

「そうだよ。知ってるんだ？」

「未央と遊んだとき、いっしょにいたことが何回かあつて」

「あー、友達の友達つてヤツ？ 未央経由ならよくある流れね。ホント、あの子の行動力も大概だわ。ウチらの学年で本田未央を知らないのはモグリ、だなんてそのうち言われるようになるかもね？」

「それは流石に言い過ぎだけど……“友達100人できるかな？”を実現しかねないよね」

言い方はどうあれ、少なくとも未央は私たちの学年では知らない生徒より知ってる生徒の方が多い、そう断言できてしまうほど交遊関係が広く、いわゆる『誰とでもすぐ友

達になれるタイプ』だ。本人もそれを自負していて『友情番長』なんて肩書き(?)を自称している。

「アタシみたいに中等部から美城ミキいる生徒から見ても未央の馴染みよりはホント凄いいよ。あれで編入生だもんね。……どう? 同じ高等部からの編入組として。ジエラる?」

「ジエラるって……、別に。人は人、私は私、でしょ。未央も私も振る舞いたいように振る舞ってるだけだし。その方向が違うだけ」

「まあ、凜ならそう言うと思ってた」

「言わなかったら?」

「んー……アタシと奈緒がいるよー、ってナデナデしてあげてた?」

「けっこうです」

まるで加蓮アレンタと奈緒しか私には友達がいけないような口ぶりはやめて欲しい。まして飛鳥の前で。

「彼女の場合、ボランティア部ということも幅広いコミュニケーションの構築に繋がっているだろうね」

私を特に気にする様子もなく、視線の先の飛鳥がそう言った。

「えっ……飛鳥も知ってたりする? 未央のこと」

「ああ、知ってるよ」

「あちやー、中等部としたりたにも手を出してたか。あの子誰とでも友達になれる能力のスタンド使いなんじゃないの?」

ニコニコと調子良きげに冗談を飛ばしてから加蓮は一口水を飲むと、テーブルにグラスを置いた音がしたところでまた飛鳥が喋り出す。

「彼女がスタンド使いかどうかは知らないが、最近よく来るんだ。部屋に」

「軽音部の? 未央が軽音部になんの用があるっていうの?」

「テーマソングが欲しいって……ポランティア部の。そう夏樹さんに相談してた」

「ポランティア部の……」

「テーマソング?」

そう私の言葉に割って入ってきたのは、料理が載った大きな銀のお盆を手の平の上に乗せたメイド奈緒だった。

「お待たせ」

「『お待たせしましたお嬢様』……でしよう?」

「待たせたな、ポテトの国のお嬢様」

服従を命じるお嬢様と、それに逆らうメイド。ふたりの軽い笑いを誘う不毛なやり取りが再び始まった。

「ほら、後輩ファーストだ。おにぎりセットとジンジャエール」  
「どうも」

左手で飛鳥に料理を渡す。おにぎりセットは見たままで中くらいのおにぎりが4つ、長方形の落ち着いた色合いの緑のお皿の上に並んでいる。

「凜のシーフードドリア」

「ありがとう」

私も自分の分の料理を受け取る。今まで喋っていた間は特になにも思わなかったのに、こうして料理を前にするとかかなりの空腹を感じてきた。

「ほれお嬢様」

力の抜けた呼びかけとともに、最後のメニューであるオムライスとサラダを加蓮の前のテーブルに置いていく。声に力が入ってなくとも配膳の手際はよく、仕事に手抜きはない。

「当然ケチャップで文字は書いてくれるんでしょう？ さあ、『永遠の忠誠を誓った加蓮お嬢様へ』って書きなさい！ ほらー！」

料理が揃うと加蓮は奈緒にいかにもメイド喫茶らしいサービスを要求した。なるほど。それでオムライスを頼んだのか。

「お嬢様、当店ではオムライスにケチャップで文字を書くサービスは有料になります」

「ええっ!? そうなの?」

「メニユーをよおおく見やがりくださいお嬢様」

「……あった。『+300円でメイドがご主人様のために心を込めてケチャップでメツセージをお書きします』……」

「メニユーにはしつかり目を通しておくことだ、お嬢様」

反逆メイド・奈緒はどんどんぞんざいな口調で加蓮お嬢様を攻めていき、もはや『お嬢様』はただの語尾と化している。

「で、頼む? 頼まない?」

「うーん……、! よし、やめとく……代わりにこちらを追加いたそうかしら」

「なんだ?」

トントン、と加蓮はメニユーの一点を人差し指で叩いて、奈緒によく見せた。

「この……『スマイル(無料)』ひとつお願いできるかしら、メイドさん?」

勇者を罠に陥れた魔王のような勝ち誇った笑みを浮かべて加蓮は奈緒を見つめた。

加蓮からメニユーをもらって見てみると、そこには確かに『スマイル(無料)』の文字があった。

「しつかりとメニユーに目を通したわ……ご忠告ありがとう、メイドさん……」

加蓮の笑顔はよりいっそう邪悪さを増す。これが漫画なら吹き出しに『ククク……』

と書かれた台詞があったことだろう。

「奈緒、大丈夫。加蓮が見つけた以上私は頼まないから」

「頼むつもりだったのかよ!? どっちみち避けられないってことか……」

どうしても逃れられない事実を前に、奈緒はいよいよ覚悟を決めそうな表情になっている。形勢としてはまだ困り顔が勝っているが、やるときはやる奈緒のことだから、やるだろう。次またこんな状況が来たら、そのときは奈緒の側につこうと思わないこともないと思った。

「よし、いくぞ……いくぞ！……ご注文ありがとうございます、お嬢様っ！」

迷いを断った奈緒が私たちに渾身のスマイルを見せてくれた。かわいい。

「ふふ……うふふふふふふふふふふ！」

それを見た加蓮が不気味に笑う。奈緒のキュートさが脳の許容量を越えてバグってしまったんだろうか。

「……それでよい」

と思っただけにはいかにも支配欲を満たされたような高慢そうな笑みをクールに見せつけた。

「ぐっ……」

歯がゆそうに奈緒が小さく唸った。確かにこの顔が自分に向けられたら私でも忸怩じくじ

たる思いに心がかき乱されそうだ。

「ふう……満足したところで、メイドさん。まだ注文があつたわ」

「え!? な、なんだよ……?」

「フライドポテト」

「……そう。かしこまりましたお嬢様」

また無茶をやられる心配から解放された安堵と、相変わらずのポテトに対する探求心への呆れから力の抜けきった抑揚のない返事をして再び奈緒はテーブルから離れていった。

(つづく)

## 第19話『Don't Speak Loudly』

職場体験学習も無事、とは言い難いかもしれないものの一応無事に終わって週が明け、いよいよ衣替えと中間テストが近づきつつある5月の終盤、だいたいこのあたりの時期はいつも、いつもより早く家を出ていて、今日もこうして数日前よりも朝早くに家を出て、学園に着く上り坂の前にある森林公園内を通って登校している。周りにはたくさんさんの植物が見えものの、とりわけ今日は菜の花に気を惹かれていて、こうして旬の時期をやや逃した菜の花を見ると、今年は今の今まで意識して見た覚えがなかった気がして勿体ないというか損をした気分が少しあったけど、だからといって今見ている菜の花が綺麗でないわけがあるはずもない。

今に時期が過ぎて梅雨に入れば見る機会はなくなるだろう。でも意識して見てこなかったことに対して菜の花に申し訳なきを感じたりするのは違うし、なんか嫌だ。菜の花は、というか他の花だって私や誰かの意識とか思惑なんてお構いなしに咲くところに咲いていて、それでいいって感じだし、今は梅雨が近いことなんて思わせないくらいにいい天気でなかなか暑い。

とりとめもない考えに頭を任せながら歩いていると不意に『それ』が目に入った。おそらく公園の管理者みたいな人が作ったであろう菜の花のサークル——半径3mくらいの、視力検査のマークみたいに一ヶ所切れ目の入った円形に菜の花が咲いていて、中心にも1mもないくらい花のないスペースがあつて、切れ目からその中心に入つてそこでツイスタ映えする写真なんかを撮つて楽しむためのゾーン、その中心にノートがぽつんと落ちていた。なんでこんなところか、と思ひながら菜の花に囲まれているそれに近づいて見てみると、ページが開かれた状態で置かれていて表紙は見えない。

菜の花を踏まないよう少し慎重になつてサークル内に入つてノートを手にとつて、葉代わりに開いていたページに親指を挟みつついったんノートを閉じた。どこのお店でも場所を選ばず買えるような一般的なものとは違う、なかなか凝つたデザインの表紙が現れた。

最初に目についたのは『森のものがたり』という文字、とかタイトルだった。表紙の中央よりやや上側に、固くも丸つぽくもない手書き風の書体で書かれていて、そのすぐ下には小川の流れる野原、上流の方で川の水を飲む鹿、切り株の上でどんぐりを食べてるリス、色とりどりの花、その周りを舞う蝶、奥にはたくさんの樹が並んでいる、という森の風景が淡いタッチで描かれている。それらを囲むように四方にはミントグリーンに箔押しされてささやかにキラキラ光るシンプルな蔦模様があしらわれていた。

全体的に派手さを抑えたデザインではあるものの、ノートというより絵本のような見た目だ。表紙に他に文字は書かれていない、つまりこのノートには持ち主の名前が書かれていなかった。これでは落とし主には届けられない。まだ落とし物と決まったわけではないかもしれないけど。

名前が書いてあるかもしれない期待はあまりしてないものの、念のためページ目を開いて中を確認してみた。

『朝食動物』

出かけようよ 丘のむこうに

柔らかい春の風に髪がなびいて 花びら舞えば

はしやぐ君にバスケット揺らされ ハムチーズサンドが踊る

草上のパーティー 虎視眈々と狙う目を 木陰とミルクティーでごまかして

サンドイツチにエッグタルト、フルーツサラダにレモンパイ

とっておきのバケツト切り分け バター塗って ハチミツたらしめて

君がミルクティーを飲み干す頃 おそろおそろなプキン添えて

木陰の隙間縫って 木漏れ日がメニユーを照らしたら……

あつという間に なにもかもおしまいさ！

開いたページにはこんな文章が書かれていた。

これは……『詩』<sup>ポエム</sup>——だ。

確かにメルヘンな表紙は勉強用よりも漫画やポエムが描いてあったほうが似合う。持ち主はこの菜の花に囲まれてインスピレーションを感じながら詩作に耽っていたのだろうか。

ページをじっくり見ていると持ち主の名前はどこにも書かれていない。ノートを閉じて、どうしたものかと考えながら頭を上げると、数m先の今までなにもなかった場所に小屋があった。

小屋は童話にでも出てきそうな丸太で組まれた小さなものだ。小屋もそうだが周りの風景も変わっていた。同じ森林とはいえ通いなれた公園の景観との違いはすぐにはわかった。いつのまにか私の周りに咲いていたはずの菜の花もなくなっている。ここは……

「……どい？」

ポエム張を開いて見てる間、一步も動いていないのは間違いない。なのに、顔を上げたら自分のいた場所がそれまでと違っている。つまり、これは……。

「『ス』で始まって『ド』で終わりそう」

ちよつとした軽口を言えるくらいには落ち着いている。もはや身の回りに異常が起きればそれはスタンドと相場が決まっている。決めつけ、思い込みはよくないが経験がそう告げていて、それだけですぐに察せるくらいの経験を感じてみれば積んでいるんだな、としみじみしてても事態は変わらない。

こうして異変に直面しつつも冷静でいられると、馬鹿馬鹿しい話だけど映画や漫画を元にくつつかの予測が頭から自然に出てくる。

まず一切移動していないにも関わらず場所が変わっているということは、いわゆる『瞬間移動』的な能力が思いつく。誰がなんのために私にそうしたかはもちろん知る由もない。意図して私が狙われたのかもわからない。そうだとすれば私を狙った理由を考えればこの状況から抜ける手立てが見つかるかもしれない。が、自分が狙われたと考えるのはやっぱり憂鬱だ。それに、もうひとつ思いついたことのほうが個人的にはしつくりくるし、まずはそっちから考えてみる。自分ひとりの頭で考えてることに、個人的な”つてなんだ。”

場所の移動に気づいてからすぐに、持っていたポエム張がなくなっていることにも気づいている。あの『ポエム張』がスタンドで、私が触ったことによつて能力が発動して、『ポエム張の中の世界』的な空間に飛ばされたんじゃないか？ このフィクションじみた考えは現実的ではないけど、最近は割と現実でフィクションみたいなことが起きてい

るし一考の余地はありそうだ。奈緒なら瞬時に思いついたかもしれない。加蓮も、今はそう言った場合、私の脳内でのイメージでは人を小馬鹿にするような微笑を浮かべているけど、何度もスタンド能力を感じるような経験をすればこのフィクション的な発想が役に立ちそうなことを知るだろう。でも知らないに越したことはないかもしれない。そもそもすでにそうなってるかもしれない。奈緒、加蓮……今、みんなはどうしてるんだらう。……そういえば今は登校時間どきか。スマホを見ると7時58分。そろそろ遅刻の可能性を気にしだした方がいいけど、今はそうも言ってもらえない。幸い圏外にはなっていないから気乗りはしないけど、いざというときは誰か呼ぶ。

さておき今は目の前に小屋がある。毘だとしてもやつぱり入った方が事の進展がありそうな気がしてしまう。ただこの未知の空間にいる私自身の実感としては、この場所に「悪意」とか「攻撃的なエネルギー」は感じない。むしろそういったものとは逆と言つてもいい。静かで……美しくて、どこか寂しげな気もする。もっともすべて私の感覚でしかないけど。しかし未知の事態だ、今は自分の感覚を信じるしかない。スタンドが心から生まれる力なら信じる気持ちは大切だ。

スタンドを出し、用心深く地面を踏みしめて小屋に近づき『ネヴァー・セイ・ネヴァー』でドアノブを掴み、一気にノブを回して開けた。

「っ!？」

「ひいひいイツ!!」

「……………」

開けたとたん、目の前に身構えている女性が見え、その後ろからは明らかに怯えているような女の子の声が聞こえた。

「…………高等部、2年B組、渋谷凜。出席番号…………14」

「え、あ…………はい」

臨戦態勢を解いて突然の点呼を始めた目の前の女性は、誰であろう学園の教師、高峯たかみねのあ先生だった。長い銀髪に見るものを釘付けにするような鋭い瞳、ほとんど表情を変えないことなく言葉少なに喋ることも相まってミステリアスな雰囲気を大いに醸す姿に憧れる生徒も少なくないが、そのクールすぎる佇まい故に木場先生とはまた違った方向で恐れられている面もある。

「その『騎士』で、なにをするつもりだったの」

いつもと変わらず落ち着き払った態度で先生が騎士——私の『ネヴァー・セイ・ネヴァー』に視線を向けて尋ねてきた、ということとは把握できていなかったがどうやら高峯先生もスタンド使いのようだ。

「公園でノートを拾ったんです」

「ええッ!!?」

また女の子の甲高い怯え声が高峯先生の後ろから聞こえた。先生は一瞬後ろを気にしてから続きを話すよう促した。

「拾って……少し中を見て顔を上げたら、いたんです。ここに」

「み、みみみみみ、見た……見られた……」

みたび先生の背後で、女の子が震えながらつぶやく声が聞こえてきた。

「それで……まあ……スタンドなんですよね？　これ。で、とりあえず目の前にこの小屋があつたから、警戒しつつ入ろうとしたら、」

「私たちがいたというわけね」

「そうです……で、その……なんなんですか、これは」

事情がわからないから要領を得ない聞き方になってしまふのが歯がゆいが、先生がいすることもあつてか、とにかく今は危険は無さそうに思えた。

高峯先生はスツと、さつきから聞こえてる震え声の主の姿が私に見えるように右に1歩動いた。木造の円形の机の下に潜って、すっかり怯えきつた態度でこつちをチラチラ見ている女の子がそこにはいた。

「中等部、2年A組、森久保もりくぼ乃々のの」

「つ、ひゃい………？」

小動物の鳴き声みたいな返事を女の子がすると、それに答えるよう先生が小さくうな

ずき、それから私の目を見つめて言った。

「これは彼女のスタンド能力よ」

なんとなく察しはついていたが、ポエム帳に、広がっているのか繋がっているのかかわからないこの不思議な空間はあの森久保という子のスタンドだった。

「行くわよ」

先生が突然言った。

「はい?」

「遅刻するわ」

遅刻、という言葉聞いてスマホで時間を確認すると8時7分だった。

「乃々、解いて」

「えっ……?」

「スタンド」

「えっ、あつ………はい。んんっ、えっ?」

唐突な流れの変化にしどろもどろが極まった森久保乃々はしばらく困惑した目で先生を見た。

「……」

「……」

「……」

沈黙が流れた。状況がわからなすぎるせいか気まずい感じはしなかった。

「……………あの」

沈黙の中、森久保乃々が苦しい顔で口を開いた。

「外に……………出ててもらえますか。緊張して……………うまく、できないんですけど……………」

「出ましょう」

先生に直裁に言われるがままに小屋を出てふたりで少し待っていると、目に広がって  
いた風景が一瞬で元の公園の、ポエム帳の中を見る前の場所に変わった。

「これでいいですか？ ……いいですよね？」

後ろからした声に振り向くと、相変わらずおどおどした様子で、事の発端だったポエム帳を抱くように両手で持つている彼女がいる。控えめに控えめすぎな態度といい後ろのちょこんとカールしたベージュ色の髪といい、育ちの良い箱入りのお嬢さんといった風情の漂う子だ。

「急ぎましょう」

「あつ、はい……………、どうも……………あの、お騒がせしました」

「え、うん、いや」

歩き出す前、森久保乃々が恐る恐るながら一言声をかけてくれた。人付き合いが苦手

そうに見えるけど、そのあたりちゃんとしているのがますますお嬢様っぽい気がした。結局、狐につままれた気分のまま、3人並んで、とはいってもこれといって言葉を交わすこともなく粛々と軽い急ぎ足で学園へ向かった。

(つづく)

## 第20話『Stormy Monday』

先生と中等部生徒とのほんのちよつとの集団登校を経て学園へ着くと、乃々はそそくさと中等部校舎へ向け歩いていく。中等部は高等部より正門から少し離れたところにあるぶん遅刻の問題がシビアだ。

「あの、その、じゃあ、行きます……」

5、6歩進んでから振り向いて改めておじぎをして小走りで乃々は去っていった。

「結局、なんだったんですか？」

乃々の後ろ姿から隣の高峯先生に視線を移して尋ねた。

「……そんなに気にすることかしら」

ちらつとこつちを見て先生が素っ気なく言った。素っ気ないといつても高峯先生の場合はこれが普通というか自然で、動作も言葉も表情もすべてがミニマルで洗練されている。このドライな姿勢が慣れない生徒からはどうしても怖がられてしまうようだけど、無理に好かれようと愛想を振り撒いたりしない姿は気高く、威圧感のある鋭い目からは研ぎ澄まされた美しい強さを感じる。木場先生が『柔の強さ』みたいなものだとは

れば高峯先生は『剛の強さ』といった感じかもしれない。

「特異な空間ではあれど、面談みたいなもの。奇異なことではない」

面談みたいなもの……。そうなると問題はないけど答えてはくれなさそうだ。確かに別に私が首を突つ込むことではないであろうものの、あんな内向的そうな子に高峯先生という組み合わせもあつて気になるものがある。

「遅刻するわよ。私は行くわ」

こちらの返事を待つことなく高峯先生も職員玄関の方へと静かに歩いていった。その動きの美しさに、一瞬遅刻のことを忘れて見入った。

\*

「よつす。今日はずいぶんギリギリだったな」

朝のショートホームルームが済むと私の席に奈緒がやってきた。

「登校中からゴタゴタしちゃって」

「まさかそれって……アレ?」

「アレ」

「マジか……」

「アレ」がなにを指しているのか正確に把握する前からアレだと言いつつしまつたけど、まあ私たちの中で「アレ」と言えばスタンドのことなわけで、現に奈緒は私の

予測の範囲内にあった流れで話を続けた。

「問題ないようなのはいいんだけど………どんだけいるんだろうな、スタンド使い」

「まったくね。ファンタジー世界とかの『選ばれし者』的な人より多そう」

スタンドという奇妙な能力のことを認知してからまだ3週間。それだけの期間で私  
はもう20人以上のスタンド使いと出会い、その中には危害を加えてくるような奴もい  
た。

「多すぎるよな……。冷静に考えてさ、こんな生活が続たらどうなっちゃうんだろうな、  
あたしたち」

「それは……」

どうなる——っていうのは、やっぱり、怪我するとか死ぬとかってことなんだろうな。  
確かに今こうして無事に暮らしているけど、実際危ない目には何度も遭っている。今後  
今まで以上の大きな出来事が起こるとも限らない。考え出せばすぐに不安がつきま  
とうことだらけだ。

「まあ凜にこんな話振つてもどうしようもないんだけどさ。気になるじゃん、やつぱ」

「こんな色々起こつてるとそうなるよね……。でもなんか、うまく言えないけど、私は  
そこまで心配してないんだ」

「なんでだよ?」

「だからそれがうまく言えないんだって。なんだろう……私けっこう楽観的なのかも」  
「へえ、凜からそんなジツタイを欠いた言葉が出てくるなんて、意外〜」

「おわ、加蓮」

少し大げさに肘を曲げ両手を上げて驚いてみせた奈緒の視線の先、私の真隣にはいつものまにか加蓮がいた。少し前から話を聞いてたようだけど、介入してくるまで私も奈緒も気づかなかった。

「朝から深刻な話してるね〜君たち。またなんかあったの?」

「凜が今朝スタンド使いに出くわしてな。まあ戦うとかってアレじゃなかったそうだけど、あたしらだって他人事じゃないからな」

「アタシなんかはアンタたちに迷惑かけたときくらいしか危ない思いしてないけど、どうなんだろうね」

「そもそも危ない・危なくない以前にスタンド使いが多すぎるんだよ。職場体験学習中だけで、え〜と……9人会ったぞ、あたしは。マスター、夏樹さん、志保さん、比奈さん、由里子さんと、危ないの4人」

「奈緒ほどじゃないけど……数えたら私も先週だけで5人のスタンド使いと出会ってる。加蓮がひとりも会わずに済んだのが不思議に思えてくるよ」

「しかも凜の場合、敵が園児になんかやってきたんだろ?」

まだ終わっていない問題に触れるように眉を思いつ切り「ハ」の字にした困り顔で奈緒が尋ねてきた。

「ざっくり説明すると、人間を狼人間に変える能力で、そのうえ本体の命令に従って動くわけ。それで園児を狼人間にして……」

「襲ってきたってわけか……。改めて聞くとマジにゾツとするぜ。よく解決できたな」

「またざっくり説明すると、私や先生が狼人間を食い止めてる間に美嘉が……なんて言うんだろう、『スタンドのエネルギーを消す』ような能力のスタンド使いで、それで園児を元に戻してくれたんだ。で、次は敵本体にもそれを使って、しばらくスタンドが使えなくなってる間に捕まえて解決、って感じ」

「ふええ〜っ、『スタンドエネルギーを消すスタンド』って……チートじゃん！ よかったな、そのミカって人がいい人で」

「そのミカちゃんって何年？ アタシが知ってる子？」

「ここで私は奈緒と加蓮が美嘉をまったく知らないような反応をしたのに疑問を感じた。

「あれ……言ってなかったっけ？ 城ヶ崎美嘉と莉嘉、私の職場体験学習に来てたって」

「……」

「……」

奈緒も加蓮も、直前まで喋っていたときの表情のまましばらく固まってしまった。

「……………ジヨ？」

「ジヨ」

「マジ？」みたいな感じで加蓮が呟いたので肯定するように私も同じ感じで返してみた。

「なんだっ…………てえええええ〜！」

それに続いて奈緒がそれはもう、わかりやすいくらいに驚いて叫んだ。

「あ〜っと、気にしないで気にしないで！ 誰にでも一生に何回かこれぐらい驚くような出来事があるもんよ、たぶん。この子には今それが来たの」

奈緒の声に驚いてこっちの様子を気にしているクラスのみんなに加蓮が妙なフォロ―を入れた。奈緒は突然叫んだことに少し顔を赤くして恥ずかしがった。

「奈緒じゃなくても驚くよ。なにアンタ？ なんてそんなこと起きてんの？」

「いや、なんか、雑誌の仕事とかで1日幼稚園の先生的な企画で来てみたいだよ？ 私も当日知ったからビックリしたし」

「すげえな…………あのカリスマ姉妹といっしょの空間にいたのか」

「うーん、ふたりにこのこと言わなかったっけ？ 話した気がしたんだけど」

「言っていない言っていない。にしても、アタシは特にファンってわけじゃないけど、人に

よって泣いて喜ぶ案件よ、それ」

「そうかもだけど、スタンドのこともあつて最終的にはそんなこと考えてる余裕なかつたし」

「そつか、助けてくれたミカつて城ヶ崎美嘉なワケだもんなく。てか芸能人にまでスタンド使いがいるのか。もうどこの誰がスタンド使いでもおかしくなさそうだな……」

さつきの照れ隠しにもつともらしく腕を組んで奈緒が言った。耳がまだ赤い。

「妹の莉嘉ちゃんもスタンド使いなの？」

カーデイガンのポケットからスマホを取り出しながら加蓮が言った。

「うん。シールからゴリラ出してた」

「は？ アンタいきなりなに言つてんの？」

加蓮の反応はもつともだけど私は真実を言つたまでだ……が、こうして口に出してみると確かにおかしい。

「シールのスタンドで、どこかに貼るとスタンドのゴリラが出てくる、って能力だったんだよ」

「なんでシール貼つたらゴリラが出てくんのよ？」

新たな疑問を投げられたがそんなの私を知るわけない。

「うーん、『城ヶ崎美嘉 莉嘉 幼稚園』で打ったけど特にそれっぽい情報はないかな」

どうやらさつきから加蓮がスマホをいじってたのは美嘉たちの幼稚園でのロケについてのもうだった。

「先週のことだし、まだなにも出てこないでしょ」

「雑誌の仕事っていつても、週刊誌でもなきやそんなすぐに概要出てこないだろ。凜はそういうの聞かなかったのか？　なんて雑誌の何月号とか」

「聞いてない」

私がそう言った直後に予鈴が鳴った。

「あくもく、アンタはいつでもどこでもドライなんだから。後でまた調べとく」

「別にいいって」

「アンタがよくてもこっちが気になるの。じゃ」

「そう……」

スマホをしまつて加蓮はそそくさと教室から出ていった。

「まさか凜にそんなことがあったなんてな。スタンドといい、なにが起こるかほんとわからないよ」

「なにが起こっても悪いことさえ起こらなければいいんだけどね」

「まったくくだ。テストも近いし、スタンドのことばかり考えてらんないよってな」

軽く伸びをしてから奈緒も自分の席へと戻っていった。

\*

放課後、奈緒と加蓮とどこかでテスト勉強をしようという話になり、それなら体験学習でお世話になったし、ちよつとしたお礼の品でも買ってからまたあのメイド喫茶に行こうと奈緒の提案で決まったので、お店の最寄りのコンビニにいったん寄ることになった。

「ほんと氣遣いのプロね。授業でお礼の手紙書いたんだし、そこまでしなくてもいいと思うけど」

「あたしの気持ちの問題だよ。それくらいあのお店気に入ったってこと」

「買うのは奈緒だから別に構わないけどね。向こうだって嬉しいだろうし。ね？ ……」

凜、なんで黙ってんの」

加蓮にそう言われて我に返る。そういえば学園を出てから喋った覚えがない。

「あ、いや、奈緒の案、いいなって思つて。私も幼稚園に花の種送るのとかアリアもつて考へてた」

「おお、いいんじゃないか。花の種なら育てる楽しみもあるし、素敵なプレゼントだと思うなあ！」

「凜の場合、お店の宣伝にもなるから実利もあるしね」

「そこは別に狙ってないけどね」

ふたりからの反応もいいので、どんどんその気になってきた。帰ったら両親に相談してみよう。それに先生にも話してみないと。

「そもそも奈緒はなにを送るつもりなの？」

「まあ無難にお菓子かな。マスター甘いもの好きだし。あ、業務的にあつて困るものでもないだろうから箱ティッシュとかもアリかな」

「女子高生が贈り物にティッシュって。第一、ティッシュ配り嫌いがティッシュあげんのは矛盾してるよ」

「ムジユンしてはいないだろ！ 誰だってティッシュは使うし……いらねーってのにティッシュねじ込んでくるやつがヤナだけだよ」

「ねじ込んでほこないでしょ」

「ふふつ、いつかどこかでティッシュをねじ込むスタンド使いと会うかもよ。そしたら奈緒、どうする？」

「とりあえずスタンドの名前は『ティッシュマン』で決まりだな」  
「まんまじゃん」

などと奈緒と加蓮の会話にどうでもいいツツコミを入れつつ歩きながらコンビニに着いた。

\*

「こんちわー!」

扉を開けて店員メイドからの挨拶より先に奈緒が店内へ向けて訪問の言葉を告げた。それを受けて私たちが席へ案内してくれたのは、先日ここへ来たときにも働いていた榎原志保さんで、あの大きな身体の個性的に個性的過ぎるマスターの姿は見えなかった。

着席した私たちはメニューを見てオーダーを考える。他のお客さんはまばらで環境音も小さく、店内BGMがよく聞こえる。ジャンルはよくわからないけど、クラブというかディスコというか、低音のビートが強調されたダンス系の曲がかかっていて、前に来たときはハードロックがかかっていた。どちらもお店の雰囲気と合っていないということはマスターによる完全な趣味選曲だろうか。好みの音楽をBGMに使ってしまう姿勢は嫌いではない。好きになる要因になるわけでもないけど。やっぱり飲食店なら決め手になるのは料理に他ならない。そしてそれに関しては先週訪れた時点で良さを確認済みだ。

「あら奈緒ちゃん、とお友達もいらつしやい。また来てくれるなんて殊勝な子たちじゃない。嬉しいわ♪」

カウンターの死角からにゆうつとフライパンを持ったマスターが姿を現した。

「料理は美味しいし、メイド奈緒生誕の地でもあるんで。パワースポットとして名高いんですよこのお店」

これが2回目の来店だというのに早くも加蓮は調子がよく、個人的な都合でお店をパワースポットに仕立て上げてみせた。

「なんであたしゆかりのパワースポットができるんだよ……」

聖地ゆかりの人物が私の隣でため息をついた。当の本人にとつてここが靈驗あらたかな地になるかどうかは微妙そうだ。

「それはさておき、はいマスター、つまらないものだけど、体験学習でお世話になったお礼の品、みたいいな？　まあただのお菓子なんだけどあはは……」

そう言いながら奈緒は律儀に両手で差し出しているものだから照れ隠しに頭を掻く動作もできずに、はにかんだ表情でマスターにお菓子を渡した。物は本当になんら特別でもない、強いて言うなら少しだけ値段の高いチョコチップクッキーだった。

「あらあらあらあらあら、ちよつとちよつとこの子は！　なんてできた子かしらもう！　嬉しいじゃない！」

「いやいや、喜びすぎだよマスター……」

「こういうのは気持ちなのよ気持ち。学校の課外活動の一環で自主的にここまでする子ってなかなかないもの、嬉しいに決まってるわあ〜♪」

受け取ったクッキーを片手に満面笑みのマスターとそんな彼……彼女の反応を前にますます照れた表情になる奈緒、それを見てなにもしていないのになにか成し遂げた気

に満足そうな顔をしてる加蓮。一帯に温かな雰囲気醸し出されている。

「なあ、ちよつと静かにしてくんねーか、立て込んでよ……」

そんな空気の中に聴き馴染みのない声が申し訳なきそうに入ってきた。声の主はカウンター席にいた他のお客さんで、私たちとそんなに年が変わらなさそうな女の子だ。

「あつ、ごめん」

「いや、テメエんちでもねえのに偉そうで悪いんだけどな、そろそろ頭パンクしそうでよ……」

ぶつきらぼうな口調で奈緒にそう受け答えた女の子の席には教科書とノートが広げられていた。

「焦らすとか煽るわけじゃないけどよ……そっちはテス勉強ねーで大丈夫なのか？」

「一応勉強のために来たんだけど……まずはなにか頼んでから、と」

「ほーん。てか、マスターと知り合いか？ ずいぶん賑やかだったけど」

「あく、たくちゃん、この子よこの子。体験学習で来てたコ！」

マスターが女の子の名前を呼んだ。知り合いらしい。

「ああ、つ、そうなのか？ ナオって言ってたっけか」

「そうよ、神谷奈緒ちゃん」

「あとふたりいるじゃねーか」

『たくちちゃん』が私と加蓮を見て言った。すごく不躰ぶしつけな考察ではあると思うけど、たぶん『たくちちゃん』はもうテスト勉強のことを忘れているような気がする。

「友達よ友達。土曜日にも飛鳥ちゃんと来てくれたの。凜ちゃんと加蓮ちゃん」

流れてマスターが彼女に私たちを紹介したので一応会釈をした。それを見た『たくちちゃん』もスツと軽く手を上げて返してくれた。

「ああ、飛鳥とも知り合いなのか。んじゃ、アタシのこと……知ってんじやねーか？」

こつちを見てニヤリと笑った彼女の口元から八重歯が見えた。それが理由ではないが私は彼女のこと知らない。

「んー、悪いけど覚えがないかな。っていうか、アナタ美城生？ 私服だけど」

同じく彼女を知らないらしい加蓮の言う通り『たくちちゃん』は、眉の少し上あたりからツノを2本生やした傲岸不遜な表情の外国の少年らしき顔が白黒で大寫しにされた半袖のシャツにデニムのダメージジーンズとラフな私服姿だった。

「そーだよ。スカート抜きにしても制服に単車はな……様になんねえからな」

単車？ 馴染みのない言葉が彼女から出てきた。バイクに乗る、ということだろうけど、バイク通学の美城生はおそらくほとんどいなく、飛鳥の知り合いらしいとはいってもやっぱり彼女に心当たりはない。

「あ……向井拓海むかいたくみ、さん、か……？」

「そうだよそうだよ！　なんだ知ってるのもいるじゃんか。へへっ」

おずおずと訊ねた奈緒に彼女が笑顔で答えた。

「え……あの”向井拓海!”」

加蓮が少しだけなにか警戒するような目つきで言った。

「あー……ロクでもねえウワサで聞いたことある名前だって顔なのは仕方ねえけどよ、”その”向井拓海で合ってるぜ」

加蓮の、自分を見る目つきが指す意味を不意ながら肯定するように向井拓海は答えた。なにか事情ありげのようだが向井拓海の名前をたつた今初めて知った私には”あの”も”その”もさっぱりわからない。

「凜、まさか”向井拓海”って名前……聞いたことない？」

私の様子からどう気づけたのか加蓮が察した。勘違いでなければ声の調子に呆れのようなニュアンスを感じる。

「知らないけど？」

「うえく……マジ？」

呆れているのは当たっていたようだ。ということとは、どうやらこの向井拓海は学園内で有名な存在らしい。

「ホント知らないの？　本人の前で言うのもなんだけど、町の走り屋チームを仕切って

るとか、バイクで高速道路を時速200kmで走り回ってるとか、暴走族をたつたひとりで潰した、とか……」

「知らない……なにその少年マンガみたいなウワサ」

「ハハハツ、だよな！ 気がついたらそんなアホくさいハナシが出てたんだよ！ まあ、完全なウソっぱちでもねえけどな」

「え」

拓海は加蓮の挙げた噂話を一笑に付しはしたものの、最後に付け足した一言は私たちに困惑させた。困惑と関心が一体になったような顔で加蓮が質問した。

「走り屋のチームを仕切ってる、っていうのは」

「仕切ってるのはアブねえチームとかじゃなくてツーリングのチームだな。もちろん安全運転だけ」

「じゃあ、暴走族をひとりで潰したのは……？」

「それはひとりじゃなく、みんなでだな。あと潰してはいねえ」

「やっぱヤバイチームじゃん！」

「ツーリングのチームじゃねえよ！ 戦友とだよ！」

「ダチ……!?!」

本人としては弁解のつもりのようにだけど、暴走族と争えるような友達との繋がりがあ

るなら噂はまんざら嘘でもないのでは？

「勘違いしないでね、なりゆき上そうだったってだけで拓海ちゃんは人を助けたのよ」

向井拓海という人間を測りかねて疑心暗鬼に陥りだした私と加蓮の空気を察したようにマスターが彼女の言葉の補足を始めた。

「女の子が暴走族のメンバーに絡まれてて、それを助けたのよ。夏樹ちゃんね。それがきっかけで、いわゆる“因縁”をつけられて、止むに止まれぬ……ってやつかしら」

「なんだ、じゃあいい人じゃん」

「おう、いい人なんだよアタシは」

「調子に乗らない」

加蓮の言葉に乗った拓海をマスターが冗談半分に嗜めた。

「ってか、夏樹のやつ、助けたって言ったってよ……アイツ、アタシが気張ってる間にその女と2ケツでトンスラしたんだぜ。こっち置いてけぼりでよお！」

「にけつ？」

意図してではないだろうけど奈緒が妙に可愛らしい響きで言った。奈緒を見てマスターが口を開いた。

「バイクの2人乗りね。かわいい女の子を助ける為だったんだからしょうがないじゃない？」

「せめてなんか言つてから行けつてんだ！ 向こう4人いる中で置いてくかフツ？」  
「そ、そうだったのか？ それは夏樹さんも軽率だったんじゃない……？」

「そう思うだろ!? えーと、神谷！ オマエはいいやつだ！ 庇わなきゃなんねえのがあるからつて4対1にして置いてかねえよな！ コツチだつて単車あんだから合図かなんか出して教えろよつてハナシだよ！」

奈緒の言葉に励まされるように拓海が大きな声でまくし立てた。

「でも勝つたんでしょ、4対1でも」

「おうよ」

「あ、勝つたんだ……」

マスターの問いに自信満々で答えた拓海にフォローを入れた奈緒は困惑した。

「なつちゃんだつて拓ちゃんの腕を信じてしたことなんだろうし、大目に見てあげないな」

「別に恨んではいねえけどよ。巻き込んで手にケガでもされたらそれこそ寝覚め悪いし」

「そもそもケンカにならないようにしなきゃねえ」

「つてもよ、滅多に出くわさねえとはいえ顔覚えられちまつてるからな。よっぽど身の程知らずじゃなきゃガンつけりや大抵引つ込むから表沙汰になるようなことは起きて

ないけどよ」

「でもウワサはどんどん大きくなっていつてるじゃない……『美城の風神』なんでしょ？」

「へっ……まあな。バカどもに畏敬の念を込めてそういう名前を付けられて広められちまうたあ、アタシもヤキが回ったもんだぜ……」

「……全然そう思つてなさそう」

マスターと拓海の会話を横で聞きながら加蓮が小さく呟いた。確かに表情を見るに『風神』の異名は痛く気に入っているようだった。

「……まあ、ご覧の通り危ない面がまったくないとは言えないけど、アナタたちの学園で流れてるウワサのような子ではないから、ウワサの片棒担いだりとかはしないでね」

「言われなくてもそんな陰湿なことはいたしませくん。本人に面と向かつて言う派なんぞで」

「それもどうなんだ……」

やれやれと秤みたいに両手を広げて意気込む加蓮に呆れた奈緒は肩を落とした。

「私は……そもそも今まであなたのこと知らなかったし、話だけで決めつけたりもしないし。それにこうして会った限り……悪くはないと思うし」

「あたしだって他人の話を鵜呑みにしたりはしないよ。でもさ、因縁付けられること

に關してはどうすんだ？ 自然放置で解決出来るならいいけど……」

心配そうに奈緒が訊ねると、拓海は少し神妙な顔になってうつむき、考える風な素振り、

「んー……大人しくはしてるつもりさ。でもな、なにか仕掛けられたら……」

と、そこまで言ってから頭を上げ私たちをまっすぐ見て、

「後はなるようになれ、だな！」

にっこり笑って八重歯を見せ爽やかに言つてのけた。

「潔いのはいいけど、もう少し考えて貰いたいもんねえ……そっちの方はどうするの？ なるようになれ？」

「んあ？」

渋めの半笑い顔でマスターが拓海の席前のカウンターに広げられたままのノートを指差した。

「あ………」

カウンターに広がったままのノートや教科書を見た拓海の顔が徐々に暗くなっている。

「コーヒー、おかわりする？」

「……………ウス」

拓海は静かに答えた。

「……………いつしよにやらね?」

思い出したように私たちに向き直り、今度はそう呟いた。割と切実に教えを乞う表情だった。鋭い目付きで懇願されると迫力がすごい。拓海をテーブル席に誘って、私たちも全員コーヒーを頼んだ。しばらくなくなにか食べる余裕はなさそうだ。

\*

緩い感じで企画された勉強会だったけど、マスターの淹れたブラックコーヒーと切羽詰まった拓海の質問責めにひとつひとつ丁寧な答えていくことでもいい復習になったこともあつて予想より捗った。次のテストへの負担が軽くなったことも手伝って、噂と偏見に溢れているらしい同級生の印象は私の中では良好だ。

「あ、ちよつとマスターと話すことあるから外で待つててくれ」

帰り際、支払いを済ませたところで奈緒がおもむろに店内へと踵を返していった。言われた通りにお店の外へ出ると、加蓮がまたなにか面白そうなことを発見したような顔になっていた。

「奈緒ったら、バイトする気ね」

「はあ? ハハハ?」

「他にどこがあるっていうの」

「なんでわかるの」

「勘！」

加蓮ははつきり言い切った。その歯切れのよさに根拠なしに納得できるものがないこともない。

「マスターと話すことってバイトのこと？」

「そう。奈緒も迂闊だなあ。私たちがいるときにそんな話をするだなんて」

「それはさすがに予測できなかったと思うよ」

盗み聞きしてるわけでもなく勝手に加蓮が察したこと迂闊なものもないだろう。後日ひとりで行ったときにも話せば防げたことかもしれないけど。というか私はもう加蓮の推測をかなり信じている。

「今話をするということはテストが終わったら働く感じかな」

「じゃあ、テスト後に奈緒の予定の合わない日にここに来れば……？」

「メイド奈緒が見れる！」

なにひとつ根拠のない予測で私と加蓮の間に共通の活気が湧き出す。仮に本当だとしても奈緒が私たちにここで働くことを教えるという可能性は加蓮にはないのだろうか。私にはない。私たちが悔い改めない限り、まずない。

「なあ、これオマエらの、じゃないよなあ……？」

イマジナリーメイド奈緒に一喜一憂している私たちに自動販売機でジュースを買いに行っていた拓海が戻ってきた。手にはコーラとノートを持っていて、ノートを持っている方の手をこつちに差し出していた。

「自販機の横に落ちてたんだけど、店入る前に落としたりしてない、よな？」

「私のじゃないよ。ていうか喫茶店行くのに自販機寄らないし、この表紙は私の趣味でもないし」

差し出されたメルヘンチックな装丁のノートを手に取って心当たりがないと答える加蓮の横で、私は小さく「あつ」と言っていた。

「これ、乃々のだ」

「のののだ？ 誰、のののださんって」

「違う、のののだじゃなくて……」

私はふたりに今朝登校時に会った森久保乃々のことをかいつまんで話そうと思った。が、その前にあることに気づいた。拓海は加蓮に渡す前、ノートに触っていた。乃々の、『スタンドのノート』に。つまり……

「あつ、これってポエム張——」

「え？」

「あつ」

なにげなくだったんだろう。開いてしまった。加蓮が、ノートを。「ふたりとも、落ち着いて！」

次の瞬間起こるであろうことを察知して咄嗟に私は大きな声を出していた。

「へ？ ……………おう、落ち着いてるぜ？」

「いや落ち着くべきは凜でしょ。どしたの、いきなり……………」

そこまで言ったきり加蓮が沈黙してしまった。そして数秒してから辺りをキョロキョロ見回し始めて、

「…………ココ、ドコ？」

「はあ？」

固まったまま加蓮が抑揚なくゆっくり言った。それを聞いて拓海が辺りを見回す。私はふたりの後ろに見える景色が変わったことに少し前から気づいて状況を認識している。

「……………ココ、ドコダ？」

加蓮と同じような無機質なトーンで拓海も言った。面倒なことになったな…………。

(つづく)

## 第21話『Ride The Wild Wind』

思いがけない形で乃々のスタンド空間へ2度目の訪問となったわけだが、まずなにも状況を理解できてないであろうふたりにこのことについて説明しなくてはならない。

「スタンドだけど無害、のはずだから落ち着いてね」

唐突な周辺の変化にポカンとなったままの加蓮と拓海に言うのと、ふたりともスイッチが入ったように忙しく辺りを見回し始めた。

「いやちよつと待つて無害のはずつてどゆこと?」

見回す動作を続けながら加蓮が早口に言った。

「今朝またスタンド使いに会つたつて話したでしょ? 中等部の子だったんだけど、こ

れ、その子のスタンドなの」

「ああ、じゃ……問題なし?」

「問題なし」

学園内の人物であれば無害ということになるわけではないけど少なくとも乃々は問題ない、というか場合によっては目をかけてあげないと乃々の方が危ないかもしれない

い。身を隠すには良さそうな能力ではあるものの、こうして本を開けば誰でも入れてしまうのだ。悪人にこの力を知られないとも限らない。

「で、拓海もスタンド使いだったんだ」

「あ？」

落ち着かなそうに周囲に気を払ったままの拓海が横目でこつちを見た。

「ノート、持ってたでしょ。スタンドのノート。あれがこの場所の発生源、らしいよ。それが触れるってことは、そうなんでしょ？」

「ああ、そうなのか……………お前らもかっ!？」

そして返事をした直後にいきなり叫んだ。私たちもスタンド使いであることに今気づいたようだ。

「そうだよ……………ホラ、見える？ キレイでしょ」

ちよつと自慢気に加蓮がスタンドを出してみせた。ミントカラーのドレスを纏い、これまた同じような色の帽子を被って日傘を持ったお嬢様のような姿の加蓮のスタンド……………。名前は『フローズン・ティアー』だったはず。

「おおー！ 確かにキレイだしカッコええ！」

拓海がどことなく奈緒のような感想を言った。見えるということとはスタンド使いに間違いないようだ。

「調子はどうなの？」

「もう完全に自分の一部ってカンジ。暴れてたのがウソみたい。っていつても暴れてたときは感覚なかったからわからないんだけど」

スタンドの調子を加蓮に尋ねると、論より証拠とばかりに『フローズン・ティアー』が日傘を開き空に掲げて、吹雪を出した。

「うおっ!？」

「こういう能力なんだよ、加蓮のスタンド」

「吹雪か……強そうじゃなか」

ワクワクした顔でそう呟いた拓海と、吹雪で薄荷色にほのかにキラキラ光る空を見上げた。

「降りそうだな……」

また拓海が呟いた。確かにそのとおりで、今朝ここに来たときはこのメルヘンなスタンドの空間にふさわしいような晴れ空だったのに、今は現実世界のこれからの季節を先取りしたかのような曇り空だ。遠くの空はここよりもっと暗く、嵐の前触れにすら見える。

「とりあえず、あそこに入ろう」

ふたりに少し先にある小屋を指し示して言った。小屋は朝来たときに乃々と高峯先

生と会ったのと同じらしき小屋だった。確証はないし天候が違つてはいるけど、まわりの景色も含めて見覚えがあるから合つてると思う。

「おう、さつきから気になつてたんだ。あそこに誰か、つてか本体がいんじやねえか？」  
「今朝来たときはいたけど……」

それなら私たちの声が聞こえているだろうし出てくるはず、とも思つたが、乃々のことを考えるとそうでもないかもしれない。

「いるかもしれないけど出てこないかも」  
「なんでよ？」

と、今度は加蓮が言つた。「よく知りもしないのにこう言うのはなんだけど……」と、ふたりに言うわけでもなく自分に言い訳するような前置きを頭の中で唱えてから私は加蓮の疑問に答えた。

「少なくとも今日の朝、初めて乃々……このスタンドの本体の子ね。と会つた限りでは、なんていうか、儂げ？ おぼろげ？ 守らないといけないような、そんな印象の子だったから、だとしたら向こうから出迎えてはくれなれないと思うんだ」

「なるほどね。一言で言つたら内向的な子つてこと」

「一言で言いたくはないけどとりあえずそれで合つてる」

「なんで？」

「自分の中で納得できてない。それに会ったばかりの子のことを教えるのにネガティブな言葉を使うのもなんか……」

「気が引けるみたいなの？」

「たぶん」

答えるとは言ったものの上手く言い現せないものを感じて私は私の言った言葉が妙に引つかかって言い淀む。陰口を言っているような気分になっっているのかもしれない。

「凜が気を遣いたくなるくらいデリケートそうな子ってことね。実際どうかは会ってみればわかるでしょ。初対面ですぶ濡れは嫌だし、行く」

加蓮に急かされ、乃々の人となりの共有はさておき全員で小屋へと歩を進めた。

「拓海は大丈夫かな？」

が、歩いて5、6歩のところまで今度は加蓮が拓海を見て気がかりそうに言った。

「アタシ？ なんなの？」

「おとなしそうな子なら、そもそも拓海なんか雰囲気だけで怖がられちゃうんじゃない？」

「あ？」

「ほら。その『あ？』っての、威嚇っぽいし」

「え、そんなか？」

ちよつと心外そうに拓海が私と加蓮を交互に見た。

「これから気をつけた方がいいかもね……つて、拓海とも会つたばかりなのにこういうこと言うのなんだけど」

「まあ……思うところないわけではねーからよ、気にすんな」

「じゃ、気を取り直して行きますか。見て。あつちなんかもう真つ暗」

加蓮の視線の先を見てみると、遠くの林の上には、もはや嵐は避けられそうにないというほどの暗雲が空いっぱい詰まっていた。さつきよりもずっと辺りは薄暗く、小屋には魔女でも棲んでいそうな気までしてくるが、あいにく入らないという選択肢はない。ここにいてもずぶ濡れになるのを待つだけだ。

「乃々、いる？ 今朝会つた渋谷だけど」

扉を開ける前に小屋の中へ声をかけてみる。返事はない。特に物音も聞こえない。

「悪いけど入るよ。ごめん」

ドアノブを回す。鍵がかかっているということもなく扉は開いた。誰もいない。明かりも点いていない。というか今朝は小屋の中をほとんど見なかつたからわからなかつたが出入口のすぐ横にスイッチがあつて、押すとちゃんと明かりが点いた。

「いないじゃん」

私に続いて入ってきた加蓮が中を見回しながら言った。

「絶対いるって確証なんかないからね。今朝はいたんだよ、乃々、と高峯先生」

「高峯先生？ それは初耳」

別に隠してたわけではないけど、確かに加蓮にも拓海にも先生のことは話していなかった。

「よくは知らないけど、スタンドのことで相談事とかじゃないかな。乃々、スタンド消すのに手間取ってたし。まだ扱いこなせてないのかも」

「あの先生と面談できるならそんな臆病な子でもないんじゃない？ わざわざ相談相手に高峯先生は選ばないでしょ。先生だって生徒とやり取りするの得意そうではないし」

「いや、あれでなかなか面倒見いいんだぜ？」

意外にも意外なことを口にしたのは拓海だった。高峯先生について、だいたいの生徒以上のことを知っていきそうなのはやはり意外に思えるが、『イメージが独り歩きしている』拓海なら、なにか高峯先生にまつわる意外な事実を知っていてもそれほど意外ではないのかもしれない。

「え、拓海、高峯先生と仲いいの？ それは超意外」

「仲いいってのはわかんねえけど……まあハナシすつことはたまにあるぜ。つつても今年始まってくらいからだけだよ」

「やっぱりスタンドがきつかけなの?」

「いや……あくと、夏樹、知ってるよな?」

「うん」

ふたつ返事で加蓮は答えて私も軽く頷いたし、先日出会いもしたけど私はほとんど木村夏樹を知らない。軽音楽部で、飛鳥と同じバンドをやってる、それくらいのものだ。

「[「r b : 軽音楽部 > けいおん」]の部室に行つてアイツらの演奏聴いてたらよ、なんか面白そうだなって思つて『面白そうだな』つて言つたらその場でちよつとベース触らして教えてくれたんだよ」

「へ〜……、? 誰が?」

「いやだからのあさんだよ。高峯先生。別ににこやかに接して教えてくれたわけではな  
いけどな」

「え……高峯先生、軽音部の顧問だっけ? てか楽器弾けるの!」

加蓮が驚いて声を上げる。その声の、面白そうなことを知ったときの抑揚の感じが、見知らぬ異空間の嵐前の暗い空の下の小屋の中で出すには場違いな感じがあつて私にはそつちが少し面白い。

「軽音部の顧問つてヘレン先生でしょ」

私の記憶違いでなければ、というか記憶違いなんてことは到底あり得ないと思つてい

る。例えば他校の人にヘレン先生がどんな先生なのかを教えるのは難しいが、とにかく筆舌に尽くしがたいというか、なにかを超越した雰囲気があるというか……。こうして考えてみると自分の頭の中ですら言い表すことのできない、とにかく揺るぎない謎の存在感を放っているのがヘレン先生なのだ。だから記憶違いなんてことは起こり得なく、ヘレン先生は軽音楽部と合唱部の顧問だったはず。あれ、でも兼任してるといふことは

「あの人は副顧問だな。のあさんもそんな頻繁に顔出してゐるわけではないんだけどな。ま、のあさんからベース教えてもらったのがきっかけだったわけよ」

「高峯先生が軽音、しかも楽器経験者なのは知らなかったな。しかもなに拓海、『のあさん』なんて下の名前で呼ぶとか相当じゃん」

「そういうのはそのときの成り行きとか気分だよ。お前らだって早々にアタシのこと名前前で呼び捨ててんじゃないか」

「私も凜もそういう性分なもので」

「んだそりや、構わないけどな。お前らと違って神谷は“さん”付けで呼んできそうだけだな」

「あ、奈緒」

拓海の言葉で思い出したように加蓮が奈緒の名前を口にした。それとほぼ同時に私

も思い出した。

「奈緒、置いてきちゃったね……」

「私も今気づいた。こんな異世界でいつもの放課後みたいなトークに花咲かせてる場合じゃなかったわ。ここってスマホ通じるのかな」

誰かに尋ねるわけでもないがそう言いながら加蓮は自分のスマホを取り出して奈緒に連絡を取ったようだった。

「おいなんだそりゃ!?!」

連絡中の加蓮の胸を指差しながら拓海がいきなり大きな声を出した。見ると加蓮の胸から『虹』が出ていた。虹は大きくアーチを描いていて、小屋の天井を突き出してくかへ繋がっていくように差していた。

「こつちもビックリした! けど安心して。これ、奈緒の能力」

落ちていた顔で加蓮は言った。私も、おそらく加蓮も一度しか見たことがないが、確かに虹は奈緒の能力だ。加蓮の行方がわからなくなったときに偶然か運命か、加蓮を探すために目覚めた力。奈緒と加蓮の間を虹が結んで互いの場所を知ることができるのだ。つまり加蓮から出ている虹のもう一端は奈緒に繋がっているはず。

「これ、来るかな奈緒? スマホは通じなかったけど……」

「ちよつと待て」

拓海が扉を開けて小屋の外に出た。つられるように私と加蓮も拓海に続くと、虹は向きを変えながらも加蓮の身体の一部のようにびったり胸から離れることなく差し続け、黒い綿飴のような曇天へと伸びていた。

「暗雲に虹たあ洒落が利いてんな。映画のワンシーンみてーだ。で、コレはどういうことなんだ？」

感心しつつも困惑した言葉で拓海が尋ねてくる。それに対する明確な答えはわかりかねるが、予想としてはこうだ。

「あの空の向こうがどうなってるかなんて知らないけど、たぶん……拓海が持ってきたあの『ノート』、あれに繋がってるんじゃないかな。で、そこから奈緒に向かって虹が伸びてる……はず」

前回と違って、いわゆる『異空間』を介してる以上わかりようなんてないけど、以前のときを踏まえるとそうなっているはずだ。

「もしこの空間を越えて『向こう』に行きようがないとしたら、空の向こうのどこかであの虹は途切れてるかもしれないけど……」

「いや、それはないんじゃないかな。凜、これって奈緒の能力だよ？ てことは虹はあくまで『奈緒から出て私に向かって伸びている』はずだから、奈緒の方からすればさつき凜の言ったとおりにはノートに向かって差してるはずだよ。それで奈緒がノートを開け

ば……」

「こつちに神谷も来るってことだな！ ヨシ！ この虹で、とつと森久保見つけて無事解決ってわけだ」

グツと拳を握って景気のいい声で拓海がそう言ったが、ここで残念なお知らせをしなければならぬ。

「拓海、この虹は『お互いを意識』してないと発動しないんだ。きつと奈緒が私たちの心配してて、そのタイミングで私たちも奈緒のこと思い出して意識しあつたから加蓮に虹が出たんだと思う。けど奈緒と乃々って面識ないと思うから、これで探すのはたぶん無理」

「うええつ、そうなんか？」

「みたいだね。前に凜たちに助けてもらった後奈緒に聞いたけど、奈緒の能力って『ステッキで触ったものの場所がわかる』っていうのと、この『お互い意識してると自分と相手を虹が結びつけて場所がわかるようになる』って二通りの力があるんだって」

落胆する拓海に加蓮が奈緒のスタンドの能力を説明してくれた。

「なるほどな。便利だけど、まったく知らない、触れもしないヤツ相手には使えないわけか……。つーか、お互い意識してると虹が出るってなんかすげーな」

「アハハツ、過剰なくらいロマンチックだね。ゲームとかアニメ好きだから、そういう

面がスタンドに反映されてるのかも」

やっぱりスタンドは精神の力なんだからそういう面は大いにあるだろう。しかしそんなことを言うなら加蓮のスタンドだって見た目はお姫様だし、傘から雪を出すなんて奈緒にも負けないくらいロマンチックなスタンドだ。中世の騎士の見た目をしているスタンドの本体の私が言うことでもないけど。でもそんな風に本体の人物像とスタンドの見た目や能力を照らし合わせてみるのも面白いかもしれない。

「あー、そういうのはあるな。アタシはバイク好きなんだけどよ、やっぱりスタンドにもバイクのパーツが付いてたりして……よ……」

拓海が言葉を詰まらせた。なにやら緊張しているのかピクリとも動かず身体を強張らせている。

「ありや、なんだ……」

判断ができないまま、一点を凝視しながらそうゆっくり言った。拓海がわからないのなら当然なんのことやらまるでわからない私たちも、わからないままに拓海が見ている方向へ目を向ける。

そこに毛むくじやらの大男がいた。たぶん……裸の。全身が焦げ茶色の体毛で深く覆われていて、肌が見えないのは幸いだった。というかそんなことを気にもさせないほど男は大柄で、腕も脚も太く、柄の長い斧を両手で持っていて……というか、いちばん

着目すべきなのは頭が……………

「牛——！」

「バッファロー——！」

「ミノタウロスだぁ——っ!!」

3つの叫び声が上がった。そう、加蓮の言うとおり男の頭は牛だった！でも牧場でのどかにしてるイメージが浮かぶ乳牛のような顔つきではないし、こめかみ辺りに太い角が生えていて、頭も体毛同様焦げ茶色で白黒系ではなかったから拓海が言ったように牛は牛でもバッファローとかそういう闘牛な感じだし、奈緒が叫んだように牛の頭に人間の胴体の生き物といえはいわゆる『ミノタウロス』だし奈緒がいつの間にか来てたしとにかくヤバい！

「ブモオオオオオオオオツ!!」

あぁっ、牛っぽい雄叫びだ！いやそんなのはどうでもよくて、斧を構えてこっちに走ってくる！

「さっ、下がってな！」

私たちの前に出て拓海が言った。いきなり怪物が現れたこともあって少し声が震えている。

突然の危険を前にしてみんなを庇おうとする勇氣は尊敬するけどこのままじゃ拓海



決め台詞のような拓海の言葉に茫然としつつもツツコミを入れてから、周囲を用心したまま奈緒が話し出した。

「店出たらみんななくなつてて、落ちてたノートに向かつて虹が出たから開いてみたら……なんなんだここは？　なんだったんだ今のは……うわあっ!？」

そして拓海の方を見たまま声を上げた。奈緒の驚きの理由は半ば理解できているが、それでも「それ」をはつきりと目にした瞬間は声を出して驚きそうになった。「それは言うまでもなく拓海のスタンドだ。」

「またすごい見た目のスタンド……。パツと見だと明らかに敵つてカンジ」「んだよ、それもわからなくはねえけどカツコいいだろ?」

拓海は加蓮の感想に冗談半分に悪態をつきつつも理解を示しながら誇らしげに自らのスタンドを見せてくれた。

拓海のスタンドは身体が全体的に暗い紫色をしていて濡れたように艶があり、機械のパーツ——騒ぎの前に言つたことからするとバイクのパーツ類なんだろうか——が人型に組合わさつたような姿は、いわゆる変型ロボットを思わせる、少年心をくすぐるビジュアルかもしれないが奈緒が姿を見て驚いたように顔はなかなか凶悪だ。目は極端に瞳の小さい三白眼。口には鋭そうな鈍色の銀歯がきれいに並んでいて、常に歯を食いしばっている。ロボットっぽくもありながら、目を反らした瞬間噛み殺されそうな飢

えた猛獣のような恐ろしさも感じさせるスタンドだ。

「間違いなく強そうだよな。まあ実際強かったわけだけど。名前はなんて言うんだ？」

しばらく拓海のスタンドをみんなで見ていると、思い出したように奈緒が尋ねた。

「獰猛……巻き込むものすべてを薙ぎ倒す『暴風』のような荒々しさ……。それで『ワイルド・ウインド』と名付けたそうよ」

この場の誰のものでもないが聞き覚えのある声が聞こえた。みんながその抑揚の少ないある種の冷たさを覚える声のした方を見ると、そこに高峯先生がいた。

「いったいなぜ貴方たちはここににいるのかしら」

私たちの誰かがこの場で彼女と遭遇した驚きを口にするよりも先に、いつものように、といつてもこの人の「いつも」でないときを見たことはないが、学園で話すときと変わらない様子で先生が言った。

「中で聞かむ」

そして誰も反応しない内に一言付け加えて、小屋へと軽く頭を傾けて私たちを促した。未だに本体の所在不明のスタンドの異空間の中で堂々と振る舞う高峯先生に続いて、私たちは奈緒を加えて再び小屋へと戻った。一向に晴れ間の差さない暗雲の下、気がつけば辺りは初めてここを訪れたときのように恐ろしいほどの静けさを取り戻していた。

) ) ) ) )

## 第22話『Wonderwall』

ぞろぞろと小屋へ戻る私たちを、最初に中に入った高峯先生が出迎えるように入入口であるこちらに体を向けてまっすぐ立つて待っていた。ただそれだけなのにどうしてこの人はこうも絵になるのか。異界と言つていいこのスタンドの空間においても髪や服に乱れはなく、氷のように涼しくそこに存在している。

「……何事」

声は小さくないが単刀直入に発された言葉の意味するところを見失いそうになる。機械音声のようなわけではないが先生はこちらになにかを尋ねるときでも抑揚がなく、ともすれば独り言に聞こえても仕方ないが、生徒である私たちはこの喋り方にある程度は慣れているし、今は状況が状況なので問われていることの指すところも容易に見当がつく。

誰に頼まれるわけでもなく私は、私たちがここにやってくるまでの経緯を先生に話した。小屋に入って玄関で靴を脱いで揃えて置いて、脇にあった靴箱から、たぶんなんの疑いもなくスリッパを取り出して履いている。さつき3人でいたときは靴箱なんて目

に留まっていなかった。猫や熊やウサギや色んな動物のシルエットが描かれていて、それほどメルヘンチックデザインではない。わざわざなにか言おうとも思わないから誰もなにも言わないけど高峯先生だつてきつちりそれを履いている。というか彼女が最初に当然のように履き替えたから私たちもそれに続いた。そのスリッパは先生に似合っていないはなかった。先生が履いているんだから問題はないだろうけど、このスリッパが実物なのか小屋同様この空間の能力の一部なのか私にはわからない。

小屋内には談話室らしきスペースが設けられていて、木製の丸テーブルを囲うように同じような色合いの、短い背もたれのあるウッドチェアが置いてはあったが、現在状況の見通しの悪さから来る焦燥感に加えて椅子の数が足りないこともあつてか誰も座ろうとはせず、話す私もそれを聞く先生も他のみんなも立つたままだ。

「遭難者が増えたわね」

話を聞き終えてから先生が最初に言った言葉はそれだった。

「遭難……言われてみればそうなのかな？ 私たち」

加蓮が言うのとそれに答えるように今度は先生が肅々と話し始めた。

「ここは本体である森久保乃々が能力を解除しなければ現状出ることのできない空間。私も、貴女たちが来る前に道に落ちていたノートを見つけ、気がかりでここを訪れた……。いつもと違い、彼女の姿がない。探して、一応の目処をつけてから一度ここへ

戻ってきたところに貴女たちがいた」

感情や意図を拒むような淡々とした喋りだが、引つかかるものがあつた。

「目処をつけたつて、なんだ。森久保はいたのか?」

当然のように拓海が尋ねた。そしてこれにも当たり前のように先生が答えた。

「乃々は見つけていない。だが、いると思われる場所を見つけた……『城』」

「しろ?」

「……お城、よ。あの鬱蒼とした森を抜けた先に城があつた」

そこからは、先生の私たちと会うまでの経緯を細かく話してくれた。

「城なんて今まで存在していなかつた。以前に森の向こうへ行つたときには変哲のない野原が延々と広がっていただけ。ただ、この空間はスタンド能力。本体の精神の変化で空間の様相が変わるのは特におかしなことではない……が、おかしい」

「どつちだよ」

そんなつもりはなかつたらうけど拓海の反応が妙に面白くて、笑いはしなかつたが漫才のようなものを感じた。たまたまそのとき視界に入っていた奈緒の表情が少し緩んだのが見えた。

「スタンドは精神の表れ。慌ただしさや過度な他者との接触を得意としない彼女にとつてこの能力、この場所は、自分だけの安寧の場……。城はまだしも、この空模様……。乃々

の意に沿わない不穏な空気。決定的なのは、拓海、貴女が退治したあの怪物」

「そうだよ、ありやなんだ」

それは拓海だけでなくみんなが疑問に思っていることだった。あの突然出てきたミノタウロスはなんだったのか。

「私が乃々がスタンド使いであることを知り、その力がまだ不安定な状態にあることに気づいて扱い方を教えるようになってから今まで、こちらに危害を加える存在の出現は初めてよ。こつちにはさっきの1頭しかいないようだけど、城にはもつと多くの怪物がいた。城周辺や門の前に……おそらく乃々を守っている」

「え……」

どうやらかなり厄介な問題が起き上がってしまった。と同時に、なにをすればいいかわかった。

「どうしてそう思うんですか？」

加蓮が訊いた。

「私は乃々のスタンドが暴走状態にあると考えている。その原因までは今はわからない……。しかし、暴走状態のスタンドには共通点がある。『守る』ことに突出してスタンドが動き出す……」

「うーん……暴走って言うくらいだし、逆の感じがするけど。凜、奈緒、私のときもそう

だったの?」

加蓮の言葉に私と奈緒は顔を見合わせて考えた。

「守るところか……あたしら加蓮を見つけたときはガッツリ戦ってたよな」

確かに奈緒の言うように私たちが加蓮を見つけたとき、暴走状態に陥っていた加蓮のスタンドは加蓮を拐さらった犯人と戦っていた。

「ああ、でも……それが『守る』ってことだったんじゃない? なんていうの、防衛本能? 本体の加蓮を守るために危険な存在を攻撃する、みたいな」

「そのとおりよ。本体、ひいては自分……スタンド自身を守るために防衛本能として、危険を及ぼし得る者を排除するため結果的に攻撃性が引き出される……ある意味反射行動といえるかもしれない」

一度話を区切って瞳だけ動かして私たちを見てから先生は話を続けた。

「私の考えが正しければ、城の中に乃々がいる。その乃々は城に守られ、城は怪物たちに守られ、さらに他の怪物たちが『招かれざる客』である私たちを排除しようと動き出した。事態はそんなところ」

「とんでもねえ……さつきみてえなのがうようよいんのか? しかもそいつら全部がアタシらを仕留めようとしてる? 厄介にも程があるな」

「でもその城から乃々って子を救い出さなきゃみんなここから出れないんだろ?」

尻込みしているような表情で奈緒が尋ねる。

「ええ。城に潜入し、乃々と意思の疎通を図り、この世界を正常な状態に戻す。それが事態の沈静化への……おそらく唯一の道。しかも外部へ連絡が取れない以上、ここにいる者だけで成し遂げなければならない……教師として不本意ではあるけど、貴方たちに助力を請うわ」

まつすぐこつちの目を見て先生が言った。その言葉とこの状況を鑑みるに協力する以外の手はなさそうだし、正常な意識を持つているのなら今乃々は不安で仕方ないだろう。今さらそれを見過ごしてはどのみち帰れない。

「アタシはやるぜ。こん中じや、のあさんの次にこういうことに慣れてるからな」

動き回る準備をするように肩や足首を回しながら拓海が言った。

「どうかな？ 私たちだつて成り行きとはいえ、けつこう身体張つてるよ。少なくとも足手まといにはならない自信がある程度には。それに……」

と言いながら加蓮は『フローズン・ティアー』を出した。窓際へ歩き、日傘の柄を左の手首に掛けて外を眺める。中世が舞台の海外ドラマのような、ただそこでそうしているだけの姿が文句なしに優雅で絵になる。

「ひとりくらいなら、傘に入れてあげられるよ？」

スタンドを制御できるようになってから、加蓮は前よりエネルギーシユになったと思

う。元気がなかったわけではないどころか、挑発的だったり威勢がいいのは前からだけで、以前よりも勢いが増した気がする。元気がいいのはなによりだが、それは日傘だと突っ込むのは野暮だろう。スタンドの日傘なら雨を防ぐのは可能そうな気もするし。「ったく……どこからそんな自信が出てくるんだか。あたしと凜のが場数踏んでるつての。踏みたくて踏んではないけどな」

いつもどおりに悪態でもない悪態をつきながら、奈緒の言葉にも同意の意思が聞いて取られた。奈緒のスタンドもさっきの拓海のスタンドほどではないかもしれないけれどもかなり力が強かったはずだ。こういうときに、そういう直球的な強さを持つ存在にはとても安心させられる。居てくれるだけで鼓舞される。御守りみたいだ。

「行くなら早く行こう。雨、いつ降ってもおかしくないし。その城つてここから近いんですか?」

「それほど遠くはない。徒歩約15分………不本意だわ」

珍しく、ため息を交えて高峯先生がそう言った。

「不本意っていうのは、戦えない人を巻き込まざるを得ないときなんじゃないですか。拓海も加蓮も奈緒も私も、本意で行こうと思ってるつもりです」

「……教師と生徒という関係によって、受け入れ難さが生じる事案もあるということよ」「へっ………のあさんの立場っつーか、できれば自分だけでケツ持ちてえって気持ちちは、わ

からなくはないけどよ。あいにくお節介どもが集まってたみてーわけだし、ここは一蓮托生、とつととケリ着けちまおうぜ？ 前に言つてたろ、『悩む前に本気を出せ』つてよ」

拓海は、以前先生に言われたらしい激励の言葉を返して背中を押した。

「自分は教師でこっちは生徒だからナントカ、つてのあるかもしれないけどさ、あんま気にしないで欲しいんだよね。先生が私たちを見くびつてるんじゃないのはわかるけど、だからつて見くびられてると感じないわけじゃないから」

こういうことを嫌みなくスッパリ言わせたら加蓮の右に出る子はいない。嫌みを感じないのは、私の中で今の加蓮の言葉と私の加蓮像とが一致したような感触があったからかもしれない。それが他人と共有できるかはわからないけど、私にとつて今の加蓮の声にはそういう力があつた。先生にもそれがぼんやりとでも伝わっていたらいい。

「私と貴方たちの立場が逆だったなら……どうする？」

しかし先生は憎いところを突いてきた。

『別に助けてもらいますけど？』と言うほどこっちも子どもじみてはいない。だからみんな痛いところを突かれた顔をしていて、強いて言えば加蓮だけが、『あー、そういうの言つっちゃう？』とでも言いたげな、失望の混じった苦笑いを隠していなかった。

「きつと先生を言いくるめたりはできなかつたらうから、無理矢理ついていったと思うわ」

先生はそう言葉を続けた。それを聞いてなぜか私の頭には、教室で綺麗な姿勢で席についている高峯先生がピンと背筋を伸ばして手を上げている光景が浮かんだ。スカートの丈は長い方がきつと似合う。

「では、出発しましょう」

そう言ってから先生は、ちよつとだけ口角を上げた。言うが早い靴を履きかえドアを開ける。

「……………あつ、ついてきていいってことか」

少し間が空いて、雑多な物音が鳴り止んだその間を縫うような的確なタイミングで入ってきた奈緒の呟きが空気を和ませた。

「相変わらずわかりにくいんだよ先生はよオ〜！」

じれったささそうにしつつも笑顔の拓海のすぐ後に、加蓮が先生の背中を見ながら小声で言った。

「頭までは冷たくない人みたいだね」

それに気づいたのか偶然か、先生はこつちを振り返って、

「行くの、行かないの」

と靴の爪先を軽く鳴らして、いつもどおりの無表情で言った。

\*

外に出ると先生は無言のまま一点へ向かって歩いていく。私たちも後をついていくと、舗装された小道のある森の前で先生が止まった。

「ここを行けば城に出る。茂みには十分注意すること。遭遇すれば……戦う。気を引き締めて」

「遭遇する」とは、もちろんさつきのような怪物のことだ。あの1体を例に上げれば、いかにも力がありそうなタイプだったから正面から戦うのは私には向いてないかもしれないが、小道はふたり並んで通れるくらいの道幅で、動き回るには心もとない。小道を外れて動けないわけではないが、突出すれば孤立してしまう。樹に遮られて空中での移動もままならなさそうだし、機動力が売りの『ネヴァー・セイ・ネヴァー』では苦勞しそうだ。

「なあ先生よ、さつきのアレで質問するのもヘンだけどよ……そもそもあの怪物はブツ飛ばしてもよかつたのか？ あれも森久保のスタンドだろ？」

言われてみればとても気にかかることを拓海が言った。すでに1体倒してるからマズいと言われたらとんでもないことになっちゃうけど……。

「以前、この世界の子細を知るための一環に、乃々に断りを入れたうえで木の枝を徐々に曲げ、最終的に折ってみた……。彼女の心身に、特に反応は見られなかった。調査が十全に済んだとは言えないけど、あの怪物たちも発生の根源そのものは乃々によるのだか

ら、それらを取り除いても彼女のダメージとはならないはず」

「……つまり、大丈夫ってことだよな？」

こつちを見て拓海が再度尋ねたので私は頷いた。先生の検証の限りでは乃々のスタンドは感覚が本体と繋がっているタイプではないようだ。

「行くわよ」

話を済ませると一声かけて、だが反応は待たずに先生は一步踏み出したので、私たちもその後ろをついていく。

「なんか見つけちゃいそうでヤな感じ……見つけなきゃこつちの身が危ないんだけどさ」

森に入ってすぐに加蓮が左右に首を動かして辺りを見ながら言った。確かに入る前のイメージとは違って、森の木々は人の通る隙間もないほど立ち並んではおらず、小道を頼らずとも移動はできる、その徹底されていない見通しの悪さゆえに見たくもないものを見つけそうな予感を与えさせる。上を見れば激しく枝分かれして拡がっていった枝葉で空は塞がれ、その隙間から少し覗いている色さえ、厚い雲の暗い灰色でこちらの気持ち重くしてくる。悪意を感じずにはいられない最悪のロケーション、乃々の意思によつて生まれた場所のようには思えない。なんにせよこのままではみんな気が滅入るだけだ。

「何体来ようが全員ツブす、来るなら来やがれってんだ」

拓海の物騒な物言いが今は心強い。あれだけのパワーを持つスタンドはなかなかいないだろう。

「ふふつ、言い方。でもま、それくらいの意気で行かなきゃヤバいかもだからね」

微笑しつつも勇んだ加蓮がスタンドを出したまきにそのときタイミングよく、ついに雨が降りだした。

「ありやりや……入ってく？ 先着一名様」

抜け目なく傘を開いた『フローズン・ティア』の隣に立って、いたずらっぽく加蓮が言った。日傘は雨をしつかり防いでいた。

「これから梅雨だし傘忘れても安心だな」

加蓮の誘いに乗るように拓海が言ったものの、傘には入らず先生を見た。

先生は拓海の視線でなにかを察したようで、私にはその意図はわからなかったけど、それが合図だったように、先生の回りが陽炎のように揺らぎだした。

「私の能力を雨避けに求めるとは、ね……」

「でも使うつもりだったんじゃないか？」

ふたりが話している最中に先生の頭の辺りの陽炎が徐々にこちらに向かって広がり始めた。それが私たちの頭上でドーム状に展開すると、降ってくる雨はそのわずかに水

色に見える揺らぎの上で弾かれ、陽炎の形に沿って滑り落ちていく。

「これは……先生のスタンドかつ!？」

驚きと喜びの混じった声を奈緒が上げた。

「不定形の障壁は、あらゆる汚れけがを遠ざける……」

小さく頷いて先生が言った。

「早い話が『グニャグニャ変形できるバリアー』だ」

翻訳するように拓海が言った。先生の全身から陽炎のように揺らぎながら漂う薄水色のオーラは物理的な壁になる、雨を防げるのはそういうことらしい。

「防水面では先生のほうが上手うわてってわけね」

軽いジョークを口にしつつ加蓮が一度スタンドをしまい、オーラで形成されたドームの外へ改めて出現させ、『フローズン・ティア』はまた傘を開いた。

「なに意地張ってんの……」

「そんなワケないで……しよっ!」

そして開いた傘を水平にすると茂みの方へ、わずかな間を挟んでから吹雪を放った。

「ぬおおおっ!?! いきなりなにやっつてんだ加蓮えん!?!」

素っ頓狂な声を上げて奈緒が加蓮に尋ねたが、その答えを聴く前に吹雪の通り抜けた茂みから大きな影が姿を現した。

「クイドウルルルルルルル……」

そこに薪割りの斧を持ってガクガク震えているミノタウロスがいた。身体も武器もさつき拓海が倒したのよりひと回り小さく、吹雪がこたえたのか震えるだけで襲いかかりも逃げもしない。

「とどめえっ！」

すかさず加蓮が追撃をかけようとするそのとき、辺り一帯、様々な方角から鳴き声が響きだした。

「ブオオオオオン！」

茂みのそこかしこから、同じ小型ミノタウロスが現れ、地面の落ち葉や小枝をやかましく蹴散らしながら一目散に私たちに向かって来る。吹雪の音を聞きつけて殺到したのか、あつという間に10体近くのミノタウロスに私たちは取り囲まれた。

「北条加蓮、スタンドをしまいなさい」

「ああもうっ！ 見せ場が作れないじゃない！」

的外れな恨み言をミノタウロスの群れに放つてから加蓮は大人しくスタンドを消す。だからといってミノタウロスたちの勢いは収まらない。

「じつとしてなさい。心配は無用」

押し寄せてくる怪物の集団を前にしても先生は冷静さをまったく崩さない。

「アーンガアアアアア!!」

内心軽く恐怖しながらも私は先生の言うとおりに黙ってミノタウロスたちを見据えた。みんなも同じく黙って事の推移を見守っている。加蓮は落ち着きなく歯痒そうに、奈緒は明らかに不安そうに、逆に拓海は身構えこそしているが、どことなく余裕ありげに自分たちに襲いかからんとする敵の群れに睨みを利かせていた。

「ンホアアーンツ!?!」

攻撃を加えようと斧を振り上げながら目の前まで迫ったミノタウロスは、私たちを守る先生の『壁』に思い切り激突した。淡い色で見えてなかったのか、ぶつかったミノタウロスは前屈みになって恨めしげに呻いている。しかし後続はそんな先行したミノタウロスを気にも留めず、あるいは勢いを止めることができないのか、どんどん私たち目掛けて突進してきては壁にぶつかっていった。中には先走って斧を早い段階で振り下ろして壁に刃を突き立てたやつもいたが、壁に壊れる様子はなく、びくともしない。かなり頑丈なスタンドのようだ。

「……終わり」

タイムリングを見計らったように先生が静かに言った。

次の瞬間、壁から無数の『刺』が伸びて、周囲のミノタウロスたちを串刺しにした。壁をドーム型に維持したまま、表面だけ刺状に変形させて攻撃した。これは強い。使い方

次第で守るも攻めるも変幻自在のスタンドだ。

呆然と串刺しになったミノタウロスを見てると、それらは一瞬で霧のように消えていった。

「……倒すと消えるみたいだな」

緊張で身体を固くしたまま奈緒が呟いた。辺りは静けさを取り戻し、雨の音だけが耳に入ってくる。

「オオオオオオオオオオオオアーン!!」

と思ったらすぐにまた、けたたましい叫び声で場が騒然となる。

「あ、あそこにつー!」

加蓮が注意を促した方向にいたのは熊だった。人間の体でもなければ二足歩行でもない、明るい茶色の毛並みで、体長は3mくらいありそうな大きな熊だ。つぶらな瞳でこちらを見ているが、狂暴そうな鳴き声を上げたのは紛れもなくこいつだ。

「ちっ……怪物のナリしてりやもうちよいやりやすいんだけどな。のあさん、刺引つ込めてくんな」

やや渋い顔で拓海が言いながら肩を回した。

「……手助けはまだ不要よ」

「ハナからケツまで世話になるのは性に合わねえ。それにウォーミングアップも必要だ

しな」

それを言ったらそもそも最初のミノタウロスを倒したのは拓海なんだけど……。

「だったら私にやらせて。さっき中途半端に終わっちゃったし」

私と同じことを考えたのか、加蓮が拓海を制止しようとした。

「アタシにやらせてくれ。先陣切れねえなんて、美城の特攻隊長の名が廃れちまう」

しかし加蓮は逆に拓海に制されてしまった。さっきといい拓海は率先して体を張りにいく。親分肌……というやつだろうか？ ツーリングのチームを仕切ってるくらいだからリーダーシップがあるのは間違いないのだろう。

「さあ……来な」

拓海のスタンド『ワイルド・ウインド』が壁を出て中腰に構えて、「ここを狙え」とばかりに胸を拳で数回叩いた。

「ウオオオオウ……」

地面スレスレまで頭を下げて熊が低い声で唸る。正直言ってかなり怖い。去年の夏休みの読書感想文のために読んだ熊ひぐまが村を襲う、昔の日本で実際に起きた事件を元にした小説を思い出す。あれを思い出せば熊よりも、ミノタウロスや狼人間の方が現実味が薄い分まだ怖くなかった。

「来るよっ!!」

そんな熊に対する恐怖心からか、前足を踏み込んで熊が突進してきたのにいち早く反応した私は反射的に声を出した。

「よおしっ！」

拓海のスタンドは中腰のまま熊を待ち構える。あの砲弾のような勢いで向かって来る茶色い塊を正面から受けるつもりらしい。そんな馬鹿な！

「バカッ！」

思わず声に出た。意図せず拓海を罵ってしまったが、そんなことを気にしている暇はない。横から熊を不意打ちできないかと、私も『ネヴァー・セイ・ネヴァー』を壁の外に出して剣を抜いた。

「この向井拓海に任せなあっ!!」

熊から目を離さずに大声で拓海が場を制した。どうするべきか躊躇していると、『ワイルド・ウインド』が姿勢を維持したまま天を仰ぐ。

「オラアツツ!!」

「ギャンツツ!!」

そして真上に向けた頭を、スタンドの懐に飛び込んできた熊の頭にジャストタイミングで思い切り叩きつけた。

「フンッ！」

そこから、頭突きでは殺しきれなかった勢いによってスタンドに寄りかかってくる熊を抱き抱えると、すかさず下腹部に膝蹴りを食らわせた。

「ンオウツツ……」

『ワイルド・ウインド』が身体を離して1歩下がると、支えを失った直立状態の熊は衰弱した様子で鼻を鳴らして、今にも倒れそうに前のめりになる。

「悪いな……成仏してくんなああッ!」

そしてとどめに『ワイルド・ウインド』は、下から繰り出した拳を熊の顎目掛けて物凄い速さで突き上げた。

「ンオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

アッパーが炸裂すると熊は真上に30m……いや40m……? 正確な高さはわからないけど、とにかく空高く打ち上がって行って……消えた。

「いや、そうはならねーだろ!!」

熊が消えて数秒の間を置いて奈緒が叫んだ。

「なるんだよ。『ワイルド・ウインド』の能力チカラならな」

「……? どういうこと?」

『ワイルド・ウインド』でブン殴ると、『殴ったモンが吹っ飛ぶ』んだよ。力を入れれば入れるほどブツ飛んでく。単純な腕力だけじゃ、さすがにあそこまで飛ばせねえよ。

ま、コンクリブチ割るくらいは余裕だけだな」

スタンドの本来の力を誇示しつつ拓海が自身のスタンドの能力を教えてくれた。ずいぶんと力を力で煮しめたようなストレートな能力だけど、拓海によく合ってるのかもしれない。

「なんつー脳筋仕様……」

遠慮がちにはあるものの奈緒がそう呟いた。

「結構幅広く使えるぜ? 『ワイルド・ウインド』は目もいいから、パチンコ玉でもありや狙撃だって出来るからな!」

自慢気に語る拓海を見ながら私はなにもなかったように『ネヴァー・セイ・ネヴァー』をしまった。

「……なぜそんなもので、そんなことをする必要があったのかしら」

少し威圧的に高峯先生が言ったが拓海は特に焦る様子もなく答えた。

「ちつと前に学園でスズメバチの女王を見たんだよ。たまたま工作室の前だったから中入って、なんかねえかなーって見たらパチンコ玉あったからそれ取って、デコピンで、こーう、スパーンと飛ばして。一発必中よ。守衛の早苗さんには報告しといたぜ」

「そう……行くわよ。新手が来る前に急ぎましょう」

拓海の話の聞き終えると、スズメバチの話はそこで終わり、先生は号令すると移動を

再開した。先生の能力による壁に、四方を守られ続けている私たちも必然的に歩き始める。まだ見ぬ『城』を目指して。  
(つづく)

## 第23話『Holy Cow』

奇襲をかける狩人のように大木の陰から飛び出してきた虎も、拓海は臆することも迷うこともなく『ワイルド・ウインド』で殴り飛ばした。拓海から逃れて私たちに近づくことができても、高峯先生の『変形する壁』の表面が刺状になって不用意な相手を容赦なく突き刺す。ふたりとも判断と攻撃、どちらも雨で視界不良の中にもかかわらず正確で、今のところ私たち3人は拓海と先生についていってただけで、私なんかは傍観者にも似た心境だ。

雨で視界も悪ければ草木と今はそれに加えてぬかるみで動きづらいこの場所では『ネヴァー・セイ・ネヴァー』はどうしても機動力に欠ける。なるべく冷静に現状を把握しようとするほどこの事実が言い訳のように思えて歯痒いけど今は下手に動く方がまずい。ふたりで十分対処できてるのだからしばらくは動く置物になってるのが懸命だけど、そう言い聞かせたところでやきもきする気持ち収まるわけでもない。とにかくこの場所を早く抜けて開けたところに出たい。そう思っている間にも草木の陰からいろんな獣や獣人の怪物が飛び出し、拓海にやられるか先生の壁に無意味な攻撃を加えてか

らか、それすらもできないまま串刺しにされていく。景色の不穏さや状況のただならなさとは裏腹に私たちの歩みは順調だった。

「そろそろ先を踏まえて温存したらどう？」

敵の気配が鳴りを潜めたところで高峯先生が口を開いた。

「温存するのはそつちなんじゃねえか先生よ？ 四六時中スタンド動かしてたらバカになんねえだろ。肝心なところでアンタにガス欠起こされたら困るからな」

拓海が言葉を返す。最後まで頼りっぱなしになる気はないものの、その口振りに疲労の色が見えないのは頼もしい。

「洗練……動きを半ば機械化させ負荷を軽微に……。私自身を例にとると、最初に『ワンダーウォール』をドーム状に展開、あとは攻撃時にのみ敵のおおよその位置に合わせて表面に刺を生成、排除……。スタンドの持続的発現における最小効率化は肝要。覚えておきなさい」

一方で疲労どころか、感情の色そのものを交えずに先生は単調に拓海にそう言った。その言葉で『ワンダーウォール』が先生のスタンドの名前なことを知る。

「あー……？ よくはわからねえけど、『習うより慣れろ』とか『考えるな、感じろ』ってことだろ。そういうのは得意だぜっ。大丈夫だ」

知ったかぶりな言いようではあるものの、拓海の言う「大丈夫」はなんだか安心感が

ある。『最小限の思考と行動で最効率を出せ』ってことだと思っただけど、思考、判断のプロセスを省略して感覚を頼りに直感で動き続けるのは拓海は得意そうに見えるし、論理と身体のとつちが先行するかが違うだけで、帰結する部分は先生が言ったことと同じなのかもしれない。いずれにせよ感覚であれだけ力強く立ち回れるということは、拓海はスタンドを使って戦う——もしくは戦うことそれ自体の——経験がかなりあるようだ。

「……期待してるわ」

先生は進む先をまっすぐ見たまま静かに言った。その言葉の意味をそのまま素直に捉えても、呆れとか他意があるように捉えても、どつちでも合っていそうな感じのあつた響きを不用意にも辺りへの警戒を怠おこたって頭の中で反芻はんすうしているうちに、前方の小道の出口の向こうに小さくではあるが城が見えてきた。

\*

小道の出口手前へ到達した頃には城はさつきよりも近く大きく私の視界に広がっていた。城の回りは整地され、短くきれいに刈り揃えられたような原っぱが広がっていて、そこには入り口の門らしき場所のすぐ側を始め、二足歩行のなんらかの生物たちが辺りに点在している。ここからではあまりよく見えないが気づかれないように私たちが小道の出口付近に並ぶ木々に身を隠してその光景を覗き見る。馴染みたくはないが

お馴染みのミノタウロスタちだ。斧、剣、ハンマー、パイプ、様々な武器を様々な大きさのミノタウロスが持ち歩いていて、中には盾を持ったやつもいる。秩序立った配置や列をなしているようには見えないが数は多いし城の中だっただうなっているかまるでわからない以上騒ぎは起こしたくない。

「そろそろ騒ぐぜ」

「えっ」

私が思ったことと真逆のことを拓海が言った。いきなりだったから苦笑しそうにす  
らなつた。

「騒いだらまずいでしょ、どういうつもり？」

不意を突いて出た声から生じる気恥ずかしさを取り繕うように私は喋った。

「アタシが突っ込んでなるべく端っこの方でアイツらの相手するからよ、タイミング見て中に入れてくれ」

そうすることが当たり前のように拓海が言う。しかし目の前は、いくら拓海でも事が簡単に運ぶような状況ではない。怪物たちは雑に数えてみても20体はいる。単身図になるのは無理がありすぎる。

「はい、はいはい！ アタシもそれ手伝う」

重ねて加蓮までそんなことを言い出した。それを聞いて「んなっ!？」という顔をした

奈緒がなにか喋る前に、奈緒の顔の前に手のひらを差し出して加蓮が奈緒を制してなにか喋ろうとするよりも先に先生が口を開けた。

「いいわ。全員の準備が整い次第開始よ」

意外なように思えたその言葉を、先生はそれまでと同じように平静かつ簡潔に言った。

「えっ、いや先生……いいのかわ……？」

内心自分と同じ意見だろうと思っていたであろう奈緒は先生の発言の意外さに素直に困惑した。

「協力が必要なのは確か。自ら買って出るのであれば尊重するまで。ただし……こちら  
の期待を損なうようであつては困る」

先生は直立不動で拓海と加蓮を見据える。その視線は鋭く、熱い。

「そうこなくちゃ、こつちも困つちやう」

加蓮も微笑みながら先生に視線を返した。風が吹くより確かに場の空気が動くのを  
感じた。

「準備はいい？」

加蓮を見たまま先生が私と奈緒に言った。

「ほんとにやる気か？ 大丈夫なのか？」

「やる気もやる気よ。あのねえ奈緒、アタシの心配より乃々ちゃんの心配をするべきじゃない?」

「なっ……なあっつ!」

そう言われると奈緒は、痛いところを突かれた顔で言葉にならない声を上げた。

「よしっ! OKだ、やってやる!」

そして吹っ切れたのか急に勢いよくそう言い放つと、

「神谷奈緒、静かに」

次には先生にたしなめられた。確かにうるさくするのはいけない。しかしその注意の感じが完全に生徒と先生の関係そのもので、今の状況にはまるで合っていないのが少し滑稽に見えた。

「渋谷、お前も大丈夫か?」

城の回りの怪物たちを目ざとく警戒しながら拓海が聞いてきた。

「みんながいいなら、私はいつでも」

「よし。じゃあ先生、そろそろ外に出してもらおうか」

拓海が言うのと、先生は壁改め『ワンダーウォール』を収縮させた。今までは足を濡らすだけに留まっていた雨が全身に当たり始める。しかしそれはわずかな間のことで、拓海と加蓮を外して再び先生のスタンドは私たち3人の回りに展開された。

「傘、入ってくでしょ」

加蓮はすかさずスタンドを出して傘を開いてその中へ入った。傘はしっかり雨を弾いている。

「いや、いい。どうせ2、3分後には濡れてんだ」

拓海は傘を断つてスタンドを出しつつ城まで続く平原を眺め続けている。

\*

囃役とはいえ、拓海と加蓮はあまりに堂々と平原を歩きだす。当然とばかりに20秒後にはふたりを見つけた怪物たちの鳴き声がいたるところから聞こえてくるような状況になった。

まずいちばん近くにいた槍を持ったミノタウロスがふたりに迫った。そこへ加蓮の『フローズン・ティアー』が傘を向けて吹雪を放った。風圧でか寒さでかその両方がか、前進するスピードが大きく落ちたミノタウロスに拓海が近づく。接近距離が5mあたりになったところで加蓮は吹雪を射つのをやめた。次の瞬間、態勢を整える間もないままミノタウロスは拓海の『ワイルド・ウインド』に殴られ、平原を越えて森林地帯に突っ込むまで吹き飛ばされる。離れている内は加蓮が、近づいてきたら拓海が攻撃するといった流れが出来上がっていて、一ヶ所に密集していなかったのも功を奏して怪物たちは拍子抜けするほど鮮やかに倒されていった。

拓海と加蓮は平原地帯のなるべく隅の方へ移動しつつ敵を倒す。私たちは森林地帯から出ずに城の入口に近い茂みまで静かに移動した。

「行くわよ……走って！」

そして先生の合図で茂みから飛び出し一気に入口を目指す。脇にいた拓海と加蓮は、それを援護するために大げさに動きながら敵の注意を自分たちに向け続けようとしてくれている。おかげで私たちの走っている周辺はがら空きだ。

先頭を走っている先生が城に到達しかけたあたりで、入口の大扉が開いた。扉を開けるか壊す手間が省けたと思つたら、中から新たなミノタウロスが出てきた。それは予測の内にあったことだったが、同時に予想してなかったことも起きていた。

新手のミノタウロスは数自体は2体だったがそれまでと異なつて体格が今までのやつよりもふた回りくらい大きく、全身には鎧を身につけていてその鈍色にびいろが雨越しのやや離れた距離からでも目につく。

数秒遅れて入口に着いた私と奈緒を先生は前を向いたまま右手をこちらに向けて、それ以上近づかないよう無言で制する。あの鎧を『ネヴァー・セイ・ネヴァー』の攻撃で破れるとは思えないけど、それでも先生ひとりに任せているわけにもいかない。倒せなくてもやれることはあるはず。

1体が手に持った巨大な斧を振り上げた。その動作は見た目よりもずっと素早く、背

筋の震えるような感覚に一瞬陥ったけど、先生は振り下ろされた一撃をしつかりとかわした。

かわしたところへもう1体がハンマーを横薙ぎに払った。先生はそれにも対応してみせた。しかも驚いたことに膝を曲げて体を後ろに180°、地面に対して水平の体勢をとってかわしてみせた。先生の全身は半透明の光に覆われている。背中からはその半透明の光が柱状に地面に向かって伸びていた。スタンドを支えにすることでこんなアクロバティックな回避行動をとっていたわけだけど、この人ならスタンドなしでもできるような、そんな気がする。

スタンドを支えにして先生はそのままハンマー持ちの顎の辺りを蹴り上げつつ後転して体勢を立て直した。2体が身につけている鎧は首や脇、膝裏といった関節部分まではガードされておらずそこを狙ったようだったがわずかに急所を外してしまったように、ミノタウロスは先生の蹴りにこれといった反応を示していなかった。そんなことを確認している間にも次にはまた斧持ちがすぐさま武器を構え直して攻撃、それが外れればハンマー持ちが次の一撃を加えて来るといった具合に、先生は防戦一方の状態に持ち込まれてしまう。

そんな状況を30秒も見ていると頭よりも身体が先に判断を下す。策もないままに私は2体のミノタウロスへと走り出していた。

2体は私に目ざとく反応し、ハンマー持ちの方がターゲットを私に変え臨戦態勢をとった。私も走りながら『ネヴァー・セイ・ネヴァー』の剣を抜いた。

ミノタウロスの10歩手前あたり、スタンドのギリギリ射程内くらいで私は止まり、『ネヴァー・セイ・ネヴァー』だけ前進させる。ハンマー持ちが武器を真横に振るつたのを見るより速く、『ネヴァー・セイ・ネヴァー』が跳ぶ。ハンマーをかわしながら宙を蹴って空中で大きく後ろ宙返りをして自分の元の後退させる。これでいい。ほんの少しの間先生を2対1の状況から引き離せばいけると思った。事実、私に注意を払って防戦の体勢を解かなかった先生は、私がそれ以上敵に向かつて動こうとしないのを把握した途端、ハンマー持ちの注意が再び先生に向くよりも素早く、鮮やかに行動を開始した。

遅くないとはいえ、2体で連携して攻撃後の隙を埋められなくなった、先生からしてみれば大味な動きと化したであろうミノタウロスの斧の一撃を苦もなくジャンプして避けると、先生はそのままミノタウロスの後ろ首に両脚を挟んで跨またがった。そして一呼吸置いてから、跨がっていたミノタウロスの首が落ち、先生は着地した。おそらく先生を包む『ワンダーウォール』の、ミノタウロスの首を挟んでいた両脚部分を刃状に変えて、無防備だった首を斬り落としたのだ。あまり直視したくない光景だったけど、幸いハンマー持ちへ意識を向けなければいけなかったのでそこを見つめている余裕はなかった。



し勢いを殺しきれずに拓海もミノタウロスも、互いに相手の攻撃を受けてそれぞれ反対方向へ吹っ飛んだ。

「いつ……てえなアツ、オイツ！」

「拓海っ！ 大丈夫かつ!？」

奈緒が声をかけると拓海は左腕をかばいながらもすぐに立ち上がった。

「痛えけど平気だよ。それより前見てな、来るぞ！」

その言葉に反射的に向き直ると、ハンマー持ちがもう起き上がって私たちに向かってきていた。拓海の『ワイルド・ウインド』の一撃をくらったのに……。

あつという間に目の前まで来たミノタウロスがハンマーを再度振るった。

「どおおおお……りやつ！」

1歩前に進み出た奈緒がスタンドを出して、なんとミノタウロスの両腕を掴んで押さえつけた。

「ウウ……ウウウウウウ……！」

苛立つてるような苦しんでるような唸りをミノタウロスは上げて、押さえつけられた両腕は小さく震えている。

「あたしの『ワン・ヴィジョン』だつてっ、パワー型だぜええ……ッ！」

必死の表情で全身に力を入れてミノタウロスの動きを止めながら奈緒が言った。奈

緒のスタンドがこれほどのパワーを持っていたのは思いがけないことだったけど、決して余裕ではないのは見て明らかだった。

「お見事」

淡白な声が聞こえたと思ったら、突如ミノタウロスの首から半透明の太い刺が生えてきた。

「おわっ……!?!」

奈緒が少し驚いた声を出すと、ミノタウロスの力と拮抗していたはずの『ワン・ヴィジョン』が、あっさりとその巨体を押し倒した。倒れたミノタウロスをさっと避けて事も無げな顔の高峯先生の姿が現れる。奈緒がミノタウロスを押さえつけている間に背後から接近して刺状に変形させた『ワンダーウォール』を首に突き刺した……のだと思う。

「奈緒、大丈夫？ 拓海も！」

遅れて駆けつけた加蓮が荒い呼吸を整えながら言った。これで開かれた大扉の前に全員が揃った。

「あたしは平気だよ。つて言っても動き止めるのが限界であのままだったらどうしようもなかったけど……」

「いや、大したもんだ。ハンマーで殴られたときに反射的に後ろに跳んじまったから踏

み込みが甘くなつて焦ったけどよ、いいスタンド持つてるおかげで助かったぜ」

攻撃を受けた腕の具合を確かめるように左肩を小さく回しながら拓海が奈緒を褒め称えた。

「その力、称賛には値すれど、それを言葉に換えるには尚早……。あの大口を越え、戻るまでは」

私たちに静かに近寄りながら先生は大扉を見た。扉は開け放たれたままで新たな怪物などが出てくる様子はない。

「早いところ入ろ。このままじゃ敵だなんだつて前に風邪でダウンしちゃう」

『フローズン・ティアー』の日傘で扉を指し示して加蓮が言った。確かに寒くはないがみんな雨で全身濡れて、足の方は走ったときに跳ねた地面の雨水で汚れている。唯一、『ワンダーウオール』で全身を守っている先生だけはどこも濡れても汚れてもいない、整った出で立ちを保っている。身だしなみの保持という意味でも便利なスタンドだと思つた。

「……」

そんな私の、あるいは私たちの視線を知つてか知らずか先生はこつちを振り返つて一瞥してから、やはり静かに大扉の先へと歩みを進め、私たちも無言でそれについていく。城内の得体の知れなさを思つて少し不気味な気分になりながら。

) ) ) ) )